
たいじゃ

葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たいじや

【Nコード】

N8440U

【作者名】

葉月

【あらすじ】

——彼との出会いは桜の季節だった——
怨霊退治を生業としている外法師兼巫女の彩華。彼女の相棒は少し変わっていて……。

現代を舞台にした和風ファンタジー／全24部で本編完結／

自サイトで公開しているものと同一です

小話（番外編）はサイトで公開しています

天青の夢 序章

—— 出会いは 桜の季節だった ——

わたしの家は代々神社である。が、ただの神社ではない。

ちみもりょう 魑魅魍魎の跋扈する古の時代より千と数百年余。かの平安京から遠く離れたこの地にも妖は数多く巢食っている。あやかし

当時よりも少なくなつたとはいえ、妖たち——特に怨霊の類は今だ消えない。

平安時代から宮廷に仕えている陰陽師は、現在、おんみょうじ 特殊急襲部隊にとくしゅきゅうしゅうぶたい 含まれる。いわば？オカルト担当の警察官？といったところだ。

国が決めた術者以外は外法師と呼ばれる。その外法師がわたしだ。警察沙汰にするほどではない出来事——いわゆる付喪神などの調伏依頼——を解決するのがわたしたち外法師の仕事である。

わたしは？外法師？と呼ばれるのがあまり好きではない。？外？なんて、お前は正統じゃない異端だと言われている気がするからだ。なので、以前、近所に住む女の子に言われた「おねえちゃんは、たいじやさんなんだね」という言葉を気に入り？退治屋？と名乗る事もある。

しかし外法師と言わないと通じない時もあるので、普段はそつちを使用している。

彼との出会いは桜の季節だった。

わたしはその頃の事なんてほとんど覚えてないけれど、その時の事ははつきりと思い出せる。

高村家に生まれた女が三歳になると、ある儀式を行う。

満月の夜、本殿へ連れていかれた。正装した両親は、少し怖い顔

をしていると思った。三つ離れた兄貴の顔もだ。

雲に覆われ月は見えない。

動きにくい巫女の衣装を着せられ、子供の自分は、いつもとは違う雰囲気に泣きそうになった。

嫌がるわたしの手を取り、古めかしい巻物に触れられる。

指先がちくり、としたかと思うと、はらり、と巻物の紐が自然に緩んだ。どんな力が作用しているのか、これは選ばれた巫女にしか開けない。

ざあ……と桜の花びらが舞う。

いつの間にか厚い雲は消え去っていて。

境内に現れたのは、満月を背に立つ長身の青年。

髪は長く、背中の真ん中あたりで軽く括り、天色あまいろの狩衣に身を包んでいた。

纏まとう神気は冴え冴えとした夜のようで。

銀色の髪が風になびき、優しい光を放っていた。

——それが、我が月詠神社つぐよみじんじゃが祀っている神、月詠尊つぐよみのみこととの出会いだった。

青年はわたしを見てにつこりと笑った。逆に、両親はとても悲しそうに顔をしていた。

父がすつと頭を下げた。

「掛巻かけまくも畏かしこき 諸神等もろかみたちの廣前ひろまえに 恐かしこみ恐かしこみも白もっさく——」

「ああ、そんなの要らぬ。普段家族に接するようにしてくれ」
月の化身は、手をひらひらと振って父の言葉を遮った。

緩やかな動作で床に胡坐をかき、わたしを膝の上に抱く。

「ですが……」

遠慮がちに否定しているが、そう言われる事が分かっていたのか、月神の言葉に驚く様子はない。

「俺は堅苦しいのは苦手なんだ。頼む」

「は……」

細長い指でわたしの髪を撫でる。心地よい指の動きに眠気を誘われて目を閉じた。

この夜の出会いから、わたしは神の妻になり、巫女になり、主になったのだ。

天青の夢 一

神や神の化身と人間を結婚させ、より強い縁えにしを結ぶ。それを？神婚こん？という。

平たく言えば、月詠尊との縁を繋げる為の人身御供のようなものだ。特殊な封をした巻物が解ければ、高村家の選ばれし巫女は問答無用で月詠尊の妻になる。

神社の神主としては嬉しいだろうが、人の親としては複雑であるう。人間の男と結婚するには、神からの三行半が必要になる。

この先、神の気が変わらなければあり得ない事。

幸いにも月詠尊は悪神ではないし、妻となつた巫女やその家族の事も、神社の周辺に住む人々の事も、とても大事にしている。

月詠神社は千数百年の歴史がある。

その間、巻物が解けたのはだいたい百年から二百年周期で、巫女は複数いる。という事は、歴代の彼の妻がいて、時代は違えど一夫多妻制のような感じだ。

——平安時代の貴族女性もこんな気持ちだったのだろうか。

「……とっても複雑よね……」

「何がだ？」

思わず口にした巫女の呟きを聞きつけ、問題の彼が傍へ近づいてきた。神だからなのか耳が良い。もしくは地獄耳。

「なんでもないよ」

見ず知らずの元妻に嫉妬なんて知られたら鼻で笑われるに違いない。

高村彩華たかむらあやかはそれを無視して、ふと目に付いた簪に近づく。昨晚の強風で倒れたのだろう。拾い上げた拍子に、長い黒髪が肩からこぼれた。元あつたように簪を置き、振り返る。

祭神である月詠尊は、今は白衣に浅葱色あさぎいろの袴を着用していて、普段は自ら進んで神社の手伝いをしている。腰まである銀髪は短く黒

く変化させ、人にしか見えない。

「近所には詠と名乗っており、表向きは正式な神職とは見なされない雇員として、宮掌という職階についている事になっている。

彼が月詠神社で働き出したのは二年ほど前。それから若い女の参拝客が増えたのは、いい事なのか、悪い事なのか。

今年のバレンタインにちよつとした騒ぎになったのを思い出した彩華は、ふつふつと湧きあがった怒りを押さえ込み、

「はいはい仕事仕事！ 働かざるもの食うべからず！」

自分にも言い聞かせるようにわざと大きな声を出した。

「まったく……神使いの荒い……」

ぶつくさと文句を言いつつ戻っていく詠を見送る。

（今日は祈祷もないし、授与所のみになるかな）

軽く乱れた髪を括り直し、彩華も自分の持ち場へと向かった。

井に炊き立てのご飯をよそい、上に鶏そぼろと炒り卵をのせる。

あとはワカメのお味噌汁。今日の昼食である。

二人分の井とお碗を持って彩華が居間へ向かう。そこでは、いそいそと詠がお茶を淹れていた。

詠こと月詠尊は食事など必要ないのだけれど、この神様は人間の食べ物を好み、三食きっちり食べる。時にはおやつも食べる。

そりゃあもう、見ている人間が満腹になるくらい美味しそうに。

食いしん坊だからといってがつついて食べる事もなく、流石というか、良家の生まれと言ってもよい箸使いだ。

食事する時間が無駄じゃないのか、と疑問に思った彩華は彼に尋ねた。

返ってきた答えは「人間でいう趣味のようなもの」だった。確かに読書や映画鑑賞など、興味の無い者にとって、それに割く時間は無駄に感じるだろう。

ついでに何が一番好きなのかも聞いてみたところ、即答で？おに

ぎり？であつた。しかも具なしの塩むすび。

天照大御神の好物はアワビだというから、神様というのは美食家なのかと思つていたけれど、違ふらしい。

しかしこの神様は？高級品？と呼ばれる食物も好んでいるから、彩華をはじめ、高村家の人間は非常に困る時もある。

さすが農耕神、といったところなのは、彩華にも分からない。

さて。今日は忙しくないとはいえ、あまりゆつくりもしてられない。彩華も食べようと箸を持ち、ふとテレビに目をやる。

『ブルーダイヤ 初公開』

持ち主を必ず不幸にする、と噂のある曰くつきの宝石が、日本で公開されるとの報道だ。

この手の？呪われた。。。？というのは、宝石に限らず数多くある。月詠神社へも月に一、二回持ち込まれる。よくあるのは、髪伸びる人形や物の怪つきの骨董品だ。

調伏の依頼人は、曰くつきと分かつていながら購入しているようだが、その日のうちに霊的障害にあい、結局耐えられずに泣きついてくるのだ。

力のある者は妖を退けるが、大抵の人間は力など持たない。

分かつてはいるが、私欲の為に金を積んだ者が霊障にあつても知つたこつちゃない、と彩華は常日頃思っている。自業自得と突っぱねたくなる時もある。もちろん外法師も慈善事業ではないから、おあいこなのだろうが。

「……………。彩華。食べないのなら貰うぞ？」

箸が止まつた彩華を見て、詠が尋ねてくる。すでに自分の分は食べ終わっている。

食いしん坊め。

「ちよつと考え事してただけ。——お代わりあるけど、食べる？」
「食べる」

こつくりと頷き渡された井を持って、彩華は台所へと足を運んだ。

「ごちそうさまでした」

お行儀よく手をあわせる。

気持ちのよい食べっぷりに敬意を表し、一杯目よりも心持ち多めによそった。作り手として綺麗に残さず食べてもらえるのは、やはり嬉しい。

……食費は若干かかるけれど。

「神社が破産したら洒落にならないけどね……」

「それなりの働きはしてるぞ」

呟きが気に障ったのか、半眼で詠が睨みつけた。

——が、いつもこうなので彩華は無視している。

空が気持ちよく晴れ渡った午後。

彩華は宮司である父親に呼ばれた。

神職者が心身を清浄にしたり、術者以外に見せたくないモノを視る為の特殊な場所、祓殿はらいでんへと向かう。

床張りの祓殿は、季節を問わずひんやりとしていた。

宮司の前に小さな箱が置いてある。

彩華が向き合う形で正座をすると、宮司は箱の蓋を開けた。行儀よく揃えていた彼女の指がぴくりと動く。

「これ……は……」

神社へ持ち込まれた小指の爪ほどの石の欠片。

可愛らしい大きさは裏腹に、その印象は禍々しい。

彩華が手をかざすと間に静電気がはしり、軽い痛みにも手を引つ込める。石が拒絶している感じだ。

「まだ幼い娘さんが河原で拾ってきたそうなんだが……毎晩泣き喚くようになって、これが原因であろうと持ってこられた」

宮司の顔には疲労が浮かんでいる。

暫く姿を見なかったので、祈祷に時間を費やしていたのだろう。

——石をじつと視る。

よくないモノだ。

呪具として使われたのか、人の？念？が色濃く残っている。敏感な者が触れれば気を失うかもしれない。

邪気は宮司の祝詞であつても完全に浄化していない。この地は神の守る霊力あらたかな聖域だというのに。呪術者は相当な手練だったのだろうか。

小さな女の子が恐がるのも分かる。外法師の彩華や父親でさえ、可能ならば近づきたくない代物だ。

「保管庫に納めて時々祝詞をあげておくが、お前も様子を見ておくれ」

「はい」

宮司から石を受け取り、彩華は保管庫へ持っていた。

ここには神社へ持ち込まれた曰く付きのモノが収められている。

呪具に使われた刃物、何らかの理由で怨霊が憑いてしまった人形

——様々な物がある。完全に浄化するまでここで眠らせているのだ。

ざっと中の様子を確認すると、保管庫の鍵を厳重にかけた。妖気が外へ漏れないように結界も張ってあるが、鍵は善からぬ事を考え侵入する泥棒対策だ。もっとも、それも月詠尊特製の結界で十分ではあるが、念の為。

鍵を握り締め、授与所へ戻ろうとした彩華は足を止めた。

（もうこんな時間か……）

境内はいつの間にか人がまばらになっていた。普段日向ぼっこをしている野良猫は、寢床である本殿床下へ潜ったようだ。

屋根のカラスが寂しげに鳴く。

辺りは既に夕暮れ。

逢魔^{あまがよ}ヶ時。

——妖たちが活動を始める時間帯だ。

ほう、旦那。お目が高い。

そいつあ例の？呪いの宝石？と呼ばれる一級品さ。

ごらんよ。綺麗だろう？

——なに？ 本物か？ 勿論だ。

俺は本物しか扱わないよ。

……じゃあ何故お前は死なないのかって？ 俺はしがない行商人だからさ。

呪われてるのは愚王だったり金の亡者だったり。俺には関係ない。

……俺が金の亡者だって？ たしかにな！

だが、俺はこうして生きてる。

お代は——だ。高いか？

こおーんなに小さいが？呪い？の伝説を除いても、かなりの希少価値はあるぞ。

旦那が必要ないなら他に売りに行くが……どうする？

胸に銀色の毛並みをした仔犬を抱き、彩華はベッドに横になっていた。

昼間、強い呪おもいにあたり疲れが出た。頭に霧がかかったような状態だ。

あと数時間経ったら出かけなければならぬのに。ぺろり、と仔犬が彩華の唇を舐めた。

「くすぐつたいよ」

顔を背ける。

「つつこら！」

「動くな。消毒だ」

仔犬は、両方の前足で彩華の顎を押さえつけた。

「消毒って……」

傷なんて一つもない。

「消毒ってより、清めだな。昼間のアレ、大きさのわりに強力だったからな。邪気を浄化できなかった侘びだ」

もう一度彩華の口元を舐めて、シニカルな笑みを浮かべた。本物の犬には表情筋がないから、傍から見れば物の怪の類と思うに違いない。

仔犬の正体は詠。

彩華にはシベリアンハスキーの仔犬にしか見えないが、狼を模写しているらしい。耳が少し尖っている。

「ちょ……っともう大丈夫だよ」

それでも執拗に追いかけてくる小さな舌に、彩華は顔をしかめた。……こいつ嫌がってるの分かってやってやるな。

両脇に手を入れ持ち上げる。ぶらーんと四肢を垂らし、先程とは違って変わって、ぴくりとも動かない。まるでヌイグルミだ。

「まったく」

もう一度胸に抱く。こうしていれば、彼が纏っている神気で浄化などたやすいのに。

耳の後ろ辺りを撫でると、心地よいのか銀色の尻尾が緩やかに振れた。思わず人間体で想像し、彩華が噴き出した。

「なんだ？」

「わんこの姿になったり人間の姿になったり、面白いなあ、思ってた」

食いしん坊で、時にこうして仔犬の姿になって——彼が人ならざるものである事を忘れそうだな。

「俺はどちらでもいいんだけどな。お前が『部屋が狭くなる』って言うから」

「だって七畳に二人じゃ狭いじゃない」

彩華の部屋にはセミシングルのベッドにクローゼット、他に本棚

とデスクがある。そこに大人二人では窮屈だ。

一緒にいるのが当然、と言って聞かないので、彩華の部屋にいる時は大抵変化している。

その前に男と女だ。

いくら？神の妻？とはいえ、彩華にも多少の恥ずかしさはある。

「まあ、こちらの姿だと密着しやすいしな……」

胸に顔を埋めている仔犬の両の耳を引っ張った。

「痛いぞ」

すけべえ
「助兵衛め」

仔犬が駄々をこねるように首を振り、彩華の手から逃れる。

「神に対してなんて事を」

「だって、普段の様子見てると、どうしても神様に思えないんだもの」

「お前に気を使ってやってるんだ」

「分かってるよ」

きょとん、とした目で彩華を見やる。

「わたしやみんなが対等に話せる存在じゃないって分かってる。荒ぶる神だって言う人もいるけど、本当は優しい神様だって知っている」

「彩華……」

首筋に顔を埋めるように顔を寄せる。くすぐったさに身じろぎし、彩華が言葉を続ける。

「まあ、うちの月詠様は結構、傍若無人だと思ってるけどねー。食にうるさいし」

「なにをう」

がばりと顔を上げ、尻尾が立った。

二人が軽い言い合いをしている間に夜が更けてゆく。

草木も眠る丑三つ時。

静寂を引き裂かんばかりの声が辺りに響く。

すでに原型を保っていない異形が、外法師に向かって長い爪を振り上げた。月明かりに照らされ、鈍い光を放っている。

振りおろされる寸前に彼女は後ろへ跳躍する。

鋭い爪が地面に突き刺さり地響きが起こった。衝撃で土が舞い上がる。あと一秒反応が遅れていたら、彩華の身体に複数の穴が開いていただろう。

素早く間合いを開けると、妖の出方をうかがう。

彩華を仕留められなかった事に悔しがって、歯をガチガチと鳴らしている。

——まったく往生際が悪い。

彩華は剣印を結び、真言を唱えた。言霊は刃へと変じて妖へ襲い掛かる。妖の脇腹辺りを挟み、刃は音もなく消滅した。

鼓膜が破れるほどの咆哮。

今宵は町外れの森林公園へ追い詰めたから良かったものの、これが町中ならば近所迷惑だよなぁ……と、彩華はぼんやり思った。

「気を抜くな」

「わかってる」

距離を置いた彩華と妖の間に長身の男が割り込む。妖は一瞬躊躇したが、見た目に惑わされたのか牙を剥く。

妖気が詠を煽る。髪が乱れるのを気にせず、彼はただ見ていた。

恫喝どうかつしている妖とは裏腹に、口元を僅かに緩ませ涼しい顔をしている。

再度、妖の爪が振り上げられた。が、目に見えない壁に阻まれ、詠には届かない。虚空で火花が散る。

緩慢な動作で右手をかざした。

穢りようがれのない神気が妖気を凌駕する。

——瞬きする間に決着はついた。

火にかけた少量の水のように、妖の体が蒸発する。わずかに残った残影が口惜しそうに揺らめく。

やがてそれも消えうせた。

手ごたえないな、と軽く乱れた黒髪を手で直しながら詠が言う。

「あつたら困る」

そのせいで一度大怪我をしたんだから。もちろん自分の油断もあったけれど。

詠の横に並び、彩華は手を複雑な形に結んだ。

「天清浄 地清浄 内外清浄 六根清浄と 袈給う《はらいたまう

》」

浄化の祝詞が終わると同時に、瘴気が消失する。

「あれ？」

目を凝らすと、妖のいた場所に何かが落ちていている。

慎重に拾い上げ月明かりにかざす。月光を浴びてキラキラと輝いている。

丸い水晶玉だ。大きさは八ミリくらいで、真っ直ぐに穴が開いている。流行の数珠ブレスレットの一部だろうか。

「なんだと思う？」

「力を増幅させる為に飲み込んだ、ってところか。結構質がいいなこれ」

人間が食事をして活動現力を得るのと一緒に、物の力を得る為に、妖は何かを飲み込むことがある。それは、呪具の場合もあるし、恐ろしい事に生身の人間の時もある。

「浄化済んだらお前持ってていいぞ。軽い爆薬代わりにはなる」

「うん——」

ひゅうと吹いた風に身震いする。もう春とはいえ、夜はまだ寒い。いつまでもここにいたら風邪をひく。

寒さに両手を擦り合わせていると、彩華の手を詠が包み込んだ。しばらくそうして温めているが、彼女の手は冷えたままだ。よく見ると顔色も悪い。

術者は自身の精気を使用して術を発動させている。それは人間の血にもっとも多く含まれ、血が全身を巡る事で人は活動できる。精

気の濃度が薄まれば、貧血のような症状が起きてしまう。

彩華は一人前の外法師として働いてはいるが、父や兄に比べれば、まだまだ半人前と言ってもよい。彼女もその事はよく分かっていて、力不足の依頼は受けられないが、場合によっては無茶はしないが無理はする。

術者が増えれば個人の負担は少なくなるが、素質がない者の方が多い。退魔の力を持たない者はお札やお守りを求めるか、術者に調伏を依頼する事になる。

詠——月詠尊——は五穀豊穡の他に、黄泉を司る。

巢喰っている闇を完全に消し去るには、神の力をもって征するのが一番早く確実である。しかし強大すぎて陰陽のバランスが壊れる為、人に力を貸すくらいしかできない。彼が本気を出せば、妖どころかこの辺り一帯も消滅する。

それは分かっているし、いつも神頼みではマズイだろうと、最低限しか彩華は頼まない。

——その割には、詠曰く「神使いの荒い」頼みもしているが。そこは等価交換。暗黙の了解である。

「少し休んでいくか？」

「平気」

二、三度深呼吸すると、彩華はにつこりと笑った。その頬には赤みが差している。

詠の掌が彩華の額にあてられる。精気は戻ったが、熱が出たようだ。

「抱えて飛んでいくか？」

「平気だってば」

少し心配性の相棒に彩華は苦笑した。深夜とはいえ、誰かに目撃されたらどうするのか。

「こんな時間に行動してるのなんて、同業者くらいだろう？」

「だから困るの」

空を飛べる術者なんて聞いた事がない。こちらが異形として退治

されかけたら笑えないではないか。

冷えた身体を暖めるように軽く身体を動かす。もう大丈夫。

「ぐるっと一周して帰ろっか」

辺りの妖気を探り、もう何も無い事を確認すると、二人は帰路に着いた。

天青の夢 二

活気のある街中を彩華はのんびりと歩いていた。

世間は平日なのでさほど込み合っていない。ゆっくりと流れる時間を満喫するのに丁度良い。

今日は公休日で神社の仕事は休みだ。だが、突発的な外法師の仕事が入ってしまった、すぐに向かわなければならぬ。

久しぶりの休みだというのに特にしたい事もなく、彩華は歩行者天国に設置してあるベンチに座った。

日差しが暖かく気持ちが良い。風もなく過ごしやすい日だ。

子供が歩きながらアイスクリームを食べているのを見て、そういえばお昼まだだったな、と考える。詠がいれば安めのビュッフェでも行くところなのだが、今日は一人。

詠は神の仕事らしく、彼女とは別行動である。

つまらないが、彼の邪魔をする訳にはいかず、一人の休日を楽しむ事にした。

お気に入りのオープンカフェで少し遅めの昼食を取り、食後のデザートを楽しんだ彩華は、街行く人の流れに目をやった。

さて、これからどうしようか。詠がいれば荷物持ちをさせたけれど……。一人なんだし、普段詠が嫌がるお店見てもいいか。

腕時計を見ると、針は二時半を指している。

あまり遅くなると帰宅ラッシュに巻き込まれる。それはちょっと嫌だ。かといって、すぐに帰るのは面白くない。

「……そろそろ戻ってるかな……」

ふと、この近くで店を営んでいる友人の顔が浮かんだ。

一ヶ月ほど前に彩華が尋ねた時は閉まっていた会えなかった。元々営業日は不定期だから、今日行って会えるとは限らないのだが……。

「行ってみるか」

カップの中身を飲み干し、彩華は席を立った。

友人の店は、大通りから少し外れた閑静な場所にある。周りは住宅が立ち並んでいるが緑も多い。そのせいか、都心だというのに空気がとても澄んでいる。

（神社と空気が似てるんだよね）

深呼吸すると霊力が漲る感じがする。森気と神気。まるで駄洒落のようであるが、昔からある法則のひとつだ。同じ発音を持つものは、同じものとして捉える。だから雰囲気も似るのかもしれない。軽い足取りで彩華は坂道を登って行く。

「……あ、開いてる」

古めかしい和風の建物の前で立ち止まるとそう呟いた。扉の上にある小さな木製の看板には、墨で『靈石屋』と書かれている。

彩華は取っ手に手をかけると手前にひいた。軽い音をたてて扉が開く。外と室内の照明の違いに一瞬目が眩む。

「あら。久しぶりね、彩華」

真っ白い色無地に、薄紅の羽織を身につけた女性が立っていた。艶のある黒髪をたらし、両サイドは後ろで纏め、赤い絹紐で括られている。

「最近忙しくって。休みの日は疲れて一日中引きこもって寝てたんだ」

彩華の言い方に目元を和ませる。

女は椅子を勧ると、一度奥へと姿を消した。やがて小さな盆に二つ湯飲みを乗せて戻ってきた。

「ありがとう。麻布都」

麻布都と呼ばれた和装の女が笑みを浮かべた。

？麻布都？というのは彼女の通り名であるが、彩華は本名を知らない。名前以外にも知らない事は多くある。必要があれば彼女の方から話してくるだろうと、彩華は聞かないでいる。

「今回はどこまで行つてたの？」

「出雲まで。良い瑪瑙が入ったと連絡がきたから」

「ふうん」

店内を見回すと、様々な石が並んでいる。原石そのままの物もあれば、アクセサリーに加工された物もある。

商品の傍には価格と効果の札が置いてある。霊石屋はいわゆるパワーストーンを扱っており、店主は麻布都だ。他に店員はいない。

訪ねても、毎回客は一人もおらず、経営大丈夫なのかなあ、と彩華は思っている。だが、神社の参拝客から時折「安価で良く効くパワーストーンを売っている」と霊石屋の評判を聞くので、本当にまたまなのだろう。

月詠神社でもパワーストーンの類を扱っている。もちろん、お守りとしてである。

水晶と瑪瑙の魔除け守である。勾玉の形をしており、若い参拝客に人気がある。長方形の普通のお守りよりも手に取りやすいようだ。「店主の私が言うのもなんだけれど、女の子って装飾品好きよね」「んー。お札を身に付けるんじゃないし……。同じ効果があるなら、わたしも紙一枚より他に価値がある方がいいかな。キラキラ光ってるとか」

宝石は、古くから魔物を払う護符であつた。権力者の墓から多く見つかるのは、魔除け効果とは別に、その輝きに魅せられたからではないか。

だから欲しがる人が多いんじゃないかな、と彩華は呟いた。

「？愛しい彼女にはアクセサリーを贈りましょう？つてのは、ファッション業界の策略だと思うけどね……」

バレンタインイベントと一緒に。

「そういえば、時折、恋人同士で来店あるわね」

頬に手を当て、思い出したのか麻布都が言う。

「いいなあ。わたしも欲しい」

「彩華も持つてるじゃない。大事な人から貰った、素敵な勾玉の首

飾り」

「間違いじゃないけど……」

思わず顔が赤くなるのを感じた。

「あらあら。ご馳走様」

見つめられて彩華の心臓がはねる。

黒曜石の瞳に吸い込まれそうな気がした。同じ女だというのに、この色気の違いはなんだ。

「心配しなくても、彩華は十分色気あるわよ？」

「ちよつと！ 心読まないでよ！」

「だって、顔に書いてあるもの。それでは依頼人に付け込まれるわよ。仕事中は無表情でもいいくらい。表情豊かなのは彩華の良い所だし、私も好きだけれどね」

曇りのない笑顔を向けられ気が削がれた。

この場に詠がいなかったのは不幸中の幸いか。でなければ「修行不足」と言われたに違いない。

くすくすと笑う麻布都にバツが悪くなり、彩華は誤魔化すように店内を見回して？ 非売品？と書かれた群青色の首飾りを見つけた。

「綺麗……。ラピスラズリだよね？」

深い青色に金砂が輝いている。

「ええ。触ってもいいけれど、紐は結んでないから気をつけてね」
麻布都の言葉に、彩華はそつと手を伸ばした。指が石の一部に触れる——と、軽い静電気がはしった気がして、慌てて引っ込めた。

「呪具……ではないよね？」

「ええ。装飾品として使用されていた、ただの首飾りよ」

彩華はもう一度慎重に手を伸ばした。

——今度はなにも起きない。

「預かり物だね。曰く付きといえはそうなんだけれど、悪いモノではないのよ」

「そうなんだ」

その？曰く付き？の部分に彩華は興味を持ったが、聞かなかった。

自分宛の仕事でもないのに首を突っ込むのは不躰だ。

確におかしな物ではないようだ。周りを取り巻く空気が淀んでいる感じはするが、霊石屋は清らかな場所だから、やがて浄化するに違いない。

預かり物ならば個人のプライバシーにも関わる。もしも手助けが必要ならば、自分か他の術者に依頼するだろう。

そう思うと彩華は、窓から差し込む西日に気付き腕時計を確認する。

「あ……そろそろ帰るね。お茶ごちそうさま」

「ちよつと待つて」

麻布都が再び奥へと姿を消した。戻ってくると、両手には白いビニール袋が二つ。中に四角い箱が入っている。

「これ、お土産」

「ありがと。……でも多くない？」

種類は違うが合計四箱。

「アルバイトさんのおやつにどうぞ」

「……それでも多いよ」

休憩時間にひとつずつ食べても一ヶ月は軽く持つ。

「ああ、一箱はね、詠にあげて。これ」

麻布都が指差したのは、確かに詠が好みそうな菓子である。

「詠に？」

「他意はないのよ。うまくいけばいいなとは思っているけれど」

「え？」

彩華が聞き返すと、麻布都はにっこりと笑った。

「彼ってば私のこと大嫌いのようだから、餌付けできないかな？
つて」

「……餌付け……いやそれは」

それはない、と言い切れないのが怖い。

言い淀みつつ彩華は言葉を続けた。

「嫌い、じゃないと思うけど」

「んー。そうね。どちらかというところ？相性が悪い？かしら。相容れないのは性質だから仕方ないわね」

「どういうこと？」

訊ねても麻布都はただ笑顔を彩華に向けるだけだった。

「で、貰ってきたのか。……美味しい」

ベッドに寄りかかった男が指についた餡をぺろりと舐めとって言う。

よほど気に入ったのか、もうひとつ口に放り込んだ。

その様子を見た彩華は、詠の隣に座ると彼の持つている箱を覗いた。口元に手をあて呻く。

「ところで俺を餌付けできてるのかあいつは」

「説得力ないんですよ月詠尊」

先ほど夕飯をぺろりと平らげたというのにどういうことか。可能ならば彼の腹を切り裂いて中がどうなっているか確認したいものだ。麻布都から貰った箱の中身は、すでに半分消えている。脱力した彩華は深い溜息をついた。

「そのまま？嫌いな相手？に餌付けされて飼いならされてしまえっ」

「たわけ。誰が餌付けされるか」

「どーだか。この間参拝に来た女の子にチョコ貰って鼻の下伸ばしてたじゃない。そんなに食べる事が好きなら、うちより裕福な神社にでも移って好きなだけ食べればいいじゃない。巫女の代わりなんて私じゃなくても、いつつくらでもいるしっ」

先日から燻っていた想いを一気に捲くしたてた彩華は、一息つくと言から顔を背けた。

その様子を見ていた詠は面白そうに目を細める。伸ばした手で彼女の黒髪に指を絡めるが、するりと滑り抜けてゆく。

「なんだ。嫉妬か。——くだらん」

「っ！」

振り向く寸前に、今度は少し強めに引っ張る。

「や……」

軽い痛みに驚いた彩華は、自分を引き寄せる力に逆らわず、詠の腕の中に落ちた。そのまま絡みつく両腕から抜け出そうと抗ったが、やがて諦めたのか力を抜く。

それでも、自由のきく言葉での抵抗は止めない。

「離せばか」

「祭神に悪態つくのはお前くらいだな」

家族に接するような態度で、と頼まれた宮司ですら多少の配慮はある。詠が呆れたように呟いた。

目元を和ませている彼の表情は彩華からは見えない。

「お前以外の女はいらない、と言っても信用しないか。難しい女だ」
耳元で囁く声に一瞬肩を揺らす。

その言葉は聞こえないふりをして、彼女はきつく目を閉じた。

天青の夢 三

少女がひとり丘に立っている。

目を伏せて、相手が来るのをじっと待っている。

ふと、何かに気づいた少女がぱっと顔を上げた。少し悲しげな表情は、見る間に笑みに変わる。

同じ頃、丘の近くを通りがかった馬車が速度を緩めて止まった。

中には、白髪まじりの髪を丁寧に後ろへ流した初老の男が座っている。

従者の問いかけには答えず、じっと丘の上を見る。大きな指輪をはめた指で、眼鏡の蔓を軽く持ち上げた。

見た事のある娘だ。

——この間、商いに行つた貴族の使用人だったか。

普段は誰が何をしていようと気にならないが、この時ばかりは違つた。

一緒にいる少年にも見覚えがあった。

貴族の三男とその使用人の娘。珍しい組み合わせに、豪商の男はしばらく様子を伺っていた。

年端もいかない少年が懷からネックレスを取り出す。金具を外すと、娘の背後に回り彼女の首にかけた。

踊り子のようにくるりと娘が一回転すると、茶色い髪と青の石がふわりと揺れる。

反射した光に一瞬目が眩み、男はしばし魅入った。

——あの娘になど相応しくはない。

金でも積みば喜んで手放すだろう。なんせ、娘の家は貧乏なのだから。

男は顎に手を寄せ笑みを浮かべる。

やがて何事もなかったかのように自身の屋敷へと馬車を走らせた。

それは人を狂わす魔力を秘めていた。
欲に溺れる人間は、決して逃れる事ができない。
その魔性に翻弄されれば、残るものは、なにもない。

月詠神社の保管庫に凜とした声が響く。
とぶかみえため
「吐普加身依身多女 寒言神尊利根陀見 波羅伊玉意喜餘目出玉」
かんごんしんそんりこんたけん
ねつとりと肌に纏わりつく妖気を気にもせず、彩華は祝詞をあげている。

彼女の頭に直接聞こえてきたのは呪詞だ。自分を排除せんとする
外法師に攻撃を仕掛けている。

彩華の右手の甲が裂けた。うつすらと血がにじみ出る。一度だけ鬱陶しそくに古ぼけた壺を睨めつけた。

初めは小刻みに震えていた壺が、次第に揺れを大きくし始めた。庫全体の空気が共鳴してざわつく。

傷がまた一つ増えた。
 痛みに眉をひそ顰めるが、構わず続ける。

——術の掛け合いは、壺が割れた事で決着がついた。二つに割れ、四つに割れ……元の形など分らないほど粉々になる。最後の足掻きなのか、砂となったそれが音を立てて棚からこぼれた。まるで断末魔だ。

先程の喧騒など嘘のように静かになってゆく。砂をかき集めて座布団ほどの大きさの和紙に載せた。和紙には墨で浄化の祝詞が書かれている。指についた砂も全て払い、彩華は庫を出た。

しっかり鍵を閉めると本殿の裏へと回る。
置いてあったスコップで少し穴を掘り、先程の砂を流し込むと、

元のように地面をならした。

あとはこの地に広がる神気が邪気を浄化し、付喪神の残滓である砂は長い年月を経て土に還る。

一息ついた途端に吐き気をもよおして彩華は口元を押さえた。

「気持ち悪……」

邪気にあたった。

本殿の壁に手をつき袴が汚れるのも構わずゆっくりとその場に座り込む。二、三回深呼吸すると少しずつ眩暈が治まってきた。

もう大丈夫だろうと立ち上がりかけるが、壁に寄りかかり目を閉じる。

「要修行、か」

詠は彼女の状態に気付いているだろうに、外せない用事があるのか、近づいてくる気配はない。

「ばかばか。伴侶が苦しんでるんだからすぐに飛んで来なさいよ」

荒い息と共に悪態をついたが、すぐに唇を噛みしめた。

理不尽な事を言っても仕方ない。一人前でない自分が悪いのだから。

こうして彩華の具合が悪くなるのは、今回が初めてではない。

月詠神社には悪しきモノが侵入しないように結界が張ってある。

そして敷地内には神気が満ちている。万が一、妖の侵入があったとしても、邪気が削がれ浄化してしまう。

訳あって持ち込まれた物は祝詞後に庫で保管する。ここには邪気が外へ漏れないよう幾重にも結界を張ってある。しかし、陰の気は時折、容易く抜け出てくる。

一般人の彩華の母や、神社の参拝客は問題なし。父と兄は呪術者として一級だから、こちらも問題なし。

問題なのは、中途半端な能力を持つ者。

鍛錬すれば無意識に退ける事が出来るようになるけれど、わたしはまだまだなあ……と、自嘲気味に呟いた。

のろのろと立ち上がった彩華は、壁伝いに移動すると本殿へと入

った。

薄暗いその中を、明かり取りから差し込む光を頼りに歩く。中央付近で立ち止まると、彩華は正座した。彼女の目の前に御内殿があり、中には形ばかりの御神体が納められている。

本来納められるべき依り代は別にある。

彩華は襟元から首飾りを取り出し、赤い勾玉に触れた。桜舞うあの夜に受け継いだ、選ばれし巫女の証。

手の平で勾玉を握りこむと、無機質なそれが熱を帯びた気がした。この場にいない彼の代わりに胸に抱きしめる。

「ばか……」

心に浮かぶ思いが消えるまで、彩華はただそうしていた。

そうして——どのくらいの時間が過ぎたのか。

彩華は何事もなかったかのように本殿を出ると、早歩きで境内を進んだ。

本殿と拝殿の境には柵が設けられていて、高村家の人間以外は立ち入り禁止になっている。外へ出るには一旦、自宅側へ回らねばならない。

仕方ないけど少し面倒だ、と思う。

建物の前で止まると、彩華は足の運びとは裏腹に、ゆっくり丁寧に引き戸を開けた。

「ごめんね。遅くなって」

「彩ちゃんお帰りー。今日忙しくないからだいじょぶだよー」

授与所にいたアルバイトの巫女が振り返り、のんびりと答えた。

巫女の眉間に皺がよる。

「……少し顔色悪くない？」

「え……そう？」

そんな事をしても良くはならないが、彩華は慌てて頬を擦った。

「裏でもう少し休んだら？」

巫女は親指で後ろを指した。授与所の真後ろは巫女達の休憩室になっている。

「でも。今日は有紀ちゃんしかいないし……」

「いーから。忙しくなったら呼ぶから」

カーテンで仕切られた休憩室へと追いやられ、彩華はひとまず椅子に座った。

手が悴んでいるのに気がつき、緑茶を淹れた湯飲みで暖める。冷えた指先が痺れて血が巡りはじめた。

もう大丈夫かと湯飲みを置き、今度は自身の両手を擦りあわせる。

「あーっ。上月さん！ ちょっとちよつと！」

カーテン越しに有紀の声が聞こえ、彩華は困ったように笑みを浮かべた。今日は巫女長は休みだからある程度は構わないが、神域で騒ぐのは好ましくない。やはり注意するべきなのだろうが、自分を心配しての事なので気兼ねする。

休憩室の引き戸が開いて、上月と呼ばれた男が顔を見せた。詠である。高村家の遠縁という事にしてあり、便宜上、苗字もつけた。

「どうした？ 陰の気にやられたか？」

「少し……休めば治るから。忙しいんでしょ？」

「いんや。どちらかと言うと、暇」

苦笑しながら詠が言う。

「……そう」

手が再び冷たくなった気がして、彩華は湯飲みを両手で持つ。

今度はなかなか温まらない。

気づいた詠が彼女に手を伸ばす。それに驚いた彩華は湯飲みを倒した。テーブルに緑茶がこぼれる。

「すまん」

「ごめん。ボケっとしてた」

台布巾で後始末をして彩華は溜息をついた。

駄目だ。落ち着いたかと思ったけれど、心が乱れてる。こんな時に調伏依頼がこなればいいけれど――。

思案していた彩華は、自身の右手を詠に取られた事に気がつかない。先程つけた傷をぺろりと舐められ、喉をひきつらせたような声

をあげた。突然の出来事に驚いて詠の手を振り払う。

「神域で何するのよ」

他人には聞こえないような声を潜める。神社で働く全員が知っている公認の？婚約者？であろうと仕事中にこういった事はよくない。

「俺の神社なんだから俺が何をしたらって構わんだろう」

実に傲慢な物言いに、分かつてはいたが呆れた。

この男、人の気も知らないで。あなたのせいでわたしは気持ちが一くさくさ「#圏点　？」しているというのに。

「井戸水で洗ったのか？」

本殿と保管庫の間に井戸がある。この井戸は、水脈が京都の神泉と繋がっていると言われているが、実際は距離がありすぎるから只の噂なのだろう。しかし大地の気が流れる龍脈は繋がっているのかもしれない。

僅かな瘴気ならば洗い流せる霊力あらたかな水が湧き出る為か、この水を狙った侵入者が時折、敷地内で倒れている。月詠尊特製の結界に邪念が耐えられなくなり気を失うらしい。

「洗ってない。急いで戻ってきたからそんな時間なかったもの。それに神域にいれば自然に浄化されるんでしょ」

少し刺々しい言い方をする彩華に、月の神は一瞬目を^{すが}眇めた。だが、彼女の物言いに気にする様子はなく、寧ろ笑みを浮かべている。「——どうした？」

穏やかな詠の声音に、彩華は唇をかみ締めた。

「なんでもない。ごめん。ちょっと虫の居所が悪いだけ」

「そうか」

幼子をあやすように彼女の黒髪を撫でる。

「じゃあ、機嫌が直るように美味しい物でも献上するかな」

「……それはアンタでしょう……」

わざとなのかとぼけた態度をとる詠に気が削がれ、彩華は僅かに微笑んだ。

井戸水を手桶に汲むと、ざばりと頭から被った。一瞬、冷たさに身を竦めるが、もう一杯水を汲んだ。

月詠神社の裏手で襖みそけつさい潔斎をしていた彩華は、濡れた前髪が額に張りついたのを無造作に払い桶を置く。

柔らかい黒髪は水分を含んで一層艶を増す。毛先を絞ると、水がばたばたと背中を流れ落ちた。その気持ちの悪さに彩華は身震いする。水に濡れた白衣が身体に張り付き体温を奪ってゆくのだ。夏ならばともかく、今の季節はまだ辛い。

調伏退治前は必ず襖はらえてんをして、普段はここまでやっていない。襖はらえてんで瞑想するくらいだ。

本来ならば、精進潔斎は肉断ちやら潔斎食やら準備をしなければならぬのだろうが、それでは突発的に舞い込んでくる依頼に対応しきれなくなる。神社の行事前は食事内容を考え、襖はらえてんを念入りに行うが無理しない程度だ。無理しすぎると今度は行事の最中に倒れる。当日は忙しく食事自体満足に取ることが出来なかったりもするのだ。

「――」

彩華は暫し考えるような仕草を見ると、念のため、と再び桶を持った。先ほどの邪念を完全に振り払うには水を被るのが一番手っ取り早い。

犬のように数回頭を振ると、水滴が四方に飛んだ。詠に見られたらみつともないと怒られるな、と彩華はうつすら笑う。

近くに置いてあったタオルで水分を拭き取り井戸横の建物へと入ってゆく。彩華たちが襖はらえてんと呼んでいる場所だ。彩華は少し薄暗いそこで、濡れた巫女装束を脱ぎ捨て服に着替えた。

吸水性の良いタオルでガシガシと擦り、まだ湿ったままの長い黒髪をヘアクリップで纏める。本当はもう少し乾かしたい所だけれど、時間がないから仕方ない。

彩華は無造作にタオルと巫女装束を掴むと襖はらえてんを出た。

祓殿と高村家自宅は繋がっているが、若干、雰囲気が違う。自宅も神社と同じ敷地内にあるが、神域と俗世くらいの違いがある。二つの建物は扉と廊下でしか仕切られていないのに、こうも差があるものなのか。

廊下にあるランドリーボックスに持っていた衣類を放りこみ、玄関へと向かった。

「お待たせ」

玄関の上がり口に腰掛けている詠に声をかけると、肩越しに振り返りつつ立ち上がる。

「寒くないか？」

彩華の格好を見て眉を顰める。

「え？ いつも大体一緒でしょ？」

彼女の服装は、白い薄手のパーカーに濃い藍色のジーンズだ。中には赤いカットソーを着ている。冬場はコートを着たり、トップスがセーターに変わる。調伏退治の時は大抵同じような格好だ。動きやすさを重視して、色は魔除けの意味がある。

「服じゃなくって、髪」

髪が濡れたままなのを指摘しているようだ。

「そんなに濡れてないし」

何か言いたそうな詠を無視して外に出た彩華は、太陽の眩しさに目を細めた。

まだ日は高く？仕事？をするには好都合だ。出来れば逢魔おつまがときヶ時は避けたい。

時間や時期に我が侘を言っではいられないが、今日の調伏退治は依頼人が妖異をずっと放っておいた物件だ。時間が経過した分、霊力が増しているだろう。

目的地は神社から近い。

いつまでも家の前に立っていて不審者扱いされても困るので、彩華と詠は誰もいないのを確認すると庭へと回った。

外から中の様子をうかがう。

「……やっぱり増えてるねえ」

雑魚とはいえ、数が半端ない。家の中心に向かって黒い渦が集まっている。

「数だけだ。大した事ない」

「うん。もうちょっと早く来たかったけど」

以前からこの辺りを通る度に気にはしていたが、突然訪ねていつて「霊障、起きていませんか？」などと聞く訳にはいかない。悪徳宗教だと思われるのがオチだ。

最初は霊なんて馬鹿らしい、と言っていたこの家の主人だが、家族の様子がおかしくなったのに気がついて、慌てて相談にきたのだ。手遅れになる前で良かった。

彩華は二階の窓をじっと睨みつけると、両の手で自分の頬をぺしぺしと叩いた。

「よし！」

家主から預かっている鍵を使って玄関から足を踏み入れる。中は薄暗くてひんやりとしていた。

澱んだ空気よどに彩華がしかめっ面をしていると、詠が二、三回拍手かしわでを打つ。それだけで雑魚霊は滅した。

この家の住人は、必要最低限の家具を持ち出して今は別の場所へ避難している。硝子の破片が所々に落ちているのに気がつき、二人は土足のまま上がった。

「上、か」

二階へと続く階段を見上げて詠が呟く。

霊威は瞬間移動を得意とするモノもいる。今回場所は変わっていないようだ。

先に詠が階段を上がってゆく。前方からひゅー、と風きり音が聞こえたと思った瞬間、詠の目の前でコップが碎けて落ちた。続けて額、花瓶……と複数飛んでくるが、全て詠の作り出した見えない壁に遮られる。

がしゃん、と今度は彩華の背後で割れる音がしたが気にせずに進

む。

一階と比べると二階は薄暗く感じる。窓から日が差し込んでいるというのだ。それだけ妖気が濃い。

「んー？ 諦めたか？」

のんびりとした声で詠が言う。

突然攻撃が止まった。だからといって油断はできないが。

詠の前へ出ると、彩華は真っ直ぐ目的の部屋へと歩いていった。

問題のドアの前で立ち止まる。妖気は消えていない。が、確実にここにいる。

呼吸を整えるとドアノブに手をかけ、用心しながら手前に引く。

蝶番の軋む音がしてドアが開いた。

暗闇の中から飛んできたランプシェードが彩華には当たらず落ちた。部屋中に浮いている家具が彩華を狙っているが、詠の作り出した結界は彼女を常に守っていてそれは叶わない。

「派手な叩音だな」

上下左右で鳴るラップ音は気にせず、彩華は指を動かす。

「臨兵闘者皆陣烈在前」

淀みない詠唱に慌てたのか、妖のたてる音が激しくなった。

天井から吊られている照明が割れる。この家だけ地震がきたかのように、家全体が音をたてて揺れた。

滑らかな指の動きは止まる事はなく、ひとつひとつの九字真言が妖をがんじがらめにする。

『ギ……ギギ……』

妖は耳障りな声を出して抵抗しているが身動きができない。

振り下ろした剣印から真白い閃光がほどばした。浄化の光は妖を飲み込み瞬時に消えてゆく。

光に眩んだ目が慣れた頃には瘴気はすっかり消え、後には中身の抜けた人形が残っていた。

彩華は数回瞬きすると、床に落ちている人形を拾い上げる。

彼女の唇から紡ぎ出されていく浄化の祝詞に人形が光に包まれる。

それが消えうせると、そつと机の上に置いた。

「任務完了、つと」

「一体どこで買ってきたんだ？　これ。たいした^{もの}霊は憑いてなかったけれど」

「海外出張のお土産らしいよ。……こら」

指で人形の額を弾くような仕草をする詠をたしなめる。

「壊れたらどうするのよ」

「壊れんよ。作りは立派だな」

「はいはい。終わったんだから遊んでないで帰るよー」

ざつと家全体を霊視するが、他に問題はないようだ。

放っておくといつまでも悪戯していそうな詠の腕をとって、彩華は依頼人の家を出た。

二人が神社へ戻ってくると、夕焼けに照らされた鳥居の前に彩華の見知った和装の女が立っていた。

「麻布都^{まふつ}？」

彩華の声に麻布都が振り返った。

「今日は仕事？」

「うん。そう」

「久しぶりね、詠」

笑顔を見せる麻布都とは裏腹に、詠は眉間に皺をよせた。眉がツリ上がり、見るからに機嫌が悪そうだ。

「なにしにきた」

「彩華にお願いしたい事があつてね」

重い声音に気がつかないのか、麻布都は笑みを浮かべたままだ。
「わたしに？」

「——面倒な物持つてくるな」

低い声で吐き捨てた詠は、彩華の呼び止めに一度も振り返らずに行ってしまった。

「今日は夕飯抜きにするぞーっ！　まったく……ごめんね。あとで

シメとくから」

「いいのよ。彩華の事が心配なのよ」

くすくすと笑う麻布都は、詠の態度を気にしていないようだ。

「立ち話もなんだからあがってって」

「うっん。すぐに済むから。これなんだけれど」

麻布都は持っていた袱紗ふくさを少しだけ開く。中には以前れいせい霊石屋で見た群青色のネックレスが収められていた。

「これをね、預かってほしいの」

「それはいいけど。でも誰かからの預かり品なんでしょう？　たらい回し……って訳じゃないけど、最初の依頼人以外の手に渡しちゃっていいの？」

自分ならあまり良い気はしない。彩華がその事を伝えたと、麻布都の表情が少し翳かげった。

「本来の持ち主は古い時代の人なの。骨董品を扱っているお店を転々としてね。先日私のところへきたのだけれど……最後は彩華の元にあった方が良いと思ってね」

「わかった」

時折、少々問題のある物品を目にしている麻布都の第六感は無駄にできない。彼女が自分の所へ持ってきたのなら、それが一番良い方法なのだろう。

そう思うと彩華は袱紗ごと受け取った。ネックレスなんて身につけるものが重くては困るのだが、ずっしりとした存在感だ。

ついこの間見た時は感じなかったけれど……と口の中で呟く。

再度家へあがるよう勧めるが、麻布都は丁寧に断ると、茜色に染められた街に溶け込むように消えていった。

しばらく後姿を見送っていた彩華は、袱紗を胸に抱えると鳥居をくぐった。

授与所はすでに閉まっている。

今度埋め合わせしなくっちゃ。有紀ちゃんに悪い事したな、と彩華は独りごちた。

一度自宅へ戻ると保管庫の鍵を手にする。

詠はどこへ行ってしまったのか見当たらない。いくら神様だからといって、あの態度はない。やっぱり夕飯抜きにするか……. 思いながら自宅裏へ回った。

頑丈な鍵を開けると庫全体が揺れた。先に保管してある器物がざわついている。彩華が短く言葉を発すると、何事もなかったかのようになり返った。

中は薄暗いが電気も点けずに空いている場所を探す。入り口に近い所が空いているのに気づき立ち止まる。

彩華は少し考え、袱紗からネックレスを取り出す。そつと布の上に置いて祝詞を唱えはじめた。

「受け取ったのか」

「わー！ びっくりした。いきなり後ろから声かけないですよ」
真後ろに立っている詠に強い眼差しを向ける。

「気配に気づかないお前が悪い」

「ふんだ」

中途半端になった祝詞を最初から唱えなおすと、まじまじとネックレスを見つめた。

「曰くつきには見えないんだけどねえ」

持ち主の念は感じるが悪心は感じない。いや、もしかしたら自分だけが分からないのかもしれない。

だって——深い青から目が離せない。

「……魅了されるぞ。気をつける」

「うん」

石は人の意思。

人の想いを吸収し増幅し、時に放出する。呪具として使われた物以外にも、魑魅魍魎ちみもろうりょうが憑きやすいものだから特に気をつける、と幼い頃から言われ続けた。

神の降りる場所を？ 磐屋？いわたまたは？ 磐戸？いわたと呼ぶように、古の時代から神と石と人は切っても切れぬ関係である。人の願いを叶える

ための媒介物となりやすいのだろう。

青い石に魂を抜かれる感覚に陥りそうになり、無意識に左手に指を這わせた。彼女の手首には数珠型のブレスレットが着いている。これには特殊な加工と術がかけられていて、持ち主を守る宝具ではなく、力が暴走した時に術者を殺めるための呪具になる。

無機質な感触に意識が戻った彩華は、たった今思い出したかのよう
に詠を睨みつけた。

「ところで麻布都に今度謝りなさいよ。わたしの友人に対して失礼な態度取ったら許さないんだから」

「仕方ないだろう。あれとは相性が悪い」

どこかで聞いた台詞を仏頂面で吐き出す詠に、彩華は苦笑いをする
しかなかった。

走る。走る。月明かりしかない夜道を走る。

ひたすら走って——荒い息を整えるために立ち止まった。

数回深呼吸をすると、今来た道を振り返った。遠くにいくつもの
松明が見える。先ほどより数が増えていている気がした。

——どうしてわたしが追われなければならないの？

途中にあった井戸水を使っただけで、血に染まった手と服は、い
くら洗っても綺麗にならない。

そんなつもりはなかった。ううん。ああするしかなかった。だっ
て、無理矢理盗ろうとするんだもの。

ポケットにしまった大切なネックレスを取り出す。

——わたしはただ、わたしの持ち物を取り返しただけ。

金に物を言わせて権力に物を言わせて。わたしたち召使の主張は認められず、泣いて諦めるしかないなんておかしいじゃない。

耳元で囁かれたあの声に唆された訳じゃない。

これはわたしの意志。

どうしてわたしが追われなければならない？

血に塗れた瑠璃は爛々と煌めいている。——そう。間違ってなんかいない。

ネックレスを目の前にかざす。振り子のように揺れて、深い青にちりばめられた金砂が妖しく光った気がした。

これはわたしの物。誰にも渡せない。

月の光を反射しているそれに目を奪われていた。夢中になって、背後から草を掻き分ける音が近づいてくるのに気づけなかった。

振り返る前に銃声。なに？

——どうしてわたしは殺されるの？

赤く燃える炎と猟銃を構える男の姿。

ラピスラズリのネックレスが手から滑り落ちた。

わたしが最期に見たのは、わたしの血を吸って満足そうに輝いている群青色の石だった。

だめ。かえして。あのひとからもらっただいじなものなの。

どうしてわたしはころされるの？

わたしはただ 好きな人と 幸せになりたいだけ

「——」

真夜中に吐き気をもよおした彩華が飛び起きた。彼女の寝着は、まだ寒い季節だというのに汗で湿っている。

昨日きちんと閉め忘れたのだろう。カーテンの隙間から月明かりが差し込んでいる。枕元の目覚まし時計は午前二時を指していた。はあ……とため息をついた途端、また吐き気が彩華を襲う。感触の悪いモノが身体中を這いずり回っているようだ。

目眩がする。胃がムカムカする。肺が圧迫される。

邪気が皮膚から体内へ侵入してくる感覚に息が詰まり、ごほごほと咳き込んだ。左手で自身の胸を擦ってみるが治まる様子はない。冷たい水でも飲んで落ちつこうと彩華は慎重にベッドからおりた。

「――あ」

彩華の足取りは不安定なスプリングの上を歩いているようにフラフラしている。足がもつれて倒れ込みそうになった身体を男の腕が優しく抱き止めた。

「大丈夫か？」

「えい？」

目が霞んで見えないが、よく知っている気配だ。

「すまん。ちよつと散歩してた」

彼の反応が遅れたのは少し離れた場所にいたためらしい。一度ベツドの端に座らせ、詠は彩華の背中を撫でた。

「水持つてくるか？」

「いい……」

掠れた声で答えると詠の胸に顔を埋めた。深呼吸すると月詠尊の澄みきった神気が身体中を巡る。

ひんやりと感じる彼の神気に、荒かった彩華の呼吸が徐々に安定してきた。

「……あれが持ってきた物のせいかな。返してくる」

低く鋭い声音に、詠の背中に回した拳で弱々しく叩く。

「なに言ってるの。一度預かったのに返せるわけないでしょ。慣れれば平気」

保管庫には幾重にも結界を張ってあるというのに、陰の気はたやすく抜け出てくる。特に人の想いというのは、ときに神の力をも上回り、中途半端な能力を持つ者は陰の気に翻弄されてしまう。

『ここから出せ』『呪い殺すぞ』ならばまだいい。分かりやすくして無視もできる。

物に染みついた想いが術者に夢を見せ、自分の無念を晴らせ、どうにかしろと訴える。

霊感体質者が憑依されてしまうのとよく似ている。退けられなければ、よくて操り人形。でなければ発狂して死に至る。

特に注意が必要なのはアンティーク物である。元持ち主の心情が染みついたそれは、長い年月を経て凶悪な付喪神へと変化する事もあるからだ。だから月詠神社ではアンティーク物は手元に置かずにあるべき場所へ返すよう勧めている。

情に訴えた妖の説得は性質が悪い。優しい人間を騙して封印を解かし、あげく肉体を乗っ取る、なんて行動はよくある事だ。

そういえば、と自身を襲う邪気と戦いながら、彩華はぼんやり考えた。

中途半端な能力を持つ術者は、今の自分と同じように苦しんだのだろう。生まれながら持った才能の差があるとはいえ、現在最前線で活躍している術者は、最初から難なく退けられたんだろうか。

たとえば彩華の実兄。

彼が苦しんでいるのを彩華は見た事がないと言い切れる。

自分の知らない所では苦労したのかもしれないが、記憶を辿っても覚えがない。

やはりわたしがダメダメなだけか。

自己嫌悪に陥ったところで、これだけはつきり考え事できるのだから邪気は消えただろう、と彩華は身じろぎした。

「もう、いいよ」

肺に溜まった邪気と神気が綺麗に入れ替わり、彩華の呼吸が規則的に変わっていった。

もう大丈夫だ、と思い、詠から離れようともがくが、回された腕に力を込められ動けなくなる。男の肩に両手を置いて押し返そうとするがぴくりとも動かない。

彩華がくぐもった声を出すと、少しだけ力が緩んだ。

身体は平気だ。ちよつとだけ心臓に棘が刺さったようにチクチクしているけど。これは最近ちよつとだけ疲れている気がするから、気が弱くなってるだけだ。カラ元気も元気の一種なんだから――。

「……なんだ？ 言いたい事があるなら言わなきゃ俺には分からないぞ」

「なんでもないってば」

神気を身体中に取り込み、心も軽くなった気がして、彩華は少しくつめに答えた。

離れようとしたが、腕を背中に回されたままで動けない。彩華が不服そうに見上げると、詠は薄く笑って言った。

「まだ少しくうしてろ。お前は半人前なんだから素直に聞いとけ」
再び顔を埋めるような格好で抱きすくめられた彩華は、しばらく抵抗していたが、諦めて力を抜く。

「……………」

「ん？」

「なんでもない」

かすかな咳きは聞こえなかったようだ。その事に安堵して、しかし同時に情念がとぐろを巻いている状態に気がつき唇を噛む。

夢で見た女の想いが彩華の心臓をちくりと刺す。

気持ちは痛いほどよく分かる。が――。

それと同化してしまつたら危険だと気づいていても、突っぱねる事はできない。

女としての想いと外法師の立場に板挟みになって、胸が痛みを増してゆく。胸の奥に燻っている感情を押さえ込むように、詠の背中にしがみついた。

優しい声がひどく心に沁みる。

天青の夢 四

麻布都まふつから連絡が入ったのは、ネックレスを預かって一週間ほど経過した頃だった。

骨董品を扱う、とある行商人が行方不明だという。最近あまりよくない代物を手に入れた、と業界で噂になっていたらしい。

普段から良い評判は聞かない行商人らしいが、だからといって人の命がかかっているのだから放ってはおけない。

しかもこれが凶変の予兆だったら一大事だ。

「それで、そいつがいそうな場所って？——ああ、そこ、ね。あんまり近づきたくないなあ……」

がつくりと肩を落とした拍子に携帯ストラップの鈴が小さな音をたてて揺れた。

彩華の膝上で丸くなっている仔狼の尻尾がぴんと張る。スピーカー状態にはなっていないが、相手の声が聞こえているようだ。閉じていた目を半分開けて耳を澄ませている。

少し尖った気を纏わせている仔狼を彩華があやすように優しく撫でた。

麻布都が答えたのは、街外れにある幽霊ビルと呼ばれている建物だった。

一応は立ち入り禁止区域になっているが、夏になると肝試しと称して近づく大馬鹿者達がいる。

別名、異形の巣窟。

力ある術者が何度も霊を抜い場を清めているが、霊を引きつける磁石でも埋まっているのか、時間とともに元に帰ってしまう。

ならばさつさと壊してしまえばいいのだが、過去に実行しようとした関係者が相次いで事故にあり、そのままになっている。

「じゃあ、今から行ってくる——うん。早い方がいいでしょ」

麻布都と二、三言葉を交わすと電話を切る。

壁時計を見ると午後十一時半を指していた。

「ちよつと避けたい時間だけどね……」

呪具も扱う行商人がおそくいる場所は異形の棲処^{すみか}。

聞けば聞くほどその行商人は胡散臭くていけ好かないが、我が儘を言つてはいられない。

「詠、仕事行くよ」

「今からか？」

ばさ、と不快そうに尻尾を揺らす。

目の据わった狼は、瞬く間に人間の姿へ変化する。

「そんな自業自得な奴は放っておけ」

「じゃ、準備してくるねー」

聞こえなかつたふりをして彩華は部屋を出た。

普段の調伏退治では詠が嫌がる事は滅多にない。高村家が、外法師が、出会う前から陰陽道を生業としているのをよく知っているからだ。神であつてもそれを抑止する事はしない。たとえ死ぬと分かつていても、だ。

今回は場所が場所だけに心配しているのだろう。

わたし一人じゃ自信ないし、月詠尊がいてくれて良かったなあ。

心の底からそう思い、彩華は祓殿へと足を運んだ。

夕方の薄暗い頃が逢魔ヶ時^{ちようりやうばつこ}——妖が活動し始める時間ならば、真

夜中は丑三つ時——魔物が跳梁跋扈する時。

郊外にある問題の建物は小高い丘の上にある。

目的地へ辿り着いた二人は顔をしかめた。荒れ果てた、という表現がふさわしい。

ビルの壁は今にも崩れ落ちそうになっている。

空に浮かぶ上弦の月はすぐそこに見えるのに、優しい月明かりは地上には届かない。

周りを囲んでいる草木は手入れする者がおらず荒れ放題。生い茂

つてはいるが瑞々しさは一切ない。どす黒い色をした葉がただそこにあるだけだ。晴れた日には彩華たちのいる街全体が見下ろせるはずなのだが、鬱蒼と茂った草木や妖気によって昼間でも視界が遮られてしまうだろう。

草木のざわめきが二人の鼓膜を震わせる。

全てが色褪せたこの空間はまさしく異界。

力弱き者は失神するか気が狂れる。

「あーもう。この一帯俺が一掃した方がいいんじゃないか？」

「やめてよ」

物騒な事を言う詠をたしなめる。

それではわたしまで消えてしまうじゃないか。

一掃、と言うからには手加減なしなのだろう。詠は心底嫌そうな顔をしている。

眉間に皺を刻んでいるから間違いない、と彩華は思った。

「かしわで拍手程度じゃ無理だなこれ」

目の前に広がる闇はただ暗いだけではない。

この地に集まった異形たちの妖気が固まっているのだ。そのためか、蜃気楼のようにビルが揺らいで見える。

詠が一度拍手を打つと目の覚めるような音が周囲に響いた。黒い妖気が道をあげるように分かれたが、すぐに闇の壁は元に戻る。

「生意気な」

再度強めに打つが結果は同じ。

詠の身体から青白い闘気が立ち上ったのを見て、彩華が慌てて声をかける。

「ちよつと、手加減してよ。ビル壊れたらどうするのよ」

彩華の言葉にちらりと彼女を見やった詠は、その秀麗な顔に似合わない意地の悪い笑みを浮かべた。

「そんなヘマするか」

「いくら神様でもビル復元なんて無理でしょ？」

情け容赦なく妖を叩きのめすことはないだろうが、念のため諫め

る。

神の靈魂が持つ二つの側面である荒魂あらみたまと和魂にぎみたま。簡単にいえば、荒魂は人々を祟り、和魂は人々に恵みを与える。

もう十数年も一緒にいるというのに、稀にみせる荒魂にはいつまでも慣れず、彩華は肝を冷やす。天変地異を引き起こすほどの怒りには遭遇した事はないが、それほど荒々しい時もある。

彩華の心配をよそに詠が緩やかに手を振り下ろす。

彼の手から放たれた白光は、二人の周りに漂っていた闇を消滅させた。

その様子に驚いたのか、妖の気配がざっと二人から離れた。遠巻きに様子をうかがっている。鋭い視線が突き刺さるが、襲ってくる気配はない。かといって安心はできないが。

詠が先導して、慎重にビルへと近づいた。

「結界はなさそうだね」

立て付けが悪いのかガラス戸はなかなか開かない。ところどころ割れている。廃墟とはいえ壊す訳にもいかずに彩華は苦勞して開けようとする。

見かねた詠が代わって力を込めた。

「こういつ時は男に頼れ」

軋む音とともに今度は難なく開く。

建物の中は外よりも暗い。ざあ……と暗闇が動いた。

その気持ちの悪さに顔を歪めると、彩華はゆっくりと首をめぐらせた。

建物は三階建て。妖気が色濃いのは一階奥と三階。

異形相手では夜陰に乗じて攻撃をしかける、といたかないのが辛いところだ。

「時間かけない方がいいな。二手に分かれるか」

「うん」

申し出を心よく了承する。

調伏に使っ符は普段より多く持ってきた。たとえ一時的としても

完全浄化は可能。けれどあまり長居はしたくはない。立っているだけで肌がただれそうだ。

特に妖気の強く感じる一階を詠が、三階を彩華が担当となった。

「じゃあ、気をつけてね」

ひらりと手を振って、上への階段へ目を向ける。

「彩華、待て」

歩き始めた彩華は腕を引かれて怪訝な顔をする。

身を屈めた詠の唇が、額、両の頬と押し当てられて、彩華は目をしばたたかせた。

「まじないだ」

「……あつそ」

確かに先ほどよりも視界がはつきりしているが、この場に似合わない行為に素っ気なく返す。

詠が離れたので踵を返し階段へと歩いていく。途中、浄化の符を貼るのを忘れない。

壁に焼けた符の残骸を見つけ、やだなあと呟く。

瘴気にやられたのだろう。肌が焼けただれるのを想像して身震いすると、彩華は自分用に符を一枚身につけた。

「どこまでもつか分らないけどね……」

ないよりはマシだ。

一歩一歩進むたび、靴底が熔けている気がする。

歩く時にする砂埃の音が、自分の立てる音なのか、異形が這っているのか判断がつかない。

姿は見えない妖たちが、金属を擦りあわせた不快な音を出して威嚇している。

廃墟は調伏退治でも滅多に来ないせいか、普段より鼓動が早いと感じた。

また一枚、壁に符を貼ると、立ち止まった彩華は深呼吸して精神統一する。

「風破^{ふうは}」

くるりと振り返ると同時に術を発動する。

短い言霊は力を得て、彩華を襲おうとしていた妖は真つ二つに引き裂かれた。残骸も闇に溶けるように消え去る。

それを見ていた異形たちの双眸が爛々と煌めいた。赤く血走った眼を外法師に据え、吼^ほえた。

短い言霊は詠唱時間が早い。しかしそのぶん効力は減る。それに、一体ずつ退治するのは時間がかかりすぎるし、術を小出しにすると意外と早く霊力が尽きてしまう。

辺りをざつと霊視すると、符を一枚取り出す。

顎を軽く引いて、彩華は腹に力を込めた。

「臨める兵 闘う者 皆 陣烈れて 前に在り」

彼女の足元から真つ白い霊力が吹き上がり、風もないのに黒髪が揺れる。

右手に集まった発光が細長く形を変えた。

生じた霊気の刃が幾重にも分裂し四方へ放たれる。まばゆい閃光が視界を覆った瞬間、異形の苦しみ悶える叫び声が反響した。

まぶたの裏に焼きついたような光の残像が落ち着いた頃、彩華はゆつくりと目を開けた。

一帯に漂っていた妖気は跡形もなく消えうせる。

先へ進もうと彩華は踵を返したが、違和感を覚えて足を止めた。

かすかに音がするのに気がつき足元に目をやる。

手のひらほどの蜘蛛に似た黒い塊が残っていた。最後の足掻きなのか、靴先に牙をたてている。

ぱちんと軽く指を鳴らしてそれを退ける。

——それっきり何も起こらない。

壁に浄化の符を貼ると、彩華はその場を後にした。

生温い風が彩華の頬を撫でた。

三階まで何なくなたどり着いた。正直助かった、と彩華は吐息を漏

らす。

符を多く持ってきたが思った以上に使ってしまった。いざとなれば切り札はあるが、使わないに越したことはない。

小さく言葉を発すると、彩華の指に青白い炎が灯った。神気でできた鬼火のような物だ。それを掲げて辺りを照らした。

炎が燃え尽きる三十秒くらいの間にこの階を確認する。

途中、出会った妖たちは先ほどの調伏を見ていたのだろう。彼女が姿を現すと、慌てて闇に紛れた。

それでも、離れた場所からぎらぎらとした赤い目で仲間を排除した外法師を睨みつけている。

隙あれば攻撃しようとしているのかもしれない。

懷から符を一枚取りだそうとして——やめた。

陰陽の均衡を無駄に崩す訳にはいかない。外法師に恐れをなして他へ去るのならそれでいい。異形の力が一力所に固まらず分散されればそれでいい。必要ならば月詠尊が全てを浄化するだろう。

妖から目を逸らし歩き始める。

その時を待っていたのか。背中を向けた彩華に、一匹が牙を剥いて飛びかかった。

ポケットの中にあつた珠を掴み取るや否や一気に力を解放する。
「斬^{ざん}」

鋭い音がしたかと思うと、黒いモノが千々に破れ去った。

一度だけ耳障りな叫びが上がったが、他に命を捨てようとするモノはいないようだ。

暗闇に浮かぶいくつもの赤い光を一瞥すると、彩華はふたたび歩き出した。

ヒールのある靴ではないのに足音が響きそうなほど静かだ。自分の心臓の音まではつきり聞こえそうだなと彩華は薄く笑う。

目を凝らすと廊下の奥におどろおどろしい雰囲気を纏ったドアが見える。

それにしても——胡散臭い連中は、どうしてこんなに気味の悪い

場所を選ぶのか。

場の雰囲気、本来持つ？気？を真逆に作用させたり増したりできると聞いた事があるが理解できない、と彩華は顔をしかめる。

そうこう考えているうちに目的のドアへと着いた。

一度瞬きして霊視する。何か仕掛けられている様子はない。それでも慎重にドアノブを回す。

「――？」

少し開いたところで止まった。何かドアの前にある。

今は妖の気配は感じない。彩華は強めにドアを押した。

ごろりとその何かが転がる。

「つつ！」

不意をくらって彩華はおもわず肩を揺らした。

人の足だ。靴の大きさから判断すると、男。

喉を鳴らすと、彩華は人ひとりが通れるスペースを開け、するりと身を滑り込ませた。

倒れている男の頸動脈あたりに指をあて、ほっと胸をなで下ろす。

男は気絶しているだけだ。しばらくすれば目を醒ますだろう。

彩華は男から離れると部屋の中を確かめる。

家具らしいものは古ぼけた木の棚とテーブルだけ。怪しいモノを扱う男も、ここで生活する気にはならないようだ。

棚に近づき一つずつ霊視する。

この男のような商人たちならば「まだ熟していない」と言うだろう。お近づきになりたくない物ばかりだが、あるだけで災いをもたらすモノはない。

「――ない？」

違和感に彩華が呟いた。

麻布都は、最近よくないモノを手に入れたらしい、と言っていたなかつた？

では、それはどこにあるのか。

指に松明代わりの炎を灯らせ再度確認する。

呪詞しじの書かれた符、ウズラの卵ほどの大きさの青い原石、群青色の小さな珠、最高級品と思われるビスクドール、札で封がされた壺……特に気になる物は見あたらな。微量の邪気は感じるが、この程度ならばすぐに浄化できる。

「まさか、もう誰かに売つてるとか……」

だとしたらまずい。呪具が「熟して」誰かの手に渡っているのなら、自分の手におえないかもしれない。

入り口付近で倒れている男を叩き起こして問いただすか……と、彩華が思ったその時。

窓のない部屋なのに、空気の流れが変わった。

それまで感じなかった妖気に、彩華の身体がびくりと反応する。

徐々に邪気が色濃くなつてゆく。

唇を噛んで自分を叱咤する。上手く隠されているのに気づけなかったのはわたしのミスだ。

棚の中央に鎮座している原石が小刻みに震えだした。その大きさには似合わない強大な妖力を漂わせている。

霊視しただけでは判断できないが、サファイアだろうとあたりをつけた。

万物は善と悪の両方備えている。聖なる天空の青を象徴するサファイアであるが、邪悪な呪具に作り変えられたのだらう。一部の地域では不幸をもたらす凶星の？土星の石？とも呼ばれているのだ。

顎をひいて、一力所に集まる邪気から視線を外さずいつでも動けるよう身構える。

均衡を先に崩したのは妖だった。

何の前触れもなく、突然の重力が彩華を襲った。床に沈みかけそうになるのを必死に耐える。

妖が人の型をしていたならば、口を歪め嗤わらっているにちがいない。

『取引をしよう』

頭に直接語りかけられる声に、彩華は青玉せいきよくを見つめる。

『お前の望みを叶えてやろう』

望みなんて、ない。

『お前の望みはなんでも叶えてやろう』

妖は自身の力を増幅させるためにさまざまなものを取り込む。人の精を喰らい、霊力の糧とする。しかし神の加護を得た者は、強い守りもしくは強靱な精神を持っている。妖はそれを崩そうとして揺さぶりをかけてくる。

よって常に強い意志と覚悟を持って、と。

彩華は幼いころ何度も聞かされた言葉を思い出して唇を噛んだ。このような怨霊退治を生業としているのだから、死ぬ覚悟はとうの昔にできている。なのに震えが止まらない。

「そんなもの……」

問いかけに答えてしまえば術に捕らわれる。分かっていたのに言葉が漏れた。

『あるだろう？ たったひとつ』

彩華の右手が震えた。

瞬きもせずに凝視する。

目に見えない手が自分の髪を撫でている気がして、彩華は一步後ずさった。

『叶えてやろう』

また一步。

突然、彩華の身体が硬直する。

捕らわれた、と認識した時はすでに遅かった。

妖の嗤う声に耳を塞ぐ。

しかし彩華の身体がびくりと震え、彼女の意志とは関係なく腕が下へ落ちた。

金縛りにあつたかのように、唯一自由な目だけを動かす。

「望み……」

——ある。ひとつだけ。

妖しい光を放つ妖を見つめる彩華の目は、幾分か虚ろだ。

「そんなの、自分でどうにかする。あんたの力なんて、借りない」

脳がとろけそうになるのを必死に耐えて、彩華は妖を睨みすぎる。気を抜いたら一気に取り込まれそうだ。

気を紛らわすために強く握った掌に爪が食い込むが、彩華は痛さに構わずさらに力を入れる。

不快な笑い声が室内に響いた。

『一人でどうにかできるのか？ できないだろう。だからその力と引き換えに望みを叶えてやるというのだ。他の誰も関与しない、お前だけの願望を』

ひとの弱みを見つけて、ひたすらそこにつけこむ。

妖が望む通りの夢を与えてやると持ちかける。だが、それは甘い毒だ。心地よさに身を委ねたら最後。甘い甘い夢の中で自分が死んだことも分からず、妖に魂を喰われるか、転生もできずに永遠に彷徨い続けるかだ。

——わたしはただ、あの人と幸せになりたいだけ——。

いつか感じた思念は……あれはわたしの願いだ。気がつけば常に傍にいる存在が大きくなりすぎている。見捨てられたら、たぶん発狂する。

きつく握っていた彩華の手が緩む。腕をだらりと下げ微動でもない。

元々は神の気まぐれで一族と契約したのだ。月詠尊と関係があった訳ではない。神は本来、何ものにも制約されない自由な存在である。いつでも立ち去ることができる——。

彩華の身体がゆらりと傾いた。

心地のよい誘いに意識を飛ばしかけ、彩華が瞼を落としかけた時だった。

「——そこまでだ」

凜々しい声が闇夜を裂いた。

姿は見えなくても誰なのか分かった彩華は、ぎくりと身体を強張

らせた。途端に金縛りが解け、ずるずると冷たい床に座り込む。

彩華は身体が僅かに震えているのを感じて、それを誤魔化すように自身の腕に爪をたてた。

「こんな小物の誘いに乗ってどうするんだ、お前は。……まあ、俺のせいではあるのか」

この場に似合わない和やかな声で青年が呟いた。

威風を纏った月の神は、自身に向けられる殺意を無視して、真っ直ぐに彩華の元へと歩いてゆく。少しだけ膝を折り、力が抜けて立てない彼女の腕を取ると引っ張った。

なすがままの身体を左腕で支えて耳元に囁く。

「すぐに済むから、しばらく目を瞑ってろ」

「……うん」

いささか困惑した表情をしていたが、穏やかな空気に包まれて安心したのか、彩華は素直に目を閉じた。

詠は優しい眼差しで見つめると、

「さて」

先ほどとは一転して、鈍く光る塊を冷たく見据えた。

「こいつに手を出さなければ見逃してやってもよかったんだが、な」
動きもせず、言葉も発さず、ただ時が過ぎるのを待っているかのようだ。

詠が右腕を伸ばして石を握りこむと、逃れようとがたがたと暴れだす。古い柵が軋んで今にも壊れそうだ。

必死に抵抗するそれを難なく神気で押さえ込み、さらに力を込める。

「——今度この世に現れた時は相手を選べ」
ぐしゃりと。

断末魔をあげる間もなく、石は詠の手の中で一瞬のうちに粉々になる。指を開くと、どこからか吹いた風が砂粒を攫って何処いそこともな

く消え去った。

「終わったぞ」

彩華の肩に手をあて身体を少し離そうとする。しかし、背中に回された彼女の両腕に力が込められた。

目を細め、同じように彩華の背中を包み込む。

「……ごめんなさい……」

「何がだ？」

今にも消え入りそうな声で言っただけ黙りこんだ彩華に問いかけるが、答えは返ってこない。

「詠を裏切ろうとした」

縋りつく腕が小刻みに震えているのに気がつき、詠は背中を撫でながら再度声をかけた。

「浮気くらい俺は気にしないが」

「……真面目な話してるの」

茶化した物言いに、彩華は伏せていた顔をあげた。いくらか普段の調子が戻ったのか、僅かに眉をよせている。

「だから、その程度のくだらないものは気にしない。欲を剥き出しにしてこそ人間。感情を持たない人形は要らぬ。——道を誤ったら俺が正してやるから、何度でも踏み外せ」

真顔で言い切る詠に彩華がたじろいだ。

不行状ふぎようじょうを勧める神など邪神以外いない。何を言っているのと目で訴えている。

「いや……。お前が心配しているのは俺の心変わりか。気に病むのは時間の無駄なんだが——ならば輪廻りんねの道から外れて俺の傍にいるか？」

「え？」

「人間でいることを辞めて、俺に魂を預けてずっと傍にいるか？
それでお前の気が安らぐのならそうしてやる」

柔らかな眼差しを彩華に向けて、ぽつりぽつりと言葉を紡ぐ。

「だが俺はそうはしたくない。知り合った人間が自分を置いてこの

世を去っていくのは、なかなか堪えるぞ」

命を助けてやる力がないわけではないが、ただ最期を見守るしかない。

目の前で愛しい人が死にそうになっているからといって、己の感情のまま天命を変える事はできない。

「……詠は」

そこまで言って彩華は躊躇する。

一瞬の間のあと、意を決したように続けた。

「詠は、ずっとそんな想いをしてたの？」

返事はなかった。

代わりに、彩華の両頬を包み込んで仰がせる。

不安げな表情を滲ませた彼女の額に、瞼に、頬に、唇を落として最後に薄く開かれた唇を塞いだ。

「睦^{むつ}むなら、こんな廃墟は避けたかったな」

少しばかり頬を赤く染めている様子に微笑み、吐息が触れ合う距離で囁く。

「心配しなくても、俺にはお前だけだよ」

密やかな声は彩華の耳には届かなかった。聞き返す彩華に、詠は微笑んだだけでそれ以上は何も言わなかった。

抵抗する間も与えずに、今度は深く深く口づけて、こぼれる批難の言葉すべてを吸い尽くす。

「悪夢は忘れてしまえ」

そうして、優しく瞳を覗き込んだ。

二人の目線が絡みあった瞬間、彩華は身体を震わせると目線を逸らそうとする。だが、詠の行動はそれよりもごく僅か早い。

ぼんやりとした彩華の瞼が徐々に重くなり、次第に視界を暗闇が覆う。急な眠気に驚いて、彩華は慌ててかぶりを振った。

「まって。まだききたいことが」

必死に耐えようと詠の背中にしがみつくが、不思議と身体から力が抜けていく。

暖かく優しい気配に身を包まれて、彩華は完全に意識を手放した。
「——心配しなくとも俺にはお前だけだ。たとえお前が嫌がっても手放すつもりはない」

すでに深い眠りにについている彼女に聞こえることはないが言葉を紡ぐ。指で梳いた黒髪は、艶やかな絹糸のようであって、頑丈な鎖のように絡みつく。

ただの暇つぶしのつもりが、あるとき捕らわれたのは天運か。
自嘲気味に喉を鳴らすと、彩華を優しく抱え直した。

視線を巡らせ——ふと、小さいラピスラズリに気がついた。
目を細めて考える仕草をし、何か思い立ったのか手を伸ばす。石に触れると微量の静電気が走った。それで、理解する。

「……あいつの見立ては間違っていたか」
間違うはずはないと分かっているが、こう思い通りに事が進むのは面白くない。

詠は青い小さな珠を摘み上げると、シャツの胸ポケットに落とす込む。

「しばらくの間ここで我慢してくれ。お前の望むようにしてやるから」

鈍く光る珠に囁き、気を失っている彩華の身体を優しく抱き上げて歩く。

途中、倒れている男の姿が目に入った。生きていると分かっているから、一瞥いちべつしただけで何もしない。

詠が歩いた後に微細な光の欠片が流れ落ちた。それが輝き渡る銀ぎん紗幕しゃまくとなり、広がる瘴気を呑みこんでゆく。

商人が集めたらしい呪具類は、音もなくばらばらになった。

建物全体に巢食っていた妖たちが騒ぎ立てる声を聞く者がいたならば、恐ろしさに震え上がっただろう。それほど気味の悪い異音が辺りに轟いた。

神気から逃げ切ったモノもいれば、真っ先に浄化したモノもいる。浄化を免れた妖たちは、どこぞへと立ち去ったのか、暗闇に紛れて

ゆく。

のたうつ妖たちは、やがて海の藻屑のように果てた。

しんと静まり返った場所に足音が響く。

屋上へと続く鉄の扉は、錆び付いた音を立てながらゆっくりと動いた。

緩く吹く風を一身に受けて詠は目を細めた。どんよりとした厚い雲は晴れ、群青の空が広がっていた。

中央辺りに立つと、膝を折って腕に抱いていた彩華をそっと横たえる。アスファルトに直にはなく、若干、宙に浮いた状態である。規則的な寝息をたてている彩華に微笑み、その真横に片膝を立てて座る。

軽く空を見上げた詠の唇が、人の耳には聞こえない言葉を紡ぎ、す……と緩やかな動作で右手を掲げる。

何も無い空間から詠の掌に青いネックレスがこぼれ落ちた。彩華が麻布都から預かった例のネックレスである。

「ご苦労。あとはいい」

あるし主の言葉を受け、月の神気に似た気配は一陣の風と共に消え去った。

受け取ったネックレスをちらりと見やると、胸ポケットから青い珠を取り出し、片手で器用に紐に通す。

呪具というものは一カ所に集まりやすい。付喪神が憑いていなくても、不思議なことに勝手に移動している。

負の気が強い場所へ。呪具^{じふん}を必要とする人間の元へ。そして、本来あるべき場所へと帰りがり、それが可能な場所を捜し出す。

目の前にネックレスを掲げると、再度詠の唇が動いた。

満天の夜空を切り取ったラピスラズリのネックレスは、陰湿な雰囲気立ち上らせていたが、今は神気を反射してきらりと輝いている。先端から徐々に形が崩れていき、金砂となったそれは下へは落

ちずに舞い上がった。

付喪神とは違い魂は宿っていない。あるのは持ち主の強い呪^{おそ}のみ。
光の粒子は心残りがあるらしく、詠の頭上で渦を巻くように漂っている。

「……情けをかけてやる」

お前の望む夢を与えてやる。それが偽りのものだとしても。

ついと手を翳すと、柔らかな青白い光が流星に似た軌道を描いて上昇する。金砂と交じりあい、天空で琴を思わせる音を奏でた。

その霊妙な楽の音に、詠は目元を和ませる。

楽しげに乱舞していたその光は、満足したのか闇夜へと溶けていった。

天青の夢 終章

木漏れ日の中を歩いていて、爽やかな風が吹いた。その気持のよさに水干すいかんを着た子供が空を見上げる。

日はまだ高い。だが逢魔ヶ時までに都合の良い場所を見つけなければならぬ。

首の後ろで一つに纏めた髪を揺らして、子供は使命を全うすべく歩きにくい獣道をひたすら進む。

徐々に草木で視界が狭まり恐怖心が沸いてくる。近くで草を掻き分ける音がして、びくりと身を竦ませた。

音の正体は狐か狸だったのか襲ってくる気配はない。胸を撫でおろし、子供は一度深呼吸した。

「早く帰らないと、父さんが心配するよね」

誰に聞かせる訳でもなく、自分を奮い立たせるために独り言を言う。そして再び歩き始めたが、突然の浮遊感に、あれ？ と首を傾げる。

音もなく地面が抜けた——否、崖に気づかず子供が足を踏み外したのだ。

悲鳴をあげる事も忘れて真つ逆さまに落ちる——。

「ぐはあっ！」

崖の下にあった何かの上に落ちた子供は、その弾みで横へと転がった。数回回転して止まる。しばらく動かなかったが、よろよろと身体を起こした。

「いったあい……」

痛みに涙を浮かべながらも、怪我しているか確認する。思っていたよりも高い崖ではなかったらしく、擦り傷程度で済んだようだ。乱れた髪を括り直し立ち上がったところで、子供は鋭い視線を感じた。そういえば、奇異な声が聞こえたよう……と恐る恐る振り返る。

長い銀髪を背中の中あたりで緩く括り、天色あまいろの狩衣に身を包んだ青年がそこにいた。穏やかならぬ雰囲気をかもした男は、腹部に手をあて、上から振ってきた子供に剣呑な視線を向けている。

「ご、ごめんなさい……」

不機嫌そうに眉間に皺を寄せている男に恐縮したのか小声で謝る。相手の怒気が増した気がした子供はさらに縮こまった。

「――面倒が増える前に待機場所を変えるか」

吐き捨てるように男が呟いた。

人間しづんと異なる容姿は化け物として忌み嫌うものだ。子供の怯えに舌打ちすると男は煩わしそうに前髪を掻きあげた。銀の髪が日の光を柔らかく反射する。

「あなた、神さまなの？」

いつの間にか男の傍へと移動した子供が男を見上げて言った。物珍しそうな眼差しを向けられて、男の皺が深くなる。

「――何故そう思う」

「だって、強い神気だもの」

それに綺麗、と囁いた子供は先ほどの衝撃で乱れた銀髪に触れた。勝手に触るな」

子供が伸ばした手を振り払い、さらに睨みつける。だが、それ以上の粗暴な行動そほうはせずに睨みずえることで退去を命じた。

手を叩かれ目をぱちくりさせて見つめ返す子供には怯えた様子はない。なかなか立ち去らずに不快感をあらわにしていた銀髪の神は、子供に興味を持ったのか、幾分か眼差しを和らげて声をかけた。

「お前、女めの子か。珍しいな水干など着て。白拍子ではないのだから？。」

行脚中において舞を披露する白拍子には子供の舞人まいびともいるが、このような辺鄙な場所にいる理由がない。近くに巫女舞を必要とする神社もないのだから。

二人がいるのは都から遠く離れた山奥。人里はあるにはあるが、ここよりももっと都に近い。

「父さまがこの地で悪事を働いている妖を退治にきたの。わたしの一族は陰陽師なの。今夜は満月で、一族の力が最もみなぎる時だから」

答える少女の顔は、ほんの少し誇らしげだ。

「そうかお前、たかむら篁の——」

陰陽道を操り月を崇め祭る一族がいると聞いていたが……と思い至った神は、まじまじと目の前の少女を見つめた。別段自分とは関係もない。しかし稀有な出来事に心を動かされ再び話しかける。

「それで、お前は どうして崖から落ちてきたんだ？」

「結界を張るから都合の良い場所を探してこい、って父さまに言われたの」

「……それは、お前を危険から遠ざけたのではないか？ この地の悪鬼は人間の手に負えるモノではないのだが」

何の気なしに言った言葉に少女が反応した。たちまち顔が強張ってゆく。

「もう日が暮れちゃう！ 戻らなきゃ！」

「待て」

今にも駆け出しそうな少女の首ぐりを掴んで止める。

首元を掴まれた少女が足を滑らせ派手に尻餅をついた。硬い地面で痛かったのか、瞳を潤ませて振り返り、上目遣いで相手を見上げた。

放せと目で訴えている少女を神はちらりと見やると腕を引っ張り立たせる。困惑した表情を無視して、少女を軽々と抱き上げると崖へと跳躍する。

急な出来事に驚いた少女は落ちないように必死にしがみついた。到着しても下へは降ろさず、神は歩き出す。

「あ……の……神さま？」

戸惑いの声をあげる少女を一瞥すると、

「お前の足では時間がかかる。死人は俺の管轄だからな。ついでに父親の元へ連れてってやる——物の怪が動き出した」

びくり、と子供の身体が震えた。顔が少し青ざめている。無理もない。陰陽道の家系に生まれても少女はまだ子供だ。

「安心しろ。誰も死なせんから。……どうせなら一掃して新たに創り出した方がいいと思うんだがな」

「どうして？」

「妖と人間、どちらか一方を排除では均衡が崩れるからな。ためらいなくやってしまえば、さぞかし穢れのない世になるだろうに」

「そんなの……」

言いよんだ少女の頭を優しく撫でて神が続けた。

「人間とは脆く卑しい生き物だ。お前も、化け物退治を生業とするならば、そのうち分かるだろう」

子供ながらに理解したのか黙ってしまう。少女は口を開きかけるが、怨嗟のこもった声が聞こえて口を噤んだ。

険しい神の目が一層鋭くなる。

「持つてろ」

神は片手で自分の首飾りを外し子供の首にかけた。

「勾玉だ。いいの？」

先端に付いている赤い瑪瑙の勾玉を手に取り、まじまじと見つめる少女の目がきらきら輝いた。

「魔除けになるからな。しばらく貸してやる」

「ありがとう。大事にするね！」

そう言って笑う少女の顔を眩しく感じた神は愛しげに目を細める。濃紺の空に浮かびあがる月の化身は、そのとき初めて笑顔を見せた。

まどろみの中で、彩華は自分の前髪がそよそよと揺れているのを感じた。ひどく懐かしい夢路を辿っていたようだ。だが思い出そうとしても、幸せな気分を満たされた、と臆げでしかない。

窓も閉めずに寝てしまったんだろうかと考え、はたと気づく。

昨日は麻布都に頼まれて、郊外へ怨霊退治に出かけたんだ。

目を開けると視界が少し霞んでいる。数回瞬きし……彩華は目を疑った。

厚い雲に覆われていたはずの空は、今は雲ひとつない。

まだ少し目が霞んでいるが、群青色の空に無数の星がちりばめられているのが分かった。

いくら郊外でも大気汚染その他の影響で満足に星を眺めるなど不可能である。軽く気が動転した彩華は、硬直したまま横たわっていた。

夢を見ているのか、まだ寝ぼけているのか……と再び目を瞑る。

「起きたか」

声をかけられた彩華は、はっと目を開けて視線を巡らせた。ところどころ壊れているフェンスに、よく知った気配の青年が寄りかかっている。暗くて表情は分からない。

手について起き上がるうとした彩華は、アスファルトの床ではない柔らかな感触に驚き、目だけを動かして確認した。

——何も見えない。が、触ると何かがある。ジェルでできたマトが敷いてある感じだ。力を入れると少しへこんだ感触まで分かる。バランスをとりながら彩華が起き上がった。急に起き上がったせいか、吐き気と眩暈がして軽く目を閉じる。しばらく呼吸を整えてからゆっくりと目を開けた。

「そうだ、あの商人は？」

できる範囲で頭の中を整理した彩華は倒れていた男を思い出し、詠に聞いただす。

「放っておいても問題はないぞ」

につこりと、見た者が騙されるような不釣合いな笑顔を向けた。

「でも、気絶してたし……」

「怪我もないし、放っておけばそのうち目が覚める。真人間にでもなっくてくれりゃいいけど、無理だろうな」

あの手の人間は喉元過ぎればなんとやらで同じ事を繰り返すだらうな。またそのうち痛い目見るだろう、と吐き捨てる詠を見て彩華は苦笑した。たしかに胡散臭くていけ好かないと思った相手だが、こう言い切られると同情したくなる。

寄りかかっていたフェンスから身体を離すと、詠は彩華の元へと歩いてゆき右手を差し伸べた。

取ったその手が暖かくて、彩華は僅かに顔をほころばせる。

力強く引き上げた。

「ひゃっ」

勢いでバランスを崩した彩華が詠の胸へと倒れこむ。急に気恥ずかしくなり慌てて離れようとするが、一足早く背中に手を回されていてそれは叶わない。

ばたばたと暴れだした彼女に対し怪訝とした表情のあと、詠は口許に薄い微笑を浮かべた。

「何を今更照れている」

「うるさい」

頬を染めて小さく呟く彩華をひょいと抱き上げると、詠は屋上にある貯水槽の上へと跳躍した。

驚いた彩華は詠の背中にしがみつき、瞬きするのも忘れて彼の顔をじっと見つめた。

「どうした？」

いつか経験したような既視感に彩華は首を傾げる。

「……なんでもない。わたしの気のせい」

遠くに見える高層ビルや電波塔の明かりがぼんやりと夜空に浮かんでいる。

先ほどと比べてたいして高くなっていないが、ここは小高い丘になっている。他に景色を遮る物がなくなり見晴らしが良い。

良いが、足元が不安定で、彩華は怖々と見下ろした。地面に吸い込まれそうな感覚に陥って後ろへ下がろうとするが、立てるスペースはごく僅かだ。

「俺がいるのに落とすわけないだろう。失礼な」

血の気のひいているその姿に詠は幾分か呆れ顔をしたが、腰に回している腕に力を入れて安定させる。

詠が右手で彩華の目を覆うと、彼女から驚きの声があがった。

「このまま上向け」

ややムツとしながらも、彩華は言われたとおりに顔を上げた。

右手が外されて、今にも振ってきそうな満天の星空に彩華は感嘆の声をもらした。都会では決して見られない星々が、雲ひとつない夜空一面に燦然と輝さんぜんいていた。

「……やっぱり幻じゃなかったんだ」

「一時的なものだから、明日には見えなくなってると思うが……明日というか、今日の夜か」

怨霊退治のためにここへ到着してから結構な時間が経っているはずだ。出かけた時間も遅かった。朝から神社の仕事もある。だから早く帰らねばならないのに、勿体なくってこの場を離れたくない。徹夜は辛いけれどなんとか耐えようと心に決めて、彩華は天を仰ぎ見る。

ひとときの幻に、まばたきするのも忘れて魅ひき込まれた。

東の空は闇色が薄まってゆき白みを帯びはじめた。
まもなく夜が明ける。

- 終 -

天青の夢 終章（後書き）

てんせいせき

天青石：セレストタイトという石の和名。

作中には一切出てきませんが、タイトル付ける際に名前のイメージからこれにしました。

ラピスラズリの和名？瑠璃？ではちょっと違うな」と。

鏡の月 序章

眠りから覚醒した青年が目を開けた。

本来は眠りなど必要としていないが、触れる肌の心地よさに意識を飛ばしていたらしい。

ゆったりとした動作で起き上がろうとしたが、身体を優しく包み込んでいる細い腕に気がつき動きを止める。

横で穏やかな寝息をたてている女の柔らかな黒髪を撫でて目元を和ませた。普段の凛々しさのある表情はどこにもなく、今はとてもあどけない顔だ。その華奢な肩を引き寄せて一度抱きしめると、起さぬように細心の注意をはらい、自身に絡みつく女の腕を解く。名残惜しそうに女の髪に口づけベッドから降りた。その拍子にずれた薄い掛布団をかけ直して、ベッド横に片膝を立てて座る。

男の深い溜息が静寂の中に響いた。

「……人間界が長すぎてもううく耄碌したのか俺は」

自嘲気味に吐き出し僅かに汗で湿った前髪を掻きあげた。

身体を蝕まれるような感覚は初めてだ。近いうちに起きる月蝕の影響など、過去にも未来にもありえないことだ。

月蝕は頻繁にはないが、よくある自然現象のひとつである。厄災や異変の前触れと考えられていたのは古の時代。必ずしも天変地異が起きるわけではない。

——だが自身に異変が起きている。

月が蝕まれる、とはよく言ったものだ。

夜空を煌々と照らしていた月が欠けていく。

夜を統べる月が影に侵食されていく。

生きながら精神を喰われるというのは、こんな感覚なのだろうか。男は苦しさを耐えるように爪をたてた。荒く乱れた呼吸を繰り返して、片膝に頭を乗せて目を閉じる。——やがて顔をあげた男の目は仄暗い光が宿っていた。

「……そろそろまずいな」

原因がわからぬうちにはどんな影響を与えてしまうのか計り知れない。

——いや、心当たりは、ある。

目を伏せた男は奥歯を噛んで自身を呪った。

たいしたことはない和高を括って放っておいたのは俺か。

歪な笑顔を浮かべつつ身体を引きずるように立ち上がり、一度だけ愛しい女の髪を梳いて手を放す。

声もなく呟いた言葉が空気を震わせた。

男の輪郭がゆらりと揺れたかと思うと、周りの闇に溶けて消えた。

何もない空間が歪んで裂ける。その裂けた部分から青白い月光が零れ落ちた。

現れた長身の男の足が床に着く。人ならざる強い神気を纏ったその男は、背中の中央で緩く縛った長い銀髪をなびかせしほし佇む。

急に息が苦しくなり歩き出そうとした足を止めた。

視界がぶれて焦点が定まらない。

「——っ」

がくりと膝をついた拍子に狩衣の袖が大きくなびいた。

頭の中が真っ白になり、思考能力も低下しそうになる。自身がどういった行動をとったのかもわからず、ふと膝についているのに気がつき愕然とする。

「ここまで弱っているのか……？」

額に手をあてて呻いた。

背中に冷たいものが伝うのを感じて血が出るほどに唇を噛む。この俺が翻弄つぐよみされるとは、と悪態について息を吐いた。

最も清浄な月詠神社の本殿ですら不安定だ。身体の中を異形が這うような感覚に不快感を露にする。その瞳には、ふたたび陰鬱な光が宿った。

前髪から覗く目がぎょろりと動いた。

男を知る者がいたならば、普段その身に漂わせている雰囲気の違いに驚くだろう。凄みの増した霊力は、今は悪鬼そのものと言って
もよい。

「汝なんじゃ悪しき神なり」と咎められたこともある。元々、神は荒魂あらみたま、和魂にぎみたまのふたつを持ち合わせているのだから、別段問題はない。むしろ自然な状態だ。

だが、三貴神さんきしんのひとりが闇に飲まれたとなれば話は別だ。滑稽すぎる。

それが可笑しくて乾いた笑い声をたてた。静まりかえった暗闇の中で、男の声だけがこだまする。

気が狂れたように晒い続ける声を、どこからともなく吹いた風が掻き消した。

——傍にいて、と。

唐突によく知った声が聴こえた気がして、男は晒うのをやめた。

深い沼の底へと沈んで消えていきそうになった意識を、甘い声が繋ぎ止めた。彼女がいなければ、今頃どうにかなっていたかもしれない。

本殿が元の厳かな静寂に包まれた。

胡坐をかいて座り直した男は、空に向かって小さく、緋月きげつ、と声を発する。

清らかな風が流れた。

呼び声に答えたその風は、慕うように男の銀髪をそよがせる。

やがて穏やかな風は小さな旋風となって男の前に現れた。徐々に弱くなった風は蜃気楼のごとく漂い、発光とともに人型をとる。片膝について声の主に深く頭を垂れると、耳より少し長めの銀髪がさらりと音をたてた。

「主よ。何なりと」

面をあげたその顔は、彼の主によく似ていた。顔だけでなく雰囲気も似通っている。

緋月と呼ばれた侍従は、主のただならぬ様子に秀麗な顔を強張ら

せた。

「主……っ」

「騒ぐな。たいしたことない」

言い切る言葉をうけて黙り込むが、困惑の色が浮かんでいる。盃に溜まっていた水が少しずつ零れてゆくように、主の神気が流れているのを感じ取ったらしい。

「しばらくここを離れる。このままではまともに動けぬからな」

緩やかな動作で立ち上がった。

理由も言わず去ろうとする男を緋月は目で追った。黙ったままの主を責めたい気持ちはあるものの、引き止める術もなく口を噤む。

「あれが寂しくならない程度に相手をしてやってくれ」

「——は」

短く返事を返した緋月に背を向けた男は思案顔で上方を見やる。

愛しい女の笑顔を思い浮かべて密かに眉をよせた。

今度あの笑顔を見られるのはいつになるのか——。

「……あとは頼んだ」

そうして月詠は、この地から姿を消した。

鏡の月 一

薄い掛け布団の中から細長い指が現れた。電子音を頼りに目覚まし時計を手探りで探している。

目当ての物にたどり着いた指がスイッチをオフにした。

音が止んでから数秒後。のそのそと布団から這い出た彩華は、小さな欠伸をひとつ噛み殺した。目じりに浮かんだ涙を指先で払うと、首を前後左右に動かす。

癖のない黒髪を手ぐしで軽く整えつつ、カーテンと窓を開けた。

部屋中に入ってくる心地のよい風を受けながら、彩華は肩から腕をほぐすように動かした。

身体がひどく重い。

無理な体勢で寝てしまったのかと考えた彩華は、昨夜のことを思い出して動きを止めた。

雲ひとつない晴れた夜だった。なのに、雷がひとつ落ちる音が轟いたのだ。

独特の雷光はなく、何事かと思った彩華は窓を開けて外の様子をうかがった。

——やはり晴れている。

耳を澄ませるが雷の音はもう聞こえない。

なにか霊的なことでも起きたのか、宮司である父の元へ行こうかと思い窓を閉めた瞬間、背後でどさりと音がした。

どこかへ姿を消していた月詠尊——詠が、文字通り転がり落ちてきた。

先ほどまで自室でのんびりと過ごしていた彩華は、突然のことに頭が真っ白になり事態を飲み込めずにいた。

詠が床に這い蹲り荒い呼吸を繰り返している。

こんな風に苦しんでいる詠は知らない。

初めてのことに彩華はどう対処すればいいのか戸惑った。第一、三貴神のひとりと言われている神相手に、人間ごときができることなんてないのだ。

ひどく狼狽して、貧弱ではない男を支える。熱を帯びた身体はいつも以上に重く感じる。

両腕で抱えるようにすると、彩華の首筋に顔を埋める男の息がかかった。

傍にいろ、と耳元で囁く艶のある声に、思わず倒れこんできた彼を突き飛ばしたくなるほど心臓が飛び跳ねた。一瞬硬直して気を取り直して、何とか重い身体をベッドに横たわらせる。

そうしてやっと鼓動の早い心臓を落ち着かせられると思ったというのに――するりと伸びてきた詠の手に捕まった彩華は、あつという間に彼の腕の中へと収まった。

絡みつく腕は、彩華がもがけばもがくほど纏わりついてくる。強い力で組み伏せられて、ぴくりとも動けない。背中が圧迫されて苦しさに彩華の顔が歪んだ。

かすれた声で訴えて、やっと緩められる。

そろりと離れた詠は今にも泣きそうな目をしていると思った。そのまま去ろうとする男を、今度は自分から引き寄せて、抱きしめてやっと落ち着いたのか、彩華を見下ろす詠の眼差しに感じていた翳^{かげ}りが消えた。互いの息がかかりそうなほどの至近距離で、ふたりの視線が交わる。

その後のことは覚えていない。眠ってしまったのだらうと彩華は考えた。

ただ、服ごしに触れた肌と唇が熱を帯びていたのは、よく覚えている――。

「彩華様」

「うひゃあ！」

突然声をかけられた彩華は、素っ頓狂な自分の声にバツが悪くな

り眉をよせた。気を取り直してきよろきよろと部屋を見回すが、どこにも誰の姿もない。

あんなにはつきりと聞こえたのに幻聴ってことはないよね……と彩華が首をかしげていると、足元で靈力が竜巻のように巻き上がった。銀に近い真つ白な風は、間もなく回転の勢いが弱まって消える。その跡には、銀色の毛並みをした仔犬が、行儀良く？待て？の姿勢で座っていた。

辺りに漂う靈気で、これが妖の類ではないということがわかる。仔犬が纏っている神気は、彩華の住まう月詠神社に満ちているものと同じである。

「えつと……緋月？」

多分そうだろうとあたりをつけて名を呼ぶ。

「はい」

銀色の尻尾がぱたりと振れた。よく見ると毛の色は銀ではなく、うっすら緋色がかっている。瞳の色も緋色だ。だから？緋月？なのかと納得する。

以前、数回会ったときは仔犬ではなく、詠に似た雰囲気の人型をとっていた。違うのは、髪の高さと表情がないことくらいだろうか。「私は本殿におりますから、御用があれば呼んでください」

「ん。ありがとう。……彼は、出かけたんだよね？」

緋月の目の前に正座する。彩華が耳の後ろを撫でると、気持ちよさそうに耳をそよがせた。

こんな何気ない仕草もよく似ている。

目を伏せた彩華に対して、緋月が心配そうに見上げた。

「ええ。理由は教えていただけませんでしたか」

「すぐに、戻るよ。きつと」

本音を誤魔化すように彩華は平然を装って答える。

そつと手を伸ばして緋月を胸にしっかりと抱き上げると、柔らかな毛が彩華の顎をくすぐった。

過去にも離れていた時期はある。だがそれは学生時代の修学旅行

程度。今回のように期間が決まっていけない別離は初めてだ。

何とも思わずに笑い飛ばすことなどできない。

泣きそうになるのを誤魔化すように、彩華は緋月を抱く腕に力を込めた。

「……彩華様。そろそろ離してください」

身をよじって緋月が訴える。

「え？ あ、ごめん！ 苦しかった？」

両脇に手を入れて緋月を持ち上げると、ぶるぶると犬が水分を飛ばす感じで体を揺すってから緋月が口を開いた。

「いえ、そうではなく……」

言いよどむ緋月に彩華が先を促すと、少し困ったように呟いた。

「あまり密着しすぎると、私が主に殺されますので」

殺伐とした言葉とは裏腹に、緋月の尻尾が軽やかに揺れた。

「……………」

緋月には、はっきりと分かる表情がない。ないから、ぱたぱたと左右に振れる尻尾との奇妙なアンバランスさに彩華が吹き出した。

「おかしいですか？」

「う、うんっ」

ひとしきり笑ってから、彩華は瞳に涙を浮かべつつ弁解をはじめた。

「詠がその姿のときって表情豊かだから、何か変な感じで。動物って表情がないから、別に变じゃないんだけどね」

普段冴え冴えとした月そのものの彼は、あれでなかなか子供っぽい部分がある。変化しているときは特にそうだ。小柄な姿と相まって、さらに幼く見えるのかもしれない、と彩華は独りごちた。

「ごめんね、緋月」

「いえ。あなたが笑ってくださるのなら本望です。あなたが寂しくならないようにと仰せつかっていますから」

思い出し笑いをしていた彩華が真顔になる。

「……そっか」

夢うつつの中で聞こえた「すぐに戻る」という言葉を、今は信じて待つしかない。

これで仕事もしないでグズグズしてたなんて知られたら怒られちゃうもんね、と寂しげな表情をしつつ、それでもしつかりとした声で言葉を紡ぐ。

「ねえ。ところで緋月って、お菓子とかご飯とか食べられる？」
「それなりに」

左右に振れた尻尾が嬉しそうだと思つた。

食事は必要ないはずなのだが、詠と同じらしい。飼い犬は飼い主に似るのか……と彩華が失礼なことを考えているとは露知らず、緋月は不思議そうな顔で次の言葉を待っている。

「詠と似てるね。食べることが趣味？」

「趣味とは違いますが。私は主の神気から作られた存在ですから、性質は似るでしょうね」

「じゃあ、好きな食べ物は何？ やっぱ洋菓子より和菓子がいいのかな？」

ふさふさな尻尾が揺れた。艶やかな毛並みは、日の光を受けて時折銀色の輝きを放った。

「餡子は好きです。甘すぎず、きめの細かい餡子は上品で良い。そこに柔らかい餅があわされば、なお良いですね」

緋月が神妙な顔で首肯する。どうやら以前食べた菓子を思い出しているようだ。

その様子がおかしくて、彩華は小さな笑みを漏らした。

紙をめくる音が断続的に続いている。

月詠神社の授与所裏。薄い壁と壁代かへしろと呼ばれるカーテンで仕切られた休憩室で、彩華は置いてあった雑誌を斜め読みしていた。

壁時計を横目で確認してみると昼休みが終わる十分ほど前だった。両手を天井に向けて大きく伸びをすると、目の前にいる巫女に声をかける。

「有紀ちゃん、お茶もう少し飲む？」

「半分くらいちょうだい」

そう言って静かに置かれた湯飲みで緑茶を淹れて渡す。

指先に伝わる緑茶の熱さに湯飲みを落としかけた彩華は眉をしかめた。

うちにあるの熱伝導率が高いなあ、とぼやきつつ彩華が自分の湯飲みに口をつけていると、

「ねー、上月さんって今こっちにいないんだよね？」

携帯を弄っていたアルバイト巫女の有紀が、唐突にそんなことを言った。

「詠？ ……うん。実家に戻ってるよ」

「じゃあーあれってやっぱり他人の空似かなあ……」

有紀が頬杖をついて呟く。

「空似って？」

雑誌を閉じて彩華が尋ねると、有紀はうーんと唸りながら首を傾げた。そのときのことを思い出しているのか、宙に視線を漂わせている。

話の先を促すと有紀は彩華の方を向き、少し困った風に言葉を続けた。

「昨日、駅前でね、上月さんに似た人がいたんだよね。出かけてるって聞いてたから、まあ夜だし、そっくりさんなだけかなーと思うて」

「そんなに似てたの？」

頬杖をついたままの有紀へ笑いを含んだ声をかけた。

自分と同じ顔の人間が三人はいると言い伝えはあるが、彼にそれが通用するかは疑問である。

「あっちのの方が怖い感じはあったかな。近づきにくいというか。目があった気はしたけど、すぐにどこかへ行っちゃったから、やっぱり他人の空似なんだろうなあ」

でも、すんごく似てたんだよねーと湯飲みを啜る。緑茶の熱さに

舌を痺れさせながら有紀が言葉を重ねた。

「兄弟とか？」

「んー……兄弟はいるけど、双子みたいにそっくりじゃない」

——と思う、という言葉を読み込んで彩華が答えた。

だいたい会ったことがないから何とも言えないのだ。詠とは遠い親戚と話しているし、ではどうして会ったことがないのかと問われても、答えようがない。

言いよどむ姿に有紀は気づいていないらしく、彩華は安堵した。

「えーじゃあ、あれが見間違いないじゃなかったら、ドッペルゲンガー？ ……あ、なんか怖いかも」

浮かんだ考えに有紀が身震いする。

もうひとりの自分に出会ってしまう心靈現象のことをドッペルゲンガーと言う。

鏡には映らない。

正体は自身の魂である。

予知能力があるためドッペルゲンガーを見る。

正体は何かわからないが、本体と入れ替わるために本人を殺してしまう——。

さまざまな謂れがあるが、もっともよく伝わっているのは？その存在は自分とそっくりでありながら邪悪なモノで、これに本人が出会うのは死の前兆？である。

「はい、先生。素朴な疑問。日本にもドッペルっているの？」

有紀が顔の横で小さく手をあげた。

「んーと」

突然問われて、彩華は自身のこめかみを両の拳で挟みぐりぐりと揉む。記憶を掘り返しても該当する妖怪は思い当たらない。

「わたしが知らないだけかもしれないけど、いないかな。似たモノはいるけど」

オモカゲと呼ばれる妖怪がそうであるという説もあるが、オモカゲは遺恨を持ったまま彷徨い続けている幽霊に近い存在だ。

幾分か冷めた中身を半分ほど飲み干して、彩華は湯飲みを静かに置いた。残った緑茶にぼんやりと映る自身の顔が、不意に笑った気がして肩を揺らす。

すぐに気のせいと気づいた彩華は、そつと息を吐いた。

「どんなの？」

「たとえばね……」

たとえば、人の姿に擬態する能力を持ったモノ。その人間の容姿・性格を完全にコピーして、悪戯程度ならばまだいいが、本人と成り代わろうとする。

映画等で登場するそれら定番の化け物は、ドッペルゲンガーとは違うと思う、と彩華が答えた。

「そっか。その、見かけた人。見た目は冷たそうだったけど、悪人には思えなかったし、ただのそっくりさんかもね」

「うん」

有紀の言葉を肯定して頷きながらも再度思案する。

ただの人ならば異形の可能性もあるが、彼は別格だ。神の御霊を模写するなんて芸当ができるのならば、それは相当な力の持ち主であろう。

本当に他人の空似ならばそれで問題ないし、少し調べた方がいいのかもしれないと彩華は独りごちた。

術を使用して幻影を見せるのではなく、そっくりそのままというのは難しいはず。だから月詠尊のコピーではないと思う。

だけでもそれが可能だったとして、と思いついた彩華が眉をひそめた。

「どうしたの？」

「……………」。彼の姿をコピーした妖あやしがでてきたとして、それが悪意持っていない方が怖いかも……………」

「なんで？」

有紀がきょとんと聞き返す。

「あんな大食いがふたりも居ついたら、うち破産するよきつと」

同じ性質を持つ者がふたり。必然的に高村家の居候となるだろう。ひとりでも大変なときがあるというのに、それが増えたらどうなるのか――。

彼の食べっぷりを知らない者は、この神社にはいない。

真顔だが目が笑っているのに気がついた有紀がぷつと吹き出した。思っていた以上に大きい笑い声を出してしまい、慌てて声を殺す。

どうやら授与所側には聞こえなかったらしい。視線をあわせたふたりは、ほつと胸を撫で下ろした。

「じゃーそろそろ食費稼ぎに戻りましょーか？」

おどける有紀と顔を見あわせて彩華は密かに笑う。

手早く休憩室を片付けると、仕切りの壁代をそつと開けて授与所側を覗いた。

今日は晴天で風も暖かく気持ちのよい日だが参拝者はまばらだ。

知名度の高い神社ならば毎日のように祈祷が行われているであろうが、祭事や行事がなければ月詠神社はさほど忙しくはない。もっとも、外法師の仕事である怨霊退治が立て続けに入ってくれば話は別だ。

彩華の父親である宮司は、すでに前線からは退いている。兄の咲也も術者であり、いずれ月詠神社を継ぐことになっているが、外法師ではない。

将来的には彩華も神職の資格を取ることになるが、中心の仕事は怨霊退治である。古の時代よりは異形の数も減ってきているとはいえ、怨霊の類は今だ少くないのだ。

陽のある場所に陰がある。昼は明るく夜は暗く。男がいて女がいて――そして、人がいる場所には妖が存在する。

すべての現象は相対する陰と陽から成る。陰陽思考に基けば、いつか詠が言っていたように？一掃？しなければ妖が消えることはない。

少々げんなりとする考えを頭の隅に追いやって、彩華は硬くなった顔を軽く揉みほぐしてから移動する。

「彩ちゃん、お札が少なくなってきたから先にお願ひ」

授与所番の交代のため顔を出した彩華に、巫女が声をかけた。

「ん。わかった」

外へ出た彩華は降り注ぐ陽の眩しさに僅かに目を細めた。数回瞬きして視界をはっきりさせる。

自宅方向へ歩きかけて、ふと立ち止まり本殿を見やった。澄んだ青空の下、本殿は威風堂々と佇んでいる。神社周囲の緑も、いつも通り生き生きとしている。

神社に満ちている神気に変化はない。問題があれば、まず宮司が気づくはず。何も聞かれないのだから通常の状態なのだろう。

「だけど」

ぼつり呟いた。術者の勘なのか心がひどくざわつく。

青空とは裏腹に、不安の渦が広がってゆくのを感じた彩華は唇を噛みしめた。

ただの思い違いならいいけれど——と。

澁みない口調で神呪じんしゅが紡がれた。

言霊にあわせて彩華から放出される純粋な霊力が大きく広がり、その場の瘴気を一気に消し去った。

目の眩む白銀の閃光が辺りを覆いつくし、それが消失すると柔らかな陽の光が窓から差し込む。

「よし、完了」

仕上げにぱん、と手を打つ。小気味いい音が響いた。部屋を見回した彩華は後ろを振り返る。

ドアの影から、この家の住人が不安げに覗いていた。彩華が全て終わったと伝えると、緊張が緩んだのかその場に座り込んでしまう。慌ててその身体を支えると、最初に通された居間へと移動する。

はっとして、深々と礼をとった依頼人の顔には焦燥の色があった。全身の力が抜けたような状態のまま放って帰る訳にもいかず、落ちて着くまで傍にすることにした。

この辺りは比較的平穏な場所だ。問題のモノは綺麗さっぱり抜けた。よほど悪質な呪具でも置けば話は別だが、普通に暮らす分にはもう心配はない。

やがて気持ちが静まったのか、青ざめていた顔に赤みが差したのを確認した彩華は依頼人の家から退出した。

「あ……ちよつと疲れたな」

たいした力の持ち主ではなかったが少し眩暈がする。

「どこかで休んでいこうかなあ」

心なしかお腹が減っている。

食事はすべてのエネルギーの源だもんねと思いつき、彩華は苦笑した。思考がまるでうちの御祭神のようだ。一緒に暮らすうちに似てしまったのかもしれない。

一番良い回復方法は神聖な力が溢れる霊地へ行くことだ。特に色濃い緑は清浄な空気を生み出しやすいのだ。かといってどこでも良いわけでもない。彩華の場合もっともしっくりくるのは、やはり生まれ育った月詠神社になる。

立込むときは怨霊退治ごとに帰ることはできないし、出先で手っ取り早く回復するには食事をするのが効率よい。

「……やつぱり帰ろう」

今日は特別寄りたいところもない。早く休めるならその方がいいだろう。

張り詰めた筋肉をほぐすように肩を動かしてから、彩華は四方をちらりと見やった。念のためと外から今一度霊視し、その場を後にした。

太陽が西に傾き、空が赤く染まり始めると、遊びに興じる子供たちの声がまばらになってきた。

「おーにさーんこーちらー。てーのなーるほーうへー」

鬼ごっこをしているのだろう。歌うように掛け声をあげる子供の声に懐かしさを感じて彩華が微笑んだ。広くて動きやすい境内で、

幼い頃よく遊んだものだ。隠れるために友達と本殿へ侵入しようとしたところを父親に見えられて、ひどく怒られたのを思い出し苦笑いする。

今は近所に住む子供の数も少なくなり、遊ぶ声が聞こえることも滅多にない。

声のする方に目を向けるが、子供の姿は見えない。徐々に遠ざかってゆく声を名残惜しそうに見送ると、自宅へ向かって歩き出した。

鬼さんこちら 手の鳴るほうへ

黄昏 手招き 子守唄

かがめの影には つつしみて

常夜 とこよ 現世 うつしよ 端境 はたさかい

鬼さんこちら 手の鳴るほうへ――

子供が言うには物騒な言葉の羅列に立ち止まった。

呪詞しじの類ではないようだ？あの世とこの世が入れかわるから、鏡の影に気をつける？とは、穏やかでない。

注意深く周囲の気配を探った彩華は、妖の気配を察知して勢いよく振り返る。――が該当するモノはいない。

「……気のせい……？」

歩きかけ、突然訪れた静寂に足を止める。

静かすぎて耳鳴りがするほどだ。それに、不思議なくらい人気がない。

背中を冷たいものが流れてゆく。景色はよく見知ったものだが、異空間に取り込まれたのかと彩華は神経を尖らせた。

だがすぐに肩の力を抜いた。感じるのは神の靈氣に似ている。

『鬼だ』

『鬼じゃ』

可愛らしい子供の声が背後から聞こえた。

ゆっくりと振り返った彩華は、目線を下げる。声の主を視界に捉

えると顔をほころばせた。そこには年の頃は五、六歳くらいの、真っ白い着物を身につけた子供がふたり立っていた。髪も肌も透き通るように白く、目が赤い。

『そなたに鬼が憑いておる』

『憑いておる』

「鬼？」

彩華が首をかしげると、ひとりの子供の目が光った。

子供は笑いながら屈むと、彩華の足元に右手を伸ばし、何かをつまみ上げた。モグラに似た黒い影が逃げようと身を振っている。そのモグラがしゅうしゅうと音をたてて牙を剥いた。時折、口から瘴気が漏れてくる。

子供が目の前にそれをぶら下げると、まるで鏡のように赤い目に妖の姿が映った。

『いただきます』

子供が顔をあげると、顎の辺りできつちりと切りそろえられた真白い髪が揺れた。

右手を高く持ち上げて大きく口を開く。口の中へ落ちた妖を、喉を鳴らして飲み込むと満面の笑みを浮かべた。

食事に取りつかなかったもうひとりはその様子を興味深そうに見ている。

『うまいか？』

『うまいぞ』

『いいなあ』

小さな口から覗く舌先は二股に分かれていた。

『もう一匹おらんかなあ？』

『——おらんなあ』

きよろきよろと辺りを見回して残念がつている。

「ありがとう。今のどこから拾ってきたんだろっ」

疲れているせいか、まったくわからなかった。

『まだまだじゃのっ』

ふたり揃ってにんまりと笑みを浮かべた。得意げなその姿は小動物を思わせてとても微笑ましい。

「うちの祭神にもよく言われます」

一生懸命首を反らせて見上げている姿が苦しそうなのに気がつき、彩華は膝を折って視線をあわせる。

『我らが《・・・》の目は何でも映すぞ』

「かが？」

『んーと……今の言葉で言うと、蛇のことじゃ』

『そうじゃ』

くりくりとした愛らしい蛇の瞳が光を反射した鏡のように一瞬輝いた。

つぶらな瞳がじつと彩華を見つめ、

『——そなたの神は今不在か？』

「ええ。……そうです」

急に問われた彩華は目を伏せた。

『なに。じきに戻られるであろう』

赤い瞳が優しい光を放った。

気を使わしてしまったかと少し笑って彩華は話題を変えた。

「ふたりは、どこから？」

『あっちじゃ』

「あっちって——空輪山？」

『そうじゃ』

月詠神社のある蓮見市はすみは、首都機能が置かれている都市中心部から少し離れていて緑樹が多い。

神社から北西に位置する場所に？空輪山公園？と呼ばれる小山がそびえ立っている。元はただの山であったが、数十年前に整備されて公園として開放された。春には、敷地内に植えられた桜が一斉に咲きほこり、毎年見る者の目を楽しませている。頂上までの人道には桜の木が植えられていて、桜の綾なす花回廊は見事だ。

遠くから見ると宝珠のような形をしているため、地元住人には？

桃のお山？などとも呼ばれている。

「あそこには祠とか神社ってなかったような……」

「昔はな、あったのじゃ」

彩華の呟きを聞きつけて寂しそうに顔を曇らせた。

昔は山や森など自然を畏れ？神社？とみなしていたが、今はたいてい社殿が設置されている。安全祈願のために山にも造られることが多いのだが、空輪山は聞いたことがない。

「昔はあった？」

「小さな祠であつたがな。御霊は入っていなかったから我らが使用していたのだ。あれはなかなか居心地が良かった。人道から外れているから、いつの間にか忘れ去られて損壊したままなのじゃ」

「かといって他の土地へも行けぬからのう」

どうやらふたりは蛇神ではなく空輪山に生まれ落ちた精霊のような存在らしい。移動はできても拠点となる住処は変えられないということなのか。

「そなた、簡単なものでよいから我らの祠を創ってくれぬか？」

「欲しいなあ」

ふたりの目には期待の色が浮かんでいる。

「うーん……難しいなあ」

勝手に神社や祠を創る訳にはいかないだろう。

神社庁に無断でもいいのかわからないし。でも属さない神社つてもあるんだっけ……？

期待と希望に輝いている瞳を無視することもできずに、彩華は頭を抱えて悩んだ。

「神の降りる場所を創って、結界張るくらいなら大丈夫かな」

別に、目に見える身体が中に入れるような建物は必要ないのだ。

外部と切り離れた神域ができればいいのだから。それに、一介の外法師ができることはその程度だ。

「それなら、祠のあった場所に大きな岩があるぞ」

このくらいじゃ、とひとりが両手を広げた。その大きさはマンホ

ールくらいだろうか。

「じゃあ、その岩を利用して。どこまでできるか心配だけれど、それでいいのなら」

しばらく唸ったあとで彩華が答えた。

『十分じゃ！』

『あとな、供物も欲しいのじゃが……』

上目遣いでおずおずと見上げる仕草に笑顔で頷く。

嬉しそうな声があがった。

手を取りあつてくるくると回りながらはしゃぐ姿に、彩華はさらに笑みを濃くする。

『楽しみじゃなあ』

『本当になあ』

そう言つと、まるで吸い込まれるようにふたりは夕暮れの空へと消え失せた。

「——ふう」

姿が見えなくなると、遠くで自動車の走り去る音が聞こえた。結界用の玉石はうちにあつたはず。あと必要なのは——。

思案しているところでクラクションが鳴った。道路の中央に突っ立っていたのに気がつき、彩華は頭を軽く下げながら端へ移動する。「半人前が安請けあいするなって怒られそうだけど」

乾いた笑いを力なく吐き出す。

彼が戻ってきたときに結界の綻びがないかの確認を、どうやってお願いしようかと思ひあぐねた。

鏡の月 一（後書き）

補足説明

端境：正しい読みは『はざかい』

語呂が悪かったので『はたさかい』としました

鏡の月 二

濁った暗褐色の影が蠢いた。

辛うじて人型をとってはいるが、ソレは腐臭がしそうなほど朽ちて見える。

嫌悪感を露にして、女は異形の顔のあたりを睨みつけた。対峙しているその顔に恐怖の色はない。

自身が優位に立っていると考えているのか。異形の唇とおぼしき裂け目から、下卑た嗤い声と瘴気が漏れた。

感覚の鋭敏な者ならば、異質な空気にすでに逃げ出しているか、失神するかしているだろう。しかし、向かいあっている女の表情は少しも変わっていない。

痺れをきかせて先に沈黙を破ったのは妖だった。尋常ではありえないほど伸びた腕が女に襲いかかる。

攻撃を軽くかわして間合いをとると、女は素早く周囲に視線を配り、取り出した符を一枚空へ投げた。

「あまねき諸仏に礼したてまつる 月天^{がってん}よ 心願成就せしめたまえ」
空を舞った一枚の符が瞬く間に分かれ、音もなく四方へ散った。

光を強くした符からそれぞれ帯状の光が放たれると、女の横顔をうつすらと照らした。

鈴に似た共鳴音が耳に響く。月の神への神呪は、術者の望みどおり真四角の結界を張った。

囲むように形成された結界の中で、妖が悔しげに咆哮する。

「……まずまずかな」

普段は彼女の相棒が行っている作業だ。

^{あやかし}妖を見れば、思うように動けずにもがいている。

少々心もとないけれど、まったくいいだろう。

彩華は軽く目を伏せて深呼吸すると、ふたたび目の前の妖に目を向けた。

いかにして有利にもっていくかも戦略のひとつだ。術者にとって都合の良い場を築くことができれば、それだけ勝利が近くなる。

とはいえ、まだまだ修行中の術者が生み出した結界がいつまで持つかわからない。早く決着をつけた方がいいだろうと、彩華は意識を集中する。

印を組みかけた指を止めて、感じた異変に目を見開いた。

その直後、霊力の檻が激しく振動して火花が爆ぜた。妖の爪が空気を大きく切り裂いたのだ。

起きた太刀風が彩華をも襲うが、足に力を入れてそれをやり過ごす。軽い痛みには彩華が顔をしかめると、頬がうつすら切れていた。ほんの僅かな血の臭いに煽られた妖の目が爛々と輝いた。くわつと開いた口に、熱を帯びた妖気が集まる。内側から熱が膨張してくるさまは、星が爆発するかのようなうだ。

「あ、ちよつと！」

妖の行動に目を剥く。あれをまともにくらったら命の保障がないのは本能で分かる。相手の攻撃に備えて、彩華は神経を尖らせた。

一点に集約し放たれた妖力が彩華めがけて襲いかかった。

「——くっ」

反射的に防御の術で衝撃を殺すが避けきれない。彩華は両足を踏ん張るが、ずるずると後退してしまう。

爆風に耐え切れずに彩華の身体が吹き飛ばされた。

やがて訪れる激痛が身体を貫く——と思ったが、徐々に速度を落とし、少し強めに背中を打っただけだった。

咳きこみつつ彩華は目を開けるが、土煙で視界が悪く何も見えない。

一瞬の閃光が辺りを染め上げ彩華は目を細めた。それでも明るすぎて、逆に真っ暗に感じる。目の痛さに耐え切れず、彩華は瞼を閉じると神経を張り巡らせた。

姿は見えなくても妖はある。しかも、背後からも何者かの霊力が伝わってくる。殺気はないが、強い力の持ち主であると一瞬で悟っ

た。

素早く体勢を整えて次の攻撃に備えなければと重い身体を動かしたが、彩華の予想外の展開を迎えた。――僅かに早く、鎌に似た白刃が彼女の背後から空を切る音をたてて飛んだ。

それを難なく避けた妖は口元を歪めて嗤う。だが、それも一瞬のこと。突然びくりと硬直して咆哮をあげた。

刃が反転して返り、その軌道上の妖に突き刺さったのだ。妖の胸の辺りから突き出た白い刃は、瞬く間に光の粒子となってやがて消える。

鼓膜が破れるほどの怒号が大地を轟かせた。

闇雲に振り回す妖の尖った爪が地面に突き刺さる。砕けたアスファルトが彩華へと飛ぶが、彼女に触れる寸前で跡形もなく消滅した。「――嘘」

驚いたのは彩華だ。咄嗟に結界を張ることもできず、破片が自身へ突き刺さると覚悟していたのに。事態がよく掴めていない様子で、ただ啞然とするばかりだ。

体に穴を開けた妖は、ぎゃあぎゃああと喚き散らしている。瞬時に体の欠陥を直す異形というのも存在するが、この妖はそこまで高度な技は持っていないのだろう。よく見ると、穴が少しずつ広がっている。

「動き回ると滅するのが早くなるだけだぞ」

低くよく通る声が聞こえた。

声のした方へ顔を向けると、彩華の背後にひとりの男が立っていた。

暗闇で顔は見えない。

鼻を鳴らして不敵に笑うその男の印象は漆黒。服装だけではない。男の持つ雰囲気は、月が闇に包まれた沈静の夜のような。

霊視しても正体は掴めない。だが、その男は彩華のよく見知った気配を纏っていた。

今自分がやるべきことをすべて忘れて、ただ呆然としていた。

何か言わなくては……と言葉を発しようとしたとき、派手な崩壊音が彩華の耳に届いた。

「っと逃げるな」

男の声に答えるかのように妖の体の一部が音をたてて霧散した。男は全身から立ち上る鬼気を強めて威圧する。

慌てて振り返ると、妖が結界を破き、ほうほうの体で逃げてゆくのが見えた。

——やってしまった。ターゲットの妖を目の前にして逃がすなんて、術者失格だ。なんて失態だ——。

彩華が額に手をあて呻いていると、黒い影が音もなく近づいた。

「あやか——」

虚空から降ってきた声に肩を揺らす。どうして名前を知っているのかと尋ねる前に、続いた男の言葉で自分の勘違いだったのだと理解する。

「妖、逃がしたな。追うか？」

「え……あ、ううん。さっきの致命傷だったし、追わなくても消滅すると思う」

最後に見た妖は、肩のあたりから腕がアスファルトへ落ち、足が砂塵へと変化していく姿だった。その間にも最初に開いた風穴は大きくなっていたのだ。

内側から命が尽きていくさまを思い出して、彩華は顔をしかめた。じわじわと少しずつ死んでゆくなんで、この先も体験したくない。

身震いしてから、彩華は男に目を向けた。その目には剣呑な光が宿りつつある。

しばらく考え込んでいる風の男が、ふいに膝を折って視線をあわせた。

助けてもらったとはいえ、まだ油断はできない。いつでも反撃できるよう彩華が身構える。

「ここ、痛くないか？」

「え？」

思いもよらなかった言葉に彩華の力が抜けた。皮膚が薄く切れて血が滲んでいたのを思い出す。

血を拭おうと伸ばした彩華の右手を男が掴む。胡乱な目つきで彩華が見据えると、男は僅かに顔を傾けた。

「——っ」

生暖かい感覚に、彩華は喉をひきつらせた。頬に触れたのが男の舌だと気づいて顔を赤くする。

「なにするのよ！」

意気を取り戻した彩華の声に張りが出てきた。

「消毒だ」

呆然とする彩華を眺めて、楽しげに男が笑う。稚気満々とした口調からは、その内心は読み取れない。

男が自身の唇についた血を舐めとるように舌を這わせると、彩華の顔が赤みを増した。文句を言いかけるが、言葉が出ずに口をぱくぱくと動かすことしかできないでいる。

「面白い顔だな」

彩華はわなわなと拳を震わせた。男の正体がわからないまま、いきなり殴りかかる訳にもいかない。代わりに全身に霊力をたぎらせて威嚇するが、それをまったく意にも介さず、男は笑みをこぼした。

「……一応、お礼言っておく。どうもありがとう」

たしかに頬に纏わりついてた瘴気は綺麗さっぱり消えた。それに、先ほどの異形のこともある。

「どういたしまして。……と言いたところだが、他人に簡単に血を与えるなんて何を考えている」

男の目が呆れまじりに語っている。

術者の力の源は、その者の生命力。術を行使するための気力の大元は、肉体を動かすために全身を巡っている血液だ。

そのほか、女の髪にも霊力が宿するという。だが彩華はその理由で長く伸ばしている訳ではない。こちらは巫女の仕事があるために必然的に伸ばしている。

まじないで「おまじないの仕上げにあなたの髪を一本入れましょ
う」などというものがあるが、あながち間違いいではない。力ある者
ならば、髪一本、血一滴で何でもできてしまうのだ。

もつともな意見に言葉を詰まらせた彩華は目を泳がせた。

「いきなりだったんだから仕方ないじゃない」

見据えられてしどろもどろになりつつも強気に答えた。今も男は
異様な雰囲気を持ちあわせている。しかし内部から優しさと親しみ
を滲ませる男の気配に、自然と身内に対する態度となる。

「……ほう」

男の声が、急に低さを増した。艶冶な笑みを浮かべるその姿は魔
性にも思える。

一睨みされて、蛇に睨まれた蛙よろしく身を竦ませている彩華は、
息をするのも忘れるくらい硬直した。

身体中の毛穴が開いて震えが走るような感覚に恐怖を覚える。少
しでも動いた途端に切り刻まれそうだ。

目を細めて笑うその表情は、殺戮を楽しむ異形とはまた違った仄
暗さを孕んでいた。

「……そんなに怯えるな。傷つくだろう。オレは繊細なんだ」

優しく触れた指で彩華の髪を梳く。

静かに何度か梳いていた手が頬へと滑る。そうして離れかけた男
の手首を彩華が掴んで引き止めた。

引き止めたはいいが、何と言っているかわからない。しばらく無
言だった彩華は指に力を込めると、意を決して言葉を紡いだ。

「どうして、あのひとと同じにおいがするの？」

ドッペルゲンガー。

そんな単語が脳裏を掠めた。気配だけではなく、街灯の明かりに
照らされた男の姿は、黒髪に黒い瞳。顔の造形は双子と言ってもよ
い。

まるで、大きな姿見に詠の姿を映したかのような。
見上げる彩華の瞳にはすでに恐怖の色はない。代わりに不安と戸

惑いが浮かんでいる。

男は鋭さを消した柔和な眼差しで見つめ返し、

「さて。オレはこの世に生まれたばかりだから知らないなあ」

などとうそぶいた。

「じゃあ、妖？ 彼に成り代わろうとするのなら、わたしは命をかけて阻止する」

月の神を祀る一族の義務ではなくわたしの意志。たとえ敵わなくてもおとなしく引き下がれない――。

警戒心を露にして彩華は眉間に皺を刻む。それは強い決意を秘めた表情だった。対照的に、男は目元を和ませて彼女の鋭い視線を受け止める。

しばしの沈黙がその場を支配した。

やがて何事もなかったかのように柔らかい笑みをたたえた男の顔に、彩華は毒気を抜かれて肩の力を抜いた。

「どう足掻いても偽物は本物にはなれぬよ。安心しろ」

なおも問いかける彩華の唇を、男は人さし指で軽く押さえて黙らせる。そうして顔を傾けると、ふたたび自身の唇で彼女の頬に触れた。

何も言わずに振り上げた左手は、やすやすと掴まれてしまった。

悔しげに彩華は呻くが、気持ちを切り替えると男へ向かい直る。

自分をからかって、どこか楽しげだと思っていた男は、軽い口調に反して真摯な視線を投げかけてくる。その理由が臆気ながら見えな気がするが、まだ頭に霧がかかっているようにはつきりとはしない。

でも……と考えを巡らせる。

怪異には違いないが彼は魑魅魍魎ちみもろうりょうの類ではない、と推し量った。

それが術者の勘なのか、十数年とはいえ彼と長年連れ添ったからなのかはわからないけれど。

彩華が掴んだままの腕をそろりと外すと、男は名残惜しそうに一度だけ彼女の髪を撫でた。

「お前、ひとりで帰れるのか？　今はまだ時期が悪いから、オレはあそこへ近づけないんだが」

「子供じゃないから大丈夫よ」

幾分か強い口調で答える彩華に対して男は喉を鳴らして笑うと立ち上がった。

「そうか。またな、彩」

優しい声音が耳をくすぐり、彩華は肩を揺らした。

夜闇に慣れた目は僅かな光でも眩しく感じられる。男の背後にあった街灯が急に光を強くした気がして、一瞬目を閉じた。次に彩華が目を開けたときには、すでに男の姿はない。

吹いてきた心地よい風に、艶のある彩華の黒髪が揺れる。

先ほどの不穏な冷気などなかったかのように、澄みきった夜気が辺りを包んでいた。

「緋月、いる？」

言ってから彩華は口を噤んだ。

用があるときは本殿にいるからいつでも声をかけろ、と言われていたのだから「いるか」と声をかけるのはおかしいのかもしれない。自分自身に笑って、その拍子にバランスを崩して持っていた盆を落としてそうになる。間一髪でこらえると、彩華はほつと息をついた。中身は無事だ。

明かり取りの窓が設けてあるとはいえ本殿の中は薄暗い。それに、外よりも幾分か気温が低く感じられる。ひんやりとした空気は、この場所が清浄であると物語っているかのようだ。

本殿の中央あたりまで進むと、彩華は盆を床に置いて正座する。きよろきよろとしつつ気配を探っていると、風もないのに彼女の目の前で渦が巻いた。白銀に緋色が混じったそれは、やがて回転速度を落としてゆく。光の粒子が螺旋を描きながら舞い上がり、彩華が一度まばたきすると、銀色の仔犬が現れた。

「彩華様。お呼びですか」

ゆつたりとした口調で緋月が言った。

「うん。緋月にね、お菓子買ってきたの。あと、質問があつて……」
彩華が示した方を緋色の瞳で見やり、ふさふさした尾を揺らした。盆に置いてある小皿と湯飲みを見て、人型が適切と判断したのだろう。瞬く間に人型をとった緋月は、彩華と同じように行儀良く座った。

「おいしそうですね」

と言ってごくりと喉を鳴らした——のは、彩華の気のせいだったかもしれない。耳の下で梳くように切り揃えられた髪が、今はない尻尾の代わりにさらりと揺れた。

「ちょうど三重の物産展やつてたの」

餅が柔らかくて餡子の和菓子。それでいて神に関係した場所の名物はこのくらいしか思いつかなかった。一口サイズの餅を餡で包んだ和菓子は、たぶん緋月の好みであろうと買ってきたのだった。

柔らかい中にももっちりとした感触は気に入ったらしい。緋月は切れ長の目をさらに細めてもくもくと食べている。

「ごちそうさまでした」

黒文字楊枝を使って食べ終えた緋月は、口直しに緑茶を啜った。

「もつとあるけど持ってこようか？」

残りは家族で食べようと思っていたが、元々は彼のために買ってきたのだ。

彩華の問いかけを緋月は首を横に振って否定した。

「それで質問とは？」

「実はね」

このあいだの依頼の帰り道で起きたあらましを簡略に述べた。今日は公休日だから、あの日の約束を果たしに行こうと考えていたのであつた。

月詠神社で供えている神饌用の、予備の食器類はある。

通常は生のまま供えているのだが、調理して供える場合もある。今回は調理した方がいいのだろうかと思い、持ち運びも考えて弁当

箱を用意してみた。化学調味料は使わず、奮発して有機食材なども購入した。

舌の肥えた詠が喜ぶ食事ならば大丈夫という確信が彩華にはある。彼を見ていると、供物は生米よりも炊き立ての白米がいいのだろうと思ってしまうのだ。

あとは「これが一番おいしい」と言っていた日本酒。あのときの姿に騙されそうだが、神に分類されるものには人間のような年齢はない。酒は神饌には欠かせないものである。

彩華が気がかりなのは神饌ではなく別のことであつた。

簡易とはいえ神の住まえる場所を作らねばならないのだから、まずその場を清めなければならぬ。一般的な水で穢れを洗い流そうと考えていたのだけれど、その水は神社の井戸水でよいのかどうかである。

月詠神社本殿の横にある井戸は、靈力あらたかな水が湧き出ている。普段この水は神殿の掃除や禊に使用している。だが、大地の気が流れる龍脈と繋がっていると謂れのある靈妙な水を、他の土地へ持つて行つて問題はないのか。

「前に聞いたときは、不特定多数にばら撒くようなことはするな、つて言つてたから、まずいかなつて思つてるんだけど。かといって水道水じゃ効果ないだろうし」

ペットボトルに詰めて売られている天然水も、なんとなく気が引ける。

不安げな彩華の表情を受けて、緋月は目を伏せて暫くのあいだ思案していた。

「空輪山は今でこそ？枯れた山？となつていますが、元々は神靈の働きが濃厚な靈地でしたから。理由もなく山と神社の龍脈を繋げるのはいささか危険なのですが……。あなたとの縁ができた今は、むしろ好都合でしょう」

「空輪山つてそんな靈地だったんだ」

靈気をまったく感じなかった訳ではないが、彩華は目を見張つた。

最後に登ったのは、高校時代の友人とのお花見だったろうか。満開の桜で作られた花回廊が見事だったのを思い出した。

力が弱いとはいえ緑の持つ独特の森気しんきはたしかにあった。不浄のモノを一切感じなかったのはそういうことなのか。

修行不足だなあ……と口の中で呟いているのを知ってか知らずか、緋月は僅かに目元を和ませた。

「それに大量には使用しないのですから、おかしな影響は出ないと思います」

危惧していた事態は起きずに済みそうだ。ほっと胸を撫で下ろした彩華は、神妙な面持ちで緋月を見やった。

「あとね、もう一つ。詠の——月詠尊の式って、緋月以外にもいるの？」

彩華の言葉を聞いた緋月が訝しげに眉を寄せた。

「そのような話は聞いたことがありませんが……なぜです？」

「あー……ちよつと気になることがあって」

「今の状態と何か関係があるのですか？」

言いよどむ彩華に対して緋月が畳み掛けた。その目には強い感情が籠っている。

なおも問うてくる相手に、彩華は言葉を返せず困ったように眉根をよせた。

「関係ある、と思う。けど、ごめん。これ以上はわたしもわからない」

あの男の持つ霊気は月詠尊と同じもの。これは断言できる。ずっと傍にいた気配を間違えるはずがない。だけど、なぜ同じなのかまでは考えがつかない。誰かに「あれは能力をコピーする妖の類だから退治した方がいい」と言われたら、深く考えずにそのまま納得してしまうかもしれない。

だが、真実を見極めずに先走るのは危険だ。

確かに感じた霊気は、自然の厳しさに似た荒々しいものだった。とはいうものの、その内側に見えた物柔らかな光を無視すること

できない。

考えが纏まらず自分自身に苛立った彩華は、膝上で揃えていた手に力を込めた。

「すみません。あなたを困らせるつもりは毛頭なかったのですが」
申し訳なさそうに頂垂れる姿がまるで叱られた大型犬のようで、彩華は慌てて頭を振った。

「こっちこそごめん。別に怒ってないから」
互いに土下座するような勢いで頭を下げると、顔を見合わせてからふたりでひとしきり笑いあう。

先ほどとは一転した和やかな空気に、彩華は硬くなっていた表情を緩ませる。落ち着いたところで腕時計を確認すると、盆を持って立ち上がった。

「そろそろ行ってくるね」

「私も行きましょうか？」

「——ううん。荷物もそれほどないし、大丈夫」

一瞬、手伝ってもらおうかとも考えたが、自分の式でもない彼に手間をかけさせるわけにはいかない。

緋月の申し出を柔らかく断った彩華は本殿を後にした。

空輪山の麓にたどり着いた彩華が空を見上げた。

高く澄んだ青空に緑がよく映えている。今日は気温が高くもなく低くもなく、散歩にはもってこいの日であろう。

あとで時間があったら久しぶりに頂上まで行ってみようかと思つた彩華は、荷物を持ち直すと、目の前に見える頂上への階段を上りはじめた。

途中で辺りを見回し、誰もいないのを確認すると横に反れる。

人の手が加えられていない獣道を歩くのは少々大変だ。傾斜だから身体が斜めに傾いてしまうのだ。ごつごつとした石や木の根に足をとられそうになりながら慎重に進んでゆく。

木漏れ日の差す薄暗い中を歩いていた彩華は、地面から僅かに盛

り上がっていた木の根に気づかず足を引き掛けた。

「——っ」

片足で二、三步跳ぶように進んでから踏ん張った。どうにか転ばずにすみ、彩華はほつと息をつくと上げていた片足を下に降ろした。トートバッグを開けて中身を確認すると、少し傾けてしまったがこちらも大丈夫なようだ。

胸を撫で下ろし頬にかかった髪を無造作に後ろに払った。耳の後ろあたりから髪の上半分を纏めていたヘアクリップが緩んでいたのに気づいて束ね直す。

木陰を吹き抜けてゆく心地よい風に目を細めた。

ここを？ 枯れた山？ と言うのはとても失礼な気がする。弱っているというよりも緩やかな場所、だろうか。靈気のまったくない場所に比べれば十二分に良いところだ。

改めて視^みれば、気がどこかで滞^みっているようだ。

「これって直せないのかな」

今まで誰も気にしなかったということは、下手に弄^もっては駄目か、何らかの事情でそのままにしているのだろうか。

大昔の術者が邪気封じに使用したのかもしれない。悪い影響がなければ他人の術に手を出さないのは術者の鉄則だ。うっかり封じを解いて悪鬼復活、なんて笑えない。

——そうすると、今からやろうとしていることは大丈夫なのか……。

いいやこれも運命だ、と彩華は自分に言い聞かせるように頭を振る。

身体中に巡る空気を入れ替えるように深呼吸すると、ふたたび歩き始めた。

「……」

突然、目の前に白いもやが見えて立ち止まる。

頭に霧がかかったような錯覚に陥った。目を瞑り息を吐き出すと、その違和感はすぐに去っていった。

どうやら結界の類だったらしい。

「……このへん？」

少し歩くと踊り場のような平らなところへ出た。

広さは二メートル四方くらいだろうか。整備した訳ではないようだが、この一帯だけ雑草が生えていない。

目立つたものは山肌の近くにある苔の生した岩だ。他に見えるものといえば、周囲を覆っている木々のみ。薄暗いためか、差し込んでいいる一筋の木漏れ日が神々しく感じられる。

注意深く見回すと、岩の近くには朽ちた木の破片が落ちていた。

一番霊力の強いあたりを目指して歩いてきたらここへたどり着いたのだ。間違いないはず。

「やっぱりここだよねえ」

その呟きに答えたのか、木々がざわめき空気が振動した。

油断していた彩華の両足に、気の塊がふたつ飛んできてぶつかつた。痛みはまったくなかったが、その衝撃で前につんのめりそうになりながらも耐える。

「来たか」

「来てくれたのか」

彩華の両足に白い物体が纏わりついている。同時にぱつと顔をあげたふたりは、あの日出会った白蛇の精霊だ。

きやつきやと楽しそうに声をあげているふたりをやりわりと引き剥がすと、彩華は膝を折って視線をあわせた。

「こんにちは」

『待っていたぞ』

『待っていたぞ』

あどけない表情のふたりに彩華は笑みを浮かべると、バッグからレジャーシートを取り出し足元へ広げた。

初めて見るのか、精霊たちは興味津々でその様子を眺めている。

彩華が酒の入った瓶子へいしと弁当箱を置くと、覗き込んでいる気配がますます楽しげになった。

酒があるから必要ないかとも思ったが、念のためと水筒に緑茶を入れてきた。これも舌の肥えている祭神が好きな銘柄である。

最後に二段重になっている弁当箱の包みをほどく。中には色とりどりの食べ物詰まっている。

可愛らしい歓声があがった。

「はい。どうぞ」

シートの上にふたり仲良く座り弁当に手をつけた。時々歓声をあげながら上機嫌で弁当を頬張っている。いたく気に入ったようで、見る間に中身が消えてゆく。

その様子に彩華は頬を緩ませた。喜んでもらえたのならこちらも嬉しい。作りがいがあるというものだ。

だが、子供たちが瓶子から酒を注いで飲んでいる姿は、なんとも奇妙な光景である。

でも年齢関係ないんだからおかしくないし、と自分自身に突っ込みを入れて、彩華は気合を入れるために頬を軽く叩いた。

「さて。こっちが本番」

生半可な気持ちで挑めば失敗するかもしれない。

普段の調伏依頼で気を抜くことがないのは言うまでもない。常に気が張っているから意識しなくとも身体が勝手に集中しているのだ。――もちろん油断して無防備になるときもあるけれど。

死と隣りあわせにならない術の執行は気が緩みやすい。だから調伏以上に注意が必要になる。

深呼吸をした彩華は、カーディガンを脱ぐとバッグからも一つ水筒を取り出した。中身は月詠神社に沸く井戸水だ。

両の肘から手先に水をかけて自身を清める。本当は頭から被った方がいいのだが、全身濡れたまま帰るのは避けたい。

「ひふみよいむなやこと ふるべ ゆらゆらと ふるべ」

右腕を左側から大きく動かして井戸水をあたりに撒き散らした。

撒いた水が綺麗な弧を描いて、地面に落ちる寸前に蒸発する。

地面から霊気が立ち昇り、風もないのに彩華の髪が揺れた。一息

ついでから一步前へ進む。

岩に手をあてると強い鼓動が伝わってくる気がする。

安堵から彩華は笑みをもらしつつ、浄化済みの玉石を取り出した。元々は霊地のためか術がかけやすそうだ。

玉石を岩の周りに均等に設置し、指を複雑な形に組む。

ゆるりと神呪を紡ぐ彩華の瞳が虚ろになり、しばらくすると仄かな光がその目に宿る。

靈氣に煽られた前髪がたなびいた。

供物を食べ終えた精霊たちが、わくわくとした表情で彩華に近づくが、彼女はそれに気がつかない。

僅かに伏せていた目をあげるとともに組んだ手に力をこめる。

——清らかな音が緑の木立に響き渡った。靈力のない者の耳には聞こえぬその音は、やがて大氣に溶け込み消えてゆく。

詰めていた息を吐き出し肩の力を抜く。息を整えるために小刻みに呼吸していると、彩華の後ろで拍手喝采が起きた。

「あー……ありがとう」

手渡された水筒の緑茶飲み干すと小さくため息をついた。やはり慣れないことはするものじゃない。

身体をほぐすように動かしていた彩華は、ふと何かに気づいて視線を巡らせた。

滞っていた龍脈の流れが変わったのを感じた。そのせいか、今まで気がつかなかったものがくつきり視^みえてくる。

岩から少し離れた草むらから淡い光が浮かんでいるを見つけた。近づき草をかき分け確認すると、半分土に埋まった平たい物がそこにあった。なぜか、靈力で編まれた籠が上に被さっている。

良く見れば、籠は半分以上壊れていた。

「なに、これ？」

邪氣はまったく感じない。

籠の隙間から手を差し込み軽く引っ張ると簡単に取れた。思った以上にずっしりとした重量感だ。

「駄目じゃ。それに触るでない！」

「え？」

精霊たちが止めるが時すでに遅し——彩華はしっかりと両手でそれを掴んでいる。

「……………」

あっけらかんとしている彩華に対して、精霊たちは不審な目を向けてからひそひそと囁きあった。

「……そんな、化け物を見るような目はやめてほしいんですけど……」

悪い因縁のあるものには思えないのだけれど、と彩華は手中の物を見た。

彼女の手にあるのは平たい和鏡だ。鏡背の中央につまみがあり、周りには細かい彫刻が施されている。右上に丸い形。その下にあるのは波立つ水。月と海、だろうか。鏡面にはヒビが入ってしまったているが、なかなかの一級品であるう。御神体として使われていたものかもしれない。

精霊たちは眉間に皺をよせて彩華を見上げると、

「なぜ平然としているのだ？」

「もしや邪気は抜けたのか？」

恐る恐るといった風にひとりが鏡に手を伸ばした。

「きゃあー!!」

触れた途端、悲鳴があがった。小さな手の指先が赤く腫れあがっている。

「大丈夫か？」

慌てて残っていた井戸水を腫れた手にかけると、痛みが和らいだのか半泣きの顔で頷いた。

「……なぜ平然としているのだ？」

ひそひそと囁きあうふたりの目が、怪異だ、と語っている。ふたび問われた彩華は意味がわからずたじろいだ。

「ふたりは、これが何なのか知っているの？」

精霊たちの様子からこれは呪具だったのかと思う。今は、その片鱗も感じないけれども。

顔を見あわせた精霊たちは目と目で相談すると、彩華に向き直った。

事の始まりは何百年も前だった。

その頃は祠も存在していたが、すでに御霊は入っていなかった。否、初めから入っていなかったのかもしれない。

ある満月の夜のことだ。数人の男が空輪山へとやってきた。

ふたりで楽しく暮らしていたというのに、どうやら男たちはこの祠に用があるらしい。

追いつ返そうと意気込むが、力の差は戦わずとも一目瞭然。仕方なくふたりは草むらへ逃げこんだ。幸い、男たちには気づかれなかったようだ。

草むらからこっそり覗くと、祠の前に祭壇を設けて奇妙な雰囲気の中、儀式を行っている。

それまで辺りに住まう農民程度しか見たことがなかった精霊たちは、男のただならぬ雰囲気恐怖を感じながらも、興味の方が勝つて様子を見続けた。

おどろおどろしい呪詞しじにあわせるように、どこからか聞こえてくる不気味な声に震えるが、足がすくんで立ち去れないでいた。

どのくらい時間が過ぎたのかはわからない。突然、儀式の途中で祠が壊れた。同時に低い唸り声も消える。

「やはり紛い物は駄目か」

しゃがれた声の男が吐き出すように言った。

男が割れた木片を地面へ払い落とすと、その跡には和鏡のみが残る。

その後も何か言葉を紡いでいたが、よくわからない。ただ、漂う霊気が尋常ではなかったので、精霊たちは事が終わるまで離れた場所避難したのだった。

——しばらくしてから戻ってくると、男たちはどこにもいない。

鏡だけがここに落ちていた。相変わらず靈気を吐き出しているが、先ほどよりは弱い。あとはふたりの力で封じ込めればいい。

これでもう大丈夫。鏡を見れば、靈気は脆弱になっている。安心したふたりはまたここで暮らすことにした。

それが半月ほど前に突然爆発したのだ。天も地も揺るがすほどの咆哮が、一度だけ辺りに轟いた。

鏡からは大気が凍りそうな靈気が放出されている。

離れた草むらに隠れた精霊たちは息をひそめて様子をうかがった。やがて壊れた靈力の籠から、黒い人影が這い出した。ずるりと音がしそうなほど緩慢に立ち上がり、ぎょろりとした鋭い目を動かして周囲を見回している。冴え冴えと降り注ぐ月の影が、暗澹あんたんとした雰囲気醸しだしていた。

ふいにぴたりと止まった視線が、自分たちを見ている。それに気づいた精霊たちは身を寄せて震え上がった。

見つかったら殺される。

一步、二歩……と近づいてくる影に異様な気配を感じ取った精霊たちは、脱兎のごとく逃げ出した。捕まったらおしまい。本能で理解した。

逃げ出す際に男の瞳が一瞬寂しげに揺らいだのを目に留めた。だが構ってられない。

近づいたら殺される。

捕まったら喰われる。

——あれは、悪神だ。

幸運なことに影が追ってくることはなかった。しかし、逃げ出した方がいいが他に住まえる場所は知らない。どの種族にも？縄張り？というものが、一応はあるのだ。

どうしようかと悩んだふたりは、そつとこの場へ戻ることにしたのだった。

『運のいいことに影はどこかへ去った後でな』

「ちょっと怖かったが気配も消えていたからな」

顔を見あわせて何度も大きく頷いた。人ならぬものでも怖いものは怖いらしい。少々ふたりの顔が青ざめている。

「鏡は近寄らなければ何も起こらなかったのな。そのままにしていたのじゃ」

「そうなんだ」

呟いて、彩華は改めて手中の和鏡をまじまじと見つめた。

正しい使い方はされなかったのだろう。けれど、やはり呪具には思えない。僅かに残る邪な念は人間のものだ。周囲への影響はもうなさそうだが、大勢の人間が来る空輪山へ放置したままにするのはまずい。

「これ、預かってもいい？」

「もちろんじゃ！」

「もう持つてこないでくれ！」

即答だった。

よほど嫌なのだろう。力説する精霊の必死さに、彩華は思わず苦笑してしまう。

鏡のヒビ割れに気をつけながら、持っていたタオルで包んでバツグヘしまった。さて、これをどうするか。

精霊たちは青ざめたまま和鏡を見つめていた。が、ふいに真顔になったふたりの瞳がきらりと光った。

「――そなたがここへ来たのは天命であつたのかもなあ」

「え？」

「そのうちわかる」

訳がわからず彩華が聞き返すがふたりは笑みを浮かべるだけだ。

――どうしようか。

彩華は考えを巡らせた。

詠がいれば彼に聞くのが一番だろう。だが今は無理だ。神社の書庫に資料がありそうな気もするけれど、空輪山についての話は家族から一度も聞いたことがない。

「うーん……」

この場合は――。

「麻布都が適任なのかなあ」
まふつ

こういったことに詳しくそんな友人の顔を思い浮かべた。

そこは、どこまでも果てしなく続く闇が広がっていた。

光もなければ小さな音すらも聞こえない。ただそこに常闇があるだけの空間だ。

？天の国？が花々が咲きほこり、平和がもたらされた清らかな場所であるとしたのは古の人間。救いを求める中で思い描いた夢物語である。誤りではないが、実際は魂を休めるための、ただの空間。

ある者は懐かしい思い出を。ある者は自身の望む偽りの夢を。安らぎの闇の中で、束の間の休息を得る。

その暗闇に青白く輝く人影が浮いている。

仰向けで眠り続けるその唇には血の気がない。生きているのか、それとも死んでいるのか。一見して定かでない。その者は、身動きをまったくせずに宙にたゆたっていた。

ふいに、銀の髪が風もないのに揺らめいた。硬く閉じられた瞼の睫毛が細かく震え、だらりと力なく下がっていた指がびくりと動く。

――何が起きた……？

信じられないといった様子で目を見張った。

例えるならば満々と水を湛えた水瓶。その僅かなひび割れから少しずつ流れていた精気が、ぴたりと止まった。何をやっても止めることができなかったというのに。

――だがこれで戻ることができる。

深い藍の瞳がずっと細められた。

上半身を起こしかけ、まだ本調子ではないことに気がついた男は、元のように横になった。

心に浮かぶ女の顔を思い出してその唇に僅かに笑みを刻む。
———すぐに、戻る。
そうしてふたたび目を閉じた。

鏡の月 三

小さな木製の看板には、墨で『靈石屋^{れいれきや}』と書いてある。ここはパワーストーンを扱っている和風の店だ。

店が開いているのを確認すると、彩華は取っ手を手前に引いた。開くときに軋む音がするが、少しも不快には感じない。どこことなく懐かしい日本家屋の雰囲気だ。

「いらっしやい。彩華」

扉を開けると、真っ白い色無地に薄紅の羽織を身につけた靈石屋の店主が笑顔で出迎えた。

「お邪魔します。今、大丈夫？」

訪ねるときは必ず客はひとりもない。偶然なのかはたまた必然なのか。気にはなるけれど、さほど重要ではないか、と彩華はひとりごちた。

不思議な出来事は人間が思っている以上によくあることだ。

「ええ、どうぞ入って」

麻布都は柔らかに笑うと、神に仕えている者のような気品のある物腰で彩華を招き入れた。

この街へ来る前は、どこぞの有名な神社に勤めていたのかもしれない。

優雅な立ち居振る舞いに見惚れた彩華は、入り口で一瞬立ち止まり、はっと気づいて中へと進んだ。

訪問を察知していたのか、すでにお茶が用意されていた。しかも、たった今淹れたばかりというように美味しそうな湯気がたっている。聞いたことはないが、彼女には式神という存在がいるのだろうか。——いそうな気がする。もしくは、千里眼でも持っているのかもしれない。

そんな彩華の考えに気づいてか、麻布都は意味深な笑みを浮かべて椅子を勧めた。

「……詠は、遠くへお出かけ？」

麻布都の目が一瞬きらりと光った気がした。

「え、うん……出かけてる。でも、なんで？」

突然問われて彩華はどきまぎしながら答える。

「顔に？寂しい？って書いてあるもの」

彩華の表情を見た麻布都は、くすくすと肩を揺らした。

もちろん実際には顔に何も書いていないのだが、そんなことを言われると濡れタオルで顔をゴシゴシと擦りたくなる。

代わりに両の手で軽く擦ると、彩華は咳払いをひとつして気持ちを入れ替えた。トートバッグからタオルで包んだ例の和鏡を取り出して麻布都の前に置く。

中身を確認した麻布都の目が楽しげに細められた。

「ずいぶん珍しい物を持ってきたのね。これはどこで？」

「空輪山で」

外法師の仕事の一環で空輪山へ行ったときに目についたのだ、と彩華はかいつまんで話をした。山に住む精霊のことや彼らが見た内容などを話しても構わないのだが、すべてを話す必要はないだろうと判断した。

「そう。木は森に隠してあった、といったところかしら。案外身近な場所にあったのね」

やはり予想は正しかったようだ。

「彩華は天照大御神の？天岩戸説話？を知っている？」
あまてらすおおみかみ

麻布都が唐突にそんなことを言った。

話の繋がりがまったくわからないが知っているのと彩華が頷く。神

職者ならば基本中の基本だろう。
すまのおのみこと

「乱暴者の弟君である素戔男尊に嫌気がさして天岩戸にお隠れになった話でしょ？」

「いささか要約しすぎだけれどそうよ」

彩華の乱暴な答えに、麻布都は表情を変えることなく言った。

弟の乱暴さを悲しんだ天照大御神は岩戸へと引き籠ってしまった。太陽が消えてしまえばこの世は真つ暗になる。

人界だけでなく神の世界でも様々な災いが起きだしてしまい、ほとほと困った八百万やあひよろずの神は、太陽を呼び戻すために儀式を行った。

——岩戸の外で何やら楽しげな声がする。

不思議に思った天照大御神がどうしたのかと質問すると「貴女様よりも貴い神が現れたのでそれを喜んでいるのです」と答えが返ってきた。

少しだけ戸を開けてよくよく外を見れば、確かに神の姿が見える。その姿をもつと良く見ようと扉を開けた途端、天照大御神は岩戸の外へと引きずり出されてしまった。

天照大御神が見た貴い神の姿は、鏡に映った自分自身であったのだ。

こうしてふたたび世界が明るくなった。

「そのときに使用したのが、八咫鏡やたのかがみと呼ばれる神鏡と、八咫瓊勾玉やさかのまがたま」
このふたつに天叢雲剣あめのむらくものこころぎを足すと三種の神器となる。

伝承では、所有者はそれぞれ、八咫鏡は天照大御神、天叢雲剣は素戔男尊。

それから……と麻布都是一息ついた。

「八咫瓊勾玉は、月詠尊。月詠神社の御祭神ね」

彩華は無意識に首から下げた勾玉を服の上から握った。

勾玉は？詠？から貰ったのだと、何かの折に話したことがある。だから件の勾玉くだんをただの人間が持っているとは到底思いつかないだろう。だが、麻布都が時折見せるこの世の何もかもを見通したような鋭い視線は、少し怖い。

そ知らぬ顔を決めこんだ彩華は聞き流したふりをした。

「うちの御神体は月長石の原石だよ。総元締めの神社にその勾玉があるのかは、聞いたことがないから知らないけど」

——上手く誤魔化せただろうか。

不安に思いながら彩華は程よく冷めた緑茶を啜る。

「御神体は仕えている神職者ですら滅多に見られないものね」

彩華の動揺に気づいた風もなく麻布都が頷いた。

「話を元に戻すわね。岩戸伝説で使用した八咫鏡の前に、別の鏡が用意されていたって知っている？」

「聞いたことは……ある」

自信なさ気に彩華が答えた。

ひがたのかがみ ひほのかがみ

日像鏡と日矛鏡。八咫鏡に先立って創られたそのふたつの鏡は、

現在は八咫鏡とは別の神社の御神体になっている。

日像鏡と日矛鏡では神意に叶わず、新たに創られた八咫鏡でやつと意にあつたと伝わっている。

「ふたつの鏡は意にあわなかったとされていたけれど、だからといって失敗作ではなかった。そうでなければ御神体として扱われない一説では、本当は八咫鏡は必要なかったと言われている」

「なにそれ？」

意味不明だというように彩華は首をかしげた。

「簡単に言えば、八咫鏡は？天岩戸？ではなく別の儀式で使われたのよ。天照大御神の御姿、力——すべてを写し取った分身を創りだそうとした輩がいた、ということよ」

思いもよらなかった麻布都の発言に彩華は驚愕した。

そんなことが可能なのか。確かにありえない話ではないし、試してみる術者もいただろう。成功すればその者は敵なしだ。自分に都合のよい最強の式神を手に入れるようなものだ。だが、そうそう上手いくとは思えない。

「天照大御神の件を知っていたのかは定かではないけれど、とある男たちが月詠を降ろそうとした、と聞いたわ」

「月詠を……」

実感がわかない彩華はそれだけ呟くと黙りこんだ。

「お茶、淹れ直すわね」

すっかり冷めた湯飲みを見て麻布都が立ち上がった。

部屋の奥へと向かう後姿を何気なく見つめた彩華は思案するように唇を噛んだ。何のために神を降ろそうとしたのか見当がつかない。「大方、不老不死でも考えていたんでしょ」

音も立てずに戻った麻布都に驚き、彩華は肩をびくりと揺らした。不老不死、と小さな声で反復する。

繰り返される月の満ち欠けは？死と再生？として捉えられやすい。月詠には変若水おちみずと呼ばれる、飲めば若返る水の伝説もあるのだ。

国外でも論争があったという不老不死は、人間の永遠の課題なのだろう。

「男たちは当時の術者が征伐して、目論見は失敗に終わったけれど鏡は不明。術の痕跡を追っても無駄だった。仲間が持つて逃げ追うせたのだ、と言う者もいた」

「この鏡がその儀式に使われたというの？」

「ええ。この彫刻は私が聞いた模様と同じよ」

麻布都は和鏡の裏をついと指差した。

細かい彫刻は、さざなみの立つ海と月なのかと思っていたが、月から湧き出した変若水が下に落ちているのを表しているようにも見える。

月神の力——否、聞いた話から想像すれば、過去の出来事は月神そのものを得ようとしていたのか。

「……」

彩華の表情がさらに硬くなった。割れた鏡面に指を這わせてぎゅっと眉をよせる。

ドッペルゲンガー、鏡、過去の凶事、月詠——このあいだから複雑に絡まっていた思考の糸が、これで綺麗に解けそうだ。

伏せていた目をあげて彩華は麻布都の顔をじつと見つめた。

「それは本当の話？」

「……という話よ。あまり公にはなっていないけれどね。今まで鏡が発見されなかったのは、ここにはないという思いこみと、術の行使が気づかれないように結界でも張ってあったからじゃないかしら」

そう言つて麻布都は柔らかに微笑んだ。その表情に拍子抜けした彩華は、強張つていた肩の力を抜いて、ふつと笑う。

逸話をあたかも見てきたように話していた麻布都に、とある好奇心が沸いた。

「ねえ。麻布都つて、年はいくつなの？」

出会つてからずっと思つていた疑問を口にした。

見た感じは二十五歳くらい。誰もが羨む透き通った白磁の肌は決して病的ではなく、むしろ健康そうである。肌の艶は十代と言つてもよいくらいだ。

「女性に年齢なんて聞くものじゃないわよ？」

気を害した様子もなく、麻布都はただ微笑むだけであつた。

霊石屋から彩華が退出すると、太陽はすでに沈んでいた。

日中はよかつたが夜は少し肌寒い。彩華は両手を擦りあわせると、肩にかけているトートバッグを持ち直した。中には例の神鏡が入っている。呪具関係に詳しい麻布都にそのまま預けようと考えていたが受け取つてはもらえなかつたのだ。

曰く、月詠と関係しているのだから月詠を祀っている神社の手元にあるのが都合がよい、と。麻布都の話はどこまでが真実なのか不明なのだが、事が事だけに隠密裏に処理した方がいいのだろう。

第一、彼のことは高村家最大の秘密であるのだ。誰にも知られてはならない。……その割には、問題の彼はまったく重要視していないのだが。彼なりに考えてはいる、と思う。たぶん。

無理矢理納得した風情で頷いた彩華は、ぼんやりと空を見上げた。夜空には望月と呼ぶにはまだ早い月が淡い銀の輝きを放っている。「さつさと帰つてきなさいよ、ばか」

口にした言葉は誰に聞かせるわけでもなく、彩華はぼそりと呟いた。

暗闇の中、彩華は手探りで電気のスイッチを探した。

指に触れた四角のスイッチを押すと、軽い音とともにオレンジ色の明かりが点く。ひんやりとした書庫の中は、電気を点けても少し薄暗く感じた。

少し湿った空気と独特の臭いが鼻を突き、彩華はしかめっ面をしながら棚をひとつずつ見て回る。

ふいに入り込んだ風に煽られて埃が舞い上がった。軽く吸いこんでしまった彩華は、口元を覆いながら悪態をついた。

明かり取り用の窓が開いているとはいえ、定期的に掃除しているのにどうしてこんなに埃っぽいのか。

堪らず彩華は一旦外へと出た。咳きこみ過ぎて目尻に涙が滲んでいる。

荒れた息を整えながら、どうしたものかと思案する。

棚の上は掃除し辛いから取れきれない埃が溜まっているのだろう。一度徹底的に掃除した方がいいのかもしれない。

「うん。今度詠に手伝ってもらおう」

彩華の兄も背が低いわけではないが、彼の方が幾分か高いのだ。

「整頓もしたいし……」

心配かけてる迷惑料として手伝ってもらおう。決まりだ。

勝手に決定事項扱いにした彩華はほくそ笑んだ。普段散々からかわれているのだから、このくらいは許されるだろう。

ようやく咳が治まったところで書庫へと戻ってゆく。

本殿の横には庫くらがふたつある。ひとつは、神社に持ち込まれた呪具などを保管する庫。そしてもうひとつがこの書庫だ。ここには、古くからの陰陽道関連の文献や、先祖が記録した日記のような書物が保管されている。

だがすべて残っているわけではない。一般人から見ればただの記録でも、後々問題が生じる可能性があるかと判断されて燃やされてしまった物も数多くあるのだ。

「……もつたいないよねえ」

ぶつぶつと呟きながら視線を上下左右に動かす。

「このあたりかな」

彩華が立ち止まった辺りには、千年ほど前の記録が記された書物が置いてある。空輪山での凶事について宮司にそれとなく聞いてみたものの、望んだ答えは返ってこなかった。ならば書庫にあるかもしれないと探しにきたのだった。

とはいっても、いつの時代に起きたことなのかさっぱりである。棚から一冊手に取ると彩華は中身を斜め読みした。

「……」

文字を目で追う彩華の眉間に皺がよった。

流麗な文字は綺麗ではある。しかし現代人には正直読みづらい。

昔は草書体やら行書体が多いのだ。書道の勉強もしているが、読むのはまた別だ。

自室でじっくり読むことにした彩華は二、三冊抱えると書庫の明かりを消した。

疲れたらすぐに眠ってしまおうと考えた。

まずは被った埃を風呂で洗い流し、彩華はほっと一息ついた。そうして、髪が痛むのも構わずにタオルで荒っぽく滴を拭う。最後に手ぐしで軽く整えると、使用済みのタオルを椅子の背もたれに放り投げた。

彩華は書庫から持ってきた書物を手に取りベッドへ腰掛けると、ぱらぱらとページを捲り、時折草書辞典とにらめっこする。

字を確認しながら読み進めるが、それでも補いきれない部分がある。

集中して書物と向きあっているうちに目が疲れたのを感じた彩華は、一度目を上げて瞬きを繰り返した。

いつも以上に疲れている。

そういえば、今日は慣れない結界張りなんて芸道を行ったのだと思ひ出す。彩華は首と肩を数回動かすと、ふたたび書物に目を落とした。

——それからどのくらいの時間が流れたのか。彩華ははっと顔をあげると、急に眠気が襲ってきたのを感じて小さく欠伸をした。そろそろ眠りにつくかと本を閉じる。あまり成果が感じられなかったが仕方ない。

残りはまた明日にしようと思ち上がりかけ、何かが肩に触れる感覚に、彩華は身体を強張らせた。顔を上げた瞬間、押し倒されるようにベッドへ倒れ込んだ。

持っていた厚い本がぱりと大きな音をたてて落ちる。

「——っ！ いや！」

身じろぎにあわせてベッドが軋む。首筋を生温かいモノが這う感覚に、彩華は肌を粟だたせた。自身を押さえつけている気の塊は、ほんの僅かだが荒々しく感じる。目元は覆われていて何も見えない。利き手と両足を封じられ、唯一自由な左手で自身にのしかかっているモノを押し返すが、ぴくりとも動かない。

抜いの祝詞を紡ごうとして、彩華は気づいた。自分を組み伏せている相手が笑いを堪えている。

「……」

「……………。詠？」

冷静になつて気配を探れば、よく知った神気だ。

「異形と御祭神の区別もつかんのか、お前は」

くつと喉を鳴らして男が笑った。手を彩華の顔の横について身体を離すと、今度は声を出して笑う。

呆然としている彩華の髪を撫でると、詠はふたたび覆い被さって彼女を抱き締めた。

久しぶりに包まれた神気と男の体温に彩華の思考が停止する。

「とにかくいったんはーなーしーてー！」

男の手から逃れようと彩華が必死にもがく。

「少し黙ってる。近所迷惑だ」

「わかったから離してっ」

なおも男の腕から逃げ出そうと暴れる彩華に、詠が含みのある声

音で囁いた。

「……………少し黙れ」

耳に届いた優しい声が彩華の動きを止めた。

糸の切れた操り人形のような彼女を見た詠は、これ幸いと両腕でしっかりと抱える。そうして優しく拘束してから、何か言いたげに開かれた彩華の唇を自身のそれで塞ぐ。

触れた唇は、熱でもあるのかというくらい熱く感じた。

驚き、ふたたび暴れだした彩華の身体を難なく押さえこみながら、詠はさらに深く口づける。

唇に伝わってくる甘い衝動に、彩華は意識が落ちかけて徐々に力を抜いた。が、何とか意識を保ってふたたび暴れだす。

彼女の主張は通じたらしく、やがて名残惜しそうに詠の唇が離れた。

「し、死ぬかと思った……………」

彩華がぜいぜいと荒い呼吸を繰り返したあと、ぽつりと洩らした。

「よりによって窒息か」

色気のない、と詠が渋い顔を見ると、彩華は恨みがましい目で男を見上げた。

「だったらそういう雰囲気作ってよ。ムードもへったくれもない」

彩華が負けじと言い返す。

だが、その瞳が泣きそうに揺れたのを見逃さなかった詠は、安心させるように彼女の頭を軽く撫でた。

「ただいま」

「——おかえりなさい」

「そんなに寂しかったのか？　そうかそうか」

意地悪な笑みを浮かべる相手に、彩華は僅かに頬を染める。抗議の声をあげかけて、ふと口を噤んだ。自身の首筋に触れる垂れた銀の髪に気づいたのだ。そつと手を伸ばして、銀の髪を梳くように指に絡める。落ち着いてよく見れば、彼は天色あまいろの狩衣姿だ。久しぶりに見る姿に、彩華は驚いた顔で詠の顔を見つめた。

「……あと二日すれば人型も取れるようになる。少しずつ大気を取り込めば元に戻る」

そう言って詠は不機嫌そうに嘆息した。

まだ本調子ではないのだろう。彼の子供のような様子に苦笑した彩華の顔が、急に真顔になる。

「なんだ？」

詠は訝しげな表情で彼女を見た。

「緋月には会ってきた？」

「まだだが……」

なぜ急に、と詠の瞳が語っている。

「じゃあ、すぐ行ってきた。とつても心配してたから」

急かす彩華に対して詠は胡乱げな目を向けていたが、やがて大気に溶けるように姿を消した。

詠が本殿へ向かったのを見届けてから、彩華はほつと息を吐いた。身体を起して軽く乱れた服装を正す。

見慣れない姿は非常に心臓に悪い。普段とは違う雰囲気を漂わせている彼に心を惑わされていた、なんて知られなくて本当に良かった。

先ほどとはまた違った呼吸困難に陥った彩華は大きく息を吸った。鏡は見えていないけれど、きっと顔が赤くなっている。まずは水でも飲んで落ちついて、詠に何か用意しておこう。

そう思った彩華は、ゆっくりと部屋を出ていった。

詠が戻ってくると、ふたりはベッドに寄りかかるように並んで座った。彩華の部屋で彼が仔狼の姿に変化していないときの定番である。

盆に手を伸ばした詠は、小さな握り飯を掴むと口へと運んだ。僅かに目元を和ませてゆっくり咀嚼する。

握り飯はどうしようかと悩んだ末に彩華が用意した。別に食べななくてもよいのだからお茶だけでいいかなと思ったが、多分喜ぶだ

ろうと考えたのだ。そしてその予想は正しかったらしい。

自身の湯飲みに口をつけながら彩華が顔を綻ばせた。

「ごちそうさまでした」

詠の顔が幸せを噛みしめているように見えて、彩華はこみ上げる笑いをこらえきれずに吹きだした。

「行儀の悪い」

彼女の様子を見た詠が目を眇めた。だが、たしなめるその言葉には非難めいた響きはない。

「ごめん」

素直に謝るが、久しぶりのやりとりに妙な照れくささが残るのか、彩華の顔は緩んだままだ。

双方とも纏う空気は甘く柔らかである。

詠の肩にこつん、と頭をもたせかけた彩華はしばし目を閉じた。

彼女の口元には安堵の笑みが浮かんでいる。

互いの鼓動が聞こえるほどの静けさの中、無言の時間が過ぎていった。

「それで、もう体調は大丈夫なの？」

やがて顔をあげた彩華が穏やかな口調で問うた。

人型を取れるようになるまでに二日ほど必要としても、人界へ戻こたへってきたということは問題ないのだろう。そうと理解していても、やはり気になる。

横に座る詠に向ける視線には不安の色が滲んでいる。

「ああ。それよりお前、また妙な物拾ってきたな？」

妙な物、とは、例の鏡のことだ。

神社へ帰ってきた彩華は、鏡を保管庫へとしまっておいた。月の神と関係があるらしい物をそこいらに放っておくわけにもいかない。結界が張ってある保管庫ならばまず間違いはないと判断したのだ。だが、それでも気配は感じたのだろう。当然といえば当然なのではあるが。

「必然的に持つて帰ることになってしまったというか……」

歯切れ悪く自身の知っていることを話した彩華に、詠は飽きれまじりに息を吐いた。

「で、あれって何なの？ 詠のそっくりさんとかも出てくるし」

得た情報を整理して、ぼんやりとではあるが話は繋がった。しかしそれは想像でしかないし、当事者がいるのだから真実を知りたい。真剣な眼差しで話しかけてきた彩華に、詠は苦笑しつつ答える。

「ドッペルゲンガーとか」

「真面目に答えてる？」

「もちろん」

少しおどけた口調で話す詠を上目遣いで睨みつけると、彩華は身体をずらして彼の目の前に正座した。腕を組んで無言のまま、ただ詠の顔をじつと見つめる。

やがて詠は少し困惑した表情で口を開いた。

「他に俺が話せることはない。麻布都が言った話が正解。……不本意だけだな」

僅かに目を尖らせて遠くを見つめる仕草をする。

怒りの矛先は自分そっくりな男に対してなのか麻布都に対してなのか、はたまた古の術者に対してなのか、彩華にはわからなかった。きっと全部なのだろうと彼女は思い至った。

麻布都とどうしてそんなに相性が悪いのかと、彩華は何度か尋ねたが、教えてはもらえなかった。話したくはない事情もあるだろうから、無理には聞かないようにしていたが、詠と麻布都ふたりだけの秘密がありそうで、とつても嫌だ。

自分の考えに彩華はやや不機嫌そうに頬を膨らませて感情を表した。

「また何を考えている？」

「麻布都、ずいぶん詳しそうだっただけど、どういう関係？」

まっすぐ向けられる彩華の視線を受け止めて、詠は優しく微笑むと、彼女の髪を愛おしそうに撫でた。

「心配するような関係じゃない。——お前と似た立場だから詳しい

ただだ」

「わたしと同じ？　どこかの神社の巫女、とか？」

しかも、巫女の前に？　特殊な？　という言葉がつく。

彩華が首をかしげた。それならば、あの人間離れした物腰も納得がいく。

「ああ。……………正確には違うけれど。俺のこともあれははつきり口にしないんだから、そのあたりは教えられなくても割り切ってる」
「……………わかった」

齒切れの悪い詠の物言いに、彩華は不満げな顔をしたが、やがてこつくりと頷く。

素直に頷く彩華の髪を再度撫でて、詠が優しく笑んだ。

「じゃあ、話を元に戻していい？　有紀ちゃんが見た男と、わたしが会った男は同一で、その男はおそらく大昔に月詠尊の複製しようとした儀式と関係している。儀式はおそらく成功していて、月詠尊はまんまと力を取られた、と」

「……………はつきり言うな」

時計の秒針が一周回るくらいの時間を置いてからぼそりと呟いた詠が、幾分か傷ついたような目で彩華を見つめ返した。

「ごめん。——儀式つて、詠は気づいてたんだよね？　当時の術者が止めたって聞いたけど、それってわたしの祖先なの？」

いいや、と詠は首を横に振った。

「高村家はまだこの土地へ来ていない頃の話だ。ろくでなしどもは潰すの簡単だったんだがな。鏡の行方だけはどうにも掴めなくて。跡形もなく壊れたんだろうと思っていたんだが、何百年も経過してから発見されるとは」

詠は少々驚いた様子だ。

今までわからなかったのは、蛇の精霊たちが創った霊力の籠で気配が遮断され、なおかつ放置されていた場所が月詠尊を祀る神社と近すぎた結果なのだろう。

「鏡に映った月、か…………」

それだけ言った詠は僅かに目を伏せると黙りこんだ。

本物そっくりの鏡像。人為的に作られた二つ目の月は、呪具の鏡に封印されたまま長い年月を経た今現れた。

「――凶変の予兆……とか」

「それはない」

恐る恐るといった風の呟きを、詠はやけにきっぱりと否定した。

「なんでよ」

拍子抜けして、ばかんと口を開いた。彩華は意味がわからないといった表情を浮かべている。

凶事に使われた鏡から生まれた妖のようなモノ。それが自我を持つて存在し、歩き回っている。本体と入れ替わろうとしているのか、それとも別の理由があるのか。アレが何を考えているのか、今の段階ではまったくわからない。

それなのに、なぜ彼がしれつとしているのか、彩華には見当がつかないでいる。

詠はしばらく目を閉じて黙考すると、

「俺の複製だから」

頬にかかる銀髪を掻きあげた。絡みのない柔らかな長い髪は、彼の余裕さを物語っているようだ。

「……あつそ」

本気で心配すると自分が馬鹿をみそうだ。

「ふざけてないぞ。そいつが悪鬼の類ならお前はとくに喰われているか、嬲り殺されていた」

内側からじわじわと蝕み消滅へと導いていく術を、あのとき自分が受けることになっていたら――ふいに、妖の命が尽きてゆくさまを思い出した彩華は、ぶるりと身震いした。悪意を向けられなかったから良かったものの、攻撃されていたら、今頃この世にはいなかったはず。

あの男に敵意は感じなかったが、その双眸は冷たい印象をもたらしていた。

彩華は無意識に伸ばした指で詠の衣をぎゅっと掴んだ。

「荒ぶる魂も、別に気の赴くままに暴りたい訳じゃないからな。悪意があるならこの世へ出てすぐ行動起こすだろっし」

「——ごめん。聞いてなかった」

我に返った彩華が詫びる。

「ああ……独り言だから気にするな」

詠は気にしていない素振りを見せるため目元を和ませた。

それに返すように小さく笑うと、彩華は唇に人差し指をあてて考えるような仕草をする。

「ねえ……彼が目の前に現れたら、どうするの？」

ずっと思っていた疑問を口にする。いずれは会うことになるだろう。

「月がふたつもあつたらバランスが壊れるから、やっぱり……排除、なの？ 月詠の霊力から生まれたのなら元に戻せないの？」

詠は何も言わず彩華を見つめ返した。しばしの逡巡のあと、
「俺の霊力を分け与えた緋月を俺に戻すのは無理だ。文字通りこの世から消して、大気に溶かすしか方法はない」

一度個体として存在したら、たとえ分身でも簡単にはいかないと言った。

「それじゃあ、彼は——っ」

彩華は手を口元にあてがい言葉を止めた。

欠伸を噛む姿を見た詠は彼女を抱きあげると、有無を言わずベツドへと放りこんだ。何か言いたげな彼女の顔を黙殺して、掛け布団を肩まで引きあげる。

「どうするかは俺が考えているから今は休め」

子供をあやすように詠が頭を撫でていると、諦めて目を閉じた彩華から安らかな寝息が聞こえてきた。

暗闇の中、淡い月光だけが彩華の顔を照らしていた。

鏡の月 四

気がついたときにはこの世に生まれていた。——いや、生まれていたというのはおかしいのかもしれない。

あれの記憶と知識を持ったまま、気がついたらどこかの空間に立っていた。

？天の国？とは違うというのはすぐにわかった。

ここはひどく息苦しい。暗闇のせいで広くも狭くも感じる。

ここはなんだ？ と漆黒の男は眉をひそめた。

そしてオレはなんだ？

——オレは誰だ？

自問自答して、理解する。

あれと同じでありながら、あれとは違う存在。本来ならばふたつも存在することはない。なぜオレはここにいる？

訳がわからず思案している男の耳に、ぱきりと割れる音が届いた。伝わってきた空気の振動に、何事かと上方を見やる。

しばしの逡巡のあと、男は不機嫌そうに目を細めた。

たわけ。下衆ごときがこの力をどうこうできるわけないだろう？ 術の失敗を感じとった男は鼻を鳴らして笑った。

オレに何をさせる気だったのか。地上に騒動でも起こす気なのか、それとも不老長寿か……。どの道いいようにされる気はないけどな。姿の見えぬ術者に向かって男は冷笑を浮かべた。

あれの霊力を写し取って実体化させたのは褒めてやってもいいが……小者ではここまでしかできぬか。稀代の陰陽師ならば可能だったかもしれないが。

ふん、とふたたび鼻で笑うが、肌を刺すような感触に顔をしかめる。

男を形にした術者は諦めきれないのか、まだ何かしようとしているようだ。

——浅ましい。

鬱陶しく纏わりつく静電気を虫を払うように追いやると、男はため息をついた。

さっさとあれにかしてもらいたいものだ。

面倒が起きる前にさっさとオレを消せ、と。

何度か呼びかけているというのに。どういう訳か呼びかけには返事がない。

返事の代わりに、頭上に現れた裂け目に引き寄せられそうになり、男は奥歯を噛んでそれを耐えた。

自身を成形している一部の霊気が今ので外へ出てしまったようだ。やれやれと男は思う。

下衆の気配はすでないから、そっちは始末したのだろうが……。神経を張り巡らせて男は外の様子をうかがった。どうやら、この空間を取り囲むように、別の力が働いているらしい。

だからか、と男は独りごちた。

じわりじわりと流れてくるあれの記憶と霊力が急に止まった。

気の流れが遮断されたのか。ならば好都合だ。

男は薄く笑って目を閉じた。

いつになるかはわからないが、やがて時が流れればこの空間ごと朽ちて消えるだろう――。

だが男の願いは叶うことなく。

大気の澱みは長い月日を経て内側からの爆発を生じた。

鏡の月 五

雲ひとつない抜けるような青空が広がっている。

けたたましい音と歓声が頭上から聞こえ、彩華が眩しそうに空を見上げると、ジェットコースターのレールが目に入った。今のはコースターが走り去る音だったようだ。

風もなく穏やかな陽気の中、園内には楽しげな話し声や笑い声が絶えず溢れている。

開園してからもう何十年と経つのだが、人気は衰えることなく、休日はかなり賑っているようだ。

敷地内に設置された花壇には鮮やかな花々が咲きほこり、毎日来園者たちを歓迎している。植物だけでなく、ライトアップも季節ごとにその表情を変えるため、何度来ても楽しめるのだろう。

「お、チュロス発見」

「どこ？ わたしも食べたいな」

地元ではあまり見かけない菓子に食指が動き、彩華は辺りを見回した。

詠の視線を追うが発見できなかった。甘い香りを漂わせているポップコーンの出店は近くにあったが、目的のものは見当たらない。

「ずっと向こう。……人の目じゃ見えないところ」

幾分か音量を抑えて詠が答えた。

ふたりの横を親子連れやカップルが足早に通り過ぎてゆく。最近新しくできたというアトラクション目当てであろう。みな一定方向に歩いている。

傍を通った来園者の鞆が当たりそうになり、彩華は慌てて避けた。その拍子にバランスを崩した彼女を詠が正面から抱きとめる。

気恥ずかしくなりながら彩華ははじかれたように離れた。

「——なんだ？」

「なんでもない。ありがとう」

着飾らなくても華やかな雰囲気を持つ男と一緒にいると、立っているだけで注目されやすいのだ。必要以上に目立つことはない。

こっそり周りに視線を向けるが、幸いなことに目撃はされなかったようだ。気にしすぎだったかと、彩華は胸を撫で下ろした。来園者たちも、夢と希望の溢れる遊園地で、赤の他人になど構っていないのだろう。

今日は平日のはずなのだが、そのわりには人が多い。平日休みの職場か、創立記念日で学校が休みなのだろうか。修学旅行もありえる。

「別の日にした方が良かったかな……」

「いつでも一緒じゃないか？」

そう言いながら、詠は右手の指をぱちんと弾いた。小さな音とともにふたりの足元に纏わりついていた影が消滅する。

「思っていたよりもさほど悪化していないし、これならこっそり片付くだろ」

「そうだねえ……」

彩華は、ふっと遠くを見つめて呟いた。目を凝らすと僅かに視界が濁っている。うつすらと漂う邪気が視えて、目を陰しく細めた。

人の集まる場所には活気が満ちる。だが、その裏には怪しげな影が潜んでいる。人の精気を狙うモノや、楽しげに笑う姿を妬むモノ。そういった異形が集まってくる。

しかも、こういった広い土地は、大昔城が建てられていた跡地であることが多いのだ。落城していたのなら、特に強い念が残りやすい。そうなるとますます悪しきモノが吸い寄せられる場所になる。「前に来たのっていつだ？」

問われた彩華はしばし思索した。

「えーと……わたしが小学生の頃じゃないかな、たしか。詠ってどうしてたっけ？」

「ひとり寂しくお留守番」

家族水入らずの遠出だったのを彩華は思い出した。——いや、あ

れは家族総出の調伏退治と言ってもいいのかもしれない。実際には父親ひとりが行っていて、当時の自分たちは普通に遊んでいたのだが。

一番最初の調伏退治が入ったのはもうずっと前のことで、それこそ彩華の父親が生まれる前だ。人間の霊力では完全に消し去ることは叶わず、こうして定期的にアフターフォローすることになっている。

その後友人たちと数回遊びにきたが、外法師として特にすることはなく、ひとしきり遊んで帰った。

本日の一日パスポートは、オーナーからの好意でプレゼントされた。

「別にいいのにね」

「五千円程度の入園料ケチって事故が起こるよりいいと思っているんだろっ」

そうなのだろうが、調伏依頼料は別途支払われている。

太っ腹な依頼人に感謝しつつ、彩華は目の端に映った黒い影を短い神呪で退けた。人の耳には聞こえない断末魔をあげて、妖はあっという間に掻き消えた。

「どうしよつか。行きたいところある？」

彩華が園内の地図を広げて尋ねた。

よほどのことがなければ休園にはしない、他の来園者には気づかれぬようにできるだけこっそりと、との依頼人の意向を受けている。閉園時間まで時間はたっぷりあるから、細かいところまで確認できるだろう。だが、効率よく行いたいところだ。すべてが短時間で済んでしまえば、残りは自由時間となる。

調伏退治を抜かせば久しぶりの遠出だ。目一杯遊び倒したいという欲求が彩華を襲う。

でも依頼優先だ。それは忘れていない。

「どういう回り方でもいいが。お前の好きなようにしていいぞ」

「じゃあ、チユロス食べたい」

こういつた場所でなければなかなか食べられないし、と至極真面目な顔をした彩華が呟いた。

「最近感覚が俺に似てきたか？」

「そんなことないでしょ。わたしは昔から食べたい物を食べたいときに、がモットーなもの」

「それはいい座右の銘だ」

本気なのか冗談なのか、どちらとも取れる口ぶりで詠が頷く。

彩華の願いを叶えるべく、詠は彼女の手を握ると、目的の方向へと視線を向けた。

遊園地の一角にあるベンチに座ると、彩華は小さく息をついた。天気は良いがさほど暑くもなく過ごしやすいかと思っていたが、やはり歩き回っていると少し汗ばむ。

ふたりは途中で購入したジュースでしばし休憩することにした。自然景観と日除けを兼ねて植えられた木々の間を風が吹き抜けてゆき、詠が気持ちよさそうに目を閉じた。

ジェットコースター、メリーゴーランド、ゴーカート——などなど。久しぶりの遊園地を謳歌して、彩華の目はいつになく輝いている。

「楽しそうだな」

「すっごく楽しい」

返ってきたご機嫌な声に詠が苦笑する。

昼に入ったレストランは美味しかったし、アトラクションの待ち時間に遭遇したミニパレードは、夜のものに負けず劣らずで煌びやかだった。夜はもっと綺麗だろう。

楽しすぎて、すっかり本来の目的を忘れそうになるほどだ。

「疲れたならもうちょっと休む？」

飲み終えた紙コップを捨てに、軽い足取りでベンチから立ち上がる。戻ってくると彩華が尋ねた。

「俺は疲れんから」

目を閉じたまま詠が答えた。

霊力が弱まればそれなりに気だるく感じるのだろうが、人間と違って疲れることはない。暑さや寒さも自動シャットアウトしてしまうそうさ。

「でも、今日って月蝕でしょ？」

「多少の影響はあるだろうが、たいした問題じゃない。それに俺は、高村の人間とは違う」

彩華たち高村の者は、陰陽道を操り月を崇め祭る一族の流れを汲んでいる。そのせいか、新月の時期は霊力が弱まり、逆に満月の時期には最大限の力を発揮できる。もつとも、元々の素質や修練によって個人差はあるのだが。

「そう？　じゃあ、どこか行きたいところある？」

返答にほっとして、彩華は無邪気な笑顔を見せた。

詠は薄く目を開けて何かを探すように周りを見回す。口元がほんの僅かだが緩まったのには、彼女は気づかなかった。

「……あれ、まだだったよな」

「え、どれ？」

詠が指差した方向を見やって顔をひきつらせた。

「行くか」

立ち上がり、詠は彩華の肩を軽く押す。

「ちょ……」

彩華の動揺はお構いなしに、詠は彼女が逃げられないように自身の腕を絡めると、半ば強引にお化け屋敷の入口へと向かった。

「ちょっと待った！　どういう嫌がらせよっ」

腕を無理矢理振りほどき立ち止まる。ふたたび捕まらぬように詠から数歩離れた彩華は、全身の毛を逆立てて警戒している子猫のようになっている。

「なにがだ？」

「なにがだ、じゃないっ」

わたしが大嫌いだって知ってるくせに。

「中は多少涼しいだろうし、気分転換にいいだろ」

「嫌」

彩華は素っ気なく言葉を発した。

「あんなもの作り物だろう？」

「だから余計に嫌なのよ」

大勢の妖を相手にするのと、作り物のお化け屋敷では勝手が違うのだ。

「……調伏は平気なものにな。同じ場面に遭遇しても顔色変えずに倒してるくせに」

「作り物と本物は違うのよ」

わざわざ恐怖を味わおうなんて人の気が知れない。あの、人間を驚かせてやるうという作りが心臓に悪いのだ、と彩華ががなる。？驚かせてやるう？という気持ちは、異形ほんものにもあるのだが、そこは本人は違うものと考えているらしい。

「ああいった暗い場所には異形も潜みやすいだろう？ 行かないで、何かあったらどうするんだ？」

などともっともらしいことを言う詠の目尻が僅かに動いたのを見逃さず、彩華がぎろりと睨みつけた。男の考えに本気で怒った様子で眉をつりあげた。だが、当の詠はそんなことは露も気にせず黙って彩華の次の反応を待っている。

道行く人々が、何かと好奇の視線をふたりに向けてゆく。往来で男女が騒いでいればかなり目立つ。

バツが悪くなった彩華はほんの少し怒りを治めると詠に向き直り、「じゃあ、わたしは出口で待っているから行ってきて」

無駄だろうと薄々わかっているが交渉を始めた。

「駄目だ。それにひとりで入ったってつまらん」

こいつ、やっぱり人が嫌がっているのを楽しんでいるな。

彩華は大きな眼を半眼にして再度目の前の相手を睨みつけ、口を開いた。

——風破。ふうは

短い言霊は風を巻き起こし、ふたりの靈力に惹かれて寄ってきた悪しき影へと襲いかかった。

遊びに来ている来園者たちは、少し強い風が吹いたとしか感じない。近くを歩いていた女が、軽い悲鳴をあげて帽子を押さえているだけだった。

術の発動した方向へ目を向けなくても浄化したのは気配でわかる。彩華は黙ったままじっと詠を見据えた。

詠はというと、今更隠す必要はないと思ったのか、意地の悪い笑みを浮かべて彩華を見つめている。

「そんな風にいい加減な術者に育てた覚えはないぞ？」

「育ててもらった覚えもないわ」

負けじと彩華が言い返す。実際、子供に対しての教育も、術の教えもすべて父親が母親からだ。もちろん月詠尊から教わったことも少なくはないが。

ぱちんと彩華が指を鳴らした。それだけで力の弱い妖は消え去る。男女が言い争いながらの調伏。この光景は、かなり異様だ。第三者がこの場にいたならば「もう少し真面目にやれ」と突っ込みが入りそうである。

——しばしの沈黙がこの場を支配した。

「冗談はさて置いて——」

と、唐突に真面目な顔をした詠に嫌な予感がしつつ、彩華は唇を噛んで彼の言葉を待った。

「月詠尊は必要以上には手を出さない、という約束だろう？——
おれあまり我侭を言うのなら、ひとりで行かせるぞ」

相手の思うツボに嵌ってはいけない。が、彼の言っていることは正しい。神の力に頼りすぎれば、人はいずれ破滅する。

「……わかった……行きます」

がつくりと項垂れて、彩華は渋々承諾する。

詠が楽しげに目を細めたのは、見なかったことにした。

おどろおどろしい雰囲気の建物の前で、彩華は一瞬立ち止まった。
「どうした」

腹の立つほど爽やかに笑う詠に殴りかかりたくなつたのを必死に耐えて、彩華は嫌々足を進める。

あと少しで入口というところで、ふたたび彩華が足を止めた。

「……………」

眉をひそめて、それ以上歩けないでいる。

詠に連れてこられたお化け屋敷は西洋が舞台らしく、外観はレнга造りの洋館だ。廃墟となつた洋館を探索するアトラクションらしい。割れたガラスや崩れた外壁が陰惨な雰囲気を醸しだしている。

せめて、乗り物に乗ったら出口まで連れてってくれるライド型お化け屋敷だったらよかったのに。別の遊園地で入つたお化け屋敷は、幻想的で綺麗で怖くなくつて、とっても面白かつたのに。

心の中で彩華が愚痴る。不幸なことに、ここは最後まで歩くタイプのお化け屋敷だった。一度入ったら最後。出口まで自身の足で歩かねばならない。

入口に立っているスタッフの笑顔ですら恨めしい。しかし関係のないスタッフに八つ当たりするわけにも、助けを求めるわけにもいかず、彩華は渋々詠のあとに続いた。

中は当然暗い。道案内用の薄暗い明かりがところどころ点いているだけだ。

入場者の不安を煽る効果音は、まだ入口付近だというのに彩華を戦慄の恐怖へと陥れた。詠にしっかりと握られた手を引かれるが、彩華は一步も動けない。

「仕方ないなあ」

苦笑して、詠は一度彩華の手を離すと、自身の背中側から彼女の腕を回させた。詠の腰に両腕を回し、背中にしがみついている格好だ。

背中に顔を埋めると、彩華の視界には詠の姿以外入らなくなる。僅かに肩の力を抜いた彩華は、詠に促されるまま足を動かした。

詠にしがみついているおかげでアトラクションの内容はほとんどわからない。だが耳栓をしているわけではないから、視界が悪い分、耳からの情報が多くなる。

水の落ちる音。何かが這いずり回る音。雷が落ちたような、耳をつんざく爆発音。先に入ったらしい来園者の悲鳴が遠くで聞こえ、彩華は一層腕に力をこめた。

「苦しいぞ」

「うるさい馬鹿」

くぐもった声で彩華が罵った。だがその声には覇気がない。

「……置いていかないでよ」

冗談でも腕を振りほどかれて先に行かれてしまったら、腰が抜けてきつと歩けない。

「……それは面白そうだが、離縁状叩きつけられそうだから止めておこつ」

彩華が呟くと、しばらく思索したあとに、のんびりとした答えが返ってきた。

「する気はないけど、近いことはする」

弱々しい彩華の言葉を聞いた詠は、くつくつと喉を鳴らして笑っている。

面白がっている詠の様子にムツとした彩華は、彼のわき腹をつねった。が、当人はまったく意に介していない。

所要時間は二十分程度のはずなのだが、それ以上に長く感じる。早く出口にたどり着かないかと、彩華がそればかりを願っていたそのとき。

——金属を力任せに叩くような音が聞こえる。

それに気づいた彩華は恐ろしさに息をつめた。

突然前方からあがった咆哮に、彩華は身の毛がよだつのを感じた。喉がひきつれて悲鳴すらもあげられない。

お化け役は行動範囲が決まっているのか、ふたりがお化けと一定の距離を取るとそれ以上は追ってこなかった。だが背後から壁やガ

ラスを叩く音が聞こえるせいで恐怖感が募る。

自身の手を重ねられた詠の大きな手に、彩華の恐怖心が少しだけ和らいた。

「こんなもの楽しむ人の気が知れない」

小さな声でぼやいた。どうしてわざと心臓に悪いことをするのか。それが不思議で、彩華は思わず考え込んでしまった。

度胸試し？ そんなことをして何か良いことがあるのか。人間、遅かれ早かれ寿命は必ずくるのだから、あえて縮める必要はあるのか。大体、面白半分で危険区域に近づく大馬鹿者たちがいるせいで、術者が死にそうな目に遭うこともあるのだ。助けを求められれば可能な限り手を貸すが、自業自得と切り捨てたくなるときも、たまにある。事の真偽を糺した^{ただ}ら被害者が実は加害者でした、なんてこともある。その怒りの矛先は、一体どこにぶつけたらいいのか――。

彼女の心を読んだかのように詠が笑みをこぼした。その顔を彼女が目撃したならば、不機嫌そうな表情をしたであろう。そんな意地の悪い笑みだ。

「彩華」

「――っ」

声をかけられた彩華は驚いて肩を揺らした。

「出口だぞ」

「本当だ……」

そつと背中影から前方を覗くと、外の明かりが見えた。安心したのか、彩華は安堵を漏らすとともに腕の力を抜く。意識を飛ばしていたおかげで、後半の恐怖は一切なかった。恐怖の代わりに軽い怒りが彩華の心を染めあげていたのだけれど。

さあ出口だ。彩華がほつとしたその直後。

地の底から轟いてきたような化け物の低い声と爆音に、彩華はそれまで耐えていた悲鳴を、とうとうあげた。

――最後の最後で寿命が縮まった。

「ふ……ふふ……」

人間恐怖を感じると感覚が麻痺して笑いたくなるらしい。

詠に手を引かれてやっと外へ出ることができた。地面に目を落として彩華は顔をひきつらせている。

ふたりが外へ出ると、西の空が茜色に染まりはじめていた。

彼女の傍で陽炎が揺らめいた。

あんど口を開いて頭から彩華の霊力を飲みこもうとした妖は、彼女がひと睨みすると簡単に霧消した。

大きなため息を吐いて空を仰ぐ。夕方になりつつも今なお降り注ぐ陽の光が非常に懐かしい。久しぶりに感じる外の空気を存分に吸いこんだ彩華は、晴れわたった空を見上げて満面の笑みを浮かべた。生きて帰れて本当によかった――などと今にも言いそうである。

「簡単に心を乱していると、そのうち異形につけこまれるぞ」
不意に背後から声をかけられて、彩華は振り返った。

「……笑いながら言われても説得力ないんですけどー？」

まさか今のが修練なんて言わないでしょうね、と彩華が目を尖らせた。

「修練になるかもな。もう一度入るか？」

呆れた彩華は声もない。

「わたしが暗闇が大っ嫌いとか、幽霊が大っ嫌いで仕事にならないっていうなら必要だと思うけど」

平気なのだから必要ない。本物の洋館で怪奇現象が起きているから調伏退治に行つてこい、と依頼があつたなら、ひとりでも行く自信が彩華にはあるのだ。

「大体、春頃にも人を謀つてホラー映画に連れてつたし！」

詠とふたりで行つてこいと、兄からチケットをもらつて観に行つたはいいが、内容は身の毛のよだつホラーだったのだ。あのときの詫びはふたりにしてもらつたけれど、今日はどうしてくれようか。

彩華は険しい目で睨みつけながら詠ににじり寄つた。その勢いに詠が若干怯えた顔で後ずさる。上目遣いに睨みつけると、詠は口元をやや引きつらせた。

「……今言い争って時間を無駄にすることないだろう?」

時計を眺めてそんな提案をする詠を彩華は鋭く見つめるが、はつと気づいたように怒りを収めた。

「彩華?」

「そうだ。観覧車」

「観覧車?」

慌てて地図を確認している彩華の様子を見た詠の顔には、訝る表情が滲んでいる。

「こつちに行くのと近道かな?」

誰に尋ねるわけでもなく呟いた。

「……観覧車に乗りたいのか?」

恐る恐る詠が尋ねる。

「そうよ。ここは夕方の景色が綺麗だつて聞いたの」

園内にある大観覧車のことを指している。一周十五分ほどの空中散歩が楽しめる。

夜のイルミネーションは前回体験済みだから、今日は夕方を楽しみにしていたのだ。せつかく来たのだから、見逃したくはない。

彩華は先ほどの不穏な空気など、もうすっかり忘れた様子で、園内の地図とにらめっこしている。

「それなら急いだ方がいいんじゃないか? もう太陽沈みかけてるぞ」

「うん」

彩華は素直に頷き、観覧車の方へと向かった。

「詠? 置いてっちゃうよ」

数歩歩いたところで彩華が立ち止まり、振り返りながら言う。

「——今行く」

その後姿をしばらく眺め、うまく話をそらせることに成功したと、詠はかすかに安堵していたのだった。

窓から見える景色が遠くまで見渡せるようになってきた。

大観覧車の中で彩華と詠は向かいあわせで座り、黙したまま遊園地が夕日に染まっていくのを楽しんでいた。

行列ができていくかと心配であったが、夜のパレード目当てが多かったらしく、さほど並ばずに乗ることができた。地上を見やれば、パレードの場所取りらしい人影が見える。

観覧車自体にも装飾が施されており、回転アームにある明かりが一秒ごとに点いてゆく。夜にはライトアップもされて、地上での待ち時間の間も楽しめるようになってきているのだ。

「高いねー」

地上を見下ろすと人が豆粒のようだ。

彩華は視線を動かし、自分たちが遊んできたアトラクションを目で追っている。こうして観覧車に乗ると、遊園地全体が見渡せてなかなか面白い。

「……」

お化け屋敷が目に入り、一瞬動きを止めた。

「どうした？」

詠が何の気なしに問いかけると、彩華はにつこりと笑った。

「……彩華？」

笑顔なのに、詠は寒気がするほどの威圧感を覚える。

「さっきの、忘れてないからね」

観覧車は不穏な空気など関係なしにゆっくりと空を昇ってゆく。ある種の密室であるから、詠は逃げ出したくても逃げ出せない。その気になれば可能なのだが、そんなことをしたら事態が悪化するのほわかりきっている。

「わかってる」

「それならよろしい」

彩華が腕を組み足を組み——偉そうな仕草をすると顔を見あわせて笑いあう。

ひとしきり笑ったあとは自然に無言となった。やがてふたりの乗った観覧車が頂上に着くと、彩華が感嘆の声を洩らした。

「やっぱり高いところって眺めがいいね」
だが下を覗くとさすがにちよつと怖い。

ガラス越しに遙か地上を見下ろすと今にも吸い込まれそうな錯覚に陥る。軽く身震いをして、彩華は座り直した。

半分以上過ぎたところで、観覧車が金属の軋む音とともに揺れた。強風が吹いたわけではない。地上からの振動が伝わってきた感じだ。
「……パレードは見れない、かな？」

「だな」

パレードも見なかったし、アトラクションで夜景を楽しみたかったのに、と彩華は眉をしかめた。

「休みの日にまた来ればいいさ」

「うん」

地上に視線を走らせると、彩華はじつと目を凝らした。ところどころに黒いもやが集まりだしている。次に西に目を向けると太陽を確認する。あと数分で完全に姿を消すだろう。

彩華は唇を軽く噛んで思考を巡らせた。

闇をも照らす太陽の光が届かない夜は異形たちが猛然と活動する時間だ。そんな禍々しい夜を抑圧しているのは、空に浮かぶ月。されど月神の拘束を何なく弾いてしまうモノも中にはいるのだ。

今宵は満月だが、月蝕がある。

月のない夜は、闇に紛れて妖が蠢きやすくなる――。

詠が彩華の持っている地図にざつと目を通すと、同じように下を見下ろした。

「……一体一体は滅茶苦茶弱いな」

昼の間に園全体を回って結界は強化した。それに園内はイルミネーションで明るいから、妖たちの動きは制限される。来園者が万が一襲われたとしても、軽い切り傷程度で済むだろうと詠が呟いた。

ふたりを乗せた観覧車は、まもなく地上へ降り立とうとしていた。

空は夜闇に包まれたが、煌びやかなイルミネーションで彩られた

遊園地はいまだに活気に溢れている。

園内の大通りから歓声があがった。かすかにカメラのシャッター音も聞こえてくる。

電飾で着飾った衣装や飾りつけられたフロート車の行列が近くを通っているらしい。夜のパレードはメインアトラクションのひとつらしく、パレードコースは人ごみで、ここからはほとんど見る事ができない。

背の高いフロート車が見えて、詠は眩しげに目を細めた。

車に負けないくらい華やかなスタッフが楽しげな音楽にあわせて踊っている。謳い文句どおり光と音で創られたおとぎの世界、と叫ぶにふさわしい。

詠はパレードから視線を外すと反対方向へ目を向けた。

少し離れたベンチにカップルが座っていた。女は貧血でも起こしたのか、ぐったりと背もたれに寄りかかり、男の介抱を受けている。妖に精気を喰われたのだろう。しかし命に係わるほどではない。しばらく休んでいれば、疲労感が残るだろうが元のように動けるようになる。

精気を己れの糧とする異形はたいてい力は弱く、人ひとりから吸収する量も多くはない。だがその分複数の人間から摂取することになるから、ある意味厄介ではある。

瘴気が残っているならば綺麗にできるが、精気を喰われた被害者に直接してやれることは何もない。してやる道理もないし、する気もない。自分が身を置いている一族の血縁ならば話は別だが。

詠はその場を何食わぬ顔で通り過ぎた。

一体の妖が浮遊しながら建物へ入ってゆくのが横目に見えて、詠は足を止めた。そうして何か思案するように指を自分の顎に当てる。静かに踵を返し、妖の後を追うように歩いてゆく詠の身体から、僅かな光が流れ落ちた。その豆粒ほどの塊がきらきらと輝いている。道端で光を放つそれに誘われるように、黒い影がざわざわと集まってきた。人の目には見えず、群がるのは靈力を欲する妖のみだ。

ひょいと光の欠片を摘みあげ、妖たちは口に放りこんだ。歓喜に身を震わせて、声なき声で咆哮する。妖たちはきよるきよると辺りを見回した。この甘い蜜のような霊力の塊は、もう落ちていないのかと。

彼らは周囲を見回し、目当てのものを見つけた妖が、ひゅ、と喉を鳴らした。それに気づいた他の妖たちも同じように鳴くと、一斉に移動を始めた。等間隔で落ちている光の粒を我先にと奪いあいながら進む。

妖たちは互いに牽制しながら道端の霊力をひとつずつ拾いあげてゆく。

一步、また一步と、少しずつ一匹の妖が侵入した建物へと近づいていった——それが畏だと、妖たちは考えがつかない。

撒き餌代わりに微量の霊力を与えて妖を集め、一気に片づけようという魂胆だ。

詠は後方をちらりと見やると、妖が潜りこんだアトラクションへと足を踏み入れた。

中はあらゆる方面が鏡で覆われたミラーハウスだ。あまた数多の鏡を用いた迷路は方向がわかりづらい。鏡の錯覚で一見広く感じるが、実際はかなり狭かった。

皆パレードに夢中なのか、詠の他に人影はないようだ。外の喧騒とは違い、ミラーハウスの中は静寂に包まれていた。

迷路を攻略するだけなら壁伝いに進んでいけば、たいていは出口に辿り着くが、今は遊ぶために入ったわけではない。

先に入った妖の気配を追って、自身は気配を殺して近づく。

妖の姿を目にとめると、詠は緩慢な動作で手を伸ばした。優しく、されど強引に自分の方へ掴みよせて妖ごと指を握りこむ。抵抗らしいものは一切なく、妖は砂塵へと変化する。詠の指から零れ落ちたそれは、やがて照明を反射しながら大気へと溶けて消えていった。

一息つく間もなく、詠は後ろを振り返った。ガラスを擦りあわせたような音が、徐々に近づいてくる。同時に感じる異形の気配。

僅かに口元を緩めて笑う。

彼の望みどおり餌に釣られた妖たちが寄ってきた。

待ち受けた瞳が一瞬だけ鋭い光を放った。清冽な神気がゆるりと動いて妖を取り囲み、優しく包みこむ。

詠目掛けて歩いていた妖が一斉に立ち止まった。

事の至大に気づく間もなく、妖たちは月神の霊気とともに霧散した。異形のあげた断末魔さえ飲みこみ、何事もなかったかのように静まり返る。

「さて。これで粗方始末したかな」

彩華は彼とは別方向から攻めていって、中間地点辺りで合流することになっている。

「……」

悠然と腕を組み、たったいま目に映ったかのように鏡の己を見つめた。

数多の鏡に、視界を埋める幾人もの自分が映っている。鏡の設置の仕方なのか、まったく同じ姿もあれば、異様に膨らんで見えるものや、醜く歪んでいるものもある。しかも鏡に映ったそれは、反転作用で逆の行動を取るものだから、別の存在がそこにいるかのようだ。

しかもここは場所柄窮屈な感じがするのだ。ひどく気の弱い人間がひとりで入ったならば、気味が悪いと震えそうである。敵なしと自負する自分ですら少々不愉快を感じるのだから、ただの人間なら恐怖を覚えることもあるのだろう。

こつんと鏡を軽く叩くが当然変化はない。付喪神が憑いていれば違ふのだろうが、今は妖気の一片も感じられない。

鏡は目に見えない真実を映し魔を祓うが、時に呪具としても使用される。昔から鏡に関する噂話——怪談話が多いのはこのためだ。

鏡に映った鏡の中に鏡が映り、その中にまた鏡が映る——鏡の中は無限の空間となり、現実の世界と異世界の境が曖昧になる。そうすると魑魅魍魎に都合の良い通り道ができてしまう。合わせ鏡は良

くないと言われる所以だ。^{ゆえん}

だが悪しき術がかけられているか、付喪神が憑いているかでもしなければ別段気にすることはない。そうでなければこのミラーハウスのように、日常生活で合わせ鏡になっている場所には必ず妖が存在することになってしまう。

ふと何かに気づいたのか後方を見やり、詠は澄んだ眼差しで遠くを視た。

いくら障害物があっても彼には関係ない。実際には目に見えなくても、気配を得るのは容易い。特に良く見知った相手であるなら尚更だ。

詠は訝ってかすかに目を細めた。妖が騒ぎ立てている様子はないが、ミラーハウスに入る前にはなかった違和感がある。

妖とは違う空気が漂っている。

なんだこれは、と詠は訝しげに眉をひそめた。

彼女の傍にとある気配を感じ取り、詠は一瞬目を瞠った。やや呆れたようにため息をつく。

やがて不機嫌そうに口を開いた。

「本来あるべき場所へと戻ってきたか」

意志を持った時点で好きに動くのは可能だったはず。神気を纏う者が神社境内へ入れないことはないし、そうすれば自分ほっと早く人界へ戻れたはずなのだ。なのにそうしなかったのは、本体の不在時に混乱を避けるためか、あるいは――。

「……単に観光したかった、などと言い出すんじゃないだろうな」
ありそうな考えに詠は眉をひそめた。己の気紛れさはよくわかっているのだ。

——さっさと帰ってくればいいものを。

ぼそりと呟いた詠は、彩華と合流すべくミラーハウスの出口を探した。

鏡の月 終章

遊園地の外れ。

アトラクション類から離れた木々の生い茂る場所で、彩華はひとり術の行使をしていた。

ここからは確認できないが、そろそろ月蝕が始まる頃だろう。だが彩華には自身の力の減少は感じられなかった。以前よりも少しは成長したようだ。

彩華は一步引いて相手の出方をうかがった。

来園者はパレードやアトラクションに夢中になっているから、中心部からかなり離れたここでの作業は他人には気づかれにくい。

長年の間に綻びが生じてしまった園内に張つてある結界は、昼間のうちに直しておいた。これで園外からの侵入はほとんど防げる。

問題があるとすれば、よほど強い異形が目をつけて侵入を試みるか、来園者が喧嘩などして負の力が働いてしまったときだ。中で陰の気が発生すると、それは外へ放出できない。術者の張る結界は大半が外からの侵入を防ぐか、すでに中にいる霊体を外へ出さないようにすることしかできないのだ。

厄介であるが、幸いここは森気が満ちているからさほど問題は起きないはずだ。邪悪なモノは少しずつ浄化されるだろう。

彩華の霊力が妖をなぎ倒した。

「あと、一匹」

術の行使は疲れる。

ぜいぜいと息を切らして、彩華は残った妖を見据えた。

最後に残った妖はなかなか手強かった。結界の中だというのに弱まる気配が感じられない。彩華は顎をひいて腹に力をこめた。

——ぐう、と唐突に腹の音が鳴った。

僅かに顔を赤らめて自身の腹を抑える。

彩華の様子に、目の前の妖は首をかしげるような仕草をした。相

手が人であつたなら、今の音はなんでしょう？　とでも言いそうだが、あと少しというところで気が緩むなんて。

自分自身を叱咤した彩華は妖に向き直った。

「……さつさと終わらせなきゃ」

詠と別れて仕事を開始したのは太陽が完全に沈む少し前だ。見落としてはないようにゆっくり園内を回っていたから、あれから二時間はゆうに経過しているはず。そろそろ夕飯の時間帯だ。昼間買い食いをしていたとはいえ、術を使えばそんなものは早々に消化してしまふ。

詠のことだから、あちらはすでに終了しているだろう。この程度の弱い妖に手間取っているなんて自分でも情けないと彩華は思う。すべて済ませて彼と合流したら、閉園時間まで遊び倒す。

次にいつ遊びに来れるのかわからないのだ。そのためには今するべきことを早く終わらせなければならない。

「地縛^{ちはく}」

気合を入れ直して言霊を紡ぐ。それと同時に起きた強い重力を、足に力を入れてやり過ごす。

青白い光を放ちながら霊力の縄が地面から生えた。それが妖をがんじがらめに縛りあげると、咆哮のような金切り声があがった。

鼓膜が圧迫されて彩華は痛みに眉をよせるが、間髪入れずに次の術を繰り出した。

「臨める兵　闘う者　皆　陣烈れて　前に在り」

霊力の刃となったそれが、命を削り取るために妖に直撃する。

ぎゃあぎゃああと騒ぎたてる妖の声は思ってた以上に大きかった。

彩華はぎくりとして一瞬動きを止めたが、続けざま術を繰り出す。

妖の腹のあたりから下を消滅させると、刃は雲散霧消した。

ほっとする間もなく次の術を叩きこむ。だが妖の命を削ることはできなかった。

火事場の馬鹿力とでもいうように、妖が自身を縛りあげている縄を引きちぎったのだ。その勢いのまま彩華の放った霊力の刃を弾き

飛ばす。

咄嗟に防御の壁を作り出して衝撃を殺すが受け止めきれずに後退する。窪んだ地面に足を取られて彩華はバランスを崩した。

「——っ」

来ると思った強い衝撃はなかった。

たたらを踏んだ彩華の身体を、男の腕が優しく抱きとめた。

こうして助けてくれるのはひとりしかいない。彩華は確信していた。

反撃を受けた痛みにも薄く閉じていた目を開く。

「ありが……」

そうして驚きに目を見張った。

「このあいだの！」

「なんだ。オレだってわかってくれたのか？」

あの夜に彩華が一度だけ会った、詠と同じ顔と神気を持つ男が嬉しそうに笑う。

彩華を横抱きの状態で抱え直すとそのまま腰を屈めた。

「わかるわよ」

瓜二つだと思っていたが、よくよく見ればこの男の方が目つきが僅かに鋭い。身に纏う気が僅かに険しい。詠も荒々しい部分があるのだが、あちらは滅多に見せない、嵐に似た雰囲気はこの男は常に醸しだしている。

「……月詠の関係じゃなければ、さっさと逃げ出してるわ」

「ふうん」

軽い口調で答えながらも、妖を見据える男の鋭い視線が緩まることはない。

液体が粘っているような耳障りな音に気づいた彩華は首を巡らせた。

下半身を失った妖はしぶとく腕だけで移動していた。ずるずると這う音をたてながら、彼女たちへと向かってくる。下腹部から流れ出る妖の体液が、暗闇の中でもはっきりと見て取れる。

気味の悪い光景に彩華は顔をしかめた。

「いい加減に放してよ。これじゃ仕事にならないじゃない」

「はいはい。遊びはこのくらいにしておきますよ、と。じゃあ……さっさと去^いね」

有無を言わさぬ命令口調だった。その一言で妖はおろか、草を汚していた体液すらも瞬く間に浄化する。

「——はい終わり」

言い終わるや否や、男は彩華の顔に唇をよせた。

「ちょ……」

彩華の額に、目元に、優しく唇を落とした。

がっしりと身体に腕を回されていて、彩華は身動きすらとれない。

「なにするのよ!」

渾身の力で押し返すと僅かに男の腕が緩んだ。

「唇は避けてやってんだから、このくらいいいだろう?」

男はやや不服そうに彩華の唇に指先を当てた。

「よくない!」

「手間賃くらいよこせ」

相手に横抱きにされたままの体勢で彩華がわめく。再度男を押し返すが、一層強く抱きしめられた彩華は、頭が真っ白になってバタバタと暴れだした。

男は彼女の気が動揺しているのを楽しんでいるのか、喉をくつくと鳴らして笑っている。

こんな状況を彼に見られたら何と言われるか。

彩華は目を尖らせて男を見ると口を開きかけた。

「……そこで何をしているのか説明してもらおうか?」

突然抑揚のない声が聞こえて身体を強張らせた。首を巡らせて見れば、声の主の視線は男にまっすぐ向かっていたのだが、彩華は自分が追い詰められた気分になる。

「んー。浮気中?」

「違う!」

のほほんとした声の後に慌てふためいた声が続いた。

男は彩華の身体を膝に抱き抱えたままだ。離れようと、彩華は自身に巻きついていてる男の片腕を両手でしっかりと掴んで力を込めたが、ぴくりとも動かない。

ふたりを――否、男を見据える詠の柳眉を逆立てた。

「そんな顔するなよ大将。……久方振りと言うか、初めましてと言うべきか……どちらがいいかな？」

「戯言をぬかすな」

ひどく静かな声音とは違い、詠の顔は不機嫌そうだ。

「そろそろ放してやれ」

「――了解」

詠が胡乱げな視線を向けると、男は涼しい顔でそれに応じた。

身体に絡まっていた腕がするりと解けたのを確認すると、彩華は安堵のため息をもらした。手や服に付着した土埃をぱたぱたと払って立ち上がる。

詠は少し離れた場所で、じっと立ち止まったままだった。

彼の元へ行った方がいいのか……と彩華が悩んでいると、詠が優雅な足取りで近づいてきた。

「全部片付いたのか？」

「うん」

術者の表情をして深く頷きながらも、彩華の内心は不安で一杯だ。誇り高い神とその靈気を写し取った存在。こうしてふたり揃うと違いがはつきりとわかる。

人が惑わされぬように闇夜を照らす柔らかい月の光が詠ならば、もうひとりとは闇夜に棲むモノを圧制する、月夜に閃く剣光だ。男の軽い口調でいくらか和らぐが、その目は常に陰しさを帯びている。

詠は眉間の皺を刻んだままだ。何を考えているのかその表情からはうかがえない。断りもなく自身の複製を作られたのだから、月詠は僅かながらも怒りを感じているだろう。たとえそれが複製自らの意志でなくてもだ。

力の差は五分五分か、本物の月詠が若干上と思われる。一触即発、なんてことにならないか。そうしたら人間の彩華に止めることなど不可能である。

手と手を取りあつて仲良く——とはいかなくても、対立せずに済む方法はないものか。

彩華の心配をよそに、ふたつの月は無言で睨みあっている。

沈黙を破ったのは漆黒を身に纏う男だった。

「偽者は消えろと言うならすぐにでも消えるが、そのときは彩に葬ってもらいたいなあ」

「……はい？」

緊張感もへつたくれもない軽い口調と内容に、彩華が間の抜けた声をあげた。

「なんでよ」

至極真面目に聞き返してみたが、にやりと笑う男を見て、やつぱり無視すればよかったと後悔する。

「そんなの、男より女の方がいいに決まってるだろう」

——心配して損したかもしれない。

彩華は脱力して深いため息をついた。横目で詠を見れば、彼は苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「冗談はそのくらいにしろ」

「まるつきり冗談って訳でもないだろう？ オレは月詠がいなければ存在しなかったんだから。生きるも死ぬも、核になった月詠次第だ。オレは要らない複製なんだからさっさと始末すればいい」

幾分か真剣な眼差しとなった男の言葉を受け、彩華は僅かに顔をひそめた。

「どうでもいいなんて思つてないよ」

眼差しを真つ直ぐ向けて彩華が言つと、男は鼻を鳴らして笑つた。「なぜそう思う？ 荒ぶる魂など常に人界にあつたら天変地異が起きかねないぞ？」

男が腕組みをしてわざとらしくため息を吐いた。お前は大馬鹿か

？ と男の目が語っている。険を帯びた眼差しは強い威圧感を発していたが、不思議と怖ろしさは感じなかった。

やっぱり根は優しいのだと、彩華は安堵の笑みを湛えた。

はつきりとは聞いていないけれど、詠も同じ気持ちだと彩華は思う。でなければ、とつくに排除しているはずだ。以前聞いたように、一度壊して流れ出た靈力を大気に溶かせばいい。方法自体は難しいことではないのだ。だが、気持ちが伴わない。自身が不快だからと排除するのでは、ただのエゴだ。

「荒ぶるって、言い換えれば気丈とか芯が強いとか……強大な生命力でしょ。生命力が衰えたら、そっちの方がよっぽど滅びが早くなると思うけど？ そりゃあ、何事も行き過ぎはまずいから、限度はあるけど」

だからいらない存在じゃない。

上手く伝わるかどきまぎしながら彩華は必死に言葉を紡いだ。

「存在する理由が欲しいなら、わたしの手伝いをしてくれるってのは？ 月詠尊と、それに準ずるひとの力が借りられるなら心強いもの」

言ってから、彩華はちよつと調子に乗りすぎたかもしれないと内心焦った。

だが彼女の真摯な思いは多少なりとも伝わったらしい。男は複雑な表情を浮かべて「だったらもう少し地上に居させてもらおうかな」と呟いた。

微笑んで頷いた彩華が視線を感じて振り向くと、同じように複雑な表情の詠と目があつた。

「なに？」

「相変わらず神遣いが荒いな、と」

言って苦笑する。その言葉には咎めの色はなかった。

「使えるものは何でも使っつわよ。でも必要以上には手は借りない。それに、度を越したら詠が止めてくれるでしょう？」

神の力に頼りすぎれば人間はあつという間に破滅に向かう。よく

わかってるし、嫌われたくはないから、いつも常識外れの言動はしないようにと心に決めているのだ。

彼に知られたらまたからかわれそうだから、と彩華はその想いは心の中に留めておくことにしたのだった。

「――そうだな」

若干困った表情の詠を見て、男は人の悪い笑みを浮かべる。

「度量が広いなあ大将は」

「大将はやめろ。諂へつらわれるのは好かん」

眉間に皺を刻んで詠が吐き捨てた。

「それじゃ主？」

「くだい」

嫌悪感を露にして詠が睨めつける。心底嫌そうな顔だ。

「詠でいい」

「構わないならそう呼ぶが」

問いかけに詠が首肯で応じると、男はどこか楽しげな笑いをその口元に浮かべた。まるで悪戯少年のようだと彩華は思う。

「――彩華。こいつに名前付けてやれ」

「わたしが？」

名前は最初の呪だ。それを人間の自分が付けてもいいのだろうか。彩華が訊ねると「むしろの方がいい」と詠が答えた。

「俺が俺を名で縛っても意味がない。？詠？という名前も先の巫女が付けたんだから」

では下手な名前はつけられない。ならば月に関係したものがいいだろう。

月の異名を頭に浮かべるが、すべてを諳そらんじるのは無理だった。思いつく限りの言葉を考えて、彩華は悩む。

「じゃあ……月影つきかげ」

やがて上目遣いにおずおずと答えた。

善の力を持った響きがいいだろうと？月の光？の別名を考えたのだった。

「そのままか」

「感性が弱いな」

ふたりの男に散々な評価をされて、彩華はややムツとした表情を見せた。

「嫌ならポチかタマ」

「……………オレが悪かった月影がいい」

彩華の迫力に負けて月影が降参のポーズをとった。そう言いながら見せた表情は楽しげだ。

つられて笑おうとして、彩華は逆に眉をよせた。吹いた風に髪を乱されて慌てて押さえる。

冷たい北風を感じて身を縮こませて、

「ねえ、いつまでもここにいないで移動しない？ 寒くなってきた」
両手を擦りあわせながら提案する。

調伏で程よく熱を帯びていた身体はとうに冷えきっている。霊力も使ったし、そろそろ暖かい室内で温かいスープでも飲みたい。

そう思った彩華は、はたと？あること？に気がついた。

同じ性質の存在がふたつ。

「……………腹減ったな」

詠の呟きに、神様にはそんなの関係ないじゃないと突っこむのも忘れて彩華は考える。

「だったらオレも食べたい。詠の記憶でしか知らないから、人間の食事って興味ある」

ああ、それも存在理由になるかもな、と。

底抜けに明るい、されど彩華にとっては不吉な響きを持つ月影の声が彼女の耳に届いた。

どうせなら一生気づかなかった方が幸せだったかもしれない。

「昼はパン食だったから夜は米が食べたいぞ」

「ふうん？ オレはどこでもいいけれど……………ここはどうだ？」

どこから取り出したのか、月影は遊園地の案内図を手にしていた。詠は地図を覗きこんで何やら思い巡らせているようだ。

こちらも術を使ったおかげでお腹が空いている。だからまず食事に行くのは大賛成なのだ。だがかし。

「……大食いな居候がひとり増えた……」

彩華の呟きはふたりの男には届かなかっただけ。これからどうするのかの意見交換が続いている。

そのやりとりをちらりと見ると、彩華はふたりにはわからないように小さくため息をついた。

——いつか友人に言った何気ない言葉が現実となってしまった。

言霊の力を侮るなかれ。

澄んだ夜空を見上げながら、彩華はひとり後悔していたのであった――。

- 終 -

天の盃 序章

今夜はやけに静かだ、と少女は思った。

夜道を一人の少女が歩いている。足音だけがやけに夜道に響く。

彼女は不安げに眉をひそめた。

まだそれほど遅い時間ではないというのに、どうしてこんなに心細いのか……。

ところどころ民家の明かりが点いているのに人の気配は感じられない。

少女は自身の不安を誤魔化すようにきつく手を握り締める。力をこめすぎたせいで手のひらに爪が食いこむ。しかし彼女はそれにも気づかないのか、さらに力を入れた。そうでもしなければ恐怖で足が竦みそうだったのだ。

腕時計を見れば、午後八時を過ぎたばかりだ。マンションや一軒家がひしめきあっているこの道は、駅前ほどではないが普段はもう少し活気づいている。

なのに、今は彼女以外はいない。今夜に限って彼女以外誰もいない。深夜ならまだしも、通常の帰宅時間に人氣がまったくない。自動車も、一台も走っていない。

少女の歩く道だけが異空間に取り込まれたかのようなのだ。

月のない夜はこんなにも暗く感じただろうか……？

空は黒く厚い雲で覆われていて、今にも泣き出しそうに見える。

まるで今の自分の心のようだと彼女は思った。

風に木々がざわめいてびくりと肩を揺らす。

ただの風だ。ほっとして小さくため息をついた。これなら、誰か知らない人間につけられている方が、人影が見える分よっぽどマシだ。

強がりを言いながらも足を止めることはない。

風が止むと耳が痛くなるような静寂が辺りを包んだ。コツコツと

彼女の靴音だけが響く。

普段通る道なのに――ひっそりと静まりかえったこの場所は、昼間も夜間も何度も通っているというのに別の場所を感じる。

自分自身を守るかのように身を縮こませて、彼女はひたすら歩く。

「……」

背後から何かが這うような音が聞こえた気がして足を止める。

気のせい……だよね……？

少女は注意深く辺りを見回した。街灯に照らされた自分と、自分の影しか見あたらない。

きつと、体調が悪いから心細く感じるんだ。朝から喉が痛かったから、風邪でもひいたんだろう。暖かい布団に包まれて朝までぐっすり眠れば、この不安な気持ちも解消されるはずだ。

コートの前合わせをぎゅっと握り締めて帰路を急ぐ。

急に呼び止められた気がして足を止めたけど……気のせいだったようだ。人の気配がないのに声がするはずがない。さっきのは空耳に違いない。やっぱりわたし疲れているんだ。

少女は心の中で呟いた。

大会が近いからしばらく部活は休めないのだ。困ったように眉をひそめ、少女は少しでも歩みを遅くした。貧血でも起こして人気のないここで倒れてしまうのは嫌だと思ったのだ。

誰も通りかからずここで凍死なんて洒落にならない。

その姿を想像して少しだけ笑う。

彼女の立てる靴の音だけが夜道に響いている。

だが、それは間違いであった。もしも術者がこの場にいたならば、それ以外に聞こえた音は空耳でない、と助言があっただろう。しかし人々を闇から守る術者は今ここにはいない。

最寄り駅から彼女がいつも使う通勤路は、自動車も走る大通りだ。歩道には街灯が一定間隔で設置されており、真夜中でも決して視界は悪くはない。なのに、今はほんの一メートル先でさえまともに見ることができない。

彼女に靈感というものが備わっていたならば、あるいは、もう少し注意深い性格だったのなら、この道の異変に気づけたはずだった。時すでに遅し。

少しずつ少しずつ――闇に棲むモノの術に嵌っているとは思いません。少女は暗闇の奥へと進んでゆく。

ふいに、しゅるりと風を切る音がして、少女は首をかしげた。今のはなんだろう？ 風が吹いた様子はなかったのに……。

生温い風に頬を撫でられ、背筋に悪寒が走るのを感じた。その瞬間、自分の意思とは関係なしに足が止まる。

「――？」

くいくい、と足が引つ張られるのを感じて足元を見た。

――暗くてよく見えないが、これは縄だろうか。自身の腕と同じくらいの太い縄らしきものが足首に巻きついていてる。

「なに、これ……」

少女は屈んでそれを取り去ろうとしたが、できなかった。両の手首にも巻きついた縄が、彼女の動きを阻んでいたのだ。

僅かな身じろぎすらできない。

「や……」

高くあげようとした悲鳴は阻まれた。唯一自由に動く眼球を必死に動かして横を見やった。

背後から伸びてきた太い縄が、自身の口を塞ぐように絡まっている。鼻から下顎のあたりにかけて何かが巻きついていてる感覚がある。

「っ……ぐ……」

ぞつとするほど冷たい靈気を放つモノが背後から近づいてくるような気がした。

人ならざるモノが段々と近づいてくる――。

逃げ出すこともその場に座ることも叶わずに、恐怖に身を硬くしてガタガタと身体を震わせるだけだ。

首にも優しく巻きつかれて、知らず目尻から涙が零れ落ちた。すぐ傍にいると思われるモノからは人の気配が感じられない。

嫌。

誰か。

誰か助けて――。

みつともなく泣きながら、助けを呼ぼうと少女はありつたけの声を張りあげる。だが。

悲鳴はくぐもった呻き声に留まった。

首筋に針が刺さったような刺激を感じた少女の身体がびくりと痙攣する。

不思議と痛みはなかった。しかし、得体の知れない何かが血を吸っている感覚に恐怖を覚えて、彼女はがたがたと震えあがった。いつそのこと気を失ってしまえば楽になれるのに……。

恐怖に染まりきった彼女の心は、意識を手放すことを許しはしなかった。

どうして自分がこんな目にあうのかわからない。いつも通り、部活動に精を出していただけだ。

どうしてどうして――。

やがて考えることもできなくなった彼女の両腕がだらりと垂れ下がる。

焦点のあわない虚ろな目には何も映ってはいない。

少女に更にきつく巻きつこうとしたソレは、だができなかった。

鎌に似た白刃が、縄とおぼしきモノを切り裂き赤い液体が噴出する。街灯に照らされて鋭く光る刃は、やがて虚空へと消え去った。

直後、青白い炎がソレの一部を焼き払う。

思いも寄らなかったのか、ソレはずるずると這いながら後退してゆく。暗闇の中で一度がたと音がしたが、後には何も聞こえない。支えがなくなった少女は鈍い音をたてて地面に落ちた。すでに気を失っていて、身じろぎひとつしない。街灯に照らされた顔は青白く、まるで血の通っていない人形のような。

実際近づいてよく見なければ、捨てられた粗大ゴミか何かだと思っただろう。現に自動車は気づかず走り去っていった。

街灯に照らされた小さな生物の影が少女に近づき鼻を鳴らす。

黒猫だ。

柔らかい肢体を少女に摺り寄せて、まだ息があることに気づくと安堵の息をつく。

首をかしげるような仕草をした黒猫は、背後から聞こえてきた音に反応して振り返る。そうして舌打ちする。

周辺に張り詰めていた暗闇と静寂を打ち消すかのような足音だ。規則的ではなく、よたよた、よろよろと表現できそうな心もとない歩き方だ。

歩道の右端から左端を往復するように、千鳥足で男が歩いてくる。仕事帰りのサラリーマンだろうか。スーツ姿のその男の顔は赤く、上機嫌で鼻歌を歌っている。

しばらく動かないでいた黒猫は、にやあと一度大きな声で鳴くとその身を闇に紛れさせた。

異変に気がつき、男は歌をやめた。飲酒でぼやけている目を必死に凝らして数メートル先をじっと見つめる。人が倒れているのを認識すると、男は恐る恐る近づいて倒れている少女に大丈夫かと声をかけた。

反応はなかった。

身を屈めて強く肩を揺すった拍子に、うつ伏せになっていた少女の身体が反転した。

ひっ、と男の口から悲鳴が洩れる。

少女の首筋にある小さな穴からは少しずつ血が流れていた。地面に広がっていた血だまりのせいで少女の半身が薄汚れている。

恐怖に凍りついた表情を浮かべて尻餅をつきながら、男は後ずさりする。

人気のなかった大通りに悲鳴が響いた。

ねえ、知ってる？ 『天の盃』って。

えーなに？ それ？

お皿状態で空に浮かんでる三日月にお願い事すると願い事が叶うってやつ。

ああ。それって『受け皿の月』って名前じゃなかった？ こう…

…細い三日月の膨らんでる部分が下になってるのでしょ？ 月の形がお皿みたいに見えるから『受け皿の月』って。

うんそうそう。でもそれはただのおまじない。私が言ってるのは都市伝説。

えー。

その、月のおまじない。普通に試すのは問題ないんだけど、都市伝説の『天の盃』は、実は妖怪が月に化けてて、お願い事をしたひとを狙って食べちゃうんだって。

ふうん。

でね。——その話を知っちゃっても駄目なんだって。

ちよつとお……それじゃわたしが死んじゃうじゃん。やめてよお。

ごめんごめん。でも妖怪を退けるおまじないもあって、それが『かけまくもかしこきつきゆみのみこと』は、じょうげんのおおぞらをつかさどりたまふ』って。唱えると月の使者が助けてくれるって話。月の使者あ？ それって神様の眷属ってやつ？ 変なの！。

どうせ噂でしょー。聞いたら死んじゃう都市伝説なんてよくあるじゃない。現に私は平気だしー。

天の盃 一

国際空港の喧騒が一瞬静まり返った。

颯爽と歩くふたり連れに、人々は好奇心の目を向ける。

特に皆の目を引いているのは女だ。

手入れの行き届いた髪は金色。彼女の背中に流れる巻き髪が、蜂蜜のごとく艶やかな光を放ちながら、歩くたび優雅に揺れている。

肌は白くなめらかで、血色の良い唇は可憐な花のようだ。

その横を歩く男は彼女の従者らしく、ひとりで荷物を運んでいる。こちらは茶色い髪に青い瞳が印象的で、女に負けず劣らずの端正な顔立ちをしていた。

長期の旅行なのか荷物が多い。しかし男は苦にも感じないのか、その顔には疲労の色はない。

『エリーザ、あちらです』

ラインヴァルトは反対方向へ行きかけた連れの女を呼び止めた。振り向いた拍子に落ちたエリーザベートの帽子を拾いあげ、軽く埃を払ってから彼女に被せる。

『ありがとう』

礼を言いながら男の目を見つめてにつこりと微笑んだ。

見目麗しい男女の組みあわせに、ふたりを見た者はため息を洩らした。海外のモデルかと囁きあう声が空港内に広がった。

『変装した方が良かったかしら？』

噂話に気分を害した風はなく、純粹に疑問を口にした。

『無意味でしょうね。あなたはたとえボロ布を頭から被っていても目立ちますから』

ラインヴァルトの言葉に不思議そうな顔をして、エリーザベートは口元を緩ませた。布を被った自身の姿を想像したらしい。

『……その格好は逆効果じゃない？』

目立たないようにするのにそれでは意味がない、とエリーザベート

は薄茶の瞳を細めて笑う。

『そのような格好をあなたにさせるつもりは毛頭ありませんが……視線が気になるのでしたら、術でもかけますか?』

自分たちの姿を変えることはできないが、周囲の興味を逸らせることは可能なのだ。

ラインヴァルトが提案すると、エリザベートはしばし思案してから首を横に振った。

『いいわ。面倒なもの。それに目立ちたくはないし』

この土地の異能力者に自分たちの存在を知らせる気はない。

別に戦争を仕掛けるつもりで日本へ来たのではないのだから、そこそ隠れる必要はないのだが、余所者の上陸が気に入らない者たちも少なからずいるだろう。

『せっかく気配を隠しているのだから、わざわざ存在を明かすこともないわ』

ほんの僅かでも術を使えば、力ある者ならば気づくはず。

『それもそうですね』

ラインヴァルトは彼女の答えに同意して歩みを進めた。

『……エリーザ? どうしました?』

エリザベートが立ち止まったのに気がついて振り返る。彼女は空港の案内図を見ていた。

おそらくレストランフロアを見ているのだろうと、ラインヴァルトは苦笑する。

『——時間がありますから、休憩しましょうか。長旅で疲れたでし
よう?』

懐中時計で時刻を確認すると飲食店を向いたままのエリザベートに尋ねる。

『うん』

笑顔で頷く姿がまるで子供のようだ、とラインヴァルトは笑みをこぼした。

彼女を促してエスカレーターで上階へとあがると飲食店の自動ド

アをくぐる。その後にエリザベートが続いた。

『紅茶でいいですか？』

青年の問いに頷くことで答えると、エリザベートは店内を見回した。

「ホットの紅茶とコーヒーをひとつずつ。……あと、ロールケーキをひとつください」

流暢な日本語で注文する青年に一瞬見惚れて固まった店員が、アルバイト仲間に急ぎ立てられて慌てて動き出した。それを笑顔で受け流すと、ラインヴァルトは横に立っているエリザベートへと顔を向けた。

『先に座っててください』

『ここで待ってるわ。あなたがいくら力持ちでも、スーッケースとトレイは持ちにくいでしょう？』

青年の足元にはスーッケースとボストンバッグが置いてある。対する女は何も持っていない。

「お待たせいたしました」

エリザベートが青年より先にトレイを受け取って店員に微笑した。

「ありがとう」

彼女も綺麗な発音の日本語だった。

『こっちでいい？』

囁きあう客たちには目もくれず、エリザベートはまっすぐ窓際の席へと歩いてゆく。

ガラス張りの店内からは人々の流れがよく見える。店の反対側に目を向けると、さまざまなショップが立ち並んでおり、出立前の旅客たちが買い物をしていた。

その様子を眺めながらエリザベートは紅茶のカップに口をつける。『食べないの？』

プラスチックのフォークに手を伸ばしながら訊ねるでもなく言うと、真向かいに座る青年が頷いた。

『ええ』

ケーキを口に運ぶ彼女の顔はとても嬉しそうな表情だ。大半の女性と子供は甘い物が好き、というのはあながち間違いではないと、ラインヴァルトは改めて思う。

チエーンストアーのケーキだから味はそこそくだろうと彼は思っていたが、彼女はどうかやら気に入ったようだ。

『食べる？』

言って、エリザベートがフォークに一口大のケーキを刺して青年の前に差し出す。何の躊躇もなくラインヴァルトはゆっくりと唇を寄せてそれを頬張った。数回租借して飲みこむ様子を見て、エリザベートが微笑む。

『おいしい？』

『はい』

青年は物柔らかな表情を変えることなく頷く。逆に店内にいた数名の目撃者たちの方が照れて顔を赤くしていた。それに気づいているのか、それともわざとなのか、エリザベートがふたたびケーキを差し出した。

『もう十分ですよ。あとはエリーザが食べてください』

微笑みながらラインヴァルトはカップに口をつける。元々彼はコーヒーだけのつもりだったのだ。

『足りなければもうひとつ買ってください』

『……そんなに食いしん坊じゃないわ』

少し頬を膨らませて心外だとばかりに睨むエリザベートに、彼は素知らぬ顔をして『そうですか？』と一言呟いた。

男の一言に含まれる意味に気づいたエリザベートは、ムツとしながらも食欲が勝って、目の前のロールケーキにフォークをつきたてる。その手が突然ぴたりと止まった。

『エリーザ？』

様子がおかしいエリザベートに声をかけるが、彼女は黙ったままだ。まるで何かを探るような、確かめるような。そんな目をしている。

『気になることでも?』

重ねて尋ねると、彼女は小首をかしげて遠くを見るような仕草をして、

『……ヴァンピール、の気配がね』

声をひそめて言った。だが自分たちの周りには今は誰もいなく、外国語を理解する者もないだろうからとエリザベートは声を元の大きさに戻した。

『ここではないけれど。気配がするの』

ヴァンピール。ドイツ語で吸血鬼を表す。

『日本にですか?』

まさか、とラインヴァルトが呟いた。

血を好む異形は日本にも存在するだろうか? 吸血鬼? と言うからには己の良く知っているモノを指しているのだろう。ラインヴァルトは意識を張り巡らせたが、彼にはわからなかった。

しばし考えて彼女は首を横に振る。

『アレに近づけばあなたにも感知できるでしょうね。ここからは少し遠すぎる』

ラインヴァルトはふたたび意識を集中してみるが、やはり彼には感知できなかった。

『どうしますか?』

『そうねえ……放っておく訳にはいかないかな』

とはいうものの、観光目的でこの地へ来たのだ。それに余所者があえてでしゃばる必要も、ないと思う。

これも縁かもしれないけれど……とエリザベートが唸った。巻き髪を人差し指に絡めて弄りながら考える。

『少し様子を見ましよう。休暇のつもりで日本へ来たのだし、観光できないのは嫌だもの』

この地の異能力者たちの目をかいくぐって異形を始末するなど彼女には容易い。そうしたくないのは、今回ここへ来たのが単に観光目的だからだ。

『久しぶりの日本なんだからゆつくりしたいわ』

緩慢な動作で頬杖をついてばやく。

『……エリーザは日本へ来たことがあったんですか』

『一度ね。あの頃は船を乗り継がなくてはならなかったから、かなり時間がかかったのよ。航海も悪くはないけれど、今は飛行機があるからあの頃よりも便利になったわね。景色は変わってしまったところもあるけれど、そのまま残っている風景もあるし、とても楽しみにしていたの』

過去を思い出して懐かしむようにエリザベートが笑む。

『そう、ですか……』

ラインヴァルトは困惑したように言葉を濁した。

『なあに？』

彼の眉が寄せられたのに気づき、エリザベートが問い返す。

ラインヴァルトは表情を変えぬまま視線を彼女から外して、ぼそりと一言洩らした。

『……誰かと一緒だったのですか？』

青年の言葉にエリザベートは一瞬不思議そうな顔をして、それからぷつと吹きだした。

『もちろんひとりよ。誰かを傍に置こうなんて思わなかったもの。後にも先にもあなた以外と暮らす気はないわ』

だから安心しなさいと言外に言われたラインヴァルトは、ほんのりと赤くなっている頬を隠すために顔を背けた。無表情を装っているようだが、内心は嬉しいようだ。

見た目のわりに幼い行動をする青年に、エリザベートはころころと喉を鳴らすと何気なく窓の外に目を向けた。そうして、凍りついたように動きを止める。

『エリーザ？』

何を思っているのか、一点に視線を定めたまま微動だにしないエリザベートへ声をかける。穏やかな光を湛えていた瞳に、冷たい焰が宿っている。

同じ方向へ目を向けると、幼い子供が危なげに走っていた。親に叱られ足を止めるが、顔は笑ったままだ。

『……子供は嫌いよ。脆いから』

そう言っただけで痛ましげに目を細める彼女を、ラインヴァルトは黙って見つめることしかできなかった。

『それは』

ラインヴァルトはそこで一旦躊躇して言葉を切る。それから幾分か言いづらそうに続けた。

『私の前に出会ったという人間の少女のことですか？』

エリザベートは答えない。身じろぎもせずに自身の手に目を落としている。

『そうね……』

それだけ言っただけで痛ましげに表情を翳らせる。自身の魂に刻まれた赤い色が、彼女の脳裏に浮かびあがった。

人間は決して入らないはずの深い森に供えられた血まみれの幼い少女。

？吸血鬼の贄？となった者は死から逃れることはできない。

たとえ化け物の気まぐれで見逃して貰えたとしてもだ。

『心の闇は、新たな化け物を生み出す』

『エリーザ？』

ラインヴァルトが聞き返すが、独り言だったらしい。エリザベートはそれ以上言葉を発さず目を閉じて——すぐに開けた。

光の加減で金と見紛う色をその双眸に宿らせて、エリザベートは遠くを見据えるように目を細める。

彼女の様子に、ラインヴァルトは背筋にひやりとした緊張感を覚えた。気が遠くなるほどの月日を彼女と共に過ごしているというのに、いつまでも慣れないでいる。人を畏怖させる力に圧倒されて、ラインヴァルトは身を強張らせた。

『——そろそろ行きましようか。アレのいるあたりを通りかかれば、どうするべきか判断もつくと思うしね』

つい先ほどまでの激情が嘘のように、エリザベートは穏やかに微笑んだ。

天の盃 二

「えーっと……次は、何……？」

緋袴に白衣姿で足早に歩き回っているのは、月詠神社の巫女兼外法師の高村彩華であった。

僅かに目線を落として考え事をしているため注意が散漫となっている。が、どういう仕掛けを施しているのか、彩華は何かにつかつたりすることはなかった。

境内を気まぐれに歩く野良猫が彼女の足元に近づくが、うっかり蹴ることもなくそれを無意識に跨ぐ。参拝者とすれ違う際には歩みを止めて、にこやかに挨拶もする。端から見れば、彼女が半ば意識を飛ばしているとは考えつかないだろう。

「このあと祈祷入ってたんだっけ……？」

立ち止まり呟いた。そうしてしばし思案する。今日は少し早めに昼休憩を取ったほうがいいかもしれない。

一度授与所に立ち寄り巫女長と話をする、彩華は同じ敷地内の自宅へと向かう。

今日は珍しく忙しい日で彩華は目が回りそうだった。少しでも気を抜いたら、そのまま深い眠りの海へと沈んでしまいそうだと独りごちる。彩華は両頬を何度か叩いて気合を入れ直し、足取り早く進んでいった。

少々思考を飛ばしていても、脱いだ草履をきちんと揃えることは忘れない。長年染みついた行動パターンは、そう簡単には崩れないもののだろう。

たとえ妖の群れに襲われても一瞬の間に戦闘態勢に入る自身が彩華にはある。だが対峙する相手が数段上だった場合は別だ。気配も殺意も綺麗に消されてはまったく歯が立たない。だから彼女は、廊下を曲がった先に気配を殺して待機している者がいるとは思ってもよらなかった。

「——っ！」

足払いされ彩華は前につんのめった。襟元を掴まれて転倒は免れたものの、苦しげに息を洩らす。

「……なにするのよ」

「ボケっとして歩いていたら指導だ」

背後にいる男の表情はわからなかったが、おそらくやれやれといった風に肩を竦めているのだろうと彩華は思った。

「だからってわざと転ばすことないじゃない！」

「支えたんだから転んでないだろ」

「そいつのを屁理屈って言うのよっ」

転んで怪我したらどうしてくれるのか。第一、やんちゃな子供の頃ならまだしも、成人した今はこんな風にされる謂れはないのだ。

ぼんやりしていた自分のことは棚に上げて、彩華は後ろにいる男に声を張りあげた。さながら首根っこを掴まれて牙を剥く仔猫のようだ。

「——兄貴、本当に苦しい……」

白衣の合わせに喉仏のあたりを圧迫されて、彩華は呻き、苦しげにもがいた。目に涙が滲んでいる。

そんな彼女を見て、眼鏡をかけた男はすまなそうな表情を作る。

「ああ……悪い」

高村朔也たかくやは彼女の肩に手をかけると軽く後ろへ引つ張った。

咳きこみながらも朔也の手を借りて体勢を整え、服装を整えると、彩華はやや不満げに口を開く。

「たまに帰ってきたかと思えば人を虐待して」

「虐待じゃないだろう。指導だ」

「ふつーに指導してくれるなら、ありがたく受け取るんですがね、おにーさま？」

じろりと睨めつけるように見上げるが、朔也は別段気にする素振もない。その落ち着いた態度がやや癪に障るが仕方がないと思い、彩華はため息をつく。こちらが本気になって怒れば怒るだけ、この

兄に勝てる術はなくなるのだ。昔から。

今ここに詠^{えい}がいなくて良かったと彩華は少しだけほっとする。彼までいたらますます追い詰められたに違いない。成人してから朔也は忙しく、朝早くから夜遅くまで仕事をしている印象が強い。この家で顔をあわせることも以前より少なくなった。なのに、何故かふたりは仲が良いのだ。詠が人間だったなら？学生時代の悪友？と言ってもよいのかもしれない。

「今日は休みなの？」

朔也はセーターとスラックスというラフな格好をしている。ここへ立ち寄ることがあっても、仕事巾着ならばスーツに身を固めているはずだ。

「ああ。忙しそうだな」

「まあね。休めで暇なら手伝って」

視線が目元にできたクマに向けられている気がして、彩華はごまかすように瞬きを繰り返した。

「断る——と言いたところだが、今日は人手が少ないか。——その前に時間あるか？」

「うん。お昼食べながらでもいい？」

これで昼を食べ損ねたら本当に倒れそうだ。

彩華の訴えに朔也は軽く苦笑すると足をダイニングキッチンへと歩かせた。

「詠は留守か？」

二人分の緑茶を淹れながら朔也が訊ねた。飲むと言われなくても相手の分も淹れるのは高村家の暗黙の了解である。

「そう。あっちの仕事。兄貴は昼ご飯いらない？」

事情を知らない者は自宅まで来ることは滅多にない。しかし念のためと思えばかして答える。どこで誰が聞いているかわからないのだ。迂闊なことは言えない。

「今はいい。……そうか。詠にも意見を聞きたかったんだが」

「それって妖関係？」

いくら人間界が長いと言っても、詠に質問ならば調伏関連だろう。一瞬、別のこともかもしれないと考えたが、すぐに違うと思い直す。朔也は至極真面目な顔をしている。仕事の話が濃厚であろう。

彩華は昼食をいつもの定位置に並べると、朔也の前にはウサギ型に剥いたりんごの皿を置いた。食後に食べようかと思いい剥いたものだ。彼が食べなければ自分で食べるか、本殿にいるであろう彼らへ持って行くつもりだ。

「ああ……サンキュ」

「わたしに話つて、詠に聞くのと同じなの？」

席に着くと同時に訊ねると、朔也は少し歯切れ悪く返事をする。

「食事中にする話じゃないからな。それはあとでいい。別件もあって……」

そう言いながらも話を続ける様子はない。彩華は食事を続けながら待つが、朔也も黙ったままりんごを口に運んでいる。

そのまま沈黙が続いた。

先に痺れを切らしたのは彩華だった。

「なに？ 別件って」

「……その、なんだ。うまくやってるのか？」

「……なにが？」

意味がわからないといった風の表情を浮かべて訊ね返した。いつもはお堅い教師のような雰囲気醸しだしているというのに、妙にすつきりしない喋り方だ。

その後も沈黙が続き、彩華はひとまず無視して食べ続ける。

食事が終わる頃を見計らっていたのか、やがて朔也が口を開いた。

「詠と……うまくやっているのか？」

「うまくつて、仲良くつて意味でいいの？ だったらイエスだけど」突然の質問に少々面食らうものの素直に答える。時々喧嘩することとはあっても円満な関係と言ってもいいはずだ。

不思議そうな面持ちで彩華が首をかしげる。朔也はというと、明らかにほっとしたような素振りを見せている。

「それが何か問題あるの？」

再度訊ねるものの相手からの答えはない。――が、やがて朔也は少しためらいがちに口を開いた。

「いくら古の約束事とはいえ――お前の意思関係なく決められた？ 婚姻？ だからな。嫌ならどうにか方法を探すぞ……今更だが」

「あー……うん……」

合点がいつて、彩華は苦笑する。

「嫌って気持ちはまったくないんだよ。子供の頃から」

目を伏せて、少し迷ってから言葉を紡ぐ。

「臨海学校とか修学旅行でさ、夜みんなで恋の話とかしなかった？

何組の誰々が好き、とか」

懐かしい思い出に彩華は顔を綻ばせた。

消灯時間が過ぎても友達と声をひそめて喋りあうなど、大人になった今はもう体験できない。

「それで、相手がいるって言うのも面倒なことになるだろうなって子供ながらに考えて、誤魔化したのね。特に好きな男の子もいなかったし。でも、後で好きになる人ができたらどうしようかって思ってた詠に……」

「聞いたのか？」

朔也の顔がほんの少し険しくなる。その様子に彩華は困ったように片眉を上げて頷いた。

「うん。他に好きな人ができたって言ったらどうするの？ って聞いたら『人の心を変えることはできないから、そのときはすぐに言え』って」

優しい声音でそう言った彼の寂しげな表情は今も忘れられない。

優しく自分の頬に触れた指の温かさも忘れられない。

言いながら思い出した彩華は顔を歪ませる。知らず潤む目を瞬きでやり過ごすにつこりと笑った。

朔也は目を見張って彼女の言葉を聞いている。ふたりの間でそんなやりとりがあったとは思わなかったのだろう。

「そういう人だからずっと一緒にいるって決めたんだ。彼が『ふざけるな』って言うような悪神だったら、親に泣かれようが勘当されようが、どうにかして縁切ったと思う。古の約束だからって情性で一緒にいるんじゃないもの。だから安心して」

彩華は重い空気に耐えられず、いざとなったら京都に縁切り神社もあるしねー、と明るく茶化して笑う。そうして、話は終わったと言わんばかりに湯飲みを手にする。

「わかった……じゃあこの話はもう終いだ」

彼なりに色々と悩んでいたのだろう。ややあつて、吹っ切れたような顔をした朔也に、今度は彩華が質問する。

「わたしのことより兄貴はどーなのよ。神社継いでもらわなきゃならないんだから。わたしは無理なんだからね」

第一子、第二子というのは関係ない。術者としての素質が強い方が継ぐということでもない。高村家の場合は子孫を残せるかどうか。ただこの一点になる。

神と人では子は生^なせないのだ。

言葉にせずとも彩華の言いたいことは伝わったらしい。朔也は苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「余計なお世話だ」

「女の子だったらやっぱり巫女さんだよねー」

まだ見ぬ縁者に思いを馳せているのか、彩華の目はきらきらと輝いている。

その顔を一瞥し、朔也がふん、と鼻を鳴らす。

「彩華おばちゃんか」

言いつつ人の悪い余裕の笑みを浮かべた。

彩華は口角をあげた朔也を上目遣いに睨む。

「——あつてるけど、人に言われるとむっかつく」

彩華は頬を膨らませて不快だと主張する。だが男は気にならないのか平然としていた。

「なに。人は誰しも年をとる」

「そうね——。兄貴、もう一つの話って？ 時間ないや」

壁時計を確認すると、そろそろ仕事に戻らねばならない時間だった。今日は忙しいというのにいつまでも油を売っている訳にはいかない。

「ああ」

はっとしたように我に返ると、朔也はやや声音を落として言った。

「……最近、妖怪の話を聞いたか？」

「妖怪？」

彩華は相手の言葉をオウム返しにして首をかしげる。こここの調伏の仕事は請けていなかった。

記憶を辿ってみたものの、該当しそうなものはない。調伏退治の話がないから異変がない、とは言い切れないのだが、最近はこれといった話はなかったと彩華は思う。

外法師などという生業をしていると、不思議な出来事の話はよく耳にする。月詠神社で働く巫女たちはそういった話が好きなのか、外法師の潤滑を考えているのか、彩華に怪異話をすることが多い。もちろん中には子供騙しなよもやま話もある。

「何のことかわからないや。事件あったの？」

朔也はいずれこの月詠神社を継ぐことになるのだが、今は出向という形で勉強も兼ねて国家機関の手伝いをしている。担当は主に怪奇現象の類だ。

問いかけに首肯した朔也がため息を洩らした。

注意深く彼の顔を見れば、目の下が少し窪んでいる。捜査が思うように進んでいないらしい。

表沙汰になっていないだけで妖異や怪異は結構ある。他にも被害を受けた本人がそうと感じなければ、気づかずにそのままになってしまうのだ。

「まだ公にしていないからな。隠密裏に処理できるなら騒ぎにしたくない」

この世に起こる不思議な出来事——特に妖異は、信じない者は一

切信しない。信じる信じないは個人の自由であるが、科学的に証明できない怪奇現象もある。だからといって、事をむやみやたらに荒立てるのはよくないだろう。

場合によっては知らない方が心穏やかに過ごせるのだ。

なにより現代は夜でも明るすぎなのだ。活動場所も限られてしまい、妖たちは隅に追いやられる。

中には現代に対応した妖もいるのだろうが、大抵は弱くなっているのだ。だが妖も長い年月を経て知能をつけているのか、ほとんどのモノは自分たちが消されないようにひっそりと暮らしている。

そうして、厄介なのは寧ろ妖怪ではなく人間だ。心に巣くった闇――恨みや悲しみは、形となって他人に徒をなす。

朔也は眉間に皺をよせて深刻な顔をする。

「先日、女生徒が襲われたんだ。比較的人通りのある場所だったんだが、目撃者はひとりもない。首筋と両手足首に小さな穴が開いていて、被害者の血が地面に流れていた」

そこまで言うとな朔也は一旦言葉を切り、更に声をひそめて続ける。「被害者の血がな、流れた以上に少ないんだ。恐らく襲ったヤツが抜いたか、あるいは吸ったか……」

「……血を？」

彩華が身を乗り出した。膝に置いた手をぐっと握り締める。

「ああ。命に別状がないのが不幸中の幸いだな。もっとも衰弱が激しいから、しばらく退院できないだろうが」

それでも助かったのなら良かった。

安堵した表情で彩華は先を促す。

「意識が戻ったところで、少し話を聞いたんだが……」

学校からの帰宅途中だったというその少女は、いつも通りの道を歩いていた。ふと何か縄のような物が巻きついた気がしたけれど、よく覚えていないという。

そのときはおかしいとは思わなかったのだが、言われてみれば、街灯があるはずなのに辺りが酷く真っ暗で何も見えなかったそうだ。

結界のようなものがあつたのかもしれない。妖が幻術で惑わせて？獲物？を人気のない場所へ誘いこむのはありえる。

「血を好む妖怪ね……。いるにはいるけど」

昔読んだ記憶を辿ってみた彩華は、僅かに眉根をよせて思案する。血のみを欲する妖は、外法師になつてからほとんど聞いたことがない。昔は頻繁に現れていたのかもしれないし、自分が知らないだけかもしれないが。

一般的に有名な鬼や山犬は血を好むという。だが穴を開けて血を啜る妖怪に覚えはない。

「あるとしたら吸血鬼？でも日本じゃ聞かないからなあ。……ありえなくはないと思うけど……」

実際に西洋の化け物に出会つたことがないから、それがどのような妖なのか判断するのは難しい。残留した妖気からある程度の情報は得られるだろうが、限度がある。

彩華は口元に手をあてて考えこんだ。

「縄……血を吸う……」

ぶつぶつと呟いていた彩華であつたが、何か閃いたのか、あ、と声をあげた。

「兄貴覚えてない？昔読んだ子供向けの妖怪事典でさ、自在に動く枝で人間を捕まえて血を吸う妖樹」

「木……か。だが普段はどこにいるんだ？以前なら隠れる場所はそこかしこにあつただろうが」

それに、その妖樹に間違いないのなら目撃証言がないのはおかしい。アレは常に血に飢えていて、事実ならもつと騒ぎになっているはずだ。

朔也の言うことが正しく思えて、彩華は考えが纏まらず悩んだ。今の時代、妖怪が隠れる場所はほとんどない。大昔と言える時代であれば、人里離れたところや山道で妖に襲われることはよくあつただろうが、人間と同サイズの妖ならまだしも、妖樹がいるとなれば大騒動になる。

「となると……吸血鬼に似た何かが現れたとも考えられるか」

誰に言うともなく呟いた朔也の言葉に彩華が頷いた。

人間の恐怖や不安が具現化して新たな妖怪を生み出すことはよくある。実際には形がなく見た者もおらず——ただの噂であってもだ。その代表は都市伝説であろう。伝承も近代の都市伝説も、口承で伝わるのだから同じと言える。

「詠は……何か言っていたか？」

もしかしたら彼の？仕事？と関係しているのか。

思い出したように朔也が切り出した。

「そんな話してなかったよ。詳しくは聞いてないけど、侵入者がどうのって言って、空港だとかなんとか……」

慌てた様子はなく「ちよつと近所を散歩してくる」とでも言いそうな雰囲気だった。だから彩華は深く考えずに生返事で見送ったのだが——。

朔也が目丸くする。

「空港？ どうしてだ？ まさか海外の妖が飛行機乗ってやって来た、なんて言うんじゃないだろうな」

「——どうなんだろうねえ……？」

侵入者という割には平然としていた。彼ならば相手が誰であろうと心配ないはずだが……。

腑に落ちない彩華が腕を組んでうーんと唸る。反対側に座る朔也も同じように腕を組んでいる。

ふたりの仕草はとても良く似ていた。

天の盃 三

暗闇に浮かび上がる提灯や灯籠の薄明かりが儼かな雰囲気を醸し出している。

しんと静まり返った境内には誰もいない。参拝時間も過ぎ、仕事を終えた職員たちもすでに退出している。

月詠神社には門はないので、望めば夜の境内を参拝することは可能だ。しかし特別見るような物はなく、夜の参拝者は滅多にいない。来るのはせいぜい本殿の縁の下に間借りしている野良猫くらいだろう。

神社と同じ敷地内にある建物の扉が静かに開かれた。

顔を出したのは彩華だ。巫女装束はとうに脱いでいて、今は長袖のシャツにジーンズというラフな格好である。自宅から出ると、そっと扉を閉めてゆっくりとした足取りで歩いていった。

両手にそれぞれ何か持っている。片手に小さな皿。反対には小型のランタンだ。これはキャンプなどで使用する携帯用のランプで、日が落ちた後に境内を歩きやすくするために購入した物だ。提灯の仄かな明かりでは裏まで照らすのは難しい。

彩華は書庫と井戸の横を通って本殿へと歩いていった。

虫の奏でる音色が夜の静寂と相まって心地よく感じる。ふと立ち止まった彩華は軽く目を閉じて視界を遮断した。こうすると自分がどこにいるのか一瞬わからなくなり、瞑想しているときのようなリラックスした感覚を味わえる。

しばらくそうして昼間の喧騒を忘れると、ふたたび足を踏み出した。

本殿へとやってきた彩華は中の様子をうかがう。気配は感じないが、呼べば現れてくれるだろう。そう思い、転ばぬよう欄干へ手をかけて上がろうとする。

僅かだが空気の流れが変わった。

辺りが真っ暗なことで、月詠尊の神気が満ちる領域だからと安心していたせいであろう。彩華は気配を殺して近づいてくる小さな影に気づかなかった。

「――ばあ」

ランタンの明かりに浮かびあがったのは黒猫。

あげそうになった悲鳴を寸でのところで飲みこみ、ざっと後へ跳ぶ。反射的に戦闘態勢に入ろうとして――毒気を抜かれた。

これは良く知った神気だ。

「つ……きかげ？」

「おう」

不審物の正体は、ついこの間月詠神社の新しい居候となった神霊だった。月影と呼ばれた黒猫は、意地の悪い笑みを浮かべながら尻尾を揺らす。

「なにをそんなに慌てている。神域なんだから妖は入ってこないだろう？」

「いきなりだったからパニックになったの！ それに絶対入ってこないって保障あるの？」

声を抑えつつも強く言葉を放つ。

彩華の心臓は早鐘を打ったままでしばらく治まる様子はない。深呼吸で落ち着けて、未だに楽しそうな面持ちの月影をじろりと睨む。

「保証はないな。どんなことも？絶対？はない」

うんうんと頷く姿に怒りを削がれて、彩華は深いため息をついた。

「寿命が五年は縮まったかな」

昼間のことと今の出来事。今日一日で一年分は驚いた気分だ。

「なあに。最近の平均寿命はながくなっているからな。大丈夫だ」

反省の色は感じられない。

何が大丈夫なのかと呆れ顔で睨みつけるがまったく効果はないようだ。

「ふおっふおっふおっ。まだまだじゃのう」

声音を変えて意地の悪い笑みを浮かべる黒猫を再三睨み、彩華は

彼の左頬のあたりを軽く抓った。

「いてっ」

わざとらしく痛がる月影に対してわざとらしくため息をついた彩華は、月影を無視して本殿へと入っていった。

本殿の中は暗闇に包まれている。明り取り用の小窓が幾つかあるが、それだけでは満足に見渡せない。

「おっ。それなんだ？」

背後から月影の声が聞こえたかと思うと室内が明るくなった。月影の仕業であろう。

彩華はランタンを消すと自分の横に置いた。

「りんご。——詠はまだ戻ってないよね？ 緋月は？」

「月詠の命でお使い中だ。ふたりともそろそろ戻ってくると思うが……全部食べていいのか？」

ぱたりと尻尾を振る月影の視線は彩華の手に注がれている。

「食べられるならいいよ」

「この程度でオレが腹一杯になる訳なからう」

「うん。それ自慢にならないからね」

いつかどこかで聞いた台詞に苦笑して、行儀よく座っている月影の前に皿を置く。

「いっただつきまーす」

底抜けに明るい声でそう言うと、月影は床に尻をつけて座り、両手でりんごを器用に持ってかぶりついた。

月影は黒猫の姿のままだ。彼の正体を知らない者が目撃したら物の怪の類と思うだろう。だが本殿は立入禁止であり今は夜。この場に居合わせる者がいたとすればそれは不法侵入者だ。精神に異常をきたしてもこちらに責任はない。

りんごをぺろりと平らげて、月影は機嫌よく彩華を見やり、

「今日は夕方から何も食べていなかったからな。腹が減って力が出ないところだった」

と、食べなくても問題はないはずなのにおかしなことを言った。

不思議に思った彩華が眉をひそめる。

「今日は……って？ わたし、あんまり持ってこないよね？」

彩華の自宅で当然のように食事をする月詠尊とは違い、月影も緋月も物を食べる習慣はない。と言うより必要がないのだ。普段は大気に溶けこんでいる生気を得ているのだという。

それとも宮司である父だろうか。猫の姿で気配を誤魔化していれば、神社に住む野良猫と間違えるかもしれない。

彩華の疑問は月影の言によって解決された。

「猫のフリしてぼってぼって歩いていると、結構もらえるぞ」

何をもらえるとは言わないが、なんとなく思い至った彩華が目をむいた。

「保健所に通報されないでよ」

「そんなへまはせん。月詠神社の美猫って有名なんだぞ？ どうだ。綺麗な毛並みだろう」

そう言って尻尾をくねらせる。程よい艶を帯びた毛はとても柔らかそうだ。確かに美猫と言ってもよい。

「……なんで、うちの猫って知られてるのよ？」

まさか言い回っているはずはないだろう。化け猫の話は一切聞いていない。しかし、だから問題ない、とは言いきれなかった。

彩華の懸念は、月影の回答で一応は拭い去られた。

月影が首の辺りをちよいちよいと指で示す仕草をする。毛で覆われたそこには朱色の首輪が着けられていた。何か文字が見える。

彩華が指で毛を掻きわけると、黒文字で？月詠神社？と記されていた。

「こうしておけば神社の猫に無体を働く者もないだろう？ ——悪戯小僧にはそれなりの報復はするがな」

などと言いつつ月影は彩華の膝に乗る。体を丸め、喉を鳴らす猫さながらの様子に、彩華は優しくその背中を撫でた。柔らかい毛の感触に笑みをこぼす。

「子供相手に本気にならないでね」

「惨いことはしてない。石投げてきたから鬼の幻覚見せて泣かしただけだ」

さらりとひどいことを言う。月影は笑いもせず、怒りもせず、ただ尻尾を左右に動かしている。

彼が子供相手に本気になるとは考えられない。ないのだが……相手がどのくらいの年齢かはわからないが、彼らが体験したその恐怖は計り知れないだろう。

「ああいう小僧は少し怖い目にあつたほうがいい。すぐ謝つたから後始末もしたぞ」

撫でていた手を止めて月影を抓ろうとした彩華であつたが、一応言っていることは正論だと思い、それはやめた。

知らないとはいえ、神に属する者に喧嘩をしかけるのだからそれなりの覚悟が必要だ。とは言つものの、子供にそれは酷すぎではある。

自身で責任がとれないほど悪いことをしでかす前に理解できるのなら、早いに越したことはない。

「まあ……悪戯も限度があるからね。でもやり過ぎたら今度はわたしが怒るからね」

「へいへい」

強めの口調で釘を刺すが月影はまったく動じていない。膝の上でごろごろと甘える様子にすっかり怒る気も削がれ、月影にはわからぬようにそつとため息をつく。

全身全霊をかけて挑んでも、たかが人間では返り討ちにあつただから仕方ない。

首の辺りを撫でていると、くすぐったいのか、月影が身を振らせた。

「触られるの嫌？」

「嫌じゃないが……こそばゆい」

そう言いながらさらに身体を動かす。だが本気で嫌ではないらしく彩華の膝から逃げないでいる。

彩華はというと、先ほど驚かせられた仕返しとばかりに首を撫でるのをやめない。

「やめんか」

諫めるような強い口ぶりではあったが、目には楽しげな色を宿している。月影はにんまりと笑い、膝の上から彩華の胸元に飛びこんだ。

勢いがついていたことと突然のことに驚いて、咄嗟に構えることができなかった。

彩華は悪戯猫を落とさぬよう片手で抱き、もう片方の手で倒れないように自身の身体を支えたが、遅かった。そのまま後へ倒れこむ。「いったあ……」

かろうじて頭を打つのは免れた。しかし床に打ちつけられた背中の痛みに彩華が呻き声をあげる。

「おー。悪い悪い。痛かったか？」

その軽い物言いからは、反省している様子がまったく言っていないほど感じられなかった。

彩華はいささかムツとして、肩に乗りかかっている月影を引き剥がそうとする。重くはなかったのだが、押し倒されている格好は、相手が猫の姿とはいえ気恥ずかしかった。

——が、月影の行動が一步早かった。彩華の手をすり抜けて彼女の顎に前足を置いて首を伸ばした。自身の鼻を彼女の鼻へと擦りつける。

「ちょ……くすぐったいってば」

声を出して彩華が笑う。

僅かに顔を背けて月影の戯れから逃れようとするが、それは叶わなかった。彩華の顎にはぶにぶにした肉球が添えられているだけだというのだ。

どうやら不可視の力で押さえこまれているようだ。自身にのしかかっているものは猫の姿であり、重さもさほど変わらない。それなのに体感重量は成人ひとり分——いやそれ以上だ。彼の神気がそう

思わせるのかもしれない。

ぼんやり思っていた彩華は、一向に止まないむず痒い接触に笑い声をあげた。

「月影。じゃれるなら相手するからちよつとどいて」

「嫌か？」

「嫌じゃないけど重い」

「そうか」

彩華の訴えを聞いた月影は、彼女の唇を一度舐めてからニヤリと笑った。

温かい体温を間近に感じて彩華の頬がほんのりと赤く染まる。

目を細めた月影は、それ以上はなにもせず床へ降りた。

彩華は体勢を整えて、せがむ月影を胸に抱く。今度は重さを感じなかった。

「さっきのどういふつもり？」

猫同士が鼻を擦りあわせるのは挨拶だと聞いたことがあった。だが彼は生粋の猫ではないのだから、それは当てはまらないだろう。

「なに。アニマルセラピーというやつだ」

「思いもよらない単語に目を丸くする。」

「そういう知識って、どこで仕入れるのよ？」

彼自身で手に入れた事柄もあるのだろうが、大半は本体と言える月詠尊の知識、記憶だ。

月影は現代の言葉で言えば、月詠を核にして、悪しき術者に生まれさせられたいわばクローン。彼の？誕生？は気の遠くなるほど大昔らしいが、最近封じられた場所から表へ出てくることになり、そのときに本体の記憶やら何やらを得たのだという。

今は猫の姿を好んで実体化しているようだが、本来の姿は月詠尊と瓜二つだ。ふたりの違いを挙げると、月影の方が纏う神気がほんの少し荒々しく、目つきが鋭い。ふたりを並べれば、それなりに違いを見つけることは可能だろうが、はっきり見分けるのは難しいだろう。

月詠は柔らかい印象が強いとはいえ、荒々しい面も持ちあわせているのだ。逆に月影は一見怖そうな雰囲気を漂わせている割には、愛嬌があり親しみを感じさせる。

神が持ちあわせているふたつの面——荒御魂あらみたまと和御魂にぎみたまが均等に分かれると彼らのようになるのかもしれない、と彩華は思う。

「どこつて。誰かが話しているのを聞いたり……そうだなあ……最近猫の集会に顔を出している」

「……」

何と言っているのか困り、彩華は口を噤んでしまう。

「奴らは変化に敏感だからな。異変があれば真っ先に感じ取る。異形の気配を見失ったら、まずそこいらにいる奴に聞いてみるといい」

「無理。動物の言葉なんてわからないもの」

そんな芸当、人間にできるわけがない。

「そうか。人間には不可能か。だが、オレらも言葉が話せる訳じゃないぞ。そいつが表に出す雰囲気を感じ取るんだ。彩も、異形の醸し出す気配や心霊が何を訴えているのか、大体はわかるだろう？
その応用だ」

「じゃあ……動物に関しては、長く一緒に暮らしてて、飼猫の気持ちになんとかわかる感じ？」

そうだったこともあると耳にした。

彩華が自分なりに答えを導き出すと、月影はうんうんと頷いた。その姿はさながら弟子を指導する師匠のようであった。

「うむ。そう思っている。……で、お前話があるんじゃないのか？
ただ遊びに来た訳じゃないのだろう？」

月影は彩華の腕から抜け出すと、先ほどとは打って変わって真面目な顔をした。彩華もそれに習い笑顔を消して身を正す。

昼に朔也から聞いた話を語り出すと、月影は表情を硬くしながら彩華の声に耳を傾けた。

「でね、神様の見解を聞きたいんだけど……？」

聞き終えた月影は複雑な表情を浮かべている。

「どうしたの？」

「……オレが仕留め損ねたヤツの話だなあ、と思つてな」
眉間に皺をよせて口を曲げた。

「逃がしちゃったんだ」

何気なく呟いたその言葉に反応したのか、月影はいかにも不機嫌だと言わんばかりに尻尾で床をぺしぺしと叩いている。

「あつてるけどつ。はつきり言つなっ」

忌々しげに月影がばやく。彩華に八つ当たりすることはないが、彼の纏う空気が？傷ついたから慰める？と主張している。

その様子に苦笑いをする、月影を膝に乗せてその背中を思い切り撫で回した。首を触られるのは嫌だがこちらは平気らしい。

自慢するだけあつて、黒猫の毛は柔らかく、肌に触れる感触が気持ち良い。艶やかな毛並みは新月の闇夜を思わせる。

「で、それと遭遇してどうだったの？」

ひとしきり撫で回してから彩華が再度問いかけると、顔を膝に突っ伏したまま、渋々といった風に話し始めた。

「異変を感じて出かけてた訳じゃないから、直前まで気づかなかった。それまで妖気なんて一切感じなかったのに、いきなりヤツの結界の中に放りこまれて……正直驚いたな」

猫の姿に擬態して神気を抑えていたことが原因だったのか、その妖も彼には気づかなかったのだ。妖の悪事に遭遇できたのは不幸中の幸いだ。

「それで、追っ払いはしたんだが、気配までぱったり消えちまつて一見無表情に取れる顔には困惑の色が浮かんでいる。先ほどから左右に大きく振れている尻尾は、戸惑っている彼の感情を表しているようだ。

神に属する者が見失うなんて、相手はそれほど強い妖なのだろうか。

その彩華の疑問を月影はきっぱりと否定した。

「いや、力はないしたことない。ずる賢いつてか、頭は良さそうだ

「がな」

「頭がいい？ …… そうか。逃げ道を残してたんだもんね」

納得してから彩華はうーんと唸った。

「…… まあ、どこに隠れているか予測はしていたがな」

考え事をしている彩華には彼の呟きは聞こえなかった。ひとしきり考えてから口を開いた。

「そうだ。姿は見えないの？」

彼らには暗闇は関係ない。瘴気や妖気が強いなど、よほどのことがない限りは昼間と同じくらいよく見えるだろう。そして、その？よほどのこと？も滅多にない。

「見たには見たが」

すつきりしない物言いである。

月影は一度尻尾を強めに動かすと言葉を続けた。

「あれ、一部分しか表に出してなかったな。によるによるくねくね、よく軽快に動き回るなあなんて感心した」

「暢気に感想言わないで」

彩華は呆れ顔で言い放った。敵ながらあっぱれ、という感情もわからなくもないけれど、と続けて呟く。

「おおすまん。オレが見たのは足先…… いや、手先？ 全体を見た訳じゃないんだが」

月影はそこで言葉を区切り、丸い目を眇めた。先ほどまで面白がっていた彼の視線が少し真面目なものとなる。

全体を見ていないとはどういうことかと彩華が首をかしげる。

「どういう状態？ 結界で隠されてたから見えなかった、ってこと？」

「いや違う。妖の体は地下にあつて、血を摂取する部分だけを地上に出すんだ。そうすれば？自分を排除しようとする敵？に襲われても体だけは無事でいられるからな」

月影の説明は意味不明なものだった。

眉間に皺をよせて考えこむ姿を笑われて、彩華がムツとする。

「正体がわかってるなら教えてよ」

「なんだと思う？」

問答を楽しんでいる様子の月影は意地の悪い笑みを浮かべたままだ。尻尾が軽快に揺れている。

彩華は考えてみるものの、思いつかず白旗を揚げた。

「お前たちが考えた通りあれは血を吸う樹木だよ。日本古来の妖怪じゃないみたいだが。どうして地上で妖気が感じられないのかと思ってたんだが……下水道使って移動してるんだろっな」

下水の？気？の澱みに遮られて妖気が見えづらくなったのだろう。彩華は月影の説明にふむふむと頷き、

「海外の化け物なのかな？　じゃあ……詠が出かけたのと関係してる？」

「いや。まったく関係していない」

「別件なんだ」

異変のタイミングが良すぎて、もしかしたらと思った彩華であったが考えすぎだったようだ。

「無縁ってこともない気はするけど、本当に偶然ってこともありえるな」

「どっちにしる退魔の準備しなきゃ」

今はまだ仕事の依頼はきていないのだが、近いうちに話が来る可能性は大だ。明日突然要請されるかもしれない。それまでにできる準備はしたほうがいいだろう。

彩華の考えを読んだのか、月影は彼女が拍子抜けすることを言い出した。

「――あれ、しばらくは動かないと思う」

「どうして？」

「ただの勘だ。次に動くのは満月の夜だな」

勘と言っが、やけにきつぱりと言い切られて彩華は言葉を返せない。

「オレの考えが間違ってなければ、満月までは問題ないよ。ま、オ

レがちよくちよく見回りしてやつから心配するな」

そうして、月影は彩華の膝の上から床へと身軽に降り立つ。目を丸くする彼女に、にやりと笑った。

「それより。お前、他にも気にしなきゃならないことがあるだろう？」

問われて怪訝な顔をする。

月影は少々呆れ顔で息を吐くと彩華を見上げた。

「祭があるだろうが。巫女舞は大丈夫なのか？」

彩華がうつと息を詰めた。

月詠神社では毎年、旧暦の九月十五日に秋季大祭が行われる。農作物の収穫を感謝して、翌年の豊作を祈念する祭だ。

月詠尊は名前が表す通り月の神であるが、穀物とも深く関わりがあるとされている。彼が殺めた保食神の身体より様々な種うけもちのかみが生成され、これが五穀の元となった。古人は満ち欠けを繰り返す月と、実りと枯死を繰り返す植物を結びつけたのだろう。

祭には巫女の舞が欠かせない。重要な務めのひとつだ。神社で働く巫女は全員が舞えるように講習を受ける。

特に決まりがある訳ではないのだが、月詠神社では縁者の巫女がいる場合は、その者が一人舞を必ず舞うことになっている。

祭まであと僅かだ。

「大丈夫……と思う」

ひどく狼狽した様子で彩華が呟いた。段々と語尾が消えそうになつてゆく。

舞の覚えは早いが、精細さが欠けていると常日頃言われている彩華であった。

「おいおいしっかりしてくれよ。当日熱出して舞えません、なんて恥ずかしいからな。ちゃんと調子整えとけよー？」

「そんなことしません」

彩華が面白くなさそうに抗議する。

祭の当日に倒れたら、巫女の数ギリギリだというのに迷惑がか

かるではないか。

肩を揺らしている黒猫に文句を言いかけて、彩華は不意に眉根をよせた。

いざというときは気合で乗り切ると思っていても、身体がそれについていかなければ意味がない。万一の場合は代役を頼むツテもあるにはあるが、頼らずに済むのならばそれに越したことはない。体調管理を行うことも仕事のひとつだ。

「……そうね」

素直に頷くと、黒い尻尾がよろしいとばかりに揺れた。

「でも、祭の日だけでも誰か手伝ってくれると助かるんだけど」
月影が渋い顔をする。

「頼めないのか？」

「急だからね。募集すれば応募はそこそこあると思うけど。簡単な仕事のみ頼むとしても、それなりに面接はしなきゃならないし」

祭が近くなればなるほど宮司である父も忙しくなる。そうなる時間は取れないだろう。

「一応、何人か知り合いに声かけてみるけどね」

「そうか。オレが手伝えることならやるぞ」

「ありがとう。そのときは頼むね」

頭を優しく撫でると、月影は猫を真似て「にゃあ」と鳴いた。

本殿の入口で彩華を見送った月影は、不意に耳をそよがせた。背後によく知った気配を感じ取って振り返る。

何も無い空間が歪んで裂け、そこから青白い月光が零れ落ちた。空間から現れた男は、背中の中央辺りで緩く纏めた長い銀髪をなびかせて床に降り立つ。

「おーおかえりー。りんご全部食べたぞ」

「……………。何の話だ」

唐突に意味不明なことを聞かされて、月の神は顔をしかめた。

「彩が持ってきた。まだあるって言ってたから、食べるなら自宅行つてこい。彩も今戻っていったところだ」

「そうか」

月詠は短く返答すると胡坐をかいて床に座った。疲れているのか、しばしぼんやりとしたまま身動きしない。時折、目を閉じたり遠くを見るような仕草を繰り返している。

小首をかしげるようにして見上げると、月影はその顔をじっと見つめた。何をしているのか聞かなくてもわかったから、彼はしばし黙って待った。

心配はないとはいえ、やはり気になるのだろう。主の不在時に手を出す命知らずも、ごくたまにはあるがいる。大抵は結界に阻まれて侵入できないか、あつという間に浄化してしまうのだが。

しかし、余計な干渉をされるのは気分が悪い。

月詠はこの月詠神社に張り巡らせてある結界に問題がないことを確認すると、安堵の息をついた。

「――問題ないな」

ややあつて月詠が呟く。

喧嘩を売る不届き者はいなかったようだ。

「オレがいるのに信用ないなー傷つくなー」

月影が僅かに口を尖らせて言った。その言葉の割にはけろりとしている。

「戯れ言を」

呟きに尻尾を左右に揺らして答えると、月影は笑みを覗かせている月神の前に座った。

月詠は、人型を取ろうとして霊力を変化させかけるが止めた。今は夜で、本殿は人間が入らぬ聖域だ。本来は神職の者ですら入ってはならないとされている。誰にも見られる心配はないから、人間の姿をとる必要はない。

「なんだ？ 耄碌して上手く変化できないのか？」

軽口をたたいた月影が宙に浮いた。月詠が首根っこを掴んで持ち

上げたのだ。

「なにをする」

ぷらーんと手足を垂らして月影が半眼で睨みつけた。月詠は涼しい顔でそれを受け流して続ける。

「いや。俺って口が悪いなど、改めて思ったただけだ」

抑揚のない声音で告げると「そうだな」と返事が返ってくる。これには月詠は苦笑するしかなかった。

神は荒御魂、和御魂のふたつを持ち合わせている。荒々しい側面は人々に試練を与え、優しい側面で人々に恵を与える。この極端な二面性は珍しくもない自然な状態だ。

ひょんなことからふたつの存在に分かれた？月詠？と？月影？はその性質はほぼ同じである。若干、月影の方が嵐に似た印象が強いのだが、かといって月詠が温厚な性格かと言われると、そうでもない。彼には保食神うけもちのかみを斬り殺す？武勇伝？もある。

月詠は、黒猫の姿のままの月影を膝上に降ろすと、少し真顔になつて訊ねた。

「変わったことはあったか？」

「あつたぞ」

こちらも真剣な表情をして尻尾を一振りすると、

「西洋の化け物がうろついてるな」

彩華に話した内容を繰り返した。

話を聞いた月詠は興味津々といった声を上げる。

「血を吸う木の化け物、か」

最近は吸血樹の存在など忘れかけていた。古の時代や山奥ならばいざ知らず、自然が少なくなったこの辺りでその名を聞くとは思わなかった。

頭を振った拍子に肩にこぼれた長い髪を無造作にかきあげて、月詠は嘆息した。

「それで、お前の見立てではしばらくは動かないのか？」

月影が首肯する。

「結構特殊な植物……いや、化け物……植物？」

頭が混乱しているかのような言い方だ。焦れた月詠が促すように咳払いする。

「どちらでもいい」

「んじゃあ、妖樹」

最初からそう言えばいいものを。

月詠がじろりと睨みをきかせるが、当人は飄々としている。

「妖どもが活発になるのは大抵夜だ」

暗闇はすべてを覆い隠す。人間は夜目が効かないから、姿を見られずに行動するには好都合だ。

「一回目の活動がついこの間の新月の夜」

女生徒が襲われ、月影が追い払った日のことだ。

「その前に、野良猫から『嫌な気配がする』って聞いたのが、満月の夜」

「……間違いはないのか？」

月詠の目が鋭く光った。

妖は光を嫌う。日光ほどではないが月光も同じだ。たとえ行動可能でもその動きは制御される。——なのに、妖樹は月が最も輝く夜に、獣が察するほどの妖気を漂わせていたのか。いくら変化に敏感だと言われても信じがたい。

月影が一度尻尾を振って肯定を表した。

「別に珍しくもないだろう？ 月に狂わされるなんてのは、異国だけの言い伝えじゃない」

月影は異国——西洋の伝承を指して言っている。

古来より月には不思議な魔力があり、特に満月の夜には様々な現象が起きると言われている。西洋でも東洋でも、月は神秘の対象のひとつであった。

吸血鬼、狼男、魔女など。月と深く関係する異形は多々生息している。血が騒ぐのか、満月の夜にそれらが動き、異質な事件が起きるといふ。中には、活動するために欠かすことのできない？ 食事？

で生物を襲うのではなく、衝動の赴くままに殺戮のみを楽しむモノもいる。暗闇よりも良いというだけで、月明かりがあるから妖が行動しない訳ではないのだ。それらを考えると月は死や魔の象徴と言えよう。

とはいえ、月は死を連想するものばかりではない。

異国の神話では、月の女神は夜道を行く旅人の守り神として崇められている。一方では、人身御供を要求する残酷な神として描かれている。伝承の地域によって象徴するものが変わってくるのだ。

「にわかには信じられないが……」

長く下界に身を留めているが、満月の夜に妖が活動していると聞いたことはない。

だが……と月詠は思い直す。

己が見たことがないからありえない、と決めつけるのは危険だ。異国の文化が入ってきたように、異形がやってきてもおかしくはないだろう。他の土地では今までもあったのかもしれないし、突然変異で苦手を克服というのも可能性としてありえる。

神妙な面持ちの月詠を真下から覗きこみ、月影は言葉を続ける。

「オレも最初は信用してなかったさ。だが、訴えられて無視する訳にもいかないからな。すぐに妖氣が漂っているって場所に行ってみたが……」

まったく言っていないほど気配が消えていた。

その出来事を思い出しているかのように月影は片目を眇めた。

「妖氣の残滓を追って地下に潜っても良かったんだがな。臭そうだから気は進まないが。その方が手っ取り早いし。でも一匹のために余計なまで消しても、な」

明るすぎる現代の街から逃れ、地下で息を潜めている妖もいるだろう。

陰陽、正邪、天地、吉凶——物事には対極の二つが必ずある。

ひっそりと闇の中で息づいているモノをあえて消す必要性はない。陰と陽。闇の中で蠢く異形と光の下で生きる人間。保たれている均

衡が崩れてしまったら、何が起きても不思議はない。

「妖の情報が少なすぎるから、むやみやたらに探し回るよりは、いつそのこと次に暴れるまで待ってもいいと思うぞ」

しばし逡巡した後、月詠が頷いた。しかし心の奥では納得していないらしく、眉間に皺がよっている。

「……」

軽快に尻尾を振っている月影の口角があがった。

「なんだー？ 月の存在が穢じふんされた気になるのかー？」

月詠がじろりと睨みつけた。含みのある言い方が癪に障ったのだが、月影はそれさえ気にもとめず笑い続ける。

「仕方ないだろう。八百万オレラは荒和あらにきの両面を持っているんだから。今更じゃないか？」

「……お前に諭されるとはな」

「ま、荒い方はオレが引き受けてやつから。ふたつでひとつ、ってな」

月詠は、にやりと笑う黒猫の顔をふと真顔で見下ろし、

「……もう人型は取らないのか？」

気になったことを口にする。

「お前の容姿と変えるのも面倒くさいしー。双子説はお前を知っている人間には通じないんだろう？ オレは詠おまえの身代わりはしないぞ？ 神社の仕事なんて億劫だからなー」

のんびりとした口調に、月詠は眉間に皺をよせた。

「そんなことません」

「お前が人界での居場所を作ってなけりや、それも面白そうだけれどな。だが――」

この方が色々色々と小回りが利くからな、と月影が呟いた。

ねー『天の盃』って知ってる？

えーつと……どの？ おまじないの？

都市伝説。

知ってるー。

なーんだ。知ってたのかぁ。

最近の話じゃ有名じゃない？ 月に化けてる妖怪のやつ。おまじないした人を食べちゃうんでしょ。

……えっ。

え、って……なに？

私が聞いたのと違う。私が聞いたのは『森の奥に潜んでいる血を好む木の化け物は、新月と満月の夜に動物をおびき寄せて血を啜っている。やがて長い年月が過ぎて知能を持ったその化け物は、自ら移動することを覚えて、今度は人里に近づいて人間の血を啜るようになった』って。

それ誰に聞いたの？

中学の友達。このあいだ久しぶりに会ったんだ。

ふーん。話す人によって内容が変わってるのかな。噂話は尾ひれがつくって言うし。……ねえ、その話、なんで『天の盃』って名前なの？ その内容だと、単に吸血の木、とかって名前でもいいと思うけど。

それはねー。化け物は薄い膜でできた球体の中に血をためて、それをこう……枝で持って空に掲げるんだって。遠くから見ると、丸いワイングラス持ってるみたいじゃない？

ああ、なるほど。獲物を獲ったから祝杯をあげるって感じかな。

……空に血の入ったグラスを掲げるのか……なんかそれ、真っ赤な月にも見えそうだね。それ見た人が、今度は『赤い月が出てくるから天の祟りだーっ！』なんて騒ぎそう。

あははっ。ありそうありそう！ いつもと違う物が現れるって怖い話の定番だもんね。月だったら、やっぱり魔女か吸血鬼のイメージだなあ。赤い月なら血も連想するしねー。『血を思わせる赤い月の夜には魔女が儀式を行い、それを偶然見てしまった者には死が訪

れる
『……なんてね。』

天の盃 四

蜜色の髪が涼やかな風を受けて煌いた。

「寒くないですか？」

そう言つて北風から守るように横に立つラインヴァルトに目だけで返事をして、エリザベートは目前に広がる街並みを眺めた。

東の空には未だ目の覚めるような青色が広がっているが、反対側の空に浮かぶ雲は黄金に染まっている。

昼間は比較的暖かく、人もそれなりにいたのだろうが、さすがに夕方ともなると人気がまばらになってきた。街灯はあるが、日が暮れた公園にいつまでもいる物好きは少ない。

楽しげな子供の声が聞こえてくると、エリザベートは目元を和ませた。

ふたりのいるこの場所は、数十年前に設備された空輪山である。春になると敷地内に植えられた桜が咲きほこり一面桜色に染まることから、別名？桃のお山？と呼ばれている小山の公園だ。

宿泊先のホテルで「街全体を見渡せる場所はないか。できれば、自然の多いところがいいのだが」と訊ねたところ、しばし考えた従業員に教えられた。高度はないが望みの場所であろうと。

エリザベートは先程から喋らない。彼女が何をしているのかわかるから、ラインヴァルトは邪魔にならぬよう自身も黙して佇んでいる。とはいえ、いつでも動けるよう常に周囲に意識を向けている。

「――ほら、帰るぞ」

背後から聞こえてきた男の声に、ラインヴァルトはさり気なく彼女に近づく。

「まだいいじゃん」

「時間はいいけど、場所変えよう。この辺、夜は人いないし……」

「なに、あんた怖いのか？」

「ばーか。ちげーよ。……例の吸血騒動、この街だつて聞いて。た

だの通り魔だつて言ってる奴もいるけど、あれ、黒魔術だつて話じやん。血を集めてるとかって……」

空から視線を逸らさないまま、エリザベートは口元を僅かに緩めた。

「……やつぱ怖いんじゃない。そんな根も葉もない噂話なんか信じちゃってさあ。魔女なんているわけないよー。噂話が膨らんじやつただけだよ」

若い男女は肩を寄せて仲睦まじく話しながら通り過ぎて行った。

ふたりの他に人はいないようだ。

人の気配がなくなると、公園内は独特の雰囲気で満たされた。物悲しさは一切なく、どちらかというと厳かであり壮麗であり——自然の息吹が濃く感じられる空間となった。

ゆつくりと、伏せていた目を開けたエリザベートは、懐から取り出した小さな水晶の塊を指で弾いて空へ飛ばした。

水晶が視界から消える寸前、エリザベートはぱちん、と指を鳴らす。

西日を受けて光り輝く水晶から何かが生えた。

鳥の翼だ。

下に落ちかけたそれは、重力に逆らって上昇してゆく。淡い光を放ちながら、瞬く間に姿を変えた。少し丸みを帯びた形とは違い、その目は鋭い眼光を宿している。

大きな目を動かして、水晶でできたフクロウは、エリザベートの頭上を一度旋回すると、繁華街へと飛んでいった。

「何か発見できるといいのだけれど」

などと嘯くが口元には笑みを刷いている。

すでに確信しているのだろう。探し物が何であるのか。どこにいるのか。エリザベートには余裕がうかがえる。

彼女の呟きに、ラインヴァルトは意識を集中する。今いる場所から徐々に範囲を広げ、異形の気配を探る。

ラインヴァルトの指がぴくりと動いた。肉眼では確認できない。

どこかに潜んでいる鋭い妖気に目を細めた。

今度は彼にも感じ取ることができた。あの日、空港でエリザベートが言っていたヴァンピールはこの近くにいる。

「……闇、が蠢いていますね」

その言葉にエリザベートが頷く。

「見つかったら、どうしますか？」

「そうねえ……」

ふうっと息を吐いて、エリザベートは困ったように小首をかしげた。

「さっきの、話……」

唐突に話題を変えられてラインヴァルトは怪訝そうに相手を見やっ

った。「話……？ 魔女がどう、という話ですか？」

言葉を引き取り、眉をひそめたラインヴァルトが訊ねる。

「ええ。どこの国でも同じような伝承があるのね」

「万国共通でしょう、異形が人間を襲うのは。理由も似かよるものです」

そうねと返してエリザベートは遠くを見つめた。

異形の気配がヴァンピールならば自分の専門分野だ。間違いがなければ、異形の種類は古に根絶えたはずのモノ。発見したら即座に処理しなければならぬ。

とはいえ、この国の術者の存在を無視もできない。いくらこちらに悪意がないとしても、縄張りを荒らすような行為は極力避けるべきだろう。

それよりなにより大事なものは——休暇でこの地に滞在している、ということだ。

せつかくの休みをむざむざ潰すこともない。

「あなたが直接手を下す必要はないと思いますが、エリーザの決定に従います」

「そうね……？」

視線を感じて肩越しに背後に目をやると、木の影で靈氣が陽炎のように揺らめいていた。

エリザベートがさり気なく身体を斜めにして観察すると、白い衣を身に着けた赤い目の子供がふたり顔を出した。気づかれないと思っているのか油断しているのか、氣配を消すこともなく、彼女たちの様子をうかがっている。

エリザベートはフクロウが飛んで行ったであろう方向を見つめて、しばし黙考する。

水晶のフクロウはもう姿が見えない。

ややあつて、ふう、とため息をひとつ吐いた。

「……八百万の神がいる、と言っただけあつてここの守りは心配ないでしょうね。あの子が帰ってきたらもう一度考えましょう」

言つて、くるりと後ろを向く。慌てて頭を引っこめる子供の姿に、エリザベートは薄く笑んだ。

高層から見下ろすと街が宝石箱のようだ、とはよく言ったものだ。エリザベートは窓から見える景色に目を細めると、心の中で呟いた。

明るくなり過ぎた現代の夜は、空から星を消した代わりに地上に巨大なプラネタリウムを出現させた。ホテルから少し離れた大通りには自動車のライトが行き交い、まるで緩やかに流れる帚星のようだ。本物に劣るとはいえ、人工的な美しさも悪くはない。

口元に笑みを履いたエリザベートは、氣配を感じて後方に視線を投げる。

シャワールームから出てきたラインヴァルトに極上の笑みを向けた。

「ワイン開けてくれる？」

当然のように命令をして、彼女は室内に備えられたソファに座る。目の前のテーブルには程よく冷やされた赤ワインと柄の長いグラスが設置されている。

「ルームサービスでも頼みましょうか？」

ラインヴァルトの問いかけに、エリザベートは首を横に振った。

「いないわ」

水分を含んだ金の髪が軽やかに揺れた。ホテルの薄明かりの中でもその輝きは失われない。寧ろ彼女は夜にこそ映える。

ラインヴァルトは彼女をやや眩しげに見つめると、笑みを浮かべてワインボトルを手取る。手際よくコルクスクリューを差しこみ、ゆっくりと抜いた。

音のない部屋にワインを開ける音が響く。

「ありがとう」

順応な従者が向かいに腰掛けるのを待つて、エリザベートはグラスに口をつけた。芳醇な香りがふわりと鼻をくすぐり、自然と口元に笑みが零れる。

追われることのないゆったりとした時間を楽しもうとしてソファに身を沈める。そうしてエリザベートは目を瞑る――が、すぐに開いた。

鳥の羽音に気づき、ついと視線を窓へと移した。つられてラインヴァルトもそちらを向く。

窓の外で何かが旋回している。半透明の塊が、半透明の翼を広げて飛んでいるのを目に留めて、正体に気づいたラインヴァルトが近づいた。

塊は一度大きく旋回すると、ふたりが寛ぐ部屋の窓へと突っこんだ。

ホテルの窓は防音と安全を兼ねてかなり厚いガラスが使われている。それを難なくすり抜けて、塊がラインヴァルトの差し出した右の手首に降り立つ。羽をたたむ塊は、ひとりでに発光すると動かなくなる。

腕から転がり落ちる寸前に掬い上げ、ラインヴァルトはそれをエリザベートに手渡した。

「お帰りなさい。私の可愛い子」

言つて、エリザベートは軽く口づけた。

半透明のそれは、上質の水晶でできたフクロウだ。

飛びこんできた窓は割れていない。ヒビすらも見受けられない。水晶にも目立つた外傷はないようだ。

エリザベートの命を受けて一仕事終えてきたフクロウは、彼女に伝えたいことがあるらしく、数回その身を光らせた。

「例のヴァンピールですか？」

ラインヴァルトが訊ねながら立ち上がり、カーテンをひいた。ここは高層のため外から覗かれることはないが念には念をいれての行動だ。

「ええ。気配を隠していないから、簡単に見つかったわね」

人に見つかるのを良しとしない異形が多い中、非常に珍しい。古の時代ならばともかく、大抵は消されることを恐れて慎重に行動しているのだ。

使い魔である水晶のフクロウを細い指で持ち直し、エリザベートは無機質な目を覗きこんだ。

「さあ……あなたがその目で見てきたものを私に教えて」

瞬間、フクロウから白い光が満ち溢れた。視界が水の中にいるように朧げになるが、ふたりはまったく動じていない。

複数の光の玉が部屋中をゆったりと流れてゆく。力ある者が見たならば、空気の玉に似たこれが、自然界に存在する生気の塊だと気づき驚いただろう。普段は目に見えぬはずのモノを指摘する第三者は、今ここにはいない。

辺りに広がっていた光はやがて一点を指すように絞られた。そしてそれは一直線にエリザベートの額に向かっていく。

順応な使い魔は、己がその目で得たものを正確に主人に伝える。

エリザベートの虚ろな瞳にはフクロウの姿しか映っていない。脳裏に直接送りこまれる情報に口元を歪める。

一通り視たエリザベートは、一息つくと右手の指をパチンと鳴らした。

彼女の両手で抱えるほどだった水晶のフクロウが、見る間に萎んでゆく。今はエリザベートの手にすっぽりと収まるほどの大きさしかない。

もう一度指を鳴らすと、今度は大気に溶けこむように消え去った。
「何かわかりましたか？」

ラインヴァルトがそう聞くが、エリザベートは口を噤んだまま動かない。目を閉ざして眠っているかのようだ。

「また、思い出しちゃった」

細長い指で前髪をかきあげてぽつりと呟く。

使い魔はとある場所の変事を見せた。何か異質な出来事があった場所に強く残った心情を探し出し、その様子を今見てきたかのように主に伝えた。 > b r <

道端に倒れた少女から流れる赤い血。それが、彼女の記憶を呼び覚ました。 > b r <

血まみれの屍となった幼子の姿。 > b r <
脳裏に焼きついたまま、ずっと忘れられないでいる。死の臭いを感じたとき、ふとしたはずみに、あの光景が胸をかすめる。今見た光景はまったく関係ないというのだ。 > b r <

「もつとも死に近い存在なのに……情けない」
人ひとり死なせたくらいで何を怯えているのか。闇夜に生きる自分が何を悩んでいるのか――。

自嘲ぎみに笑うエリザベートを、ラインヴァルトが痛ましげに見つめる。

「仕方がなかったのでしょうか？ 贄として捧げられた命は、贄の意思で覆せない。悪魔が情けをかけても結果は同じだ。一度決まった運命は変えられないのだから」

「……そう、ね」

幾分かきつい言葉に怒る様子もなく、エリザベートは息を吐いた。そうして彼女は長年心に巣くっている闇を思い出す。

気紛れに屋敷近くの森を散策していたエリザベートは、小さな悲鳴に立ち止まった。声のした方を見やると、ひとりの男が慌てた様子で逃げてゆくところだった。

人間は近寄れぬよう、辺りに術をかけてあるのに……。しかも、侵入者の気配も感じなかった。

内心しまったと呟いたエリザベートは、すぐに思い直す。

恐らくあの男は狩りにでも来て道に迷ったのだろう。命の危険に晒されて、隠れていた潜在能力が現れることはよくある。第六感で安全な場所を見つけ、外敵を阻むこの結界内に難なく入りこんだのかもしれない。そうでなければ、危険の多い森の奥までやってくるはずがない。この辺りに住む野生動物は凶暴なのだ。それは長年の経験から人間たちもよく知っているだろう。

何にせよ、大騒ぎするほどのことではない。あの男が噂は本当だと村人に伝えてくれるに違いない。森には魔女が住んでいるから近づくな、と。

エリザベートは念のためと神経を研ぎ澄まし、他に異変がないか確認する。

結界の綻びは感じられなかった。先ほどの男も無事に結界外へ出たようだ。

その後はわからない。異質な気を放つ異形ならばいくらでも気配を追えるが、相手がただの人間では無理だ。自身の結界内であればともかく。

ため息をひとつつき、彼女は散策を楽しんだのだった。

エリザベートが自身の間違いに気づいたのは、それから二日後であつた。

仕事を済ませて屋敷に戻る途中だったエリザベートは、ゆっくりと失速した馬車に眉をひそめた。

やがて馬車は静かに止まった。

どうしたのかと訊ねると、御者が困ったような声をあげた。小さな子供がいます、と。

森の奥に子供がいるはずがない。しかし、御者が嘘をつくとも思えない。

エリザベートは不信感を抱きながら馬車を降りた。結界の狭間に女の子がいた。不思議そうな顔をしてエリザベートを見つめている。

「あなたひとり？　どうしてここにいるの？」

エリザベートの問いには答えず、少女は首をかしげた。

「どうやって来たの？」

今一度、優しく話しかける。

一番近くの村でも距離がある。少女の足では到底無理だ。誰かが連れてきたとしか考えられない。

しばらく待っても、少女は何も答えなかった。

——そういえば、この子は先ほどから音を発していない。言語障害があつたとしても、意思を伝えるために唸り声くらいはあげるはずだ。

エリザベートが訝しげにしていると、少女が小走りで彼女に近づき、ニコツと笑った。

不意をつかれて肩を揺らす。

曇りのない瞳に見上げられ、エリザベートはうろたえた。これほどまでに無垢な魂は初めてだった。

「いらつしゃい。村へ送つてあげる」

そう言つて差し出した手を、少女は何の疑いもなく握り返す。

指に伝わってくる温かさにエリザベートは微笑んだ。

少女を村へ送つて、それで終わるはずだった。

一連の出来事から数日後、エリザベートは深い森の奥で瞠目した。身じろぎもせず、ただ一点を凝視する。

やがて目をすつ……と細めた。

屋敷には行けぬよう、結界を張り巡らせた境目。そこに、粗末な木で作られた祭壇が設置されていた。慌てていたのか、今にも壊れそうなほど粗雑な作りだ。

祭壇はひどく汚れていた。そこに、ひとりの少女が横たわっている。

少女の服は先日会ったときとは違い、聖者が身に着けているような清廉な衣服だった。元は純白であったのだろう。だが、赤黒い染みが全体に広がっていた。

真っ黒にも見える赤い液体が、ぽたりぽたりと少しずつ地面に落ちていく。錆びた鉄の臭いが鼻につき、血が流れているのか、とやけに冷静に思う。

——人間は、時に異形よりも厄介な存在だ。

エリザベートは瞬きも忘れて祭壇を見つめた。

ああ、そうか。この子は贅だったのだ。森の奥に住む異形^{じぶん}が、本能の赴くままに近くの村を襲わないように。……そんなこと、私はしないのに。

捧げられた生贄が逃げることは許されない。そのために屠る行為はよくある。

「なんて、脆い……」

やっとの思いで掠れた声を出す。

人間は脆い。簡単に命が消える。それ以上に心が脆い。

エリザベートは少女にそっと手を伸ばした。

ひやりとした感触が、少女がすでにこの世にいないことを伝えてくる。

「……」

彼女の瞳に剣呑な光が宿る——が、すぐに消えた。

「埋葬しなきゃ」

呟いて、血に汚れた少女の髪を優しく撫でる。

一年中花が咲き誇るような、綺麗な綺麗な場所がいい。

直接手を下したわけではない。ただの自己満足でしかない。

でもそれが、自分にできるせめてもの償いだ。

横たわる少女を難なく抱き上げて、エリザベートは結界の中へと姿を消した。

ワインの入ったグラスを室内灯に透かすように掲げる。輝く赤い色は、摂取したばかりの生贄の血を思わせた。

盃に注がれた血のような――。

エリザベートは僅かに眉をひそめると、グラスを持ったまま立ち上がった。

「エリーザ？ どうしましたか」

急に立ち上がった彼女にラインヴァルトは怪訝そうな顔をする。

問いかけには答えずにエリザベートはカーテンを少し開けて窓の外を見た。

目に見える異変は感じられない。しかし闇に身を潜める生き物は確実にこの街に存在する。

「この国の魔術師に任せようかと思ったけれど……介入しようかしら。ゆつくりのんびりもいいのだけれど」

休暇で来たのだから、わざわざ手を下す道理はない。放っておいても近い内に始末されるだろう。相手はとても弱い。

だが――狩りの血が騒いでしまった。

エリザベートは右手を目の高さまで持ち上げ、ワイン越しに外を見た。

街が血の海に沈んでいる。

「では、この後の予定を変更しなければなりませんね」

頭の中でスケジュールを組み直しているのか、ラインヴァルトは考えるような仕草をする。

「悪いわね」

「ご主人様の気まぐれにはなれていますから」

しれっとした物言いが気に入らなかったのか、エリザベートが僅かに口を尖らせた。後ろを振り返ると、彼女の予想通りの笑顔がそこにあった。

「生意気ね。誰に似たのかしら」

エリザベートの顔には咎めの色は見受けられない。口元に柔らかな

笑みを履いてラインヴァルトを見つめ返す。

「さて……あなたの屋敷へ伺ってからは、主から手取り足取り指導を受けましたから……我が主に似たのでしょうかね」

「そう。じゃあ仕方ないわ」

ゆっくりとした動作で立ち上がり、ラインヴァルトは親愛なる主の前へと移動した。主を見下ろす形で直視する。

静寂の中で互いの視線が絡みあう。

ラインヴァルトは黙ったまま見上げてくるエリザベートを引き寄せてその腕に抱えこみ、柔らかい唇に自身のそれを重ねる。そのまま彼女の肩に顔を埋めた。

——あれは遥か彼方の出来事。あれから幾星霜もの時間が過ぎた。人間ならばとうに寿命を終えている。

不意に、出会った頃のラインヴァルトを思い出したエリザベートは小さく声を洩らした。

子供だった彼はいつの間にか自分と肩を並べるようになった——。
「何がおかしいのです？」

少し拗ねたような口調のラインヴァルトに破顔する。

こうして甘えられるのは嫌いではない。

エリザベートは彼の背に手を伸ばして自ら抱き寄せた。

天の盃 幕間

人間が足を踏み入れることのない深い森の奥で、エリザベートはひっそりと生まれ、ひっそりと暮らしていた。

ベッドに横たわっているエリザベートの指が緩く握られシーツに皺をよせた。

目が覚めた彼女は、まず瞳だけを動かして部屋を見回した。豪華ではないが品の良い家具が並んでいる。埃ひとつなく、常に掃除が行き届いていることが見てとれた。

だが、生命の気配は感じられない。その理由は誰かに聞かずともわかっている。

エリザベートは緩慢な動作で起きあがると、腰掛けたまま伸びをする。窓から差し込む陽の光を反射して、蜜色の髪が揺れた。

頭がぼんやりとしている。脳に薄い紗幕がかかっているようだ。瞑想をするかのように目を閉じて、エリザベートはしばしその状態で考える。

いささかあやふやな脳内の情報を整理してから立ち上がった。薄手の夜着のまま歩を進める。まだ本調子ではないから慎重に案内はなくても難なく屋敷の外へ出たエリザベートは、爽やかな風を受けて目を閉じた。

自然の息吹きを、生命力を感じて、ほう……と息を吐く。人の手が加えられていない森林は特に密度の濃い生気を得られる。住居はこのように不便なところではなく、もっと容易に移動できる場所を選ぶべきなのだろうが、その不便さがこの身を隠すにはもってこいなのだ。

鬱蒼と生い茂った枝葉は日光を遮り、昼間でも薄暗い。人間が森の中を目印もなく歩くことは難しいだろう。運が良ければ森を抜けられるが、大半は彷徨い続けた拳句に野生動物の餌食となるか、そ

のまま行き倒れだ。だから人々は必要がなければ森へ行かなかった。豊かな果実を実らせる木々は森の浅い所にもあり、奥まで進まずとも十分であつたから。

森の奥には、今では誰が建てたのか不明な屋敷がある。そこには不老不死の吸血鬼が棲んでいると言われており、近辺に住んでいる民は、最奥には決して近づかなかつたという。吸血鬼の怒りを買わなければ何も問題はないとも伝えられていたからである。

「吸血鬼、か……」

どこか自嘲めいた笑みを浮かべて彼女は呟いた。

ある意味で同種と見られるのは致し方ない。人間ではないのだから。

普段は緩やかに流れている自然の気の流れ——気脈は時折激む。個々の差はあれど、生きとし生けるものが持つ心の歪みは周囲に影響を及ぼす。生死の混在する人里は特に、ほんの些細ないざこざから、人々を脅かす闇が生まれてしまう。

放っておけば世の均衡が崩れるだろう。だが、その歪みを正すために、自浄作用というものが存在する。

主に水や大気の汚濁を取り除く自然の働きを指すのだが、この場合は怒り、妬み、悲しみなどといった負の感情が滞るのを防ぐ力のことになる。そして、負から生まれた魔物を屠る力でもある。

？力？は人間そっくりな姿に具現化されて、必要があれば歪みを正すためにその地へ赴き、いびつな闇を分解する。

人ではない？闇の分解者？は容姿だけではなく、肉体構造も人間と酷似している。傷を負えば真っ赤な血が流れ、致死に至れば死亡する。

相違点をあげると、少しの負傷ならば瞬時に治ってしまうし、なにより寿命が長い。優に千年は越えるであろう。精神が衰退しない限りはいくらでも生き続ける。

一見不老長寿に思える彼女は、だがそうであると断言できず、役目を終えて代替わりするときには、身体は塵と化し跡形もなくなっ

てしまう。そうすると、均衡が崩れないように新たな分解者が生まれる。それは古代から一度も途切れることなく綿々と続いていた。

「――」
エリザベートの眉が僅かに顰められる。

輪廻転生というものが当てはまるのだろうか。自分たちがどのような扱いをされてきたのか、これからどう思われるのか嫌でもわかる。

強く手を握り締めて、心に燦る感情を鎮める。

人々は？人の形をした自浄作用？のことを、怪異から人間を守る？天の使い？として崇め奉ることもあったであろう。しかしいつの頃からか？異形？であると恐れた。

人間を脅かすモノたちを退治する術者であっても、時に異質な存在として扱われてしまう。相手が神でも悪魔でも関係ないのだ。魔の性質を持つモノは、人間から見ればひとくりに魔物と呼ばれる。とはいうものの、魔物と呼ばれるのは苦々しく感じる。

エリザベートは考えを振り払うように頭を振った。

思うことは多々あれど、異形被いの役目を負ってこの世に生まれた使命は果たさねばならない。

金色の髪が風を受けて軽やかに揺れた。形の良い唇が何かの言葉を紡ぐが音は発されない。続いて、右の親指に牙をたてて傷をつける。

血がぷつくりと盛り上がり、指を伝って流れた。

傷口から少しずつ流れる血は赤い絹糸のようになり、空中でその身をくねらせる。やがて複雑な文様と、それを囲む丸い円を描き始めた。

エリザベートの血で描いた魔法陣だ。

彼女と向き合う格好で形成された魔法陣が金色を帯びた赤い光を放った。

辺りに風が巻き起こりエリザベートの髪をためかせた。乱れる髪を押さえることなく、彼女はただ黙って待つ。

木々の梢を揺らしながら何かが近づいてくる。

その気配はひとつではない。また、人間の持ちえるものではない。エリザベートに惹かれ集ったモノたちが彼女の前に姿を現した。全部で五体。

彼らの容姿は、外見が人間に近いもの、動物の姿のもの、妖魔に見えるもの——実に様々である。

森羅万象の素となる？ 気？ が具現化された、心霊的存在。それがエリザベートが使役しようとしているモノの正体だ。幸いなことに森の奥には核となる自然界の生気が満ち溢れていた。

集まった顔ぶれを見回してエリザベートは目を細めた。

協力を得られるのは非常に嬉しい。

未だ血が止まらない右手を魔法陣にかざして、人間には正しく発することが難しい言葉を紡いでゆく。

一体ずつ魔法陣を潜り、エリザベートから一滴の血を与えられて主従の契約を成す。

主との血の契約。その様子を偶然目撃してしまった者は、魔族の首領が自らの使い魔を増やしているように見えたのかもしれない。

こうして、この地に吸血鬼の伝承が誕生したのであろう。

さて、そんな因縁を持った彼女が生まれてから数百年が経過した。契約をした彼らはエリザベートから受けた命を忠実にこなす他、彼女の身の回りの世話もしていた。やがてエリザベートが役目を終えたときに契約は解かれ、自然へと還ってゆく。

時が流れ時代が変わってくると、彼女を取り巻く環境も変化した。

「森の奥に棲む化け物が怪異を被う」

——と耳にした貴族が、密かに異形被いを依頼してくることも少なくなかった。

私利私欲の依頼でなければ断る理由はない。役目をこなすため時

には人間と交流を深める機会も必要だからだ。その方が小さな情報が入りやすいし、通貨を手にするにはもってこいだった。

だが、基本の生活は変わらない。普段は森から出ずに、エリザベートは使い魔たちと共にひっそりと暮らしていた。

ある日エリザベートがいつものように屋敷で寛いでいると、従者のひとりが部屋を訪れた。

困っているらしく、少し白髪の混じる眉を下げて彼女に告げた。

人間の子供がここへ紛れこんでしまった、と。

エリザベートは軽く眉をひそめた。連れてくるように命じると、小さくため息をつく。

何人たりとも屋敷はおろか周辺には近づけぬよう結界が張り巡らせてある。手練の術者ならばともかく、ただの人間では決して破れない。

それなのに、この少年はいとも簡単にやってきた。人間が森の奥へ現れたのは、自分が知る限りこれで三度目だ。

一度目は偶然迷いこんでしまった男。二度目は吸血鬼じぶんの生贄とされてしまった少女。

心臓が痛みを訴えた気がして、エリザベートは硬く目を閉じた。しばらくして、迷い人だという少年が彼女の前に姿を見せた。

——疲れているのかしら。年は取るものじゃないわ。

心に浮かぶ感情をかき消すように、わざと呟くと、エリザベートは優しく問いかけた。

「坊や。ここへ何をしに来たのかしら」

「……あなたが、森の主様？」

「そう……ね。そうとも呼ばれているわ」

他にも、魔女、吸血鬼、血塗られた貴人、闇の支配者など——実に様々な呼ばれ方をしているの。面白いでしょう？

冗談めいた口調で言うが、少年が反応することはなかった。

少年は何とも言い難い表情をしていた。強いて言えば、無表情。

愛想笑いもせず、魔物を目の前にして命乞いもせず……。瞳の奥が

冷めきつている。

エリザベートは眉間に皺をよせた。

子供特有の生気が感じられない。頬にうつすらと残る青あざは虐待の跡だろうか。それに、袖から覗く手首の細さが気になる。

考えても埒が明かない。エリザベートはもう一度先ほどの質問を口にした。

「坊やは何をしにきたの？ 見たところ、狩りで迷いこんだ様子はないけれど」

少年は着の身着のままできたらしく何も持っていなかった。

狩猟目的で森へ入ったのならば、弓矢なり籠なりを身に着けているはずだ。

少年はエリザベートの目を真っ直ぐ見つめて答えた。

「生贄に。村長の息子が、森の主様を見た、姿を見せたってことは生贄が必要なのだって大騒ぎして。主様の怒りを静めるために僕が選ばれました」

一瞬、少年の言葉が理解できず息を呑んだ。

「……そう……」

三度どころではなく四度目であつたらしい。一体、いつ姿を見られていたのか……。それよりもなぜ気づけなかったのか。

彼女は記憶を辿り唇を噛んだ。思い当たるのは、ついこの間の異形被いだ。珍しく手こずり心身共に酷く疲れたのだ。

「……嫌ね。本当に老いぼれたのかも」

額に手を当てて自嘲気味に呟く。

そんな彼女を見て、少年が不思議そうな顔をする。年齢を感じさせない彼女の容姿では説得力がないのだろう。

こほんと咳払いをひとつしてからエリザベートは真面目な顔をした。

「わたしは人間ではないけれど、生贄は必要ないわ。だからあなたを村へ帰してもいいのだけれど……それでは問題が生じそうだから」
脳裏に血塗れの祭壇が浮かんだ。

二度とあのような想いを味わいたくはない。

少年に感情を悟られないように笑みを絶やさず続ける。

「知り合いの人間に頼んでもいいし、ここで暮らしてもいい。あなたの望むままに」

「じゃあ、ここに置いてください。一通りの仕事はできます」

少年の即答を聞いて目を見開いた。

村人たちが言う噂話を耳にしているだろう。なのに、死に近いこの場所に好き好んで残ろうとするなど正気の沙汰ではない。

真意をはかりかねたエリザベートが返答に窮していると、少年は初めて反応を見せた。笑おうとしているのか、引き締めていた唇を微かに緩めた。

「知らないところへは行きたくない。村に近いここへ置いてください」

「わかったわ。——シルフ」

エリザベートの声にひとりの男がやってきた。少年を連れてきた彼女の従者だ。

彼は視線を横に流して一瞬少年を見やり、それから正面を向いた。

「この子に湯浴みと着替えの準備をお願い」

丁度良い大きさの服はないが、少年が今着ている物よりはずっといいだろう。

主の命にシルフと呼ばれた初老の男が恭しく頭を下げた。

少年の服はどこどこ破けたり泥で汚れている。預かると決めたからにはそれなりの格好はさせたい。エリザベートには彼を奴隷のように扱う気はないのだ。

「坊や名前は？」

少年はほんの少し痛ましげに目を細めて、だが抑揚のない声で答えた。

「そんなのない。僕に用があるときは、おい、とかお前って呼ばれていたから」

「……両親は？」

少年が首を横に振った。

「僕が小さい頃に亡くなったと。よくは知らないけど僕は罪人の子だから、村長の家に預けられて、監視する、って」

それで奴隷のように扱われていたのか。罪人などと言っても本当のことなのかわからない。

合点がいつて見知らぬ人間に怒りを覚えた。エリザベートは心に湧き上がる怒りを鎮めるように自身の肌に爪を立てる。

「では、まず名前をつけなくっちゃね」

口調はできるだけ平然を装って言った。

「そうね……。ラインヴァルト、はどうかしら。強い支配者と言う意味よ」

「強い、支配者？」

オウム返しに答える少年にエリザベートは笑顔を返す。

「あなたの人生はあなたのもの。誰も干渉できない。わたしも、指導はしても支配する気はないわ。いつかここを去るときに、ひとりでも大丈夫なように。もう誰にも束縛されないように願いをこめて

……………嫌かしら？」

言って、更に笑顔を深めて少年を見つめる。

ラインヴァルトと名づけられた少年は、相変わらず無表情であった。しばし考えるような仕草をしてから首を横に振る。

「それでいいです。僕が呼ばれていることがわかれば、何でも」

やはり声に抑揚はなかった。

整った眉を歪ませる新しい主人に、ラインヴァルトは怪訝な表情を浮かべた。

扉を叩く音にエリザベートは目を落としていた書類から視線を上げた。

「どうぞ」

ゆっくりと扉が開いた。

「エリザベート様、お手紙です」

顔を出したのはラインヴァルトだった。

足音を立てずにエリザベートの元へと歩いてゆき手紙を差し出した。

そのとき年相応のふつくらとした手首が目に入り、エリザベートは自然と笑みを零す。

「……どうかしましたか？」

首をかしげるラインヴァルトに「なんでもない」と微笑みかけて、エリザベートは手紙を受け取る。

「ここには慣れた？」

問いかけると彼は頷いて答える。

「はい。シルフさんも、最初は怖い方かと思いましたけれど、丁寧に教えてくれますし」

シルフはエリザベートと契約をした使い魔のひとりである。彼は特に何も指示しなくても淡々と確実に仕事をこなす。

以前から何度かこういった経験があるのだろうとエリザベートは結論づけた。

術者の呼びかけに応え易い、あるいは応えてくれない、という違いは必ずある。

心霊的存在。言い換えれば精霊とも呼ばれる彼らは、こちらに好意を寄せてくれるなら心強い存在だ。逆に敵意を持たれると非常に厄介である。

もう一度目元を和ませてからエリザベートは蠟封された封筒を丁寧に開けて内容に目を通す。

途端に彼女の顔から笑みが消えた。

「お仕事の依頼ですか？」

その手紙を読み終わる頃を見計らってラインヴァルトが声をかけた。

「ええ。街中で血を吸われる事件が発生しているんですって」

「吸血の種族、ですか？」

ラインヴァルトは興味津々といった表情を浮かべた。

そんな彼の問いかけに肯定するように頷く。

「ええ、そうね……」

呟いて、エリザベートは手紙の続きに目を通す。その内容に柳眉が逆立った。

化け物の姿は一部しか目撃されていないという。細長い部分を器用に動かして獲物を捕らえているようだ。

想像するに、異形の正体は――。

「……妖樹？ でもあれはとうの昔に絶滅したはず……」
自分の祖先とも言える存在が消したはずだ。

「エリザベート様？」

怪訝そうな声には返答せず、エリザベートは手紙を凝視している。怒っているのか、何とも言えない表情だ。

「紅茶でもお持ちしましょうか？」

我に返って視線を上げると、心配そうに見下ろす瞳と目が合った。エリザベートは僅かに目を伏せて息を吐いてから、もう一度目の前の少年を見つめた。

「大丈夫ありがとうございます」

心から感謝の言葉を告げて笑みを浮かべると、ラインヴァルトはほんの少し表情を緩めた。

「それってどんな化け物なんですか？」

「……それ？」

反射的に疑問を返したが、手紙の内容を指しているのだと気づく。興味を覚えているのだろう。ラインヴァルトが瞳を輝かせている。

「ええとね」

エリザベートは無邪気な様子に苦笑しながらも口を開いた。

「直接見ていないから想像でしかないけれど、たぶん、妖樹」

「ようじゅ、ですか？」

疑問符が浮かんでいるらしい少年に頷く。

できるだけわかりやすい言葉を選びながらエリザベートが説明する。

「普段使わない言葉だからわかりづらいでしょうね。自らの意思で動くことのできる、樹の姿をした化け物よ。吸血樹、と言えばわかりやすいかしら」

動かなければ、ただの植物と見紛うだろう。そうして、油断した獲物を相手に悟られずに狩るのだ。鳥ならば枝に止まったところを。人間ならば木陰で休もうとしたところを。

文献にはこうも記されていた。

本来は森の奥で育ち、近づいてきた野生動物の血を採っていた。

その寿命は二ヶ月ほどと短い、一切の活動を止めて眠りにつけば、十年以上にもなる。

最も活発になるのは、記録によれば満月と新月の夜。花を咲かせ花粉を撒き散らし、獲物に幻覚を見せる。獲物の視界を奪い、己のいる方へ誘い込む。

「吸血樹はそうして集めた血を薄い膜の中に溜めて、空に掲げるそうよ」

枝で赤い液体を掲げる様は、勝利の美酒を楽しんでいるようにも見た。その様子を目撃した人間が模倣した事件もあった。

吸血樹自体はとても弱い、場合によってはとても厄介な存在になる。

「樹の化け物というよりも？樹に擬態した異形？と呼んだ方がいいかもしれない。わたしが生れ落ちるずっと前に根絶えたはずなんだけれどね」

どこかに残っていたモノが繁殖したのかもしれないし、誰かが育てたのかもしれない。

理由は正直どちらでもいいとエリザベートは思う。

自身に課せられた使命は化け物退治であり、異形の生態を調べる研究者ではないのだから。

「しばらく屋敷を空けるから、あとはお願いね」

エリザベートが告げると、

「……はい」

なんとも歯切れの悪い返答であった。

理由がわからずエリザベートは眉をひそめる。

「なあに？ 気になるから言って頂戴」

尚も言いよどむラインヴァルトに再度促すと、彼は緊張した面持ちで口を開いた。

「僕も、連れて行ってください」

思いもよらなかった言葉にエリザベートは呆気に取られた。

「街へ行きたいのなら、別の日に連れて行ってあげる。……珍しいことを言うのね。今までお願いなんて一度もなかったのに」

彼女の驚いた表情にラインヴァルトは少年らしい悪戯じみた笑みを浮かべた。

「遊びはまたいずれ。……そうではなくて、仕事のお手伝いがしたくて」

「子供が何を言っているの。わたしが相手をするのは妖魔と呼ばれる怪物の類なのよ。弱い人間ごときが対抗できるわけがないでしょう」

エリザベートは鼻でせせら笑った。わざと煽るようにしたもの、ラインヴァルトは動じていない。

頬杖をつき、ふうつと息を吐く。

人間との交渉に、人間を使うことを考えなかった訳ではない。同種同士で話をした方が潤滑に事が進む可能性が高い。街に拠点を設けるのもいいだろう。

だが、彼はまだ子供だ。巻き込むには経験がなく早すぎる。

「たとえ子供でも関係ない。エリザベート様と契約を交わせばいいのでしょうか？ 痛っ」

ラインヴァルトは口を閉ざした。頬に与えられた軽い衝撃に驚いて瞬きを繰り返す。

叩かれたのだ、と彼が理解したのは少し時間が経ってからだった。「契約がどういったものか、本当にわかっているの？」

感情のまま立ち上がり、見下ろすエリザベートは無表情だ。

その目の冷たさにラインヴァルトが息を呑む。それでも、負けじとばかりに言い返す。

「わかっています」

「いいえ、わかっていない」

幾分か低い声にも少年は怯まない。

しばし睨みあうかのように視線を交わす。ふたりの間に沈黙が漂った。

険しくしていた顔を僅かに崩してエリザベートがため息を吐く。

「わかっていない」

呟いてエリザベートは腰を下ろした。肘をつき組んだ両手を口元にあてて、もう一度息を吐く。

「……どこまで知っているの？」

上目遣いで訊ねると、ラインヴァルトは少し考えるような仕草をした。

「ええと……エリザベート様が血を与えて契約を交わした相手は、主の命に従い主と同じ時を過ごす。役目を終えたときには、主と共に自然へと還る……間違っていますか？」

「いいえ」

短く肯定し、しばし逡巡してからふたたび口を開いた。

「どこでそれを知ったの？」

感情を抑えてエリザベートが問う。使い魔たちが話すとは到底思えなかったのだ。

しかしそんな彼女の考えを覆す言葉が返ってきた。

「仕事の合間にみんなに教えてもらいました。お前もいずれは主のために働くのだから。世話をしてもらっているのだから当然だろう」と

思っていた以上にお喋りだったらしい。いや、彼らが多弁であると感じかず、また他言しないよう言い含めなかったのは自分の失態だ。

無邪気な顔の少年に怒る気も失せて、エリザベートは苦笑する。

彼は落ち着いた様子だ。押し黙って次の言葉を待っている。

「先ほども言ったように人間には立ち向かう術がないでしょう」

「それはそうでしょうけど。契約すれば問題ないんじゃないですか？」

どうかと尋ねられれば答えは是だ。人間も、素を正せば自然から生まれた生命。可能だろう。しかし、人間と契約を交わした結果がどのようなになるのか、試したことがないから彼女は知らないのだが。「わたしはできるだけラインヴァルトを巻き込みたくないの」

エリザベートは殊更優しく言葉を紡ぐ。これは心からの願いだ。何も知らないままですむのならそれが一番だ。

だが、そんな彼女の心中などお構いなしと言わんばかりに、ラインヴァルトが笑みを浮かべた。

「もう巻き込まれてます」

ぽつりと呟かれた言葉に、エリザベートは開きかけた口を閉ざした。

「贅となったときから僕の運命は決まったんです。エリザベート様言いましたよね？ 僕の人生は僕だけのものだって。最初のきつかけはあっても、どうしたいか決めたのは僕です」

ラインヴァルトは言って、エリザベートを真っ直ぐに見つめる。確かに、言った。

エリザベートは言質を取るような物言いに、少し顔を引きつらせる。

「——なかなか強情ね。誰に似たのかしら」

「さあ？ ここへ来てからは、ここに住むご主人様に色々と教わりましたから。その方ではないですか？」

しれっとしたラインヴァルトの物言いに啞然とする。

瞬きを数回繰り返してから、エリザベートはこみあげてくる感情に相手を崩した。

天の盃 五

「あ？天の盃？だ」

月詠神社を参拝していた少女の声を耳にして、彩華は手を止めて空を見上げた。

薄朱に染まった空の反対側に、上弦の月よりも幾分か膨らんだ月が浮かんでいる。

「えー？ …… こういうとき何て言うんだ……？ えーと、満月だから」

問われたもうひとりの少女はしばし唸り、結論が出たのか友人に向き直った。やや苦笑しながら口を開く。

「…… あれはちよつと満ちすぎじゃない？ 盃って言うより、ボール？」

言いながら片手首をぐるぐると回した。どうやら料理で使う泡だて器を表現しているらしい。

彩華はふたりのやり取りを見て、もう一度空を見上げる。しばらく考え事をしていたようだが、答えは出なかったようだ。隣に立つ少女たちに問いかけた。

「ねえ、天の盃って、なに？」

「知りません？ 月の神社だから、そういう話も詳しいのかなって勝手に思ってたんですけど……」

言いづらそうに少女が口籠もる。その様子に彩華はくすりと笑った。

「先輩のときってそういうのなかったですか？」

質問されて、彩華はうん、と頷く。

「でも七不思議とかはあったよ。中学にもあったし」

学生時代を思い起こして懐かしむ。それに立場柄そういった話は意識しなくとも耳にする機会が多かった。

だが知らないことも沢山ある。

疑問符が浮かぶ彩華に、ふたりは月にまつわる話を丁寧に説明した。

「皿に水が満ちてゆくように徐々に願い事が叶うっておまじないです。月の雫が器から溢れる頃には願い事が叶うだろうって。月をグラスに見立てることもあるとか」

「それで受け皿の月、天の盃、なんだね……確かに三日月って平瓮^{へいか}に似てるし」

これね、と授与所に置かれていた物を少女たちに見せる。彩華が手にしているのは、薄い皿状のものだ。

「なんですかそれ」

「神様への供物を盛るんだ。土器^{かわらけ}って言ったりもする。これには米か塩ね。盃^{へいし}って言うとお酒のイメージだけど、お酒はこっちの瓶子^{へいし}に入れて……」

彩華はそう言いかけて口を嚙む。それから少し考えるような顔をした。

神に酒を供えるときは、いわゆる猪口のような器は使わない。

「……ああでも御神酒盃として使うこともあるから間違っではないかな？」

後半は誰かに聞かせるために言った訳ではないらしい。きよんとする少女たちを尻目に彩華は独りごちた。考え事をしつつも手は休めていない。長年の慣れなのだろう。手際よく片づけている。

「先輩？」

怪訝そうな声に我に返った。

「ごめんボーっとしてた」

非礼を詫びると、少女は慌てて否定した。

「いえ。こちらこそお仕事中に押しかけてすみません」

「気にしないで」

笑って、表に出していた神籤の筒や御守の箱を授与所内に入れる。「もう閉める時間だから」

夕方となれば参拝者はまばらだ。行事があれば違うのだが、日が

落ちる頃を狙ってわざわざ参拝する者は少ない。

「そろそろ暗くなるけど、帰らなくて大丈夫？ 変な通り魔事件もあるようだから、車出そうか？」

噂がただの噂ではないことは知っている。だが、悪戯に騒ぎ立てて相手を混乱させるのは避けるべきだと判断した。

「大丈夫ですよ。ここから近いですし」

彩華の申し出を少女は柔らかに断った。だが、

「本音を言えば、ちょこつと怖いですけどねー」

そう言っただけで恥ずかしそうに笑う。

「えー？ そういう話、好きだったじゃない」

高校時代を思い出した彩華が笑いながら訊ねる。

途端に、少女が真顔になった。

「え……まあ……今も好きなんですけど……」

言いよどむ少女の顔は心なしか青ざめて見える。

「何があったの？」

様子がおかしい事を察した。いつもは怪談話も少しユーモアを含んでいたのだ。

彩華は顎を引いて真っ直ぐに少女を見た。自然と術者の顔になる。

「そのために来たんでしょー」

友人に促されるが用件を切り出せないでいる。

しばらく黙っていた少女は、やがて話しはじめた。

「その、噂話を聞いてたら興味持って……色々調べてみたんですよ。あたしが聞いたのって、同じ？ 天の盃？ って名前でも、受け皿の月のおまじないと、おまじないをした人間を食べちゃうって二つあって。似ているけど違うところが面白いなって思ってた」

幾分か声は小さい。怯えているのか、肩が震えている。先ほどまでの陽気な感じがない。

「そうしたら、今度は別の？ 天の盃？ の話を聞いて」

他にも情報はないかと思い、検索サイトを開いた。

「色々な噂話を集めているサイトに、魔女が使い魔を操って血を集

めているっていうのがあって」

使い魔には様々な種類があり、一般的には動物が多いとされている。状況にもよるが、鳥が空を飛んでいる姿を目撃して勘ぐる者は少ない。

「人に見えないように姿を消して行動することもあるとか」

ただの噂。ただの作り話。

心のどこかでそう思っているから、怖いという感情は一切なかった。寧ろ神秘的に感じた。

「でも、それを読んだ次の日だったかな。半透明の、鳥みたいなやつが、すーっと目の前を横切って」

なぜだかわからないが急に怖くなってしまった。

はつきりと見えない霊体も、血を欲するというのがのも、怪談話では定番だ。「これを見た者は呪われて必ず死ぬ」などと書かれていても平気だ。今までどんな物を観ても？怖いと思うことを楽しむ？以外に感情は起きなかった。

——でも、霊体験と思えるものは今回が初めてだった。そのうち友達と心霊話をしただけだったとしても？霊的な物に関わってしまった？と思い込むようになった。

「色々なこと考え出しちゃって、そのせいか、変な夢まで見ちゃうし……」

そう言って、少女は下を向いたまま微動だにしない。

「うーん……そうだねえ……」

それだけ言って、目を細める。神経を集中し妖気を探る。

少女は俯いたままだ。

少女に妖気の類は感じられない。偶然遭遇しただけでも影響を受けるものなのだが、一片も残っていない。

かといって、嘘を吐いているとは思えない。

成り行きを見守っていたもうひとりの少女が声をかけようとした頃、ようやく彩華が口を開いた。

「大丈夫……と言っても心配だよね」

明るさを帯びた彩華の声に少女が顔を上げる。いつもと変わらぬ表情に拍子抜けしたのか、放心した様子だ。

「どういった類のモノを見たのか、話だけじゃはわからないけど、変なモノではないよ」

何の迷いもなくそう断言されて、少女がますますポカンとする。

「……ヘンな顔！」

「え？ ……ひどーい！」

友人の茶化しにあい、白くなっていた少女の頬に赤みが差す。話したことで気が軽くなったのだろう。

ふたりにつられて笑みを零していた彩華だったが、不意に真顔に戻って言った。

「実際、妖怪や幽霊とか昔からの不思議なモノって、目の錯覚が多いからね。それつきり変なことがないのなら、気にしなくて平気。昔ながらの妖怪の話って、悪さをする子供を戒めるために作られたようなものだから、怪談話が怖いって思うのも自然な感情だから、問題なし」

もう一度言い切ると、少女は安心感が増したのか、にっこりとした。

その後もふたりで楽しげに笑う姿を見て目を和ませる。

遭遇したそれが幻ではなく本物だったならば、僅かな不安の種に他の異形が近づく可能性はある。

だが、もう大丈夫だろう。

彩華が授与所の扉を外から閉め、声をかけようとふたりの方を向いたとき、

「——こあら。高村サボるな」

「はいっ。……？」

背後から聞こえてきたやや低めの声に彩華は肩を揺らす。

だが、すぐに訝って頭をひねる。突然のことに驚いて、いつも以上に背筋を伸ばしたのだが、声質に違和感を覚えたのだった。

どことなく笑いを含んでいた。地声ではなく作ったような不自然

さ——それに、聞いたことのある声だ。

「有紀ちゃん？」

すると、振り返らずとも楽しげな様子が伝わってきた。

「正解」

横から顔を出した有紀が、にやりと意地の悪い笑みを浮かべた。
神妙な雰囲気をかき消すように境内に笑いが起きる。

遠くを歩いていた黒猫が、一度だけ不思議そうに振り返った。

天の盃 六

等間隔に設置された街灯に照らされて、薄暗い道に人影が現れた。軽い足音を立てて歩くその人影は女のものだ。ひとつに纏めた黒髪が動きに合わせて揺れている。薄闇の中でも柔らかい光を放つその様は、何かを誘っているようにも見える。

女はどこへ向かっているのか。一度だけ夜空に浮かぶ満月へと視線を流したが、それ以外は脇目も振らずにただ真っ直ぐ前を見つめて歩いてゆく。

時刻は夜半前。

住宅が並ぶこの通りは夜が更けると行き交う人も少なくなるが、閑散とした雰囲気にはならない。僅かながらでも外へ漏れる家の明かりや生活音が緩和しているのだろう。

「――」

女の歩みが一瞬だけ止まった。自動車のヘッドライトを目を細めてやり過ぎ、何事もなかったかのように横道へと入る。

途端に静けさに包まれた。民家はそこかしこにあり、真夜中でも決して無音ではないのだが、表通りとは雰囲気が変わる。

「どうした？」

路地へ入って少ししたところで、声がかかった。

女はひとりではなかった。彼女の足元には付かず離れずの距離を保ちながら歩んでいる黒い塊がいた。

「どうした……って何が？」

足を止めて訊ねると、暗闇に丸い光が浮かんた。黒い塊が数歩近づき女を見上げた。

街灯が切れているらしく、彼女の周りは薄闇に包まれている。

「曲がる前、一瞬止まっただろう？ 何か感じたのか？」

「ああ……」

合点がいつて、女――彩華は肩を竦めた。苦笑しながら足元にい

るであろう黒猫の疑問に答える。

「違うよ。ライトが眩しかっただけ」

「そうか。人間は色々と不便だな」

瞬きを繰り返して目が暗闇に慣れてくると、それまでぼんやりとしていた塊の姿が見えてきた。黒猫の尻尾が左右に揺れている。

「ねえ、何も準備してこなかったけど、本当に大丈夫なの？」

幾分か声を抑えて聞く。

まだ視界ははっきりとしていないため、相手が頷く気配のみで回答を受け取る。

続けて、黒猫が言葉を発した。

「ああ。お前とオレがいれば十分」

「出かける前もそう言ったけど、どうということなの？ 月影」
重ねて問う頃にやっと目が慣れた。だが、少々不便である。

彩華は手招きしながら、少し離れた場所へと移動する。壊れていない街灯の下だ。

おとなしく後をついてきた黒猫と視線をあわせるべく膝を折った。ついと辺りに視線を走らせて誰もいないことを確かめると、彩華は再度訊ねた。

「どこにアレが出現するかわからないから、餌を撒こうと思ってな」
一度対峙したお陰で感じる妖気からおおよその検討はつくが、こちらの行動を読まれて逃げられては元も子もない。大した知能はなさそうだが念のため、とは月影の弁だ。

「彩。お前の血を——そうだな、一滴くれ」

「血？ 一滴でいいのね？」

首を縦に振るのを確認して、彩華は小さく言葉を紡いだ。

彼女の右手に淡い光が集まる。それを指で摘むようにすると、光は細長い針状になった。左手の親指に持ってゆき、先端を皮膚に潜りこませた。

「……っ」

軽い痛みに眉をしかめて針を離す。

「はい」

傷口から流れ落ちるそれをこぼさぬように月影の目前へ指を持つてゆくと、彼は血へ息を吹きかけた。

途端に、一滴の血は青白い光を帯びて霧散する。

ふたりの周りに浮遊していたそれは、やがて何かに呼ばれたかのようにいずこへと飛んでいった。

「これだけでいいの？」

言いながら、彩華は右手の指を擦りあわせた。すると、音もなく、自身の気力を寄り合わせて作成した針が消滅する。

左手の傷はすでに塞がっている。小さな傷だから心配無用なのだが、幼い頃から『血には気をつける』と言われ続けているため、確認する癖がついているのだった。

彩華は視線を黒猫に戻した。

「居心地が良いのは、真つ暗な、澱みきった陰影だが、光に群がる虫と一緒に。生命力溢れる存在だとか、力を持っているやつに惹かれて寄っていくのさ。術者の生命力溢れる気に、オレの気を上乗せしたからな。これ以上はないってほどの良い餌だ」

月影が上出来と言わんばかりに仰々しく頷く。

先ほどの血を餌にして異形を誘い出すつもりらしい。

「本当は、生まれたての赤ん坊が良かったんだけど、それは可哀想だからな」

昔は生贄にしたって言うが――。

月影の呟きに彩華が顔をしかめる。

「やめてよ」

「……すまん」

素直に謝る月影にそれ以上文句は言わず、そつと息をつく。

生命力は成人よりも生まれたばかりの命の方がより強い。なにしろ命がけで生まれてくる。それに、手が加えられていない無垢な存在は、それだけで価値があるのだ。

彼の言っていることはわかる。事実を述べただけで、悪気がなか

ったのもわかる。

だが少しだけ気をつかって欲しかったと思うのは、自分勝手だろうか。

彩華は唇を小さく噛んだ。

このような生業をしていると、あまり耳にしたくない内容も入ってくる。特に海外の文献には、ぼかして書いてあるものの、かなりきつい物もある。

今更何も知らない振りをする気はないのだが、心が痛む話はできるだけ聞きたくないのが本心だ。

だがそれは、術者としては甘い考えである。正邪両方を知ってこそ真実を見極められるのだ。

彩華は心に浮かぶ様々な感情を胸にしまい立ち上がった。

思い込みや偏見は冷静な判断力を奪う。今は考えるよりもやらなければならぬことがある。

月影を促して歩き出した。

彩華の髪が夜風に吹かれた。

纏めているとはいえ、少し強い風に煽られて乱れる髪を押さえながら、彩華は不思議そうな声を洩らした。

目の端に、きらりと光る物が映った。

「なんだ？」

なんでもない、と言いかけて口を閉ざすと、月影も同じように神経を張り巡らせた。

鳥の羽音がする。姿は見えない。気のせいだと言われてしまえば反論はできないほどの小さな音。それも一瞬だった。

彩華は聴覚に頼るのは諦めて、精神を研ぎ澄ました。

僅かだが気配を感じる。妖気ではなく、どちらかというところ森気――自然の生命力に似ていた。

力を感じる辺りに集中する。

暗闇の中、遠くに光を見つけた。淡く発光しながら宙に浮いている。

「違う。飛んでるんだ」

彩華の眩きが聞こえたのか、それとも角を曲がったのか、光が消えた。

一瞬視えたアレは、妖怪や付喪神の一種ではないようだ。だとすると、思い浮かぶのはひとつ。

「式神っていうか、使い魔っていうか。……見たって言うてたの、あれかな……」

誰に言うともなく呟くと、黒猫の尻尾がぴんと張った。

「ああ……この間、神社に来ていた奴らか」
納得したように言い、

「女三人寄ればなんとやら、ってな」

と、身体を揺すって笑う。

「ごめんね。うるさかった？」

今更ながら、月詠尊が騒音を好まないことを思い出し、彩華は非礼を詫びた。

神聖な神社でやたらと騒ぐのは以ての外だ。祭の最中ならばともかく。

内心失敗したと思ったが、済んだことはやり直しはできない。

彩華は恐る恐る相手の様子をうかがう。月影が怒っている素振りはない。

「騒々しいのは好かんが賑やかなのは悪くない。あいつも、気に障るなら表に出てこないで奥に引っ込んだままだろう」

月影の言葉は尤もだ。本気で嫌ならば人型などならず、とうの昔に人界との関わりを避けているはずだ。

彩華は小さく頷いて立ち上がった。いつまでも一カ所に留まっていれば不信に思われていまう。なにより、ここは狭すぎる。

「道草したな。急ぐか」

頷いて、彩華は歩みを早めた。ここから目的の場所は少しばかり離れている。

「ねえ」

数歩先——といっても相手は猫の姿なので、実際は彩華の歩幅で一步程度なのだが——を歩いている月影が振り向く。

「うん？」

「えっと……ね」

妖が？ 畏？ にかかるにはしばらく時間が必要だ。それまでに聞いておきたいことがあった。

彩華は以前から聞きそびれていた疑問をおずおずと切り出した。

「今回の異形って、結局どんなモノなの？」

外来種とも呼べる異形で、血を好んで吸う。おそらく外見は木の化け物。

どうやら満月と新月の夜に活発になる。

断片的に特徴は聞いているが正直言つてよくわからないのだ、と言つと、月影は困つたような顔をして笑つた。

「なんだ。わからないまま調伏に出たのか？」

「うん。わたしの力で退けるのなら、大した問題じゃないと思ったから」

彩華が素直に頷くと、喉の奥で笑う声が聞こえた。

「んーまあ……それなりに、弱いな」

言つて、月影は塀の上に飛び乗つた。

そのまま進んで行くので、彩華は黙つて後をついていった。

「洋物と対峙するのは、たぶん初めてだからなー。オレもどう言つたらいいのかわからんのだがなー」

「たぶん初めて、なの？」

「もしかしたら相手のことを良く知らずに消しているかもしれないが。オレ単体は、ないな」

後半きつぱりと言いつちられて僅かに眉根をよせる。

いい加減だと思つた訳ではない。

どのような性質か、弱点は何か。一切の情報がなくとも対応可能ということに、人間とは違わたしたちうのだと改めて実感したのだ。

「日本にも樹霊なんてのがいるけど、それとはまた違っているしな

あ。そもそも、神の括りになる精霊とアレを一緒にしたら罰当たりか」

独り言のように呟いて、月影はちらりと背後に目をやる。
異変はまだない。

「月影は正体わかつてるの？ 思い当たる似た妖、とか」

訊ねると、黒猫は口の端を持ち上げて笑った。

「さあて。何とも言えんな。一種の付喪神と考えてもいいと思うが。――例えば、河童が長い年月を経ても妖樹になるのは不可能だ。異なる存在だからな。だが、ただの樹木に何らかの魂が宿れば、それが妖樹と呼ばれる存在になり得るかもしれん」

もしかしたら文献や先祖が残した記録書に記されているかもしれないが、如何せん確認する時間はほとんどない。

なにしろ高村家の書庫には、一日や二日では全てに目を通すことが不可能なほどの書物が眠っている。しかも訳有りで処分してしまった物も多数あるのだという。該当する書物が必ずあるとは限らない。

それに、急に入ってきた仕事では一々調べていられない。相談者は一刻も早く解決をと望んでいるのだから。

「都度有利な方策を見つけるのもいいが、大抵は退魔法をひとつ知っていれば問題ないからなあ」

のんびりとした月影の言葉に頷いて返す。

最も良い方法を探している間に事態が悪化しては意味がない。
ならば今持ち得る術で迅速に事を終わらせるべきだと彩華は考える。

「じゃあ、もう単純に樹に擬態した化け物と捉えていいのかな」

月影が頷いた。

樹霊。または木霊。

片や土地を守り人間を守るもの。片や人間を脅かす異形。不可思議な存在として見れば一緒と思えるが、似て非なるものだ。

「古臭い妖気と真新しい妖気が入り混じってるような感覚は、いさ

さか気になるんだけどなー。しかも複数ってなあ」

ぶつぶつと呟く月影の言葉は、彩華の耳には入らなかった。

「……どうした？」

考えこんでいる彩華に気づいた月影が声をかけた。

「繁殖方法も植物に似てたら嫌だなあって」

種をどこかへ隠されてしまったら探しようがない。

「それはオレも考えた。だがもう一度妖気を体感できれば、残滓だろうが仲間だろうが逃がさん」

なんとも頼もしい言葉だ。

思うと同時に、彩華は真剣な面持ちになった。

本当は、自分で見つけ出さねばならないだろう。誰かに頼ることなく。いくら仕事を手伝ってもらっているといっても、まず先頭を切るのは己でなくてはならない。

思わず手のひらに爪を立てていると、

「あまり気に病むな」

月影から声がかかった。

心情を読んだかのような絶妙なタイミングに驚いた彩華が足を止める。

「お前はわかりやすい」

露骨に顔に出ていたのだろう。愉快そうに笑われて、彩華が渋い顔をする。

「真面目な話、なにも全部ひとりで抱えこむ必要はないんだぞ？」

向き不向きは必ずあるし、役割分担というものは大事だ」

「役割分担？」

月影が頷いた。

「すべてのことをひとりでやろうとして、結局手が回らず全部を駄目にしたら不毛だろう？　ならば素直に手を貸してもらえ。そうして、まずは得意分野で力を発揮すればいい」

「そうね」

彩華が頷き返す。

最初から最後までひとりでやり遂げることも大事だろう。しかし己を過信して、ただならぬ事態が生じては意味がない。

彼の言うように、まずは自身の役回りをきちんとこなすこと。

では、自分には何が可能か。

退治屋としての役割は、霊障の原因を突き止めてそれを祓うことだ。原因がわからなければ、父や兄——それこそ月詠尊に助言を乞う。

時にその逆も然り。あまり馴染みのない事柄について意見を求められる場合もある。

神社の祭神である月詠尊とは縁あつて関わりを持っているが、怨霊調伏に関しては彼の親切心からだ。本来ならば放っておいてもよいものを、気にかけて手伝ってくれている。

「ご縁つて不思議なものね」

ぼつりと洩らした言葉を耳にした月影が、なんだと訊ねるような仕草をする。

先祖が月詠と出逢い絆を深めなければ、月影と出逢うこともなかった。

神社を通して知り合つた友人から、後々ヒントになる言葉を得たりもする。

互いに助け合う関係を築いてゆくことは必要だ。何物にも代えがたい貴重なものだろう。

神妙な顔つきで考えていると、横から笑い声が聞こえた。目を細めて黒猫が笑っている。

「そんなに深く考えんでも。調伏に関してなら、お前の場合は……

あれだ。神の胃袋をガツツリと」

「なによそれ」

彩華は意味がわからず首を傾げる。

「人ならざるものを手懐けるの得意そうだからな、お前」

褒められているのか馬鹿にされているのか。少し複雑な気持ちで彼を見た。

「でも、妖怪はどうかと思うからなあ……。神を喜ばせて、縁を持つて、困ったときに助けてもらうと。巫女の仕事だな」

「それなら巫女神楽で十分よね？」

「神楽？は文字通り？神を楽しませる？ための舞だ。神を喜ばせて縁を結ぶ。」

神事はそれで事足りるはずだ。考えを巡らせても、それ以上は思いつかない。

「舞だけでは不十分だ。神饌しんせんは、なくてはならないものだ」
言い切られて彩華は少々面食らった。

神社には、神事の最後に？直会なおらい？という行事があり、神前に上げた神酒や神饌を神職や祭典に関わった者たちでいただく。これには、神霊の力を分けてもらい加護をお願いするため、ひいては神との繋がりを得る意味がある。

だから、彼の言い分には確かに納得のいくものはあった。

——あるのだが。

彩華から、ふっと笑いがこぼれた。

「……それって……月影が遠回しにお供え物を欲しがってるだけじゃないの？」

図星なのかそれとも丁度そのとき聞こえなかったただけなのか、返事はなく、黒猫の尻尾が揺れるだけであつた。

そつえば、と彩華は思う。

毎朝の神饌は神前に供えているが、それとは別におすそ分けなどをしていた。

しかし、ここ数日は気が回らなかった。その程度で怒り出すような心の狭い神ではないが、迂闊だったかもしれない。

「何か食べたいなら用意するけど。……もう夜中だし、帰ったら御神酒持つていこうか？」

尻尾は相変わらず左右に揺れている。が、一瞬だけぴんと張ったのは見逃さなかった。

強張っていた彩華の頬がいくらか緩んだ。

天の盃 七

しばらくして、行く手に山の頂が見えてきた。山と言っても、せいぜい小山か、丘程度の標高しかないのだが。

流れてきた雲によって月が隠れた。幾分か辺りが暗くなる。

彩華は夜空を一瞥して、

「……騒がしくなっても平気かな」

あの場所に棲むふたりの子供の姿を頭に描き呟いた。

目指すは空輪山だ。くうりんやま近場でそれなりに広い場所。なおかつこちらに有利なところとなると、選択肢は少なくなる。

話はつけてある、と月影が言った。

「月詠と縁を結んだんだ。元々気脈が乱れていたのを正してやったんだから、それなりに手伝いはして貰わなけりや——」

月影が突然ぴたりと止まり、口を閉ざす。少し遅れて湿った空気を肌に感じた彩華が足を止めた。

息を詰めて様子をうかがう。静まり返った辺りからは何も聞こえない。

——否。

ガサガサともズルズルとも聞こえる物音が近づいてきた。

背中に冷たいものが流れた気がして、彩華は思わず身震いする。

漆黒の闇に、妖気が満ちる。

彩華の顔にさつと緊張が走った。後方から駆け抜けてゆく風が髪を乱す。

風は生温く感じた。

すかさず振り返った彩華は、塵が入ったのか、反射的に目を瞑る。少しだけ目を赤くしてすぐさま前方に向き直る。

言葉も、視線すらも交わさずにふたりは走り出した。

次の瞬間、背後からガンッ、という音が聞こえた。続いて、重量がありそうな、鈍い金属の音がした。

気にはなるものの、振り向いている暇はない。

もう一度、重い金属音が後方で聞こえた。感じる妖気は、距離が縮まっているものの、まだ少し離れている。

じわじわと追ってくるモノを確実に連れて空輪山へと行かなければ――。

ふいに、彩華の身体が僅かに傾いで、動きが遅くなった。眉間に皺をよせて懸命に足を動かすが、とうとう止まってしまう。

「ばかたれ。こんな陳腐な仕掛けに捕まってどうする」

地面に降りた黒猫は、暗闇を睨みすえてから彩華を一瞥する。

「ごめん」

月影の叱責に、彩華は短い返事しか返せない。全身を蝕む倦怠感のせいで、思うように身体が動かない。それでも一步また一步と進む。

同時に、短く深呼吸を繰り返すと、身体中を巡る毒が少しずつ外へ出てゆく感覚を得た。

だが、安堵したのも束の間。

「待て、彩」

己を制する鋭い声に、彩華は再び走り出そうとして止めた。足下を通り過ぎた陰気な気配を感じ取り、前方をひたと凝視する。薄暗い街灯に照らされたマンホールが、ずつ……と音を立てて浮いた。

目に見えぬ力が働いたのかと思ったが、そうではなかった。何かが下からマンホールを押し上げたのだ。

月影が彩華の前に立つ。その身は牽制するように青白い焰を纏っている。

「妖……」

小さく声をもらして彩華は同じように一点を睨みすえた。意識を集中せずともそのモノを目視することができた。よほど自信があるのか、異形は己の姿を隠そうとはしていない。

穴から、まず揺らめくモノが姿を現した。焦げ茶色のそれは、先

端が細く、地下に向かって徐々に太くなっている。表面がゴツゴツとしているのが見てとれて、触れれば皮膚が切れそうだ。

あれが妖樹の枝なのだろう。繋がっているはずの幹にあたる本体は、地上からは確認できない。

枝は獲物を探しているだろうか。不規則な動きを繰り返している。波のようにうねるその様子に嫌悪感を抱いて、彩華は思わず顔をしかめた。

「うわ。よくよく見ると醜悪だな。木なら植物らしく、ぴんと背筋伸ばして花でも咲かせていれば良いものを」

「ちよつと遭遇早過ぎだと思っけど、ここで退治する？」

吐き出された感想に心の中で同意して、彩華はひとつの案をもちかけた。

場所が狭いのは難点だが、相手は確かに弱い妖だ。一、二発で仕留める自信はある。

「それでも構わないが」

月影の焰が僅かに強まった。

「折角だから、全体を拝むってのはどうだ？」

彩華は考えるような仕草をした。

後学のために確認しておくのは良いかもしれない。

承諾すると、月影が駆け出し宙を舞った。軽い身のこなしで、浮いているマンホールへと降り立つ。同時に、その体を包む闘気が光を増した。

ガンツと大きな音が響く。勢いに任せて、月影がマンホールの蓋を閉じたのだ。

音にならない悲鳴が空気を振動させる。

下水道へと続く穴から地上へと露出していた妖の一部が、蓋が閉じたときの衝撃で切断されたのだ。

本能なのだろうか。樹木の枝を思わせるその部分は、地面へ落ちてからもしばらく動いていた。ぴくりとも動かなくなったそれは、端から崩れて砂のようになってゆく。やがて、風に煽られる頃には

大気に溶け込み跡形もなくなった。

それっきり無音だ。足下から妖気は感じるものの、動く気配は感じられない。

「うん？」

月影が声を洩らした。彼はまだマンホールの上に立っている。その体が浮いた。

ず……と音をたててマンホールが少しだけ開いたのだ。隙間から妖気が流れ出てくる。

妖はそれ以上何もせず、こちらをうかがっている様子が感じられた。

「逃げないのならば好都合」

反撃する機会を狙っているのだろうか。西洋の異形は妖気を洩らしたままで、いまだに動かないでいる。

逃げ出さずこちらに興味を持ってくれたのならば、まずは作戦成功だろう。

「んじゃ、ぼちぼち移動するか」

己の足下を睥睨して、月影が言った。

隙間から、妖樹の枝とおぼしき細長いモノが這い出てくるのが見えた。

「彩、行くぞ」

月影が四肢に力をこめた。

ふたたびマンホールが閉まる。にじり出ていた妖樹の一部は、その衝撃で消え去った。

下から空気の抜けるような音がして地面が微動する。

妖樹の怒気をかすかに感じながら、ふたりは駆け出した。

ふたりを次の獲物と狙っていた妖樹は、徐々に速度を上げて追いついていったらしい。

目のマンホールが先程とは打って変わって素早く開き、下から

異形が這い出てくる。

仄暗い闇の中。一本の木がその姿を現した。幹はずっしりとしていて、彩華が想像していた以上に大木であった。それでも二メートル弱だろうか。伸びる枝には、葉はほとんど生えていない。

ぺたり、と湿った足音がした。

目を凝らしてよく見ると地面が濡れていた。

おそらく下水道を通って水に濡れたのだろう。通常、土に埋まっている根の部分が色濃く変わっている。

ふいに妖樹がひとまわり成長したかに見えて、思わず息をのむ。

だがそれは彩華の思い違いだった。妖樹が身をくねらせながら、彩華と月影に近づいたのだ。

「随分自信あるんだなあ」

月影が感嘆の声をあげた。されど眼光は鋭い。

ざわざわと音を立てて枝がしなった。そのとき生じた葉音は、まるで妖樹が笑い声をあげたかのようなだった。

枝をくねらせている様は、獲物を前にして喜々としているように思える。

彩華は顔をしかめた。

「どうした」

「うねうねしたのって、わたし苦手みたい」

言って、彩華は身震いする。心底嫌そうにうんざりした顔をしている。

「じゃあ、ここの子供も嫌か」

「神様と眷属は別」

どこか面白がっているような響きを感じて、にべもなく返す。

ここの子供、とは、空輪山に棲む蛇の精霊たちのことだ。彼らとはやはり縁が巡って、今では月詠神社と密かに繋がりを持った。気脈も繋がっているため、他の場所よりも有利に動ける。

また一步、妖樹が近づいた。

「彩。山の中に追い込め」

「わかった」

素早く距離を測る。

妖樹との間は目測で三メートルあまり。階段はすぐそこだ。

彩華は、深くひと息吸い込んでから神呪を口にした。

言葉は瞬く間に形を成して、淡く光る矢に変化した。そうして、すぐさま妖樹へと飛んでゆく。

光の矢は妖樹の幹を掠めて落ちた。と同時に悲鳴が上がる。

一本目の矢は妖樹の気を逸らすためにわざと外した。だが、続けざまに放った二本目が、的確に撃ち抜いたのだ。

奇妙な声をあげながら妖樹が身悶える。それでも致命傷にはならないためか、活動を停止する様子はない。

「縛り縄 不動の心 あらん限りは」

間髪を入れずに彩華が言葉を紡ぐ。

言霊の力により大気が歪み不可視の縄が現れた。縄は瞬時に妖樹を捕らえて動きを制御する。

耳障りな音波が辺りに響き、彩華は眉を寄せた。

だがそれも一瞬のこと。妖樹から目を逸らさずに言葉を紡ぐ。

次いで現れたのは、柄のない刃だった。風刃と化した霊力は、術者の命を実行すべく飛んでゆく。旋回しながら妖に近づき、勢いを衰えさせることもなく、むしろ増しながら襲いかかった。

空気を切り刻みながら不可視の刃は妖の体を伐採してゆく。幾つかの枝が地面に落ち、瞬時に跡形もなく消え去る。

妖の絶叫が響き渡った。

彩華たちは別段慌てることもなく、妖樹を見据えている。

妖の声は常人の耳に届かないとわかりきっていたためだ。霊力の長けている者ならば気づいたであろうが、素質のない人間には？強い風が吹いた？その程度でしかない。

怒気を孕んだ咆哮が空気を振動させる。風は妖樹の憤激を表しているようで、重圧感を含んでいた。

虚を衝かれた彩華の身体が傾ぐ。

妖は、その一瞬の間を見逃さなかった。

残っていた枝が勢いよく伸びて攻撃を仕掛ける。鳶のように柔らかくしなり、彩華の左手首に絡みつく。

「——くっ」

前へ引つ張られるのを足に力を入れてやり過ごし、体勢を立て直す。

「彩っ」

「平気」

短く返してから、

「風斬」

やはり短い呪を紡ぐ。効果は弱くなるのだが、手間がかからない分速効性があり、使う霊力も少なくすむ。

腕を拘束していた枝を難なく切り落として彩華は身を引いた。

風が唸る。

残った枝を闇雲に振り回して妖が騒ぎ立てた。

視線を交わしてから、彩華と月影は階段を駆け上がった。

一気に登りつめても息が弾むことはなかった。やはり気脈が神社と繋がっているからだろうか、と彩華は思う。

永遠に枯れない泉のように、とはいかないが、霊力が湧き出てくる感覚がある。今なら強敵相手でも通用しそうだ。

だが油断は禁物。身体の軽さが気脈によるものなら、己の力だけではないのだから。

高揚する気持ちを抑えるように叱咤して、妖と対峙する。

全体を揺すりながら追いかけてきた妖樹は、登りきったと同時に攻撃を仕掛けてきた。刈り取られなかった数本の枝が柔らかくしなる。

「痛っ……」

避け切れなかった枝の先端が彩華の頬を掠めた。こめかみあたりから左頬にかけて一文字のミミズ腫れが走る。

「なにをしている」

呆れと憂慮を含んだ声に苦笑を洩らした。

「油断した」

指をやると、滲んだ血が少しいた。だが大した傷ではないようだ。

「あとでちゃんとして消毒しとけよ」

月影の体が青白く発光する。丸く形を成した霊力が、今度は三日月型となり宙を滑る。

声をあげて妖が荒れ狂った。ぎゃあぎゃああと喚き散らして枝を振り回す。

妖樹から切断された枝が最後の足掻きと言わんばかりに空を舞うが、あえなく砂塵となった。枝を一本のみ残して、光の鎌は消滅する。

欠陥を修復する能力を持つ妖ではなくて良かった、と彩華は思う。そうでなければ、うねうねと蠢く枝に手間取っただろう。

「情報は十分に得た。さっさと済ませて帰るぞ」

頷いて、彩華は全身に霊力を滾^{たぎ}らせた。風もないのに黒髪がふわりと浮き立つ。

妖樹がますます騒ぎ立てた。辺りに充満しつつある霊力に反応したのだろう。唯一の枝を使い必死の抵抗を試みている。

彩華の耳元を枝が掠めたがもはや動じない。

妖の背後から駆け抜けてきた疾風に驚いて、彩華は思わず目を閉じた。

仕事中に目を逸らすなど言語道断だ。慌てて手の甲で目を擦り、涙と一緒に塵を流す。

少し赤くなつた目で妖の姿を確認する。

大きく振りかざした枝と、夜空に浮かぶ丸い月が重なり、盃を振りかざしているように見えた。

攻撃を軽くかわした彩華は素早く印を結んで口を開きかけた。

「待てっ」

月影の命に従い、即座に術の発動をやめる。それと同時に淡い光が視界を掠めた。

妖樹は、彩華たちから興味がなくなったとでもいうように、枝を振るう先を変えた。元々細長い枝を更に長く変化させて、己の周囲を飛び回る何かを払い落とそうと必死になっている。

鳥の羽音がする。高速で飛び回る何かの姿を彩華は捉えることはできなかった。

だが、先程から止まない音は、間違いなく鳥の羽ばたきによるものだ。

目にも留まらぬ速さで幹に無数の切り傷がついてゆく。妖樹は払い落とそうと躍起になっているが、一本枝ではままならないのだろう。傷が増えるばかりだ。

繰り広げられている戦闘に啞然として、彩華は横にいる黒猫に問いただした。いつでも動けるように指は軽く印を結んだままだ。

「あれって、月影の分身とか、そういうもの？」

話しながらも意識は妖樹と突然現れた光に向ける。

必死に目で追いかけて、やはり鳥だと確認できた。

手を出さないのはこの鳥の目的が不明だからだ。

「いや」

返ってきた言葉には不機嫌な色が滲んでいた。

「……横取りされるのは、あまり気分が良くないな」

淡く発光する飛行物体に目をやって月影が呟く。

ちらりと横目で確認すると、黒猫の鼻のあたりに皺がよっているのが見てとれた。

——これは、かなり、間違いなく。怒っている。

彩華が声をかけようと思ったそのとき。

ガラスの割れる音がした。

妖樹の根元に透明な塊が落ちている。半分砕けているが、まだ戦う気なのだろう。半分砕けているが懸命にもがいている。

散らばった破片が月光を反射して煌めく。

ぬっ……と、妖樹の根が持ち上がった。

狙いはガラスの塊。残りを踏み潰すつもりらしい。

「地縛」

言霊の力により震えた大気が妖を縛る。片足を上げたような格好で妖樹が固まった。地を踏みしめている根っこごと動きを封じた。

「月影っ」

彩華の意図を組んで黒猫が駆け出す。塊を器用に背中に乗せてあつという間に戻ってきた。

「ほれ」

「ありがと。……」

片翼を失ったそれは、ぴくりとも動かない。

視線を戻すと妖樹は捕縛されたままだ。

彩華が神呪を紡ごうと口を開きかけた。

しかし、それよりも早く行動を起こした者がいた。

妖樹の体に幾重もの矢が突き刺さると、ぎゃあと甲高い悲鳴があがった。妖気を削ってゆく彩華の術とは違い、今の矢は的確に急所を狙ったように見えた。

矢は、自分の背後から射られた。

一瞬呆気にとられたが、彩華はすぐに正気に戻って振り返る。

彩華たちがいる場所よりも少し高い遊歩道から女が見下ろしていた。

まず目を惹いたのは金色の髪だった。柔らかそうな巻き髪が風に吹かれ、なびく度に艶を放つ。

長身の男を従えて、女は悠然と立っていた。

妖樹を見据えたまま、女が蠱惑的な笑みを浮かべる。その印象は棘を持つ薔薇を思わせた。

薔薇の化身はしばらく妖樹を見つめていたが、つい、と視線を滑らせた。

「こんにちは。東洋の術者さん」

彩華を見つめてにこりと笑う。その容姿からは想像できないほど

流暢な日本語だった。

「日本へようこそ。取り込み中だから後にしてくれないか？」

彩華が口を開くよりも早く、抑揚のない声で返事がされた。月影だ。

月影は訝ってかすかに目を細めた。殺気はないものの、警戒している様子がうかがえる。

「ごめんなさい。邪魔をするつもりはないのだけれど……これは、私たちが狩り残したモノだから……この場は譲ってくださいさる？」

女は丁寧な口調だったが無言を言わさぬ響きがあった。

穏やかに佇むその姿は、妖気の漂う術者の戦場にはとても場違いである。

だが暗闇に浮かぶ金の瞳は、女が常人ではないことを物語っていた。

「遠いこの国にどうやってたどり着いたのかしらね」

女は、見る者がうつとりとするような極上の笑みを異形に向けた。
「ラインヴァルト、彼女をお願いね。強いパートナーがいるから心配はないでしょうけれど」

異形から目を逸らさずに女——エリザベートが命じる。

「はい」

ラインヴァルトと呼ばれた男は短く答えると、軽い身のこなしで柵を乗り越えた。優雅な足取りで彩華に近づく。

ふたりが魔性と呼ばれるモノに近い存在であるのだと、彩華は瞬時に理解した。

纏う気は人の持つものではなく、かといって神と呼べるものでもない。完成されているがどこか歪な作り物——そんな印象を持った。
「こいつから離れる」

今にも飛びかかりそうな勢いで月影が牙を剥く。

「月影」

彩華が嗜める^{たしな}。

この人たちの瞳にも纏う空気にも翳りは無い。それは、彼にもわ

かっているはずだ。

最後に睨みをきかせたものの、渋々といった風情で月影が引いた。
「お怪我は……されていますね。痛みは？」

彩華の左頬を目にして、ラインヴァルトは優しく目元を和ませた。
「怪我ってほどではないので大丈夫です」

突然ジーンズの裾を引っ張られて足下に視線を落とす。目を三角にした黒猫が、じっと見上げていた。

月影の無言の攻撃を受けた彩華は、身を屈めて彼を拾い上げた。
胸に抱くようにすると、尻尾を一度だけ振ってから大人しく腕に収まった。

「すぐに済むと思いますので、治療はその後」

治療が必要なほどの怪我ではない。消毒と瘡気の洗い流しはしななければならぬだろうが。

彩華は何か話そうとして口を閉ざした。ラインヴァルトにつられて視線を動かす。

妖樹と、少し離れたところに立つエリザベートが見えた。双方睨みあったままの状態で微動だにできなかった。

エリザベートが小首を傾げた。その拍子に金色の髪が揺れる。

触れずとも柔らかさが伝わってくるような彼女の髪は、夕暮れ時に金色に輝く日の光を紡いだようにきらきらと輝く。

我知らず目を奪われた彩華の耳に、じゃり、と砂の擦れる音が聞こえた。

身じろぎすらしていないと思っていたのは彩華の勘違いで、妖樹はすでに捕縛を解いて後退していた。少しずつ……気づかれないように摺り足で後ろへと進んでいる。

「逃がさない」

彼女が発した言葉には、気を抜くと背筋がゾツとするような嫌な響きがあった。冷ややかな、それでいてどこか楽しそうな声。

だがエリザベートが仕掛ける様子はない。それっきり、黙ったまま佇んでいる。

ふいに、妖樹の姿が歪んだ。素早く横へ移動しようとして、ぴたりと動きを止めた。

これでは不利だと感じて窮地を抜け出そうとしたのだろうか。しかし一メートルも進まないうちに、妖樹は退去を阻まれた。方向転換しようとするが、叶わず悲鳴をあげる。

妖樹の間近に何かがある。

どこからともなく現れた長い棒が、自らを光らせながら地面に突き刺さっていた。後から後から発生した無数のそれは、同じように地面に突き刺さり、瞬く間に妖樹を囲う。

妖樹は完全に身動きが取れなくなった。

「逃がさないと、言ったでしょう？」

妖艶な笑みを唇に刷いて、エリザベートが再度宣言する。

金の瞳が鋭く煌めいた。

「ほう。さしずめ狩りといったところか」

月影が感嘆の声をあげた。

「狩り……？」

ぼつりと呟く。先程から感じていた違和感はそれかと納得する。

妖気を削いでから消滅させる彩華の退魔法とは違う。

獲物の考えを読み、最小限の動作で、確実に狩場に追い込んでゆく。今この場は、光の棒でこしらえたあの檻が、追い込み柵の代わりなのだろう。

一度狙われた獲物は、もう逃げられない。

簡易的な檻に囲まれた妖樹はしばらく脱出を試みていたものの、次第に弱々しくなっていた。

「あなたはいつからこの国に居たのかしら」

言葉はわからないはずなのに、エリザベートは妖樹に向けて言った。

「今の時代は棲み難いでしょう？」

それまで殆ど動かなかったエリザベートは、右手を顔の横にあげて、ぱちんと指を鳴らした。

淡かった発光が命令に応えたかのように強さを増す。

視界が白く染め上げられて、目が慣れる頃には、檻も妖樹も消えていた。跡には微量の光の粒子があるばかり。

エリザベートが屈んで何かを拾い上げる。

「……意外と素早いから、あなたは隼はやぶさが良いかしらね？」

誰に言うともなしに呟いた。

指で摘んで目前にかざしたそれは、薄茶色の水晶に見えた。濁りはなく、月明かりに照らされてきらりと光る。

「あれは妖の……残滓？」

彩華の声を聞きつけてエリザベートが振り返った。

彼女は今まで狩りをしていたとは思えない、柔らかい表情だった。モデルのような綺麗な足取りで彩華たちの傍へと近づいて、そっと手を伸ばす。

突然、左頬に触れられた彩華は驚いて肩を揺らした。

細長い指を一度だけ滑らせて、

「あの子のお礼」

エリザベートが笑う。

左頬に体温とは違う温かさを感じた。反射的に頬に触れると、そこにあるはずのミミズ腫れがない。

「あの子？」

少々頭を混乱させながらも聞き返すと、エリザベートはちらりと目で合図した。

視線の先にはラインヴァルトがいる。彼の手にはいつの間にか片翼の壊れた鳥が収まっていた。

エリザベートは差し出された鳥を受け取って、愛おしそうに目を細める。

「ありがとう。お疲れ様」

彼女は囁きにも似た礼を述べた。

彩華が目を見張る。

手のひらよりも大きかった鳥が、みるみるうちに崩れて砂になっ

たのだ。やがてそれも、最初からなかったかのように消えた。

「あなたは、なに？」

闘気を綺麗に隠しても彼女から人の気配は感じない。だが、やはり化け物と呼ぶのは憚^{はば}れる。

不思議とおぞましさはなかった。詠や月影——人ならざるものが普段傍にいるから、そう感じる訳ではないようだ。

それでもまだ油断はできない。彩華は警戒を解かずに女の言葉を待った。

しばし考えこむように小首を傾げたエリザベートは、やがて彩華を真っ直ぐ見つめて、赤い唇に笑みを刷いた。

「わたしは……闇を狩る存在^{モノ}」

月を背にしてそう答える女は、闇夜に最も咲き誇る大輪の薔薇のようだと彩華は思った。

「異国の狩人か。それはご苦勞なこと。で？ 何のつもりで来た」

抑揚なく月影が言う。全身を青白い闘気で包み込み、目を眇めた。

「月影」

今にも戦闘態勢に入りそうな彼を制する。

「一応、形式的に聞いておこうと思ったただけ。知らない奴が訪ねてきたら、何用か聞くだろう？」

と、月影が鼻を鳴らす。

「ん……まあね」

確かに一理ある。だが刺々しい態度は少し問題だ。

彩華がどうやって宥めるか考えあぐねていると、エリザベートが真っ直ぐ月影を見つめた。

金の双眸に冷やかな光が宿った。

「では。わたしもひとつ訊ねていいかしら？」

「なんだ」

荒んだ気を一切消さずに月影が促す。

「自然の理を崩して平気なんて、随分と高慢な神なのね。無意識でもその道を選んだのは本人とはいえ……」

何の話なのか検討もつかない彩華が怪訝そうな顔をする。

月影の目が一瞬だけ剣呑さを帯びた。

「……それを、あんたが言うのか？ 見たところ、そっちも変わらないだろう？ 天命かどうか知らないが、オレにはあんたが男の運命を狂わせた元凶と思えるぞ」

言って、月影はエリザベートの横に立つ男を見やる。

「そうね。他人の事情をとやかく言えた立場ではないわ。ごめんなさい」

張り詰めていた空気が和らいだ。

「——いや。オレも言い過ぎた」

素直に詫びる月影に驚く。

感じ取った雰囲気、猫にマタビ女郎に小判、となるものを探さなければならぬと思っていた彩華だった。

「待て、彩」

彼女の心に浮かんだことを鋭く察して、月影が低い声で問うた。

「お前……オレを何だと思っている？」

「えーと……あらみたま荒御霊？ ちょっと喧嘩っぱやし」

答えが気に入らないらしく、黒猫の眉間に皺がよった。

「否定はしないが、違う」

「上手く言えないけど……それ矛盾してない？」

「してない。オレはちよつとばかりやんちゃな素質を持つ、ちよつぴりお茶目な八百万のひとりだ」

何がお茶目か。

彩華はそんな思いを視線に含ませるが、当人は物ともしない。

「相手の出方次第で態度を変えるだけだ」

「う……ん……」

なおも言い切られて彩華は言い澀んだ。

普段穏やかな人間も時には本気で怒る。神が二面性を持っているのは、人間のそれと変わらない。

多分、そのようなことを言っているのだろう。言いたいことは何

となくわかる。わかるのだが――。

気に入らないから暴れます、では無駄な争いが絶えなくなるではないか。

後でうちの御祭神に意見を聞こう、と彩華が考えたとき、女の笑う気配を感じ取った。

振り返ると、思った通りエリザベートが供を従えてこちらを見ていた。

「お取り込み中に申し訳ないのだけれど……少しお時間いただけると？」

につこりと、美しい微笑みを向けられて、彩華は黙って頷いた。異を唱える理由はなかった。

天の盃 八

草木の眠る真夜中でも、駅周辺の繁華街はそれなりに賑やかだ。遊び帰りなのだろうか。まだ煌々と明かりの灯る看板の近くに立っていた複数の人間が、興味津々という顔で何かを話している。

時折、好奇心旺盛な視線が刺さるのを感じた。

「……」

異国の旅行者ふたりを伴って、彩華は少々居心地悪そうにしながら歩く。

そんな彩華の心情など露とも知らず、エリザベートとラインヴァルトは周囲を物珍しそうに眺めている。

とにかく目立つのだ、このふたりは。見目麗しいだけでなく、特に観光地でもないこの地域に、見るからに海外からの旅行者となれば嫌でも人目をひく。

ちなみに月影は黒猫の姿のまま、ぼてぼて彩華の横を歩いている。これで彼まで人型を取っていたら、更に目立つただろう。

ほどなく三人と一匹は、二十四時間営業のレストランへと着いた。「先に入ってる」

入口の少し前で月影が声をかける。

「詠に連絡しておく」

彩華は黙って頷いた。

月影が一緒だから心配はしていないだろうが、予定よりも帰宅が遅くなれば良からぬことが起きたと思うかもしれない。

暗闇へその身を滑らせた黒猫を見送って、自動ドアを開いた。来店を知らせる機械音が鳴り響く。

「いらっしやいませ今晚は」

ホール担当のウェ이터が疲れを見せぬ笑顔で出迎えた。彼は一瞬惚けたが、我に返って慌てて三人を席へと案内する。

昼間は混んでいるはずの店内も、さすがに深夜帯は人もまばらだ。

音楽が流れているため緩和されているが、ひっそりと静まり返っている。

奥まった席へ案内されて彩華は安堵する。

少々特殊な内容の話になるだろう。聞き耳を立てる者もないだろうが、注目されるのはなるべく避けたかったのだ。

「いつもこんなに静かなの？」

エリザベートが興味深そうに店内を見回す。

彩華は首を傾げた。

「さあ……この時間に滅多に来ることはないの」

夜遅くに出かけることはあるが、仕事が終われば寄り道などせずに帰るからわからない。

団体客がいればまた違うのだろう。しかし今はどの席も少人数だ。ドアが開いて来店音が鳴った。

「いらっしやいませ……？」

明るくはきはきとしていたウエイターの語尾が小さくなった。不思議そうな顔をして、ウエイターは店の奥へ引込む。

しばらくして、当然のように歩いてくる黒猫の姿が目映った。

夜中だから知人に遭遇する確率は少ないはずだ。人型をとってはどうか、と提案してみたが、注意するに越したことはないと考えたようだ。

猫は他の人間に見咎められることはない。おそらく姿が見えぬように術を施しているのだろう。

悠々と尻尾を振りながら、月影は三人の座るテーブルへやってきた。助走もつけずに飛び上がり、彩華の膝上を難なく飛び越えて、ソファーに着地する。

反動でソファーが軋んだ。

「何かいる？」

彩華が小声で訊ねると、月影は首を横に振った。

「帰ったら酒をもらう」

月影はそう言って、彩華の横に行儀良く座る。四肢を揃えて背筋

を伸ばし、一見正座でもしているかのようだ。

「わかった」

約束だと言わんばかりの真面目な顔に彩華は苦笑する。そうして、そつと目をあげた。

開いたメニューの影から、向かいに座るふたりへ視線を向ける。

何を注文しようかと楽しそうにしているエリザベートと、そんな彼女を微笑ましく見つめているラインヴァルト。

こうしていると、人目を非常に惹くだけの、恋人同士に見える。何の力も持たない、ただの人間に。

特にエリザベートは、空輪山で妖と対峙していたときの靈力を綺麗に消し去っている。感じた戦慄はもうない。先ほどの出来事は夢だったのか、と思ってしまうほど穏やかな雰囲気醸し出している。金に煌めいていた瞳も、今はよくある薄茶色だ。

年齢は自分と同じくらいだろうか。ラインヴァルトは大人びた風格があるから、彼は少し年上に違いない。態度から、彼が従者の立場であることがうかがえた。

ここへ来るまでの会話で、ふたりが欧州の出身らしいこともわかった。勉強をしたと言っていたが、それにしても日本語が上手だ。

「決まったのか」

「あ……うん」

考えに没頭していた彩華を引き戻したのは、月影の囁きだった。メニューの後ろのページを開いたまま動かないでいた彩華を訝しんでいる。

「ちよつと、ボーッとしちゃった」

声を抑えて笑う。

通路を挟んだ向かいのテーブルに人がいるため、彩華は何気なく座り直して月影の姿を隠す。見えぬよう術をかけているとしても気になったのだ。

もう一度メニューに目を落とした彩華の視線が、ある一点で止まった。

しばらく心の中で葛藤して、ぱたりと閉じる。心惹かれた物はあ
るのだが、結局飲み物だけにしてメニューを元に戻した。

「アレはあんたたちの国から来た奴なのか？」

注文を取りにきたウェイターが去ると、早速月影が口を開いた。

「わたしたちの国、という用語弊があるわね」

エリザベートが困ったように眉根をよせた。幾分か声を抑えて話
し出す。

近くにいた他の客は、注文を済ませる頃に運よく席を立った。今、
周りには誰もいない。心配はないのだが自然と小声になる。

「最初に発見された時期や場所を知りたいというのなら、屋敷に戻
って文献を開かなくてはならないけれど……」

月影が尻尾を振るようにして遮った。

「そこまでは求めてない。オレが知りたいのは、アレがどうやって
この国に来たかと、少々の生態くらいだ」

「憶測も含まれるから、正解はわたしにもわからないの」

と、前置きしてエリザベートは話し始めた。

店内に流れる緩やかな音楽と相まって、彼女の凜とした声は伝承
を伝える語り部のようなうた。

「大昔は森の奥でほとんど知られることなく生息していたのだけ
れど、誰か心ない者が外へ持ち出したのでしょね。最初は珍しさか
らだったのかもしれない。興味本位で軽く考えていたのかもしれな
い。人の入らない森で育つ分にはまだ良かったのに」

自身の利益を得るために悪事を行う輩はどの国にもいる。

悪人の良からぬ気にあたって、元々は問題がなかった気質が変化
するときもある。面倒ごとに拍車をかけないでほしい。

彩華は過去の調伏を思い出して、僅かに半目になる。

「あるとき、隣国の街中で異質な事件が起きてね。吸血鬼が現れた、
と」

それが吸血鬼ではなく血を好んで採取する吸血樹——妖樹だった
のだろう。

眉をひそめてエリザベートはため息をついた。

「外へ出てしまったモノは、随分と昔に根絶えさせたはずだったのでも、物好きが妖樹の種をどこからか入手して育てていたのでしょうね」

「迷惑な」

月影の率直な感想に彩華が幾分か険しい顔で同意する。

自然に育ったならば致し方ない。育つ何らかの原因があったのだろつ。

しかしあえて栽培する必要はない。しなくてもよい厄介事に首を突っ込むなど自殺行為になりかねない。

「丹精こめて育てたヤツにうっかり襲われたりしてな」

月影がけろりと怖いことを言う。

「あるかもねえ」

彩華が呆れたように言うのと、エリザベートも相槌を打った。

「誰が街中に持ち込んだのか、結局わからなかったの。持ち主の名前が書いてあった訳ではないし」

茶目つ気たつぷりにエリザベートが微笑んだ。

「妖樹は今回のモノとは比べ物にはならないくらい小さかったし、日が落ちてしまえば、当時は今と違って暗闇に包まれるから」

闇に沈む街。満足に見渡せる明かりがなければ、襲われたらあつという間だ。相手が妖でも人間でも同じ。

「その？小さいヤツ？は捕まえたんだろつ？」

「ええ。その子は捕まえたんだけど」

月影が目を眇める。

「ソレの種が残ってた……か？ で、何らかの方法でここへ運ばれてきたと」

誰かが故意あるいは偶然持ってきてしまったのだろつ。

重ねられた質問にエリザベートが肯定を示した。しかし「でも…

…」と否定の言葉を続けた。先ほどまでであった微笑みは消し去っている。

「その子が残した種というよりも、そのもの——本体と言った方が近いかもしれない」

淡々と事実を語るその声音は低く、冷たいものを感じる。

「寿命が短い種族ですべてを狩ることはできなかったのだけれど。古代からの記録によれば、発見された複数の妖樹は、構成パターンがまったく一緒だったから」

「どうということ？」

黙って聞いていた彩華が驚きの声をあげた。

「異形の構成パターンが一緒ってことは、そのまま同一の個体が複数存在していたと考えていいの？」

「株分けか細胞分裂ってところか。植物だけに」

増える様を想像して、彩華は僅かに眉根をよせる。茶化す口調でも、月影の例えは笑えない。

ひとつの物が繰り返し増殖してゆく様子は少々気味が悪い。それが異質なモノであるなら尚更だ。

「月影？」

ふと横を見ると、月影は渋面のままエリザベートの言葉を反芻していた。

「古代から、と言ったな。しかも寿命が短いと」

と、確認するように切り出した。

「ええ」

「なぜ古代生物が今になって動き出すんだ？ 寿命が短いのであればおかしいだろう」

約十五日ごとに活動する今回の妖が、なぜ最近まで公にならなかったのか。

まだ育っていないうちは小動物から血を摂取していたと仮定しても、おかしい現象が起き出したのは、ここひと月の間だ。もっと前から怪奇現象だと騒ぎになってもよい。

「それは、妖樹が特殊な体質だからでしょうね」

エリザベートが形容し難い笑みを浮かべた。苦笑いが近いかもしれ

れない。

「先に言ったとおり寿命はとても短かいの。平均で二ヶ月くらいかしら。けれど、眠ってしまえば何十年、何百年と生きられる……冬眠状態と言えればわかりやすいかしら」

目覚めたときに必要な分を摂取。満足したらふたたび眠りについて一切の活動を最低限に抑える。

それならば、たとえ寿命が短くとも半永久的に生きることが可能だ。

「だから古臭いのと新しい気配が混ざっていたのか」

古くから生きる妖樹本体と、体内を巡る獲物の血が月影にそう感じさせたのだろう。

月影は納得した風情で頷いた。

「最後の質問。オレは、もうすべて消えたと考えているが、あなたの見解は？」

「ヴァンピールの気配も感じられないし、少なくともこの国にはもういないわ」

エリザベートが柔らかい口調で、されどきっぱりと断言する。

「そうか。じゃあオレの話は終わった。あとは彩に任せた」

「ええ？」

「旅人をもてなすのは、その土地に住む人間の仕事だ」

突然話を振られて彩華が戸惑う。

「唐突に言われても困るよ」

「普通に、神社に海外の参拝者が来たと思えばいいだろう。これも何かの縁。異文化交流は大事だ」

縁と言うならあなたも当てはまるでしょうが。

目で訴えてみるが月影は動じない。

海外からの参拝者への対応も、たまにはある。だが滅多にあるわけではない。精々が年末年始だ。他は数える程度。しかも今は状況が違う。

「神社？」

エリザベートが興味深そうにしている。

「神社で働いているの？」

「はい。私の家は代々受け継がれてきた神社なので」

頷くと、エリザベートの瞳が好奇の色を強めた。テーブルから軽く身を持ち出す格好で彩華を見る。

「ならば、さぞかし古き趣のある神社なんでしょうね。清涼な空気の中に、上品でありながら鮮やかな色の建築物……素敵」

驚きに見開いていた目を優しく細めてエリザベートが笑う。

「昔ながらの建物なので、味わいはあると思いますが……」
彩華が困惑した様子で言いよどむ。

鼻屑目ではあるが、本殿の欄間やその他に施された細やかな彫刻は中々の代物だと思うし、霊力あらたかな井戸や、樹齢三百年ほどだという立派な桜の木もある。

だが井戸は霊力があり過ぎて身内以外には公開していない。本殿はどこの神社でも参拝者が入ることはできないし、桜は本殿の裏だ。謙遜ではなく、観光的な価値は一切ないだろう。有名な神社は他にいくらかもある。

「古き良き物はそれだけで価値があるのよ。迷惑でなければ、遊びに行っても構わないかしら？ 話には聞いても神社って観たことがないの。観光らしい観光も、今回が初めてだから」

拒む理由はない。害をもたらさなければ誰であろうと参拝は自由だ。

えっ、と洩れた男の驚く声に視線を巡らせた。

ラインヴァルトが不思議そうな顔で己の主を見ている。

「エリーザ。あなた一度だけ来日したことがあると言っていませんか？ 船を乗り継いだから大変だったと」

「ええ、言ったわ」

対するエリザベートもきよんとしている。

「ええと……来た、としか言わなかったのよね？」

確認の言葉を受けたラインヴァルトが肯定の返事をした。

「初日に空港で、だったわね。そうだった」

エリザベートはひとりで納得したかのように頷く。

状況が飲み込めず、話に入ってもいいのか……どうしたものかと思っていたところに助け舟が出された。

「なんだ、前にも来たのか？　いつ頃だ？　観光でないなら何のために？」

月影だ。

立て続けの質問にエリザベートが苦笑する。

「ああ悪い。他意はない。観光じゃないのに船で旅行なんて珍しいと思っとな」

「旅行なんて大それたものではなかったの」

当時を思い出してエリザベートは息をつく。

「単に、立ち寄っただけなの。船は時間がかかるから、休憩を兼ねてね。知り合いの貿易商にお願いして乗せてもらって。あの頃とは風景も大きく変わってしまったているわね……夜でも煌々としている灯りも、高層ビルも、なかったから」

そう言ったエリザベートは、当時を懐かしんでいるのか、伏し目がちに微笑んだ。

彩華は眉をひそめた。違和感を覚えたのだが、考えが纏まらず黙っている。

「貿易商、ねえ……何年前の話だ？」

月影も同じように感じたのだろうか。彼も眉間に皺をよせている。

「ラインヴァルトに会う前だから……三百……二百年？」

「そのくらいですね」

平然とラインヴァルトが頷いた。

「だから妖樹以外に古代の匂いがあつたのか」

特に驚いた風情もないまま、月影は相槌を打つ。

「……にひやく……？」

彩華が複雑な顔をする。

彼女の呟きを聞き止めた者はいないようだ。月影はエリザベート

の話に集中している。ラインヴァルトもおそらく。

こちらも特異体質のようだ。

——深く考えない方が身のため、だろう。

なんせ、自分の周りにも規格外が存在がいるのだから。

彩華がそう結論付けたとき、ウェイターが注文の品を持って現れた。

月影の耳がぴんと張った。ほぼ同時にエリザベートが口を閉ざした。

遅れて彩華も気がつき、何となく姿勢を正す。

「お待たせいたしました」

ウェイターが両手にそれぞれ盆と皿を持って現れた。

「特製パンケーキセットのお客様」

「彼女に」

ラインヴァルトの返事を受けて、エリザベートの前にセッティングされる。

思わず椅子から落ちそうな気分になる彩華であった。

真夜中はお目にかかる機会が少ないであろう食べ物だ。考え事をしていたせいで、彼女が何を注文したのか気づかなかった。

嬉々として輝くエリザベートの瞳を目にして、ラインヴァルトが苦笑する。

まだホカホカと湯気のたつホットケーキを三枚重ねて、一番上にバナライスクリーム。アイスの上にはチョコレートソース。ケーキの周りに色とりどりのフルーツをあしらった、この店特製のパンケーキである。ちなみにフルーツは季節によって違う。

カロリーは言わずもがな。深夜に食べるような代物ではない。

女なら少なからず気にすることを一切気にしていない風のエリザベートに、彩華は羨望の思いを向ける。

だが、美味しそうに食べる姿は見ていて気持ちがいい。そうしてふと思う。

人ならざる者って、みんな食いしん坊なんだろうか。

そんな彩華の思いに気づいたのか、涼しい声が直接脳裏に届いた。
——海外は知らないが、八百万は結構宴会事が好きらしいからな
あ。どこも一緒じゃないか？ 三大欲求は。

声の主は霊体となつて彩華の傍に控えている月影だ。自分も一応
神の分類に属するというのに他人ごとのような口振りだ。

彩華は月影を横目で見ると、自身のカップに口をつけた。
確かに神話を読むと食べ物か舞でもてなしていることが多い気がする。

——でも……。

同じように思念で返そうとして、目の前で繰り広げられる光景に
言葉を失った。

これは、俗に言う？ 恋人食べ？というやつだろうか。

エリザベートがケーキの刺さったフォークをラインヴァルトに差し出し、彼はそれを照れることなく受け取っている。

「値段の割に美味しいですね」

「そうよね。屋敷の近くにもお店できないかしら……。んーおいしい」

にっこにっこに。

擬音が聞こえてきそうなほどの笑顔で、エリザベートは上機嫌に
ケーキを口に運んでいる。

「文化が違いますから無理でしょう」

「そうよね。残念」

瞬きを繰り返している彩華が、更に脱力感を増すであろう声が聞こえた。

——なあ彩。今度オレにもあれやって。

あれとは恋人食べだ。

聞こえなかったフリをして無視した彩華は咳払いをひとつする。
月影がどこまで真面目に言っているのかわかったものではない。
やるのは百歩譲っていいのだが、冗談を本気にして馬鹿を見るのは避けたい。

——気が向いたらね。

素っ気ない返事でもよかったらしい。月影は一度伸びをすると、彩華の膝の上で丸くなって目を閉じた。

さっきまでは気が張っていたから平気だったけど、急に疲れが出たような……。

彩華は欠伸をひとつ噛み殺した。

退治屋稼業はこれで一旦終了だ。明日からは巫女舞の練習に精を出さなければ。

なんせ祭まで日にちがない。舞の練習は鬼の教官もとい御祭神が見てくれるのだろう。

彩華は苦虫を噛み潰したような顔をして、紅茶を啜った。

天の盃 終章

ある日の昼下がり。

朝から抜けるような青空が広がっていた。風もなく、穏やかな午後である。

反して、月詠神社は通常の厳粛な雰囲気とは違い、賑わいをみせていた。

鳥居から拝殿にかけて人々が列を成している。普段は並ばずともお参りは可能だ。しかし、年末年始と今日この日は別だ。

列ができているのは拝殿だけではない。授与所もだった。

拝殿から流れてきた参拝者たちが物珍しそうに授与所の中をうかがっている。

無理もない。滅多にない光景がそこにあつたのだ。

お馴染みの巫女たちに交じって見慣れない女性がいた。彼女は金の髪をひとつに纏め、巫女装束に身を包んでいる。ときばきと仕事をこなしている姿は、とても初心者とは思えない。ちなみに茶色い髪の彼女のパートナーは、持ち前の体力を活かし裏方に勤しんでいる。

外の通りには、お祭り時には外せない屋台が連なっていた。ソースの焦げる匂いや明るい声が境内を満たしている。

本日は毎年恒例の秋季大祭が行われる日であった。農作物の収穫に感謝をして、翌年の豊作を祈念する。

そのため、月詠神社境内はいつもと違う空気に包まれていた。じきに祭神に奉納する舞が始まる。神楽殿の周囲には、始まりを待つ参拝者たちが集まり出していた。

ところ変わって。

神社と同じ敷地内に、祭神のための物ではない建物がある。祭祀を行う一族の自宅だ。

その一室で。若い男女が些細な言い合いをしていた。

男女はぴったりと寄り添い、傍目からは抱きあっているようにも見える。

だが様子がおかしい。男女の交わす言葉には睦言めいたものはない。甘い雰囲気すら一切なかった。

「待て。動くな。気が散る」

言葉は荒っぽい優しい声音の男と、

「いたっ……まだ？」

俯き加減で訊ねる、いささか涙声の女。詠と彩華である。

詠はラフな普段着だが、彩華は違った。いつもの簡易的な巫女姿ではなく、その上に千早ちはやという薄手の衣も身につけている。巫女の正装だ。

「急かすな気が散る」

ふたたび短く命じて、詠は作業に専念する。彼の指先は自身の胸元に添えられていて、しきりに動いている。

「うまいこと絡んだものだな」

感心している場合ではないと思った彩華だったが、この状況は自分が招いたことなので黙っている。

祭の準備に追われて少々疲れたのだろう。さあそろそろ移動しようとした矢先に、立ち眩みを起こした彩華は、背中から倒れかけた。近くにいた詠が咄嗟に抱きとめたのはいいが、そのはずみで彩華の髪が彼のシャツのボタンに絡まってしまったのだった。

そうして今に至る。

「眩暈は？」

「平気。一時的なものみたい。……盆暮れ正月が一度に来た忙しさ、つてね」

ヤケになったように呟く彩華に対して冷静な突っ込みが入った。

「暮れと正月は、ほぼ同時にやってくるけどな」

彩華はじろりと背後に立つ詠を睨む。物言いたげな眼差しだ。

けれど詠は気にも留めない。彼に背を向けて俯いている彩華の表

情は見えないし、彼女が怒ってもたいした脅威ではない。

「取れたぞ」

ややあつて、詠が手を離れた。指の隙間から彩華の黒髪が流れ落ちる。

「ありがとう」

彩華は軽くひりつく頭皮を撫でながら礼を言う。

時計を見やり、慌てて己の髪に手を伸ばす。

ひとつに纏めていた髪は転びかけた拍子に乱れてしまった。一度ほどいて手早く纏め直す。

あと十五分ほど時間はあるのだが、巫女装束姿で走って神楽殿へ行くのは見映えがよろしくない。

最後に足の先から首元まで、着崩れていないか確認する。

「大丈夫……かな」

自問自答したところで、詠のため息まじりの声が聞こえた。

「……髪飾りが曲がつてる」

弾かれたように頭に手をやる。

「直してやるからこっちへ来い」

言つて、詠は一步近づく。

彩華はそれに倣つて詠の前に立つと、バツが悪そうな顔をする。

「そんな調子できちんと舞えるのか？」

髪飾りに手を伸ばしながら詠が呆れた様子で問う。

「舞えるわ」

即答されて、詠は僅かに目を瞠った。

自信があるようだ。

「舞自体は何年も前に覚えているし、細かい動きも直ってるし」

数日前、神社へ来た際に人手が足りないと知ったエリザベートが手伝いを申し出た。

巫女指導役は有紀たちに任せ、そのおかげで彩華は舞の練習に集中できたのだった。短い期間であつたが、指の伸ばし方や神楽鈴を振る角度など、鬼の教官から手厳しい指導を受けた。

あとは心をこめて精一杯舞うだけ。

彩華の心持ちが伝わったのか、

「上等」

詠がにやりと笑う。

「ならばこの月詠を満足させられたら、何か褒美を取らせようぞ」

芝居がかった口調に笑みをこぼして、彩華は考えを巡らせた。

「じゃあ……ふたりでどこかへ出かけたい。近場でいいんだけど」

「そんなことでいいのか？」

彩華が頷く。

「遠出は無理だと思うし」

それに、一緒に過ごせるのならどこでもいいのだ。

照れ臭そうに笑う彩華の頬がほんのり赤くなっている。

意味ありげな視線に気づいているのかいないのか。詠は目元を和ませた。

「よし。完璧。行つてこい」

いささか大袈裟に言う詠にもう一度はにかむと、彩華は玄関先へと向かう。

外へ出ると、少し離れた場所だというのにここまで賑わいが届いた。

心地の良いざわめきだ。

零れるような笑みを浮かべて歩き出す。

普段よりも慎重な足捌きで進んでいた彩華は、ふいに何かに惹かれるように視線を上げた。

抜けるような青空の下。

月詠神社は今日も穏やかな気が満ちている。

- 完 -

天の盃 終章（後書き）

『たいじや』シリーズ、これにて一時完結です。
なぜ？一時？なのかというと、また現代陰陽師の話が書きたくなっ
たときの保険（笑）

サイトでは小嘶や設定資料なども公開しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8440u/>

たいじゃ

2011年7月21日03時47分発行